

総てを癒すもの



# 第1章 「邪教」

## 1

邪教の儀式は夜間と相場が決まっているかの如く考える人が多いが、その定義は『彼ら』には当てはまらない。

### 光の教団。

元々は太陽を信仰の対象とする太古の宗教だったが、『太陽のもとに平等』という教義を歪める一派が台頭して以来、その名は邪教の二つ名で呼ばれ続けている。

今日も小高い丘の上、白日のもとに儀式が執り行われていた。丘は頂上の一角だけ開けており、周囲は森で囲まれている。その森に身を隠しつつ儀式の様子を窺っている一団がいた。

「なんとか間に合ったようだな」

一団の先頭にいる、鎧に身を包んだ男が呟いた。彼は付近の村々を治める領主で、名前はグランゼルという。彼の視線の方向、一町（約百m）ほど先には二間（三・六m）四方の

天幕があり、その周囲を護衛する戦士や弓兵が七々八八見とれる。天幕に描かれた太陽の刺繍が所属を、そして若い治癒術師をさらった犯人を断定している。

術師のエリザが失踪して四日。搜索は遅れたが、昨日までの曇天が味方してくれたようだ。今はあの天幕の中にいるとみるのが妥当だろう。

「この程度なら十分勝てそうですね、グランゼル様」

傍らにいる初老の男、執事ウォーゼンの言葉に頷き、後ろの兵士たちの方を向いて言う。

「いいな、弓兵はまず相手の弓兵を狙え。最低でも動きを止めるんだ」

長弓を携えた二人が頷き、ゆっくりとした動作で矢を取り出す。

「弩兵はひとまず歩兵を挑発し、半分まで来たら弩で撃ち殺せ」

弩を持つ二人も頷き、杖を差し太矢を装填して構える。

「残りの歩兵は機を見て突撃する」

歩兵の方を一瞥して向き直ると、グランゼルは右手を上げ目標の方向に軽く振った。

弓兵の先制と奇襲が効を奏し白兵戦に持ち込む頃には教団側の戦士は半分近く倒れていたが、それでもいざ白兵戦になると互角だった。天幕の中にもまだ数人の戦士がいたのである。

目の前の敵が倒れた隙を突いてグランゼルは戦列を脱し、脇を抜けて天幕に駆ける。形勢変更を狙った行動だったが、途中で振り返るも追い縋る者すらいない。余裕がないのか、それとも天幕にまだ誰かいるのか。

(ええい、ままだつ)

彼はすぐに考えるのを止め、きびすを返して走った。天幕に着くなり、木版を織り込んだ帆布に剣を振りおろす。

しかし次の瞬間、重い拳のようなものがグランゼルの腹を打ち、彼は数歩後ろによろめいた。

「詰めが甘いぞ」

天幕から鎧をまとった男が出て言い放った。暗褐色の鎧を全身に着込んでいるが、胸部に描かれた赤い六芒星が魔術師であることを表している。まだ天幕から詠唱が聞こえる以上、こいつは儀式を行っている司祭ではない。小さなうなり声を上げながらグランゼルはゆっくり剣と盾を構えるが、今度は閃光が彼を襲った。眼前が真っ白になり、思わず彼は数歩のけぞった。衝撃もないのに目が痛い、それほどの閃光であった。堅く閉じているはずの彼の眼前には赤や緑の残像が輝き蠢いている。

その隙を見て魔術師は周囲の状況を探ってみた。戦局は五分、半分が倒れ残り半分も動きの重さからして疲労困憊といった状況であろう。

(もう一人来るとしてもだいぶ後になりそうだな)

彼自身も儀式の準備で疲弊しているため、あまり面倒なことはしたくない。近くに敵弓兵もおらず詠唱も終わりが近いとなれば、適当にあしらって時間を稼ぐのが得策か。とそのとき、グランゼルが動いた。

異常なほどの光と熱でエリザは目を覚ました。

起き上がって辺りを見回す。屋根の無い天幕の中のように、恰幅のよい、太陽をあしらった法衣の男が彼女の前に立っている。

(……誰?)

思い出せない。だが、なぜかその男を見ると奇妙な震えと悪寒が背筋を駆けのぼる。熱さで着ている服が湿気ているにもかかわらずその一方で震えが止まらず、自分自身を抱えるようにしつつ反射的に後ずさっている。

そんなエリザに司祭は鋭くこう言った。

「汝に命ず、その円内に留まれ」

その途端、わずかに残っていた力も気力も消え失せ、エリザはそのまま腰を抜かしたようにへたり込んでしまった。

「もう術は終わっておるのだ。効果のほどを見せてもらうぞ」

司祭の呟きも聞こえはするものの、恐怖のため内容を理解することはできない。落とした視線の先には朱で書かれた同心円がある。

「な、なに? ……」

その同心円がなぜ凶々しいものに見えてしまい、上ずった声が出てしまう。問おうと司祭を見上げるが目が合うと急に恐怖が増し、すぐに目を閉じてうつつむいてしまう。

「安心しろ、贅にするわけではない」

(！)

司祭の言葉で、急に精神が弛緩するのをエリザは感じていた。目を開け司祭を見るが、何故か先ほどの恐怖はない。

「汝に力、我等に奇跡を与えたもう」

(力？ 言霊?)

すでに考えることができる程度にまで彼女は恐怖から回復していた。自分がこの男と同じ法衣を着ていること、非常に暑い筈なのに汗一つかいていないことにも気づいた。しかし今の状況、以前の恐怖、目の前の男、先の台詞……どうも結びつかない。良くない状況であることは明らかだが、これまでの経緯とこれからの予想がさっぱりわからない。

「それって、どうゆうことですか?」

とりあえず尋ねてみるが、司祭はそれにこたえず、周囲の様子を窺っているようだ。彼女の今の精神状態なら、剣と剣のぶつかる音が聞こえる。

(まさか……：：：戦場?)

なぜ鏢迫り合いの音が聞こえるのか、彼女にはまだ解っていない。

「今に解る。まずは外に出よ」

再び司祭の命令。確かにそうだ、外に出れば謎が解ける……躊躇もなくエリザはそう考えていた。

突然、法衣を着た黒髪の女が何事もなかったように天蓋から出てきた。天蓋までの三間余を詰めることができず焦っていたグランゼルにとっては、少なからぬ空隙を生むに値する驚きである。そして、その空隙を魔法戦士が衝いた。

がずつという鈍い音。魔法戦士の渾身の突きが咄嗟に構えたグランゼルの盾を貫通し、左二の腕に刺さる。しかしグランゼルは盾を傾けてその剣を無理矢理流し、即座に腰の短剣を抜いて魔法戦士の兜の隙間に……

「やめてっ!」

エリザが咄嗟に叫ぶが、短剣は止まらない。鼻当ての右を深さ二寸ほど刺さり、それをグランゼルは押し下げた。戦士の顔から一気に鮮血が吹き出し、鎧を一層赤く染める。彼はそのまま膝から落ち、うつ伏せに倒れた。それでもなお鮮血は大地を流れる。

魔法戦士を倒しふと天蓋の方を見やると、エリザが彼の方に向かって走ってきている。なぜか怒ったような表情なのが気がかりだが、とりあえずグランゼルは面頬を上げて迎える。しかし、当のエリザはあと二く三步のところまで近づくといきなり腕を突き出し、衝撃弾で彼を付き飛ばす。予想外の力に油断も加わり、彼は本当に軽々と吹っ飛んだ。二間以上は飛び、さらにごろごろと転がる。だがエリザ自身

も反作用で突き飛ばされ、尻餅をついてしまう。彼女にとっても予想外の魔力だったのである。

「それがお前の力だ」

いつの間にか彼女のすぐ後ろに立っていた司祭が、低い声で言う。

「大いなる光の力を内に宿す奇跡……術は成功だ」

しかしエリザの方は術を放った腕が何故か非常に熱く、話を聞くどころではない。そんな状況も知らず、司祭は倒れている魔法戦士を指さし命ずる。

「こいつを癒せ。まだ助かるかもしれない」

はいと短く答え、エリザはよろめきながらも起きあがった。治療術師である彼女にとっては当然のことであり、咄嗟とはいえさつきなせあの男を突き飛ばしたのが逆に解らない。倒れている魔法戦士はなおも血を流しており、顔には全く生気が無い。通常なら諦めるところであるが、何故か彼女には癒せる自信があつた。既に冷たくなりかけている傷口に左手で触れ魔力をそこに集中させる。

だがすぐに、エリザは自分の左手が焼けるように熱くなるのを感じた。熱は左腕を駆けのぼり、全身が尋常ではない熱を持ち始める。耐えられず手を離すが、熱は収まらない。それどころか術を中止したにもかかわらず体は熱くなるばかりだ。彼女はうずくまり、苦痛に満ちた呻き声を漏らしはじめる。

しかし、後ろから見ている司祭は冷静だった。彼女の体内で炎を司る霊が強くなりすぎ、均衡を崩したのだらうと分析していた。となれば炎の力を弱めるか、他の元素である地・水・風を補うか……

(どう考えても補う方だな)

結論は即座に出た。これだけの犠牲を払いながら元の木阿弥では意味がない。この女を奇跡として祭りあげることには意義があるのだから。

「落ち着け、私が助けてやる」

司祭はエリザの肩に手を置き云った。そして立ち上がり、天を仰いで言霊を紡ぎ始める。

漂うもの、流れるもの、全てを包み、満たすもの

堅きもの、重きもの、全てを支え、型作るもの  
見えざるもの、無有なるもの、全てを廻し、そして

て散らすもの

煌めくもの、熱きもの、全てを照らし、力与えるもの

全ての元素の調和相見え、ここに我らが生命有り。

願わくばこの生命に榮えあらんことを……

言霊を紡ぎ終え改めてエリザの方を見ると、うつ伏せに

寝た体勢のまま動こうとしない。しかし規則正しく動く肩が生命の無事を主張していた。とりあえずこれで一段落ついたようだ。周囲を見渡すも彼の三間ほど前に奇襲部隊の長らしい男が、左方十から二十間くらいのとこに双方の戦士と弓兵が倒れているのみ。残ったのはこの治癒術師の女と自分だけのようだ。改めて視線を治癒術師に戻す。

女が動いた、最初彼はそう思った。しかし何かが違う。全体が放射状に動いているような……

(なっ、……まさか?!)

彼の頭には、滑稽とも言える仮説が浮かんだ。先の術は彼女の中にある四霊の力を等しくするもので、その前の儀式は陽光から炎の霊力を注ぐものだった。

そうか、原理的には有りうる。史実にも原因こそ違うものの同じ術を行使した記録が残っていたはずだ。

「まあよい、これも奇跡のうちよ」

司祭は笑みを浮かべ、低い声を漏らす。その目の前でエリザの体は本来の形を保ったまま膨張していった。

ごろんと仰向けになると陽光が眩しく、またそれでエリザは目を覚ました。

(まだ『中春月』のはずなんだけどなあ……)

そんなことを思いながら上半身を起こし、辺りを見回す。随分と良い景色だった。遙か遠くの間々は白い頂から麓のなどらかな緑まで見え、その手前に森があり、草原となり、そして自分の足のつま先が……

「えっ?!」

唐突に、この光景が受け入れがたい何かを持っていることに彼女は気づいた。下方に視線を転じる。かなりの高さに居ながら、腕と胸はそれを超越し地面に付いている。右手で地面を撫でてみると、柔らかい地面の感触と同時に、はるか下の掌が動いた。違和感は確信に変わりつつあったが、受け入れがたい状況に変わりはない。何をすれば良いのか、何をするべきなのか全く解らない。頭の中は同じ疑問がぐるぐる回り、顔が徐々に熱くなる。

その時、ふと左膝の横にある黒いものが目に止まった。それが人であることはすぐ判ったので、エリザは左手で慎重に摘み上げて右掌に乗せ細部が見えるよう顔に近づける。全身を鎧兜で覆っているが、大きさは彼女の小指よりやや太い程度で紐のような細い腕がついている。

(こんなに……小さいなんて)

逆に考えればそれだけ自分自身が大きいということになる。だがしかし、これは彼女にとって好都合でもあった。治療術師が普段使う術は魔力を生命に与えて回復を促すものであり、重傷の治療には莫大な魔力を要する。だが今の大きな魔法も相応にあるはずで、おそらくは何人でも、幾らでも癒すことが出来る。

エリザは意を決し、魔力過剰による害を心配しながら鎧の男にできるだけ慎重に魔力を加えていく。それでもさすがに男の体がびくびくと動き始めた。

ふう、と安堵の息が思わず漏れる。

(この人を、さつき突き飛ばしたのよね……)

とすると、他にも怪我して倒れていた人が居たはずだ。改めて辺りを見回すと、腰の左横に暗褐色の甲冑を着た男が倒れており、三尺ほど向こうにも何人か居る。傍の男を拾って右掌に移し、左手を突いて立ち上がる。体重が掛かると足の元の地面は思いのほか沈むが、エリザはあえて無視することにした。

半ば戻っていたグランゼルの意識は、急激な上昇に伴う違和感で醒めた。上昇が止まると少しだけ体が浮き、そしてすぐ鎧の重みが戻る。上体を起こして面頬を上げ辺りを見回す。かなり遠くまで見渡せるが、前方は大きなタペストリーらしきものに遮られている。

とそのとき、いきなり地面が後ろに動き、彼の上半身を前



に押しした。何事かと思う間もなく重い音が下から響き、さらに今度は地面が前に動いたので彼は仰向けに倒されてしまふ。そのとき上を向かされたグランゼルと下を見ていたエリザの視線が合った。目が合ったのを感じ取ったのか、彼女は軽く微笑む。その表情は紛れもなく彼の知る治癒術師のものだが、視界一杯に映っているのに妙に遠く見え、手をかざしても腕を伸ばしても空を切る。

そんなグランゼルの動作を、エリザは『小人が私に向かって手を振っている』と解釈していた。よく見えるよう掌を近づけ、話しかける。

「あの……何か」

言いかけたところで、掌上の男は突然両耳を抑えて身を強張らせる。彼女にとつては意外な反応であり、声が大きすぎたからと気づくまでには一呼吸分の時間を要した。

必死で状況を判断しようとしていたグランゼルにとつて、予期せぬ大声量はまさに不意打ちだった。なんとか持ち直した彼が改めて周囲を見渡すと、エリザの肩から伸びる腕が自分の足元まで届いていることに気づく。彼女の掌上に立っているという状況、そしてそれが意味する真実を理解するにはやはり幾許かの時間を要した。

エリザは左手で自分の口を覆い、そして再び視線が合うのを待つてから遠慮がちに尋ねる。

「あの……大丈夫、ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

グランゼルにも、この非現実的な状況はほぼ飲み込めていた。少し頭の中を整理し、そして問いかける。

「しかし、お前のほうこそ……さつきは司祭に操られれたようだったし、今はこの大きさだろう。さらわれてからいったい何があつたんだ？」

「さらわれた？」

瞬きを二三、エリザの視線がグランゼルの離れさまよう。普通なら憶えてないはずはないのだが、どうもその辺の記憶がぼやけているらしい。

「そうだ。四日前に光の教団がお前を拉致してから、こっちは必死で探してたんだぞ」

グランゼルがそう付け加えると、さまよっていたエリザの視線が再び彼の元に戻った。この人は自分を助けようとしている。小さい上に鎧兜もあるので顔はよくわからないけど、この人の声を聞いたことがある。そして隣にいる暗褐色の鎧、この男はさつき自分が癒そうとした人だ。たしかそれを命じた司祭は太陽をあしらった刺繍の法衣を着ていて、自分もまた同じ服を来ている。この柄、別の場所で見たとような……

「あゝ！」

いきなりの大音響がグランゼルの体をビリビリと揺さぶる。エリザが左手で口を塞いでいたため、そして息を吸い込む動作を見てグランゼルが咄嗟に耳を塞いだため辛うじて意

識を繋げることはできたが、真っ白になった感覚のなか残響に似た耳鳴りだけが残る。

「ご、ごめんなさい。グランゼル様」

思考すらまともに働いていないグランゼルには、その言葉は届いていなかった。

グランゼルの落とさないように注意を払いながらエリザはゆっくりとその場に座り、左親指と人差し指で横たわっている戦士を次々につまみ上げて右掌に乗せてゆく。鎧込みで二十貫（七十五キロ）はあるはずの戦士を麦穂のように軽々とつまみ上げるその動作をグランゼルは何も言えずに見ていたが、四人目に積み上げられた男を見て手を振り声を上げ制止する。

「? …… なにか?」

エリザが手を止め視線をグランゼルの向けると、彼は隣の魔法戦士を指差しながら問う。

「もしかして、こいつ等も助けるのか?」

「ええ、もちろん」

即座に答える。

「光の教団の人間だぞ?」

エリザはやや戸惑っているような表情を見せながらも、ゆっくりと肯く。

「でも、今の私なら助けられるんですよ? それを見殺しになんて……」

小さく首を横に振るエリザに、グランゼルは小さく項垂れる。優しいとか律義とかいうより、泥棒に追い銭をよこす愚に近い話だ。しかし、この若い治療師が普段から自身の力不足を悔やんでいたことを知っているので、余り強く言う気にもなれない。

「わかった。しかし……」

彼らをどう押さえておくか、特に魔術師をどうするかが問題だ。そのことを伝えると、エリザはしばし考えた後おもむろに左手の指で自分の黒髪をとき、抜けた数本の毛髪を右掌に垂らした。

「傭兵さんはこれで縛れませんか?」

グランゼルは髪の毛を拾いあげてみる。やや太い紐くらいあり、左右の腕に絡めて思いきり引いても切れる様子はない。

「ん、大丈夫そうだ」

それを聞いてエリザの表情が少し明るくなる。

「じゃあ、魔術師さんは、それに目隠しをすれば……」

「うむ」

グランゼルは腕を組み、考える。

魔術の行使には精神の集中と対象の知覚が欠かせないため、魔術師を更迭する際にはそれを封じる手段——具体的にはある程度の負傷・食事を抜いての禁固・目隠しその他——が用いられる。

「そうだな、加えて腕の一本でも折れば良いのだが」  
エリザの眉が少し内に寄る。

「そこまでしないと、駄目ですか？」

「うむ」

頷き答える。腕を組んだまま譲らないグランゼルト、困惑した表情を浮かべ彼と魔法戦士とを交互に視るエリザ。

しばらく続いた沈黙の後、エリザが遠慮がちに口を開いた。

「解りました。じゃあ、とりあえず……」

右掌をそつと降ろす。

しかし、グランゼルトにとってはたまったものではない。浮くような感覚と共に彼の地面が傾き、手を張って耐えるも着地に伴う衝撃によって彼は二回転ほど後ろに転がる。

「だつ、大丈夫ですか？」

エリザのうわずつた声が上方から届く。柔らかい掌の上だったため、体の節々を少し痛めただけで済んでいる。多少よろけながらも立ち上がり、手を振って応えた。エリザはほつと息を漏らし、そして真剣な面持ちで彼に焦点を合わせる。すると、グランゼルトの体内を何やら熱いものが一瞬だけ駆け巡った。それだけなのに痛みは失せ、体中に力がみなぎっている。

術を終えたエリザはグランゼルトに掌から降りてもらい、問うた。

「誰が味方なのか教えて頂けますか？」

その意味の解らないグランゼルトが怪訝な表情を向けると、彼女は少し照れたような笑みを浮かべて言葉を継いだ。

「いや、あの……皆さん小さすぎて判らないんです」

それを聞いて思わず吹き出してしまう。根本的に勘違いしていると彼は思ったが、言葉としては出さないことにした。

グランゼルトの指示に従って倒れている兵士を拾い集め、三々四人ごとに回復術を掛ける。端から見ると離れ業のようだが、術を行使しているエリザ自身にとっては魔力を絞る必要がないため寧ろ楽な作業だ。回復して起きあがった兵士たちは彼女の姿を見て呆然としてはいたが、恐怖に駆られた行動をとる者はいなかった。数少ない治療術師の一人として広く親しまれていたからである。

全員が動けるようになったのを確認すると、エリザは極力水平を保つように掌を降ろす。そして彼らが降りるのを待つから再び自らの髪をとき、抜けた毛髪を彼らの上に落として、言った。

「これで、倒れている人たちを縛って下さい」

それだけ言われても、状況も掴めていない——辛うじて自分達が締められたわけではないと解った程度の——兵達には理解しようもない。ぼかんとしている彼らにグランゼルトが説明を加える。

「そうやって今倒れている敵さん達を護送するらしい」

それでもなお、理解するのに早い者で数瞬を要した。意味を解した者の一人、長弓を携えたイーゼムという名の若者がエリザの方を見上げ、陽気な声で言う。

「敵も助けるのか。まったくおまえらしい！」

少し照れくさそうに笑いながら、「すみません」とエリザが返す。その巨軀に似合わぬ普段通りの仕草に、彼らの内に残っていた恐怖や疑念も霧散する。言った後でしまったと思っていたイーゼムも、表情には出さないようにしたものの内心ほつとしていた。

兵達は髪を適当な長さに切つて数本単位で束ね、倒れている戦士や弓兵の手足を縛る。縛られた兵士達を拾いあげようとして、ふとエリザは思いとどまった。

司祭が、いない。

顔を上げ見回してみるが、やはり見つからない。彼女は立ち上がつてより広い範囲を見回したが、いない。振り向き、そして反転する。翻る巨軀が風を生み、見張り塔ほどもあるブーツが地響きをたてて踊る。周囲の兵達が思わず一二歩引いてしまう程の威圧感だが、エリザは足下に気を払っていない。

天蓋の前、最初彼女が居た辺りに紅い染みが二つ付いているのが気になった。小さい方は魔法戦士が出血した跡だろうか。もう片方はそれより大きくて丸く、そしてよく視ると布のような物が張り付いていないか。

「!!」

はつと短く息を吸う。染みに近づき、しゃがんで観察する。血に染まった布にはそれでもなお太陽をかたどった刺繍が見て取れる。不意に右肩甲の辺りがべたつくように思った。触つてみるとやはり粘つこい感触があり、目前に戻した左手には暗紅色の糊のようなものが付いている。

もう明らかだ、拒絶することもできない。

（殺した……私か？）

体の各所から汗が滲み出し、体は小刻みに震えている。左掌を見る視線も虚ろで、思考が空回りしていることは誰の目にも明らかだ。

「そんな……」

少しの間を置いてようやく出た言葉がそれだった。

震えもやや収まり、虚ろだった視線は元司祭だった染みを再び捕らえ始める。起きあがる直前に寝返りをうったとき潰したのだろう、放射状に広がった暗紅色の染みが惨劇を物語っている。

そつと法衣を拾い上げてみる。中には殆ど肉が入つておらず、元司祭だったことはその法衣を以て予想するしかない。

（こんなの、どうすれば……）

ほぼ直感的に、無理だと確信していた。しかし下から見ている連中にはそれが解らない。イーゼムがエリザの視界内にとことこと入り、急かすように言う。

「どうした？　治療しないのかい？」

混乱しているところへ浴びせられたその言葉に、エリザの感情が瞬間的に沸き立つ。

「それが出来ないからっ！」

悲鳴に近い声。落雷のような音圧をまともに受け、彼は後方にぼたりと倒れた。白目をむき、右耳から血を流している。

「ご、ごめんなさい……」

エリザは慌てて彼の体を拾い上げようとするが、摘むときに力加減を間違えてしまった。ぼきっという音が鳴り、肋の折れる微かな感触が指に伝わる。

強ばったように目を固く閉じながら、ようやく彼女は自分の巨体を持つ意味を理解し始めていた。この大きさだどちよつとした不注意がたやすく彼らの命を奪う。しゃべるときも、歩くときも、掬うときも、どんな時でも細心の注意を払わなければならない。

まずは、掌の上に横たわり血を吐いているイーゼムに注視する。一度深く呼吸してはやる気持ちを抑え、慎重に魔力を加える。

ほどなく彼は目を覚ました。

「ごめんなさい、大丈夫ですか？」

エリザが問うとイーゼムは起きあがり、苦しそうにだが手を振って応える。そしてすかさず同じ掌上の赤い法衣を指さして「これか？」と問う。

エリザは無言で頷き、彼の乗っている掌を慎重に地面までおろす。イーゼムは降りようと二三歩進んだところで立ち止まって振り返り、上を向いて

「まあ、頑張れ」

と少しぶつきらぼうな口調で言った。

「ええ。なんとかやつてみます」

エリザは静かにそう答え、イーゼムが掌から降りるのを確認してから掌を再び眼前まで持ち上げた。

死人を生き返らせる蘇生術は『術にして奇跡』と言われ、今でこそ葬儀の一環と位置付けられているが、原理的には可能だと聞いた覚えがある。たしか高度な『変幻術』で身体そのものを作り、そこに生命の息吹を吹き込みながら本人の霊を呼び寄せて体に封じ込めるという手順だったか。それら一つ一つが高度な術であるのは勿論だが、秘められた部分も多く、成功例も殆ど無いらしい。ましてや駆け出しの彼女にとつては余りにも荷の重い術である。

しかし、とエリザは思いとどまった。今自分が持っているであろう膨大な魔力なら何とか出来るかもしれない。なにより、このまま諦めるということだけはしたくない。

彼女は目を閉じ、元々の司祭の背格好を思い起こし始めた。

治療に専念しているエリザの横で、グランゼルとイーゼムは彼女に聞こえないような小声で喋っていた。

「法衣からして、多分司祭かと。完全に潰れてましたが」  
両手を水平に合わせながらイーゼムが答える。

「司祭、というと親玉だな」

顎に手を当てて頷きつつ、グランゼルは考えていた。蘇生術なんてのは物語上の奇跡に過ぎないと思っていたが、もし本当に司祭を蘇らせることが出来るのならエリザに掛けられた術を解けるかもしれないし、最悪でも儀式の詳細を吐かせるくらいは可能だろう。なによりも彼女自身がこの男の蘇生を強く望んでいる。

しかし、蘇生ができたとして、その次はどうするのか。

しばしの思考を中断し、グランゼルはエリザの方を見上げる。丁度彼女は術に失敗したのか、無念そうに天を仰いでいるところだった。

「少し話をしたいのだが、良いか？」

グランゼルは努めて低い声で尋ねる。

「え？ ええ、まあ」

エリザは一瞬だけ怪訝そうな表情を浮かべつつも彼に応じる。ここで断るほど切羽詰まっていなかったことを確認しつつ、グランゼルは慎重に問いかける。

「いま、そいつを生き返らせようとしているんだな？」

「ええ。なんとかやってみようと思っています」

その口調から自信は余り伺えないものの、決意だけは固そうだ。これだけの大きさと意志があれば本当にやりかねない。

「で、相手は司祭だな？」

「はい」

「一度おまえはその司祭に操られていただろう」

「……」

「奴を生き返らせて再びそうならないとも限らん」

「ちよ、ちよつと待つてください」

慌ててエリザがグランゼルの台詞を遮る。声の大きさに二人が顔を顰めるのを見て彼女は右手で自分の口を塞ぎ、小さな声で言葉を継ぐ。

「それじゃあまるで、私に『生き返らせるな』と言ってるみたいじゃないですか」

「その通りだ」

グランゼルは非難めいた口調のエリザを睨みつけ、きつぱりと言い切る。その強い態度が彼女の反論を押し返している間に、彼は素早く言葉を繋ぐ。

「それにだ。ここで奴を生き返らせると、結局二度殺すということになる」

「二度？」

エリザは少し身を乗り出し、グランゼルが強調した部分を問い返す。

「なぜですか？」

「裁きを受ければそうなる。それだけの罪だ」

確固としたグランゼルの言葉に打ち砕かれたかのように、エリザの視線と掌、そして肩ががっくりと崩れ落ちる。

今まで生き返らせることばかり考えていたため、生き返らせることが更なる苦痛を生むなどとは思ひもしなかった。もし本当に処刑台に登らせるための生還だとしたら、それは命を弄ぶ拷問でしかない。しかし、どうせ死が確定しているのであればここで殺しても同じなのか？

(それは違う！)

彼女は反射的に激しくかぶりを振り、長い黒髪を揺らせる。だが、それではどうするのか、どうするべきかを考えても全く案が見つからず、思考が先に進まない。

ややあつて、手元に落としていた視線を少しだけ上げ、エリザはぼつりと言い放った。

「私、どうすれば良いんでしょう」

その問いにグランゼルは視線を下げ逸らす。イーゼムは逆に彼女を見上げて何か言い出そうとしていたが、それに気づいたエリザが彼に視点をあわせると、耐えきれなかったのか彼は目を伏せてしまう。

答えを知っていいような素振りに、エリザは思わず身を乗り出して問う。

「あなたは、あなたはどう思いますか？」

巨大な上半身に迫られて一瞬たじろくものの、イーゼムはすぐに顔を上げる。既にエリザの真つすぐな眼差しが彼を捕らえ、離そうともしない。

逃げられない、そうイーゼムは感じ取った。彼が言おうとしていたのは労りの言葉などではないのだが、ここで気休めを言うのは無意味だ。彼は話す内容を頭の中でもういちど構成し、一通り噛みしめてから語りかける。

「俺も、グランゼルの意見に賛成だ」

「やつぱり……：：：：そうですか」

イーゼムは彼女の膝先まで歩み出て視界内に入り、ほとんど真上にある顔を見上げる。

「つらいことだったのは、解る。特にお前にとってはそうだろう」

そこまで言って深く息を吸い、そして一気に言う。

「だが、殺しの罪から逃れるために命を弄ぶのはもつと深い罪になるとおもわないか」

「ま、待つてください」

上ずった声とともに、エリザは身を強ばらせる。

「罪から逃げるって、どういうことですか。私はそんな……」  
膝先のイーゼムを睨み、エリザは責めるような口調で反駁する。その右手はいつの間にか固く握られていたが、遙か上から睨む双眸や自分の背丈くらいの握り拳を前にしながらも、なぜか彼はあまり恐怖を感じなかった。

落ち着いた口調で、彼は諭す。

「そんな積もりじゃないのは解る。今は奴を助けたいのに必死で、そこまで考える余裕が無いんだろう」

それを聞いたエリザの首が僅かに落ちる。ただ、瞳がイーゼムに向き合っていないところから頷いたわけではなさそうだ。

「そこがお前らしいと言えはそうなんだが……しかし、後で自分でどう思おうかを考えてくれ」

離れていた視線が再び彼を捕らえ、二三度の瞬きの後にエリザは目を閉じる。その真剣な表情にイーゼムは続く言葉を止め、上を向き過ぎて疲れた首を左右に寝かせてからまた見上げる動作を何度か繰り返す。

長い沈黙の後にようやくエリザは目を開き、  
「分かりました」

と、わずかに震える声で言った。

「祈るだけ……祈るだけなら、構いませんよね？」

膝先のイーゼムとその後ろに控えるグランゼルの両方を目で捕らえながら尋ねる。

「もちろん」

イーゼムは即答し、後ろを振り返る。目があったグランゼルは僅かに苦笑を滲ませながら斜め上の不安げな顔を見上げる。

「祈るくらい、一々問うことでもあるまい」

「いや、あの……すみません」

エリザは力無く頭を下げる。イーゼムは溜息を漏らし、彼女の前に歩み寄ると壁のように聳える膝にそつと手を触れる。見上げると、案の定というか彼女は次の言葉を待つかのように彼をじつと見ている。

「まあ、落ち着け。みんなお前を信じているから、きつとエリザは驚いた様子で目を見開き、自分を指さして問う。

「信じてくれるんですか、この私を？」

今度はイーゼムが驚く番だった。彼女の巨軀と人を殺めた罪を指しているのは解るとしても、こんな問いを発するまで追いつめていたとは……

「何を言ってるんだ、当たり前じゃないか！」

イーゼムは慌てて怒鳴る。それと同時に拳で『壁』を叩いていた。

「お前は何も変わっちゃいない。安心しろ」

膝を叩く拳はエリザにとって余りにも弱く、怒鳴っているはずの声も小さい。だが、確信を持った口調と言葉は大ききの差を超えた力で彼女の内に響く。

(信じてくれるんだ……)

素直にそう思えた。こんなに大きな自分を、人を殺めた自分を、彼等は信じてくれる。何も変わっていないとさえ言ってくれる。

力が抜けたかのようにエリザの口から長い溜息が漏れ、頭



が垂れる。暖かい風を受けて身構えるイーゼムの背中に彼女は右手でそっと触れ、ぽつりと言った。

「ありがとう」

エリザは血塗られた法衣だけの亡骸を膝の上に置き、手をつくつて軽く目を閉じる。そして朗々とした声で祈りを捧げ始める。大きな声でありながらどこか穏やかな調べに、作業に戻っていたグランゼルをはじめとする兵たちも思わず手を止めて彼女の方を見やる。

鎮魂を祈るのは本来なら聖職者の仕事だが、治療術師が関わることも多い。自分の無力さと残された者の怨緒さえ籠もった視線を受けて祈る辛さは相当なもので、こうやって祈る毎に打ちひしがれたことをつい思い出してしまう。それを受け止めてこそ一人前だと師匠からは言われているのだが……。

とそのとき、突然祈っているエリザのこめかみを冷たい両手が掴んだ。

(！)

反射的に震えてしまうほどの異様な感触。辺りを見回してみても、その光景に変化は無い。エリザは再び目を閉じて祈りに入ろうとしたが、そんな彼女の頭の中に今度は低く掠れた声が響く。

(儂に心寄せる時を待っておったぞ……お前は蘇生術の順序も覚えておらんのか)

(えっ?)

それは紛れもなく司祭の声、それも直接響く「心の声」だった。初めて聞くそれに彼女は驚き目を開くが、目に入る景色が彼の声を聞く支障になるように思えたので、即座に瞼を下ろす。

(まあ、一介の治療術師には縁遠い術じゃからの。正式な手順は、まず魂を呼び寄せ、その魂から肉体を再生するのじゃ。できるか?)

(はあ。しかし……)

いきなり講釈されてしまい、エリザには生返事しかできない。しかし、蘇生はしないという先程の決断を彼は聞いていないのだろうか。熱の帯び方も含めて怪しいと思う彼女をよそに、司祭の声はさらにまくし立てる。

(出来ないなら儂が代わりに術を行使しよう。)

『術にして奇跡』と言われる通り、蘇生は術を越える何かを持つぞ。下手打つとそちらが逆に『呼ばれる』やもしれぬし、摂理を乱す罪を己が御霊に刻むこともある)

(で、でも。生き返ったとして貴方はどうするんですか?)

やつと割り入ったエリザの問いだったが、

(案ずるな、このまま処刑台に向こうても構わぬ)

司祭は強固な口調であっさりと言答する。

(さあ代われ、お前の魔力と御霊を儂に委ねよ)

(!!)

エリザはみたび目を見開く。熱の入った講釈や二度死ぬことも厭わぬ姿勢の訳がやつと解った。即座に彼女は身を引き宙を睨みながら両手で耳を塞ぐが、それでも司祭の声はくぐもるどころか一層はつきりと強く聞こえてくる。

(なぜ拒む? お前にとつても悪い話ではあるまい)

目を固く閉じて、体を強ばらせても声は緩まない。

(何を迷っておる?! さあ、代われ!)

遂に発した怒鳴り声。その声は強い木霊のようにエリザの頭の中で何度も響く。更に何か得体の知れない冷たいものが彼女の首筋に触れ、そこから肩へと伝わり……  
「やめてっ!!」

エリザは遂に首を振って叫んだ。

彼女の正面で様子を伺っていたイーゼムはまたもや空気の振動をまともに受けてしまい、後ろに数歩よろめいて尻餅をつく。作業をしていたほかの連中も一斉に彼女の方を向く。

「あつ……ご、ごめんなさい」

エリザは座ったまま上半身を一杯に屈め、イーゼムのすぐ上から様子を伺う。消耗こそ激しいものの氣を失つてはいないようで、彼は差し伸べられた指を借りてどうにか立ち上がった。

「大丈夫ですか?」

「だつ……」

思わず怒鳴り返そうと上を向いたイーゼムだが、彼の顔と

変わらない大きさの潤んだ瞳に相對する。その目を見るだけで彼女が本氣で心配していると解つてしまい、怒る氣も失せてしまった。

「叫ぶ時は何か言えよ……」

代わりに彼は呟く。

「奴に呼ばれたのか?」

「ええ。それと何か入り込まれるような感じがして、それで思わず……」

ゆっくり身を起しながらエリザは訥々と応える。申し訳無さそうに眉の下がった顔が遠ざかるのをぼーっと見上げていたイーゼムだったが、いきなり彼の腰辺りに何かが巻き付いたかと思うとそのまま一気に持ち上げられる。気づけば彼は暖かい両手に包まれ、心配そうに様子を伺う瞳と再び對面していた。

「ごめんなさい。あなたを何度も傷つけてしまって」

か細く震える声と、鼻をすする微かな音。半ば閉じた目からは今にも涙がこぼれそうだ。胴体より太い指で軽々と掴み上げておきながら、この氣弱な態度。視界一杯に広がる泣き顔を前にイーゼムは溜息をつくしかない。

「解つたから、泣くな。それよりすることがあるだろ」

苦笑さえ浮かべながら彼はゆっくりと諭す。

「せっかく奴の誘惑を退けたんだ。他の連中は治してやれ」

「あ、はい。そ、そうですね」

イーゼムを包む手を膝まで下ろし、宙を凝視して一呼吸。もうあの声は聞こえてこないが、それでも彼女は目を閉じて心の中で強く念じた。

（罪を負う覚悟なら出来ています。それでも信じてくれる人がいるから。

……だから、貴方に私の御霊を委ねるわけには行かないんです）

そして、ゆっくりと目を開けてみる。

幸いなことに、返答はなかった。

下を見ると、イーゼムの問うような表情が目に入る。エリザはもう大丈夫と言うかのように微笑み、軽く頷いた。

その後の治療は順調——というよりも、普通では考えられない速さで——進んだ。致命傷を負っていたはずの兵たちでさえ彼女の治療によって次々と意識を取り戻したのである。

肉体が残って魂が抜け切らない限り、原理的には高度な治療術で対処できるが、重体の患者一人を治療するだけで疲れ果てるのが常だ。何人も立て続けに治療できるようなものではない。

「本当に凄い威力だな」

「ええ」

感心さえしているグランゼルにエリザは満面の笑みで応じ、さらに右手を軽く握って言う。

「全然疲れないんです。まだまだ行けますよ」

（……もう全員治療しただろう）

グランゼルは呆れたような笑みを浮かべつつも、治療できることを心底喜んでいるエリザを前にして言い返す気にはなれなかった。

回復した兵たちを連行のために縄で繋ぐ間も、抵抗はなかった。治療の前に両手を縛られている上に幽閉していた治療術師が桁外れの巨人となって見下ろしているのだから、当然と言えば当然である。赤の魔法戦士も両手をねじり上げられたうえに目隠しまでされているため、手の出しようがない。ただ、毛髪の縄はすぐに消えてしまったので、天蓋の布を割いて燃ったそうだが。

「じゃあ、帰りましょう」

全員が集まった頃合いを見計らってエリザは兵達の側に右掌を降ろす。彼女にとつてはそつと降ろしたつもりでも、体温を含んだ暖かい風が周囲の者達を撫でる。掌の広さは一問四方で段差は一尺から二尺くらい、重さはどのくらいあるだろうか。

「乗れることか？」

いち早く意図を察したイーゼムが上を向いて問う。

「ええ、そのつもりですけど……」

答える言葉をそこで区切り、エリザは改めて集まっている兵たちと掌の大きさを比べてみる。彼女から見た兵たちの肩

幅は七く八分ほどあり、十人近い鎧の男を乗せるのはたとえ立たせたとしても難しそうだ。

「ちよつと、手狭みたいですね」  
残念そうに漏らす。

(いつそ、もつと大きければ良かったのかなあ)

理想は十人を座らせても十分に余裕のある大きさだ。とすれば今の倍くらいの大きさが必要になりそうだが、そうすると人の五く六十倍ということになる。今までも人の体を持ち上げたりする際には注意が必要だったが、これが一寸強にまで縮んでしまうとなると更に慎重な扱いが要求されそうだ。そんなことを考えていると不意に膝や手の甲を擦る奇妙な感触があつたので、エリザは考えるのを一旦止めて膝先に視線を戻す。すると……

さっきの半分位、身の丈一寸ほどに縮んだ兵士たちが皆一様に彼女を見上げていた。

「あれ？　皆さん、どうして……」

言いかけて科白と思考が止まる。そのまま瞬きを二三度。

「つて、私が大きくなつたんですか？」

彼女を見上げている頭の幾つかが縦に振られ、一人が半ば笑いながら大声で応える。

「どうやったらそんな考えになるんだっ！」

念じれば自分の大きさを變えることが出来るらしい。取り敢えずエリザはそう解釈することにした。ともあれ、今の大ききであれば全員を乗せても十分な余裕がありそうだ。

「とりあえず、帰りましょう。これで皆さん乗れますよね？」  
はにかみながら彼女は申し出る。その一言でようやく我に返ったのか、兵たちはのろろと動き出す。

掌の厚みはおよそ四尺、兵たちの腕の下まであり、軽装の弓兵ならまだしも鎧を着た歩兵にとつて直接登るのは難しい。先に登った弓兵たちが引つ張り上げようとすが、掌の上は柔らかくて踏ん張りが効かないため逆に引きずり下ろされてしまう。

上から見ていたエリザにとっては、自分の大きさを嫌でも実感させられる光景だ。彼女は右手の小指を左手でぐっと押さえ、地面に半分ほど埋めた小指を差して言う。

「じゃあ、こつちから回つて下さい」

彼女の言動を理解した一部の兵達は小指の方に回り、ゆつくりとその上を渡る。柔らかくて不安定とは言え、太き二尺強の丸太橋だ。転ぶ者もない。

小指を渡る兵たちの身はエリザにとつて余りにも軽く、くすぐったい位にしか感じられない。だが、時にふらつきながら指の上を歩く小さな兵たちが同じ「人」であると思うと何だかおしく、つい微笑みがこぼれる。こんなに大きき

が違うのに彼らは自分を信頼してくれている、だから私も彼らと一緒に道を歩いていきたい……。

だが、他の兵たちが倣おうとしたところでグランゼルが「待て」と制止の声を上げる。

「二手に分かれよう」

「二手、ですか？」

怪訝そうな表情を浮かべながら、エリザが低い声で問う。

「そうだ。先発隊が街に入つて事情を説明するから、その後に来て欲しい」

グランゼルは彼女を見上げて頷き、説明を加える。確かにその内容は彼女の疑問を解消するに足るもつともな理由だ。なぜ事情の説明が先に要るのかも含めて。

「そう、ですよ。こんな大ききだから」

俯きながら応えるエリザの口調は尻すぼみだ。そんな彼女にグランゼルは何も言えなかつたが、代わりにイーゼムが「いやあ、その服だろ」

と、軽い口調で割り込んだ。

「そうだな」

即座にグランゼルも同調する。そしてエリザの方を見上げてみると、たつたそれだけの違いにも関わらず彼女の表情は明らかに柔らかくなっている。

「とにかく、街に入れるようになれば緑の狼煙を上げる。それまでは大人しく待っていてくれ」

「どのくらい掛かります?」

間髪入れずにエリザが問う。この大きさだと真剣な眼差しが伴う迫力も相当なものだ。気圧されたグランゼルは僅かにどもりながら応える。

「い、いや……わからん。途中の村にも説明するから、かなり掛かるかもしれん」

「そうですか」

再びしよげるエリザ。グランゼルは慌てて言葉を継ぐ。

「いや、まあ今日中には入れると思ってくれ。分担して当たれば早いはずだ」

「あ、はい。ありがとうございます」

エリザはぺこりと頭を下げる。その動作につれて長い黒髪が前に流れそうになり、慌てて彼女は身を起こし直した。

それからしばらくの間、グランゼルとウオーゼンが協議した結果、捕虜付きの本隊が六人、別動隊が二人という振り分けに落ち着いた。それぞれに属する者の名が読み上げられるが、名前を呼ばれないままイーゼムが残る。

「あれ? 俺はどつちですか?」

「おまえはここに残れ」

所属を問うイーゼムに対し、グランゼルは彼を指さして答える。

「親しいから良いだろ。捕虜が多いから人員を割けんだ」  
確かにエリザが術を修めに出る前から互いに知っていた仲

ではあるが……。そんなことを思いながら彼女の方を一瞥してみると、エリザはじつと彼の方を伺っている。不安そうな様子からしても、ここで拒否すれば彼女が寂しがることは明らかだ。イーゼムは彼女に向かって微笑み掛け、頷いて見せる。

「解りました、残ります」

グランゼルの方に向き直って言ったとき、返答を待っていたかのように誰かが

「変なことすんなよー」

と囁し立てる。

「しねえよっ!」

どなり返すイーゼム。続けて「出来るわけねえだろ」という科白が出そうになったが、彼は咄嗟にそれを飲み込む。目だけ動かしてエリザの方を伺ってみると不意に目が合い、彼は慌てて視線を逸らした。

一通り先発隊を見送るとエリザは立ち上がり、目を閉じて念じる。すると彼女の体が少しずつ縮み始め、先とほぼ同じ大きさになる。そのまま彼女はしばらく目を閉じていたが、やがて目を開けて溜息交じりに言う。

「これ以上は無理みたいですね。もっと小さくなれたら良いんですが……」

そして彼女は膝を立てて座り、その膝の上にイーゼムを乗せる。

「こうすれば、お互い首が痛くないでしょ」

そう言つてエリザは微笑み、イーゼムも笑いながら「そうだな」と頷く。

「しかし、これからどうする？」

不意に発したイーゼムの問い。エリザは「そうですね……」と言つたきりしばらく考えていたが、やがて真剣な表情で答える。

「やつぱり、皆さんを癒してあげたいと思います」

「ん？」

質問の意味を微妙に取り違えられていると感じながらも、イーゼムは即座に気を切り替え言葉を返す。

「ああ……まあ、今まで通りつてことだな」

「ええ、まあ、そうですね。でもこれだけの力があれば、今までよりずっと多くの人を助けてあげられると思うんです」

「んん……：：：～」

確かにその通りだが、逆に言えばエリザが人の世に留まる方法はそれ位しか無いのではなからうか。イーゼムは彼女自身がその辺りをどう思っているのかという疑問を感じたものの、彼女が気づいているかどうか解らない以上は聞けるわけもない。

そんな悩みを知つてか知らずか、エリザは尚も話を続ける。

「外にも出てみたいと思つています。出来ればこの島の人総

てを癒してあげたいなあ……」

そこまで言つて、エリザは少しだけ恥ずかしそうに微笑む。その笑みに陰りは見られず、純粹に癒したいのだろうとイーゼムは判断した。現実としてそう順調に行くとも思えないが、今はそれで良い。彼は極力自然に笑つて返す。

「そりゃあいい。……：：：：：：：：：：：：：：～しかし壮大な計画だな」

言いながら彼はエリザの頬に触れようと手を伸ばすが、遠近感が狂つているのか頬に届くと思つていた手が空を掴む。しまったと思う頃にはもう遅く、重心を崩したイーゼムはつんのめつて膝から滑り落ちる。

「あつ！」

エリザは咄嗟に手を差し伸べようとしたが、彼の胴より太い人差しでは少し加減を間違えただけでまた傷つけかねない。手を出せないまま不安そうに見守る中をイーゼムは法衣の上をそのまますると滑つていく。

結局彼が臍の辺りで止まつてから、エリザはおずおずと問いかける。

「だ、大丈夫ですか？」

イーゼムは即座に立ち上がるが、足取りがおぼつかず倒れそうになる。エリザは前のめりになった彼の胸を指で支え、再度「大丈夫ですか？」と問う。

「大丈夫だ。ちよいと足場が悪くてな」

イーゼムは手を上げて応えるが、エリザの眉尻はまだ下がつ

たまだ。彼は僅かに困惑した表情でそれを見上げていたが、ちようど腰の位置にあつた指に座ると不意に悪戯つばい笑みを浮かべて付け加える。

「むしろ面白かつたくらいだぞ」

緑の煙が上がっているのをエリザが見つけたのはそれから半刻あまり後、もうすぐ日も暮れようかという頃だった。

「あ、あれ。見てください」

エリザは立ち上がり、掌上のイーゼムに煙の方向を指さして見せる。

「ん？ あれは……王都じゃないな」

嬉々とした表情のエリザとは対照的に、イーゼムの声は低い。

「王都までは五里以上あるから、取り敢えず日が暮れる前に来いということなんじゃないか」

その説明にエリザの喜びも失せ、ぽつりと漏らす。

「やつぱり、難航しているんでしようか……」

「捕虜の扱いに困っているか、ウォーゼンの爺さん辺りがへたつたか。大方そんなところだと思うぞ」

内心慌てつつも、イーゼムは表向き呑気な口調で付け足す。

「まあ、行こうや」

「はい」

念のためエリザは灯明の術を自分の左掌に掛け、右掌にイーゼムを乗せたままゆつくりと歩き始める。

それから小半刻ほど後だろうか。術による光が徐々に明るく感じられる頃になってエリザは違和感に気づいた。右掌上で丸くなつてうとうとしていているイーゼムの大きさが、出発時より少し大きくなっている。立ち止まって周りの木々の高さを見てみるとこれらも膝より高い位置まで上がっており、どうやら自分が小さくなつたようだ。

小さくなるように念じた積りはないが、そういうものなのだろうか。立ち止まったまま考えているうちに、イーゼムが浅い眠りから覚める。

「あ、おきてしまいました？」

エリザが少しだけ申し訳無さそうに問うと、イーゼムは彼女の方を振り返つて頭を搔きながら応える。

「すまん。暖かいから、どうにも眠くて」

イーゼムのぼつの悪い笑みに、エリザもつい微笑を漏らす。だが彼は自分が座っている掌の端と端を一瞥すると、素早く問う。

「で、おまえ、少し小さくなつてないか？」

「え、ええ。それで、ちよつと……」

困惑した表情で応えるエリザ。イーゼムは少し考えていたが、いきなり立ち上がる。驚いて左手を沿えるエリザのことも構わず、彼は早口でこう言った。

「あいつら、太陽絡みだつたよな？」

「あいつら……つて？」



エリザが問い返すと、イーゼムは如何にももどかしそうに腕を振りながら

「教団の奴らだよつ」

と言り返す。

「え、ええ」

「だったら、日が沈めば戻るんじゃないか?!」

エリザが頷くや否や、イーゼムは考えていたことを一気にぶちまげる。その大胆な仮説に、エリザは目を大きく見開いて彼を注視する。

「つて……元の、大きさに？」

「おう！」

力強く応えるイーゼムの大きさは、いつの間にか中指より二回りくらい大きくなっていた。エリザは彼の方を見たまま考え始める。

(戻れる? 元の大きさ……みんなと同じ大きさに?)

その意味が彼女の頭の中で具体性を伴うにつれて、自身も気づかないうちに涙が込み上げてくる。

「あ、あれ? どうしたんだろ。私……」

エリザは震える声で呟き、軽く鼻をすすする。

「まあ、良かったじゃないか」

イーゼムのその一言に、エリザは無言で頷く。

力は失うことになるが、きつとこれで良いのだろう。イーゼムはそう思い、視線を下ろす。座っている掌は既に三尺四

方にまで縮んでいる。もうじき日は暮れ、エリザも元の大きさに戻るだろう。そうすれば……

重大なことに気づいたイーゼムは立ちあがって上を向き、

一拍おいて大声で言う。

「悪いが、急がないとまずいぞ。夜の山道は危険だ」

エリザもその言葉にはつと我に返り、頷くと左腕の袖で涙をはらう。

だが出発する前に、エリザはふと思ったことをイーゼムに言う。

「あ、でも、その前に……先に言ったことは、内緒にして下さいね」

「先に？」

イーゼムは鸚鵡返しに問い、腕を組んで今までの会話を思い出してみる。しかし彼女が秘密をばらしたわけでもないし、誰かの悪口を言っていた記憶もない。

「内緒にするようなこと言ったか？」

「いや、あの……これから何をするかと聞かれた時の答えです」

イーゼムが問うと、エリザはしどろもどろに答える。

「ああ、総てを癒すつて言ったことか？」

問われたエリザは顔を紅らめながら頷く。

なんだ、そんなことだったのか。イーゼムは笑いながら「わかったよ」と答える。だがその笑みはすぐに悪戯っぽく

なり、彼は科白を加える。

「だが、明日の朝にはまた戻るかもしれないねえぞ？」

「戻るって言わないで下さい」

エリザは口を尖らせて抗議する。しかしその表情は嬉しもうだった。

落ち合う予定の村に着いたころには完全に日も暮れ、エリザは元の大きさに戻っていた。そのことが先発隊を驚かせ、また説明を受けていた村人たちをある意味で拍子抜けさせたが、翌日の朝になって彼らは更に驚くことになる。

エリザが家から出た途端に、再び以前の圧倒的な大きさになってしまったのだ。

皆が呆然と見上げる中、ひとりイーゼムだけが悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「あー。やっぱり、戻っちゃったなあ」

「だから、戻るって言わないで下さいよ……」  
対するエリザの弱々しい抗議。だが彼女の中に絶望感はない。

この大きさで何が出来るだろうか。家や木々の上縁ばかりの光景を前に、彼女は思いを馳せていた。

## 第2章 「応対」

1

エリザは脛まである紺のスカートの裾を持ち、鏡の前でぐるりと回ってみた。ちよつとだけ遅れて浮き上がり回るスカートと前掛けは彼女には新鮮に映ったが、その程度のことを新鮮に思う自分が少し恥ずかしくなった。女性の治癒術師としてはごく普通の格好なのだが、独りで乗馬することが多いためシャツにズボンで通してきた。スカートをはくことさえ王都での見習いを終えて以来だから一年ぶり位だろうか。

次にエリザは足元を注視しながら二三歩あるいてみる。丈が長いので下から覗かれても大丈夫そうだが、足元が見えにくいことと思つたよりスカートが風を起こすことが問題になりそうだ。誤つて踏み潰せば肉片すら残らないし、踏みつぶさなかつたとしてもこの風で吹き飛ぶかもしれない。

最後に正十字の入った帽子が歪んでいないか鏡を見て確認し、布を敷いた紐付きの籠を肩に掛けて更衣室を出る。

隣室で待つていたグランゼルは、更衣室から出てきた彼女の姿を見て「ほう」と小さな声を上げた。彼にもまた珍しいものに映つたらしい。

「何故か違和感があるよなあ」

照れ隠しにも見える微笑みを浮かべながらそう付け加え、傍らに居る老執事のウオーゼンの方に目配せする。ウオーゼンは頷き、おもむろに説明を始めた。

魔術の重複により治癒術師が巨大化したとの報を聞いた本国は、宮廷魔術師を長とした一行を観察のため派遣するという内容の書簡をグランゼルの元に送った。そして中春月廿日つまり今日、その一行が来るためエリザが迎える手筈になつている。慣れない上に足元が見えにくい格好を彼女がしているのも貴人を迎えるためだ。

領主別宅から出たエリザは家の影の中で深呼吸し、そしておもむろに影から外へと歩み出る。二歩三歩と足を進めるたびに体が熱くなり、足下を見ると既にいくらか背が高くなつているのが解る。

陽光を浴びると巨大化し、日没とともに元に戻る。念想による制御もある程度は可能だが、上限と下限は天候によつて決まる。数日の経験から自分の体についてこれだけのことが解つていた。

別宅より十分離れて立ち止まり空を見上げる。快晴で日差しが強く熱い。できれば身丈を小さめに収めたいのだが、

この天気では無理そうだ。エリザは三日前の実験を思い出していた。どこまで大きくなれるか確かめるため、村から離れた丘に登り、自らの手で雲を散らす姿を念想したのである。さすがにそこまで大きくはならなかったが、遙か遠くまで見えた景色と視線を下に転じたときの目眩がするような高さはつきりと憶えている。その高さが恐ろしくて殆ど動けなかったのだ……。

しまったと思つたが、もう遅かった。目を開けると受け入れたくない現実が入ってくる。霞んで色褪せるほど遠くまで見える景色、目の眩むような高さ……。前の実験と違うのは（こ）が別宅の前であり、いま道を歩いていたという点だ。二尋（三・六メートル）少々あつたはずのその道は今はずで引いた線のように細く見え、道に入りきるはずもない彼女の長靴は脇の草地を窪ませている。

「今度は何をやつたんだ？」  
家の中が急に暗くなった理由は察しがつく。どうせエリザが余り家から離れずに巨大化したのだろう、そんなことを思いながらグランゼルは窓を開けて外を見る。窓から見えたのは縦に三分割された光の帯だった。紺の上下を着て聳え立つエリザの後姿が見えると思つていたグランゼルにとつては意外な光景だったため、彼は急いで家の外に出る。そして呆然と見上げていたウォーゼンに駆け寄ろうと数歩進んだとき、いきなり横薙の突風が二人を襲つた。

慌ててエリザは周囲を見まわす。周囲の木々は彼女のくるぶし程の高さしかなく、振り返つて下を見ると右後方に一寸立方くらいの置物のような家がある。そしてその脇には麦粒くらいの塵みたいなものが二つ、彼女のスカートが巻き起こした風で転がっている。

しばし後にそれらが自力で動き起きあがるのを見て、エリザは初めてこの塵が人の姿だということを理解した。

「あ、あの……」

そつと後ろに向き直り、少し身を屈めて話しかける。エリザにとつてはそれだけのことだが、足下にいる二人にとつては目前の地形変動に等しい。足を降ろせばその途方もない体重が瞬間的な地震を起こし、風を孕んだ服が回ると暴風となつて吹き荒れ、口の動きに少し遅れて届く声は空気の振動を見て即座に地に伏せたため被害は受けなかったが、見上げると中天までエリザの姿が占める光景が映り、とにかく圧倒されるばかりで声も出ない。

「ごめんさい、大きくなり過ぎてしまつたみたいで」

軽く頭を下げるが、それだけでも彼女の声は一呼吸遅れて空気を振るわせ、重心移動に伴つて爪先が音を立て沈む。

「とりあえずもう少し小さくなりますので」

そう言つて直立の姿勢で二三度深呼吸する。そしてエリザは目を閉じ、二階建ての家と同じくらいに小さくなっている自

分を念想する。

しばしの集中の後、少しずつ身体が熱くなり始める。身体が小さいほど熱を持つことが解っているので、正常な動作だ。

ある程度の熱さを感じたところで再び目を開けると景色は森と丘が主体となるよう変化しており、家の屋根は脛よりやや低く道は彼女の長靴よりやや広くなっている。二尋（三・六メートル）が三寸（九センチメートル）となると四十倍前後であり、大雑把に考えて二十丈（六十メートル）、まあ我慢できない大きさではないとエリザは判断した。

自分の体に関する見積もりと計算が速くなったのも経験の賜物である。ただ、その度に人間離れた値を突きつけられるのはあまり気分の良いものではないが。

「では、行つてきます」

ぺこりと頭を下げると、エリザは反転して東へと歩き出す。本国小隊とは、領境で正午に合流する予定だ。

残された二人は暫くの間、呆然としたまま見送ることしかできなかった。確か三日前の極大化実験では、丘について靴跡の大きさから百五十倍程度の大きさと推測されている。そのときは場に居合わせなかったため、建造物の範疇すら超えた大きさと想像するしかなかったが、まさか天の半分を覆うほどとは思っていなかったのだ。

「とりあえず、戻りましょう」

「う、うむ」

ウオーゼンの声でどうにか我に返るグランゼル。しかし家に入った二人を待つのは、机から椅子から柵まで殆どがひっくり返り混沌そのものを具現したような部屋だった。

馬が走れない程の急峻な山道が続くため普通なら丸一日掛かる行程だが、足下に気を使いゆつくりと歩を進めてもエリザが山地西側の領境に着くまでには一刻も掛からなかった。合流予定は正午だから、まだ相当の時間が残っている。

座って休み、脚をもみほぐしながらエリザは考えた。ここで相手小隊を待っても構わないが、領境を越えても咎められることは無いと説明されていたし、この辺は他に通る道もないから相手部隊と行き違う可能性も無いとも聞いた。今の歩調であればたぶん半時ほどでバラムという近くの町に着けるだろう。

「よおし……」

町というからには千人規模で人が住んでいるはずなので、自分が助けられる人が居るかもしれない。エリザは軽いかげ声と共に立ち上がり、そして再び東を指す。

町に向かつてくるエリザの姿は、領境を越えて直ぐにパラムの見張り番に捕らえられた。持っていた金槌で背後にある鐘を乱打し、螺旋階段を駆け下りる。塔の下層は兵の詰め所となっており巡回していない兵達がくつろいでいたが、文字通り転がり落ちてきた見張り兵にその全員の注目が集

まる。

二度深呼吸し、さらに少し思考を落ち着けてから見張り兵は報告する。

「きよ、巨大な治癒術師の娘がこっちに攻めて来ています!」  
視線と沈黙。

彼の発した語彙の間に相関が全く無いため、文として理解されていない。少し間を置いて漸く一番奥に座っていた男が口を開く。

「もう一回、言ってみ」

「ですから、隊長。巨大な女治癒術師がこっちに向かっていくんですよ!」

大袈裟な動作と共に即答する。いかにももどかしそうな動作に対し、問うた隊長の方は幾分目を細めて「ふむ」と唸り、

「そう言うなら見てやろうじゃないか」

と言いながらのそりと立ち上がる。そして先の兵士に先導されるまま塔に登り、西向きの見張り窓から外をのぞき見る。

はじめは普段通りの風景と思ったが、よく観ると山の合間に明らかに風景から逸脱した大きさの女が俯き加減で歩いているのが判る。腰から上が周囲の林から出ていることか  
らして背丈は二十丈を下るまい。エプロン胸部の青い正十字と独特の形状の帽子が確かに治癒術師であることを示しており、年齢は東方人の特徴を差し引いて二十弱といったと

ころか。

通常には有り得ない光景を受け入れるため暫し間をおき、隊長は思わず感心したように呟く。

「なるほど、確かにお前の言ったとおりだな」

そこへ副隊長が足早に登ってくる。その男は窓の外を一瞥して光景を確認すると、それを指さしながら隊長に問うた。

「さっきの鐘は、あれですか」

「ああ」

再び窓の外に向き直り、顎に手を当て考えること数瞬。そして彼は再び問う。

「そう言えば、王都が何か言ってたでしょう、調査団が来るから領境まで護衛しろとか何とか」

いきなり話が転換している。ついていけない隊長が怪訝そうに「ん?」と返すと、すかさず

「それと関係があると思うのですが」

と繋ぐ。

「……ああ、あの娘がか」

やっと話が繋がった。

「まあ、向こうは向こうだ。こっちはどう対処する?」

「そうですすね……」

窓の外を見ながら副隊長は暫し考える。治癒術師の格好をした侵略者なんて馬鹿げたものは想像したくないが、すでに想像の域を超えた巨人があそこに実在している以上はそう

とばかりも言っていられない。

「取り敢えず交戦もあり得るとみるのが妥当でしょう。どのみち此処ではやりにくいと思いますので、町外れで待機ですかね」

そう言うと副長はもう一度窓の外を一瞥して言った。

「ところで、なぜあの娘は治癒術師の格好をしているんでしょうか」

「知るかつ」

あっさり返す。あの巨人をどう斃すかを既に隊長は考え始めていた。

主立った兵を集めて早急に練った『有事の対処法』は、城弩や投石機等の攻城兵器を用いて追い払う、または足に縄を掛けて転倒させ、頸に弓兵の矢か槍兵・騎兵の突撃を撃ち込んで斃すという内容であり、そのためには接触する場所は相手からの死角が多い森の中が望ましいという結論になった。

街の人々が不安そうに見守る中、槍兵や弓兵・騎兵が西門の外に集結する。投石機と大弩も何台か台車に乗せられ、荷馬に引かれて行く。そして三里まで接近したことを告げる鐘が鳴ると作業は中断され、部隊は町を発つ。

そのころにはエリザにも何やら武装した集団が大荷物を引きながら町から出ようとしているのが見えており、それが自分を退けるための部隊とは露ほども思っていない彼女は手を振って応え、足下に注意を払いながらも少し歩調を早める。

相手が歩みを早めたので、部隊も急いで行動を起こす。まず全隊を町から出して西門の門を降ろす。そして町から四半里ほど移動した森の中で部隊を展開し待機する。待機している間にも娘の足音らしき地響きは大きくなり、兵士の間にも緊張が走る。押さえが利かなくなつて暴れ出す馬も何頭か出てきはじめた。

しかし、目前まで来て立ち止まった娘の行動は、戦闘も辞

さないと考えていた彼らには想像も付かないものだった。

「こんにちわ。皆さん大勢でどうなさったんですか？」

軽く頭を下げてご挨拶。予想外の対応に啞然とする部隊長以下にも気づいていないエリザは、すこし屈んだ姿勢のまま右手を軽く握って

「もし力になれるようでしたら、お手伝いしますけど」と付け加える。

彼女の格好と同様の油断させる作戦なのか余裕から来る冗談なのか、それとも本気なのか、部隊には全く判別できない。どうすればよいかと部隊長は傍らの副長に問うた。副長も少し返答に迷ったが、即座に攻撃する意志がない以上はとりあえず話をして真意を聞くのが良いと提言する。

足下で兵達が自分の方をちらちらと見ながらお互いになんやら話しあっているのが視点の高いエリザにはよく見える。あまり良くない雰囲気とは思いつつも、この部隊が自分に差し向けられたものだとは気づいていない。領内では顔が知られているため、驚かれこそしたものの不審者扱いを受けたことは無かったからだ。

ややあつて、隊長らしい男が面頬を開いてエリザを見上げ、その厳しい体格に相応の太い大声で言った。

「では、まずそちらの真意を聞きたい」

それを聞くエリザの両眉が内に寄る。

「真意？」



耳に手をあて返しながら意味の解釈を試みるが、やはり解らない。とりあえず自身の胸を指さしつつ問う。

「真意って、私のですか？」

「そうだ」

傍らに居た男が隊長を遮るようにして答えた。体格も着ている鎧も細身で、隣の隊長と比べるといかにも対照的な感じがする。

「まずは名前と所属、それから此処に来た理由を教えてください」

「あ、はい」

彼らが自分の名前すら知らないということに、名前を聞かれて始めてエリザは気づいた。

- 名前は、エリザートランド。
- 所属は、リーデアルド領の治癒術師。
- 理由は、本国の小隊を待つ予定より早く合流地点に来てしまい、先にあの町に行けば待機の間にか手助けできると判断したため。

エリザが答えた内容は要約すれば以上の通り。それに対してどう返そうかと考えている副長に、今度はエリザが尋ねる。

「じゃあ、さっき私の言ったことに答えて頂けますか？」

再び部隊がざわざわとしはじめる。『巨人退治のためだ』な

どと答えてしまえば、彼女が本当のことを言っていたとしても気を悪くするだろうし、まして嘘なら口実となりかねない。疑念が疑念を呼び、それが緊張を否応なしに高める。「お手伝いしたいと思っただけですけど、もしかして私のせいでっただけですか？」

問う声はその巨軀に比してあまりにも弱く、細い。改めて部隊の構成を見ると攻城に使うような弩や投石機が並んでおり、しかも弩が斜め上を向いているのが判る。そして、彼女の淋し気な視線が最後列の投石機を捕らえたとき。

突然、その投石機から頭大の岩が勢い良く飛び出す。緊張と視線に耐えかねた兵士が、留め金を半ば無意識的に引いてしまったのだ。

顔めがけて飛んでくる石に対しエリザは咄嗟に左手で顔を庇う。彼女にとって小豆くらいの石は二の腕に当たり、スカートで跳ね、再び頭大の岩となって逃げ遅れた弓兵の肩口を直撃した。

石が当たったことに気づかないエリザは暫く経ってから小首を傾げつつ構えを解く。改めて足元の部隊を見回すと、さっき自分を襲ったであろう小石が落ちており、傍らで弓兵が倒れている。彼女は直ぐに屈み、弓兵を摘み上げようとす。しかし部隊の兵達にしてみれば、それは小屋に匹敵する巨大な手が降ってくるということであり、特に掌の影に居た弓兵達にとっては直接死に結びつく恐怖だ。耐えきれなかつ

た弓兵が反射的に矢を放つ。

(一)

驚いたエリザは即座に手を引き体を起こす。そして右手を振り刺さっていた小針を払う。突然の攻撃に驚きはしたものの、射掛けられた矢は彼女にとっては爪楊枝の半分程度の大きさであり、刺さっても手の皮を貫く威力はない。

矢による攻撃はその一度きりで止みはしたものの、驚きが収まったエリザは理不尽な扱いに対処しようしようもない感情を抱き始めていた。敵意なんてないことをさつき説明したばかりなのに、自分は怪我人を助けようとしているだけなのに、なぜ彼らは警戒を解かないばかりか弓まで射掛けてくるのか。しかも、弓を射た連中は妙に朗らかな表情をしている。弓兵達にしてみれば思いがけず命を拾ったことに對する安堵で気が抜けているのだが、エリザがそれに気づくはずもない。

「どうして射ったんですか？」  
弓兵に尋ねる。

そのつもりは無かったのに、つい語調が強くなってしまった。しまったと思いエリザは言い直そうと思つたが、取り繕う前に部隊長は「作戦開始い！」と後ろに怒鳴つた。彼にしてみれば、こういう場合に先手を取るのには必要条件だ。この力量差では相手が少しでも躊躇している隙を突くしかない。

「奴は本気だ。死ぬ気でやれ！」

それを聞いて弓兵は再び射撃を開始し、どう動くか決めかねていた槍兵も槍を斜めに構えて動きだす。

「ちよ、ちよつと待つて下さいっ」

彼女にとつては本気ではないし、命懸けで来られても困る。しかし矢は次々と射られ、槍兵は素早く陣形を整えすぐにも突撃を掛けそうな状況だ。思わず後ずさろうとするが、そのとき右足の踵辺りに何か引つかかる感触を受けた。

怪訝に思いスカートを後ろに寄せて爪先を見る。すると綱の束を肩に掛けた軽装の工兵達が足下でなにやら作業をしているのが見えた。

巨人の靴に綱を巻いていた工兵達も異変を感じて彼女の方を見上げる。そして自分が見られていることに気づく否や、彼らはのけぞりそのまま身を反転して逃げだす。足に力が入らず、また肩に掛けた綱のせいで思ったように逃げられないが、腕で地面を叩き、肩で転がり、とにかく全身を使いまがくようにして逃げる。

その一方でエリザもまた、今まで彼らが足下に居たということに対して驚きと焦りを感じていた。彼らは何時から居たのだろうか？ これまでも多少は足を動かしていたはずであり、もし自分が彼らを踏みつぶしたり蹴飛ばしたりしていたら……

付近の地面を凝視し、赤黒い染みが無いか調べる。次に体を反つて後方を確認し、さらに踵を浮かせ下の地面を見て

誰も踏み潰していないことを確認する。

(とりあえずは大丈夫みたいね)

つい安堵のため息が漏れる。改めて足下に意識を戻すと既に工兵達は見あたらない。もう一度後ろを見ても居ないから、おそらくさつき後ろを見ている間に立ち去ったのだろう。これで安心して足に絡んだ紐を外すことができる。

まだ弓や弩・投石機による攻撃は続いており、主に顔を狙っているようだ。しかし弓は直立している彼女の顔の高さまで届くのがやつとで、投石機の放つ石は尖っていないために当たっても痛くはない。そして最も痛いはずの弩は、なぜか当たつてすらいない。つまり彼らの武器では全く歯が立たず、そしてそれにも関わらず彼等は攻撃を止めようとしないので。上から見下していて段々馬鹿馬鹿しくなってくる。

「あのお、本当にもう止めにしませんかあ？」  
腕を腰に当て、弛んだ声で呼びかける。応じないのが解っているだけに、どうにも力が入りづらいのだ。

どうやって説得するか、それともしばらく放置するべきかと考え始めたところで、ふと目の前に垂れた糸のようなものに気付いた。摘んでみると、その糸は髪の毛としては太く服から出た糸屑としては長い。糸の先が気になり、少し手繰ってみる。

するといきなり部隊後方の大弩が動き、そして前方で構える槍兵のまったただ中に突っ込んだ。

(！)

しまったと思つたときにはもう手遅れだ。大弩は十数人の兵士達を巻き込みつつ陣を縦断し、エリザの足元まで転がってようやく止まった。陣が張られていた場所には土煙が立ちこめ、呻き声が至るところから上がっている。

「そ、そんな……」

思わず声が漏れてしまう。何気なく引いた糸がこんな結果をもたらすとは。そもそもなぜあの糸を引いてしまったのか、糸を引けばこうなるとなぜ予測できなかったのか……

とはいえ、今更後悔しても始まらない。エリザは膝をついて座り、倒れている兵士を怪我の酷そうな者から一人ずつ慎重に摘み上げては左手に載せていく。兵士を摘み上げるため右手を降ろすと兵達は一旦引き、そして殆どの者が彼女の手に槍を突き立てる。突撃さえ掛けてくる者もおり右手の傷は左手と地面を往復する度に増えるが、エリザは手首を切られないように注意することしかできない。なにせちよつと手を払うだけでまた怪我人が増えるのだ。一度全員を「黙らせ」てそれから治癒することも少しだけ考えたが、いくら都合が良いとしてもそれをするわけにはいかない。  
左手に六人乗せるとエリザは身を起こし、掌の上で弱々しくもがき抗う負傷兵に「回復術」を施すと再び一人ずつ摘んで地面に下ろす。今度は地上の槍兵達も構えこそすれ攻撃はしてこない。

負傷兵を拾い上げたかと思えば少し間をあけて再び地に下ろす。そんな巨人の行動が不可解であるため兵士たちは待機していたのだが、巨人が別の怪我人を拾い上げている途中で最初に拾われた兵達が起きあがり始めたことで、彼らにもようやくその意図が解つてきた。

しかし、本来『回復術』は生命力を補う術であり、すぐに治せるのは疲労や軽い怪我までである。間違つても動けないほど負傷した兵士を即座に治療する術ではない。とはいえ、もしこの巨人の治療術師が体軀に比した魔力を持つなら……

目の前の奇跡に対し呆然としている兵達をよそに、エリザは次々と怪我人を拾い上げては術を施して行く。倒れて動けなかった連中を治癒し終えると、今度は「他に怪我している人はいませんか？」と問い、掌を地面に下ろして

「もし居たら、乗って下さい」と付け加える。

兵の多くが彼女を見上げ、そして互いの動向を視線で伺う。とりわけ肩を借りて立っている兵士に注目が集まる中、そのうちの一人が肩を借りている男に二言三言話しかけそして肩を貸している方の男がエリザに問う。

「なぜ、掌に乗せてから治療するんですか？」

兵達の注目が両者に集まる。確かに術者と相手が離れていても、威力や精度が落ちるだけで魔術自体は問題なく行使

できる。

それに対してエリザは

「そうしないと、相手と力を上手く絞れないんです」

と答え、力加減の失敗を少しでも減らす為にはこれくらい慎重である必要がある旨を付け加える。

その答えに納得したのか、肩を借りている方の男が頷くと二人組は掌に向かって歩き始める。それに気づいたエリザは掌を彼の方に近づけ、さらに段差を縮めるため指を地面に押しあてて沈める。彼女にとっては親切でやっていることだが、目の前で太さ一尺程の丸太のような指が音を立てて沈む様子はそれが人の手で為されているという事実と併せて兵たちの殆どを反射的に半歩ないし一步引かせに足る異様さだ。手に乗ろうとした二人組も動きを止めてしまう。

思わぬところで兵達が退いてしまったのを見てエリザ自身も戸惑う。何をやっても怖がられているようにさえ思えてしまうが、とりあえず平静を装って話しかける。

「驚かせてすみません。でもこれで乗りやすくなったと思いますので……」

そう言うのと彼はエリザの方を見上げて彼女の表情を少しの間伺い、そして再び歩き始める。信用するか迷っており恐怖もあるようだが、完全に疑っているわけではない。寧ろ信じようとしてくれているのが彼女にとって救いだ。

二人組が掌に乗ると、エリザは付き添いの兵士に降りて

貰うよう言い、一人だけ乗せた状態で左掌を地面から持ち上げる。掌は、人ひとり分の体重を無視して余りにも簡単に上昇していく。

ゆつくりと左手を体の前に持つてくるとエリザは慎重に魔力を絞りながら「回復術」を施す。そして再び左手を下ろす頃には既に何人かの兵士が指の形にへこんだ場所の少し手前で待っていた。

やっと信じてくれた。そう思うと胸の芯が熱くなり、自然に微笑みが浮かぶ。時間を要し諍いもあっただけに、今こうやって自分を必要としてくれるのが彼女にとっては非常に嬉しい。

「乗ってください。纏めて面倒を見ますから」  
少し震える声でそう言うと、下ろした掌に乗るよう促した。

「あの、本当に申し訳ありませんでした」

全員の治療が終わると、エリザは座った姿勢のまま頭を下げた。

いきなりの意外な行動に対し、また兵達の注目が彼女に集まる。それは対処に迷つての行動なのだが、物言わぬ視線の集中を怒りと恐怖だと受け取った彼女は、その視線を正面から受け止めることさえできず、俯き加減に目を伏せて

「やっぱり、怒ってます……よね？」

と細い声で問うのが精一杯だ。これだけ怖がられている状況で、どうすれば彼らに赦して貰えるのだろうか。

その問いを受け、どうします？ と副長は隣の隊長に聞く。この状況で謝られてしまつて、赦す以外にどうしろというのか。

「どうするって……」

隊長が間の抜けた声を出しつつ上方に向き直ると、既に彼の方を見ているエリザと目が合う。見張り塔ほどの高さから縦るような視線を注がれ彼は無意識的に少し上体を反らしてしまつたが、一拍おいて

「いや、もう構わんよ」

と返す。その言葉に反応してエリザの眉が少し上がり、二三度瞬きする。

「いいんですか？」

「まあ済んだことだし、治療もして貰ったからな」

「本当にいいんですか？ 何か出来ることがあれば遠慮せずと言つて下さつても」

なおも畳みかける。彼女にしてみれば、自分の力に対する恐怖のため赦す以外の選択が無いと思つていのではないかという疑いがまだ残つている。しかし隊長にとっては、これだけ圧倒的な存在感と力を持ちながら自分等の言動に一喜一憂している彼女の姿が余りにも不釣り合いで、余裕のある今となつてはそれが滑稽ですらある。

「ああ、大丈夫だ」

続けて彼は後ろに「そうだろう？」と問いかける。問われて兵士の何人かは即座に頷く。

「許すも何も、なあ」

「あれは奇跡としか言いようがねえや」

「こつちにはどうしもようもねえし」

「ただ、非番を潰されたのがなあ」

口々に適当なことを言う兵士達。それを聞き、エリザも少し照れたような微笑みを浮かべて軽く頭を下げる。

念のため点呼を取るよう部隊に命じ、隊長は自身と副隊長をエリザに紹介した。隊長の名はブラドゥ、副隊長の名はリオノスという。

「宜しくお願ひします」とエリザも座ったまま軽くお辞儀する。

さつきから妙に嬉しそうなのは赦して貰えたからなのだろうか。表情や仕草にまで感情が現れているのを見てみると、さつきまで彼女の一举一動を恐れ対応を考えていた自分は何だったのだろうかとやや自虐的な疑問さえ浮かんでしまう。しかしその反面、彼女が手を降ろしたときに感じた死の恐怖もまた事実だ。あの圧倒的な大きさの影が恐ろしい速度で迫る状況を思い出すだけでも息が苦しくなり……

「隊長、点呼終わりました」

呼ばれてブラドウは思考を一旦止める。報告したりオノスの方を見ると、彼の後ろには既に兵達が整列していた。

不明者無しとの報告を受けて彼は町への帰還を宣言するが、急にエリザが「ちよつと待つて下さい」と割つて入る。そして彼女は肩から下げていた籠を地面に下ろし、側面の口を兵達に向けて開く。

「この中に入ってください。私が運びますから」  
そう言つて中に入るよう促す。籠は縦四間横三間ほどで、やや裕福な家程度の大きさだろうか。

「これで運ぶつもりか？」  
「ええ、揺れるとは思いますが、歩くよりずっと速いはずですよ」

訝しげなブラドウの問いに対し、エリザは軽く微笑みながら答える。確かに彼女の言う通り速いのだろうが、本当にそれで良いのだろうか？ 彼は隣のリオノスの方に目を遣り意

見を求める。リオノスは僅かに苦笑いを浮かべ、肩をすくめて応える。「好きにやらせて良いんじゃないですか」とでも言いたいのだろうか。

ブラドウはため息混じりにうなだれ、そして改めて上に向かい「判つた」と答える。

了承を得てまず投石機と城弩がエリザの手によつて籠に入れられ、次いで四十人ほどの歩兵が入る。それで籠はあらかた埋まり、さらに騎兵や荷馬を積むには足りないようだ。それを見て取ると、リオノスは騎兵に一旦退くよう合図を送る。

「では、我々は後から追うことにしよう」  
上に向かつてそう伝えるが、エリザは咄嗟に「ちよつと待つてください」と彼を制する。

「籠を大きくできますけど、どうしますか？」  
急に入った横槍に加えて予想外の提案。皆の動きが止まりその主を見上げる。

一々驚かれてしまうのは前と変わらないが、もうその驚きが恐怖には結びついていないことがエリザにも見えていて解る。彼らの反応を心配する必要が無いと思うと自然に口も緩む。

「ええ。私が大きくなれば籠も一緒に……」  
「ああ?!」

咄嗟に出た声が説明を途切れさせる。もちろん声が出たの

は籠を大きくできるからではない。まだ大きくなれるというのか。そして、自分等はそんな相手に戦いを挑もうとしていたのか。

「大きく……つて言うのは……どこまで？」

騎兵の一人が問いを絞り出す。思いがけず驚かれてしまいエリザはどう答えるか迷ったが、答えをはぐらかせる状況でもなければ嘘を通す自信もない。

「そうですね……前に試したときは、八十丈（二四〇メートル）ほどだったと」

少し顔を赤くしつつも正直に答えると、案の定というか問うた兵も視線を落とし固まつてしまう。身長に『丈』という単位を用いるだけでも異常だが、それに八十という値を組み合わされるとすぐには対応する建物が想像できない。兵達は互いに顔を見合わせつつ考え込み、そして誰かが呟くように言う。

「そういや、中央の見張り塔が六く七丈（十八く二メートル）でしたよね」

八十丈なら、その塔の……街一番の見張り塔のさらに十倍以上だ。

「つてことは、その塔が踝（くるぶし）に来る位か」

言葉を継ぎ、リオノスはエリザの顔を見上げる。口を半分開いたまま更に視線は上へと……

「そう、ですよね」

彼女自身大きくなった自分が他人からどう見られるかは解らなかつたので、改めて具体的な例を挙げられるとつい考えしてしまう。見張り塔の後ろで、塔が踝までしか来ない程にそびえ立つ自分……

慌ててエリザは軽く頭を振る。変に想像してまた今朝のようなことになつたら大変だ。

改めて騎兵達を見ると、先頭の二人は彼女の膝のすぐ前まで寄っており、他の騎兵達も啞然として彼女を見上げている。

「いや、あのお」

気まずそうに笑みを浮かべこめかみを軽く搔きながらエリザはこの状況をどう説明しようかと考えるが、なかなか良い言葉が思いつかない。

暫しの沈黙。それを破つたのはブラドウだ。

「と、止まつたのか」

滅多に出さないであろう上擦つた声で呟き、溜息とともに肩を落とす。突然大きくなり始めたから、本当に八十丈まで大きくなるつもりなのかと思つていたので。潰されると感じたときにはその膝は近くまで迫つていて、焦りのため手綱を引いて馬を反転させることさえできなかった。

彼の疲れ切つた様子から、エリザはようやく彼らの危機感の大きさを悟つた。申し訳なきように謝り、「下手に想像するとこうなつてしまうんです」と困惑した表情で説明する。



その説明に納得し落ち着いて貰うのを待つて、エリザは「じゃあ、そろそろ出発しますね」と切り出す。しかし、何かを思い出したようにリオノスが割って入った。

「あ。ちよつと、待つてくれないか？」

エリザの視線が自分の方に向くのを待つて、彼は続ける。

「出発前に、街に知らせておきたい」

そう言うなりリオノスは馬から降り、鞍袋から火打ち石と藁束、緑色の小さな油壺をとりだす。そして藁束に油を垂らして地面に置き、火打ち石をカチカチと打ち始める。

その様子をエリザは少しの間見ていたが、すぐに身を乗り出して提案する。

「私が点けましょうか？」

日が陰ったかと思うと急に上から声が降り、騎兵達は反射的に空を見上げる。目が合ったのでエリザもまた反射的に軽くほほえむ。ちよつとした沈黙の後、リオノスは

「じゃあ、頼む」

と返答し、藁束を槍に刺してエリザの方に突き出す。エリザが彼の胴体よりも太い人差し指を藁束の下に添えると、すぐに藁束から煙が立ち炎がちらつき始める。彼女が指と上半身を引くのを見てリオノスは槍をたぐり寄せ、ゆっくりと左右に振つて煙の出具合を確認する。通常ではあり得ない速さでの点火だったと言えよう。

緑色の煙が十分に出ていることを確認すると、彼は槍を

ゆっくり振つて空中に何か紋様のようなものを描く。風がないため、煙で描かれたその紋様は輪郭をすこしずつ崩しながらゆっくりと昇つてゆく。エリザはその煙に息が掛からないよう左手で自分の口を押さえつつ見守り、煙の紋様が大きな輪郭を保つたまま自分の頭より高く昇つたのを見て始めて

「今のは何の印なんですか？」

と尋ねた。

「ああ、今のはこっちの識別子だ」

「じゃあ、煙の色は？」

「緑は、『解決済、援助不要』という意味だ」

そんな基本的なことを聞くのかと思いつつ答えたが、よく考えれば発煙が要るほどの戦は彼自身も余り体験していない。

「隊長、次は『講話』の印でも送つておきますか？」

「うむ。まあよきにはからえ」

面倒そうにブラドウは答える。

印にも結構色々あるものだ。そんなことを思いながらエリザは立ち上る煙とバラムの街を交互に見ていた。街までは四半里、彼女にとつては十五間ほどの距離でしかない。よく見ると、見張り塔の屋上に兵が居る様子さえ掴める。あの人と話が出来たら早いのにと思いつながらぼーっと眺めていると、不意に誰かの怒号が微かに聞こえてくる。

(?)

慌てて眼下の騎兵部隊を見渡すが、緊迫した怒鳴り声か飛んでくるような雰囲気にはどうしても見えない。再び街に視線を転じる。目を凝らしてみると、今度は二人でなにやら言いあっているように見える。恐らく自分や煙への対応をどうするか議論しているのだろう。

「……などありえるのか？ 奴はまだピンピンしてるんだぞ！」

「いやしかし、だからこそ何らかの返答を送らなければ」また聞こえた。しかも今度は内容まで聞き取れる。

「いや、そうかもしれないが。だが街の連中はどうする？」

右側の兵が首を振りながら問うのを受け、左側の兵は右手を顎にあてながら軽く唸っている。

「……と、すると？」

やや間をおいて彼が問い返すと、右側の兵も少し考えてから低い声で自分の案を言う。

「時間を稼いで、その間にいつそ脱出させる方が良くもしれんなあ」

「まっ……待つてくださいい！」

思わずエリザは腰を上げ、大声を出してしまった。しまったと思つて周囲を見回すと、案の定兵士たちは彼女の声を受けてうずくまり騎馬は狂ったように嘶いている。一方の見張り塔の兵士も顔を紅潮させ目を見開いてこちらを睨んでいる。

「いや、あの……すみません、ちよつとだけ待つてくださいい」

しどろもどろになりながら塔の兵士にそれだけ言うと、エリザは取りあえず騎兵たちが落馬しないよう何頭かの馬の背を撫でて静め、ブラドウとリオノスの前に左掌を下ろして「乗って下さい。街の人と話せそうなんです」

と促す。やや怪訝に思うがただならぬ様子から言に従うべきと判断し、二人は掌に飛び乗る。エリザは焦りながらもそつと左手を顔の高さまで掲げ街の方に向き直ると、見張り塔の側に二人が見えるよう左手を動かし三度塔を注視する。彼女の視線が向いたのを見て取った見張り塔の男が、即座に怒鳴り返した。

「いつから聴いてやがった？」

側にいれば凄惨な剣幕なのだろうが、これだけ離れているとそれほど威圧感はない。

「ついさつきからです。返答を遅らせるといふ辺りからです」

エリザはそう答え、反応が返ってくる前に畳みかける。

「まずは隊長さんに喋って貰いますから、避難勧告だけは待つていただけませんか」

そして左掌の上にいる二人に小声で問う。

「あの塔の人の声、聞こえていますか？」

二人は顔を見合わせ、そしてブラドウがエリザの方に向いて

答える。

「いや、何か言ってるらしいのは聞こえたが、内容までは……」

ほっとした表情で頷くエリザ。これなら話を通じるかもしれない。手のひらの二人も兜を脱いで座る。

「これでもう少しましになるはずだ」

「ええ、そうですね。では……」

エリザはそう返し、二人を乗せた左掌を注意深く自分の左耳のそばに寄せ、話しかけてみてくださいと促す。ブラドウは二度ほど咳払いした後、低く通る声を張り上げる。

「貴様等、何を画策しておる！」

彼の声に応じ、塔に居る兵がはっと驚いて即座に向き直る。声は届いているらしい。

「隊長お」

塔の兵士のそう呼ぶ声が彼らにもしっかり聞こえる。

「一体どうなっているんですか、説明してください」

その問いからして向こうの混乱を象徴しているかのようだ。とはいえ、これだけ常識外れな現象がそろった事件だ。ブラドウにとつても何から説明すれば判断が付きにくい。

「一言で言えば」

そこまでしか返せず、彼は「そうだな……」と言葉を詰まらせてしまった。エリザも彼の方を見やるものの、部隊同士の話である以上口出しできない。その数瞬の間を破つてり

オノスが声を出した。

「彼女に敵意は無い。治療術師として街に寄りたいたって……」

それを聞いてエリザはにっこり笑い、揺れに翻弄される二人のことを忘れて思わずうなずく。街の人が一番知りたいたとは多分そのことだろうと彼女も思っていた。しかし、塔の兵はその言葉をどう受け取ったのか、お互い顔を見合わせて何か言い合っている。小声のためかその内容は解らないが、片方の兵が首を横に振っていることだけは見て取れる。短い議論のあと、塔の兵たちは彼女の方を向き直り問うた。

「なぜ信じるんですか、そんな明らかな虚言を」

『明らかな』って……」

兵の問いに対してついそう漏らしてしまうエリザを、ブラドウが「まあ待て」と耳たぶを引きつつ制する。

「虚言ではない。我々も一度負傷したが、治療を受けて今は全員無事だ」

「そ、その説明はまずいのでは？」

ブラドウの返答に対して今度はエリザが小声で問う。事實は説明の通りではあるのだが、向こうは負傷させたということの方に気を取られるのではないだろうか。そう思つて慌てて説明を始めるが、

「いや、あの、負傷というのも……目の前の糸を引いたんですけど、それが……」

あまりにも断片的な内容なので、今度はリオノスが彼女の耳を引いて「まあ、落ち着け」と制する。そして、塔の兵士に「私が順を追って話す」と前置きした上で説明を始めた。

●まずはエリザの所属と目的

●先に手を出したのがこちらの兵であること

●こちらの攻撃に対して彼女は全く手を出さなかったこと

●しかし目の前に垂れた縄を彼女がつい引いてしまい、損害を出してしまったこと

そんな感じでリオノスは説明をしているが、塔の兵たちは熱心に話を聞いているようには見えず、むしろ彼らの後ろつまり街の内部を気にしているような雰囲気である。そんな中、塔の窓に新たな兵が入り込んでくる。肩で息するほど消耗していたその兵は、息を整えると一息でこう報じる。

「もう限界です、住民を押しえ切れません」

その言葉を三人ともはつきりと聞き取ることが出来た。

エリザは視線と二人の乗る左掌を自分の膝の上まで降ろして

「やっぱり、駄目みたいですね」

ぼつりと言った。

街の人の助けになればと思つて来たはずだったので、結局自分のしたことは何だったのだろうか。不注意でこの人達を傷つけ、街をここまで混乱させ……しかも彼らに対して

何もすることが出来ない。

右手を握りしめ、奥歯を噛み、伏せた目の視線は膝の二人に当たっているようだが焦点が合っていない。膝の上の二人には、エリザの表情は悲しそうでもありまた怒っているようにも見える。

不意に彼女は上を向き、ぐすつと鼻を鳴らして息を吸い込み、吐く。そして再び左掌の二人に視線を向け、左掌をそつと地面に降ろした。

「じゃあ、帰ります」

そう言う声が幾分震えている。後ろめたいものを感じつつも二人は掌から降りエリザの方に振り返ると、彼女は二人に頭を下げる。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「いや、ああ」

自分を見る寂しそうに潤む眼に戸惑い、リオノスはそれだけしか返せず視線を落とす。だがすぐ彼は顔を上げ、思いついた言葉を躊躇することなくまくし立てた。

「出来るだけ早く説得したい。そうしたらまた来て貰えないか」

彼の提案に、エリザは潤んだ瞳のまま微笑み頷く。リオノスはそれを見てほっとした様子で肩を落とす。そんな彼の頭をブラドウは小突き、悪戯っぽい口調で言った。

「青いな」

結局、どうしても救援を要するときには黄色の煙をあげる  
こと、明朝三の刻（日出の二刻後）に同じ場所で会うこと。  
この二点を申し合わせたのち、エリザは重い足音と共にゆっ  
くりと歩み去り、兵たちは町民を鎮めるため街に戻った。

戻りながらエリザは何度も後ろを振り返ったが、領境に着  
くまでに救援の黄色い煙を見ることはなかった。それは混乱  
が無事に収まったからなのか、それとも逆に彼女を呼ぶこ  
とすら出来ないほどの状況なのか、それを伺い知る方法は  
無い。

日はまだ高かったが往来を行き交う人はおらず、山を越  
えるまでの帰路はエリザにとって非常に辛い行程となった。

### 第3章 「再会」

1

彼女の重く大きな足音は、場合によっては二町（二百メートル）先からでも聞くことが出来る。革の鎧を着て弓を携え木陰で休む若者の耳にも、それは届いていた。

森の小径は遮るものが多いから特に気を使うとエリザはこぼしていた。ならばいつそ彼女に見えやすいところで出迎えた方が良さだろう。イーゼムという名を持つこの若者はそう判断し、荷物を担いで道の真ん中に出る。

彼の動作に気づいた巨人の娘、エリザが軽く微笑み手を振って答える。領外に出ていたためか、紺のワンピースに白い前掛けという格好だ。

「あなたの居るところまでで、他に誰か居ますか？」

「いや、大丈夫だ」

問いに大きめの声で答えると彼女は頷き、それまでより早い歩調で歩き始める。一步、二歩、三歩……。かなり離れていると思っていたのだが、わずか五歩余りで見上げると首

を痛めるほどにそびえ立つエリザの姿を見ることになる。

イーゼムの一步半手前のところでエリザは左足を前にして立ち止まり、風を起こさないようゆっくりとしゃがむ。ついで彼女は右掌を地面に降ろして前方にゆっくりと進め、イーゼムの二寸ばかり手前で止める。

白い柱の束が自分の少し手前で止まるのを見届けると、彼は視線を上を転じ問う。

「どうしたんだ、今日はやけに丁寧じゃないか」

「ええ」

少し恥ずかしそうにはにかみながらエリザは答える。

「外でいつものようにしたら、怖がられてしまつて」

その答えにはははと彼は笑いつつ指まで歩み寄り、

「まあ、俺はもう摘み上げられるのにも慣れたけどな」

と言つて腿の高さまである指に跳び乗る。そして指から掌の真ん中まで進んでから上を向きエリザに目配せすると、彼女は頷いて右手をゆっくりとあげつつ立ち上がる。地上から二十丈（六十メートル）近い高さまで押しあげられるこの浮遊感、初めは新鮮かつ不快な感覚だったものの慣れた今となつては微かにまだ不快感が残るのみだ。

「街までで良いですね？」

エリザが問う。頼むとイーゼムが短く応えようと、彼女は

「ありがとう」

と返し、微笑みとともに軽く頭を下げる。その奇妙な反応に

イーゼムは苦笑いで応じた。

「何言ってるんだ、礼を言うのはこっちだろう」

そう返すと、指摘されて初めて気付いたのか、エリザは「いや、あの……」と要領を得ないことを呟きながら視線をイーゼムから外す。少し間をおいて視線を戻し、彼女は応えた。

「一緒に来て頂けるのが嬉しかったもので」

イーゼムが怪訝そうな表情のままのを見て、エリザは取り繕おうとさらに説明を加える。

「向こうでは怖がられてばかりだったんです。そうでなくても寂しいのに」

しかし、それでも彼の表情は変わらない。なぜこんな小さなことで悩んでいるのか。それに彼女の持つ力と「寂しい」という弱音がどうしても繋がらない。

「寂しい？　そういうもんか？」

訝しげに問うと、エリザは頷いて右手を差し出し「こっちを見て下さい」と言つて左手で前方斜め下を指さす。イーゼムは不安定な掌と指の上を歩き、中指の先まできたところで四つん這いになって上体を前に寄せる。

彼の眼下に広がっていたのは周りを囲む森の木々だった。多種多様の木々が成すでこぼこな緑の絨毯は遙か数十里先の青い山裾まで広がっている。さらに身を乗り出してほぼ真下を見ると地面が遙か下にあり、思わず吸い込まれそうに

なったイーゼムは慌てて身を引き起こす。

「いやあ、随分高いんだなあ」

振り返つて言うイーゼムの表情は興奮と照れの混じったものだった。

エリザは頷き、伏し目がちな表情のまま答える。

「私の目の高さにも何もありません。昼は毎日こうだから何か寂しくて」

慌てて振り向き直り、下を見て、そしてようやくこの光景が彼女にとつて別を意味するかをイーゼムは理解した。建物や木、街や森、それらすべてが眼下にあり自分と同じ視線に何も無いという寂しさ。いや、視線の高さだけでなく彼女の持つ力や存在そのものもまた……

「それかあ。寂しいって言うのは」

あの事件以降彼女の態度が妙に丁寧なものも何となくだが合点が行く。だが、考えから覚めてふと気づいた折りにエリザと視線が合つてしまい、真摯な瞳に捕らえられたイーゼムは反射的に半歩引いてしまった。

慌ててエリザは目を伏せる。逆にイーゼムは数歩前に歩み出て

「すまん、やっぱり見つめられると辛いんだわ」

と言つて軽く頭を下げる。それを聞いたエリザは再び視線を彼に合わせ、

「ええ、いいですよ」

と少し寂しそうな微笑みを浮かべて言った。

「こうやって居てくれるだけで十分です」

エリザは目を閉じ、右掌に左掌を添えて顔に近づける。彼女の顔が日光を遮って近づいたかと思うと、イーゼムは暗闇の中暖かく柔らかい壁に擦りつけられていた。解放されて初めて、彼はそれが頬擦りだったことを理解した。

とりあえず街に戻った際に簡単な報告をしたあとでエリザは近くの村々を一回りし、夜になり元の大きさに戻ってから別宅で本報告を行った。

その報告は、グランゼルにとって溜息の出るような内容だった。簡潔に言えば「本国からの部隊には会えないばかりか具合を聞くことすらできず、単に街の人を脅かしただけで帰らざるを得なかった。ただ討伐に来た警備兵は信用してくれている様子」ということである。

長い沈黙の後、やっとグランゼルは重い口を開いた。

「うーん、まあ、仕方あるまい」

対面の椅子に座ったままじつと俯いていたエリザが反応して顔を上げる。

「とりあえず明日のことだが」

そう前置きして、グランゼルは明日に関する注意事項を伝える。本国の使節についてそれとなく隊長に尋ねること、街に入れて貰えないようなら深追いはせず使節との合流を先に考えること、この二点が骨子だ。後者を聞いたエリザが不

満そうな表情を浮かべたので

「本国に身を立って貰えば動きやすくなる。最悪それまで辛抱するんだ」

と諭すが、エリザの表情は晴れない。

「でも、そうするとずっと不安なままのような気がして

……」

「ううむ」

視線を下げたまま口に出した弱々しい抗議も罪の意識を感じているからこそなのだろう。だが、既に疑われているかもしれない自分等が彼らの信用を得るため出来ることは、そう多いとも思えない。しばし考えた後、グランゼルは

「では、私も同行しよう」と提案する。

それを聞いてエリザの顔がふっと跳ね上がった。一瞬だけその表情は明るかったが、慌ててそれを隠すように頭を下げた。

「申し訳ありません。ご足労願ってしまつて」

その様子に、グランゼルは奥歯を噛む力を強めた。苦笑いを誤魔化すためだ。

三の刻に町の手前という約束から逆算して出発を日出の小半時後と決め、エリザを退室させる。だが、その後もグランゼルは椅子に座ったまま考えていた。本国から来た手紙には記されていないなかったものの、辺鄙な合流場所を考えると彼



女の存在を秘密にしたまま事を進めたいのではなからうかとすると、バラムという一つの街だけではなく、もつと大きな問題になることを考えているのかもしれない……。

翌日の朝もよく晴れており、早朝のうちに準備を済ませ出発した二人は二の刻半ばには昨日の場所に到着しており、バラムから人が来るのを待っていた。

「大丈夫ですか？」

エリザは、左手に横たえたグランゼルの背中を彼の胸より太い人差し指でさすりながら問う。グランゼルは首を項垂れたまま手を軽くあげて応えるが、その鷹揚な動作はいかにも辛そうだ。気分の悪さは治療術で対処できるものものふらついた感覚は断てないため、結果として術の効果は回復を早める程度でしかない。

「ごめんなさい、もう少しゆっくり行けば良かったんですけど」

「そうだな。特に山が辛かった」

深呼吸の合間に答える。領境の山道は、とりわけ籠の中に入ったグランゼルにとつて険しかったようだ。

「爺さん乗せてあれはまずいと思うぞ」

「そ、そう、ですね」

事の重大さに改めて気づいたのか、応えるエリザの表情も堅くなる。彼女が魔術を教わったローンハイム師も使節団の一員として加わっている。師は高齢のため足腰こそ弱かつ

たものの、好奇心が非常に強くまた自分の調子を崩さない好々爺だった。

（今の私を見たらなんて言うだろうなあ）

そう考えると、妙に表情が緩んでしまう。それと同時に背中をさする指も止めてしまったため、表情の変化をグランゼルに気づかれてしまった。

「おいおい、笑い事じゃないんだぞ」

グランゼルはそう咎めるが、彼も苦笑いしておりまた偶然ながら同じように今の自分がどう思われるかを考えていた。

（街の連中には飼鼠か何かをあやしているように見えるんだろうな……）

その街だが、予定より早い到着にもかかわらず見張り塔の兵に取り次ぎを申し出たときの対応も落ち着いており、特に動じた様子はなかった。塔の兵が降りてから暫く時間を経たのち、馬に乗ってブラドウが出てきた。鎧は着いていないかわりに包帯を左腕に巻いており、右手だけで手綱を引いているためいかにもぎこちない。二人の前でどうにかこうにか馬を止めるのを見計らって、エリザの膝に下ろされていたグランゼルが一礼する。

「初めまして。リーデアルド領領主の」

そこで言葉を区切り、怪我人をすくい上げようとしているエリザを手で制す。

「領主のグランゼルリーデアルドと申します。彼女がそち

らに迷惑を掛けたと聞き及び、参りました」

ブラドウも軽くうなずき、馬上で一礼する。

「それは遠路遙々。私はバラム自警団団長のブラドウ＝アルガゼオ。……随分お疲れの様子でしたが？」

『お疲れ』のところを語気を強めにやりと笑うと、対するグランゼルは腹に手を当てつつばつの悪そうな笑みで応じる。

「いや、まあ、それはお互い様と言うことで。その腕は？」  
ブラドウは包帯の巻かれた左腕を一別し、「いや、ちよつと……」と彼にしては珍しく曖昧な答えを返す。だがグランゼルはそれを気に掛ける様子もなく、親指で後ろのエリザを指さして問うた。

「とりあえず、治療させますか？」

そして後ろを向いて言う。「そうしたくてうずうずしている  
だろ？」

「え？ ええ」

急に話を振られ少しだけ驚いた様子を見せるが、エリザの対応は早い。直ぐに左手を伸ばしてブラドウの右側面に掌をあて、彼に体重を預けさせるとそのまま眼前まで掬い上げる。だがそれから左腕の包帯を解こうとして、彼女は自分の指がそんな細かい作業には適さないことに気づいた。

「すみません。もし宜しければ、包帯を解いて頂きたいのです  
が……」

右手を止め、おずおずと問う。ブラドウは笑いつつも右手だけで結び目を解き包帯を外していく。露になった五寸ばかりの刀傷にはまだどろりとした血がこびりついていた。エリザはブラドウにその傷を向けてもらい、右人差し指の腹で彼の左肘に触れて凝視する。ブラドウにとって彼女の治療を受けるのは今回が初めてであり、上腕の倍以上の太さがある指にせよ視界一杯に迫る真摯な眼差しにせよ、治療を受ける側も相手の大きさに慣れる必要があるように思えてしまう。ただ傷の癒えは非常に早く、左腕が少し熱を帯びたかと思うと痛みは急激に引いていった。

完全に傷が塞がったのを見てエリザが指を離すと、ブラドウは身を起こし左腕を何度か曲げ伸ばししてみる。皮が張っても痛みが無いのを確認して上から様子を伺っているエリザに向かって腕を掲げる。そして彼は、街に体を向けその左腕をグルグル回してみせる。塔の兵はそれを見て頷き、うち一人が下に降りていった。

「これで恐らく街には入れるだろう」

後ろを振り返って満足そうにブラドウは語るが、なぜ突然そんなことを言い出すのかエリザには見当も付かない。

「？」

始めは目を見開き純粹に疑問を感じている様子だったが、焦点を彼から外して暫し思考した末に戻した視線はいくらかの疑念を含んでいた。

「もしかして、試したんですか？」

エリザの問う声は低い。口調に非難がこもるのを抑えたからだが、それでもなおブラドウは声に押されて直ぐには応えられず少し間をおいて頷く。

「すまない」

彼を支える掌が僅かに閉じ、握りつぶされるのかと思ったブラドウは咄嗟に身構える。

「ごっ、ごめんなさい」

エリザは慌てて手を開き謝った。扱いに對する不満は拭いきれないが、彼の表情にまだ緊張と恐怖が張り付き注意深くこちらの様子を伺っているのを見るとこれ以上責める気にはなれない。とはいえ、次に言うべき言葉もまた見つからない。

そんな沈黙の中、不意にグランゼルが口を開いた。

「じゃあ、街に向かうとするか」

そして彼は、エリザの視線が自分のところまで下りるのを待つて言葉を継ぐ。

「不満を言うな。彼は恐らく自分の腕を切つてまで仲立ちしてくれただぞ」

そこまで聞いてエリザは「あつ」と声を漏らし、再び左掌の男を見た。いきなり間近から見られたブラドウは一瞬だけ身を引いたが、向けられた眼差しの暖かさに気づき直ぐに重心を前に戻す。

「ありがとうございます」

感謝の言葉と共にエリザが頭を下げる。先のような試され方は不本意だし、試さなければならぬほどに信用されていないのは寂しいが、それでも彼は自分の腕を傷つけてまで間に立つてくれた。本来なら、それだけで過分な扱いではないか。そう思うと目が潤み、彼女は少しの間目を閉じた。

「リオノスの提案だよ。奴は自分でやろうとしたがな」  
ブラドウは微笑みながら応える。

「つたく、こういうことは長がやらにや格好がつかんことを知った上で言いやがるんだからな。性根の悪い奴だ」  
そう言つて彼は舌を出した。

四半里先にある街壁も、エリザにとつては二十間先にある衝立でしかない。高さや揺れに慣れない乗客もいるため極力ゆっくり歩いたが、それでも壁の手前まで来るのはすぐだった。

街壁の高さは彼女の腿くらい、四丈といったところだろうか。その遙か上から街を一望すると、彼女の住んでいるリーデアルドに比べて建物が密集しておらず意外と街の奥まで見渡せること、そのいずれの通りにも人影が全く見あたらないことが判る。前者は西方開拓のために拡張した経緯から、そして後者は未知の巨人に対する自然な反応といえよう。

「うーん、どうしましょう」

エリザはつい掌上の二人の方を向いて尋ねる。

「どうするって、どうするんだ」

グランゼルが即座に問い返すと、エリザは少し考えてから答える。

「えっと……いえ、そのままだとまずいので、挨拶とかした方が良くと思うんです」

「まあ、好きにしろ」

苦笑いを浮かべて答えるグランゼル。それで住民の態度が変わると思えないが、望むなら好きにさせるのが一番だろう。

エリザは姿勢を正し、街の目抜き通りに真っ直ぐ向き合

う。家々の鎧戸から自分の動向を伺っているであろう住民の不安を少しでも取り除かなければならない。彼女はそう考えていた。

「初めまして。西のリーデアルドから来ました、癒し手のエリザ・トランドと申します。先日はご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

そこで一旦頭を下げると体の動きに合わせて掌も上下してしまい、乗っていた二人が慌ててエリザの指にしがみつく。気づいた彼女は指を曲げ、二人が無事落ち着くのを確認してから街に視線を戻す。やはりこういう多数の目を受けての挨拶は緊張するものだ。一旦深呼吸し、やや俯きながら挨拶を続ける。

「そこで……その、お詫びといえますか、出来れば皆さんの治療を請け負いたいですか……」

街からの反応はない。エリザは不安そうな表情で掌の二人を見やる。

「このまま街に入っても良いんでしょうか？」

「構わんだろう、道幅は十分にあるしな」

ブラドゥはそう答え、そして「西ではどうやってたんだ？」と尋ねる。

「一度街壁を跨いだ後は、できるだけ小さくなって街の中を歩いていました。リーデアルドは狭いので、通れる道はあまりありませんでしたが」

「なに？　小さくもなれるのか」

エリザの答えに對し、つい怒号に近い大きな声がブラドウの口から出てしまう。

「ならなぜそうしなかった?!」

「すつ、すみませんっ」

びくつと肩を震わせるエリザ。その動きによつて再びよろめき転びそうになった二人を、彼女は指で支え直す。

「小さくなると凄く暑いので、余り長く居られないんです」  
小さな声で答えながら、彼女はブラドウの表情の変化を伺っている。怒鳴られて縮こまっている子供にも似た仕草だが、怒鳴っている側は文字通り彼女の掌に立たされている上に、彼を見る怯えた瞳も直径半尺はあろうかという大きさだ。気弱な様子とは裏腹の圧倒的な存在感に、ブラドウはつい苦笑と共に溜息を漏らしてしまう。

「怒鳴つて悪かった」

ブラドウは柔らかな口調でそう言い、一呼吸おいて言葉を継ぐ。

「特に治療を要する者が中央の治療院に預けられているから、そこにまず行つてくれ」

それを聞いてエリザの表情も緩み、返事と共に頷く。

「で……場所はどちらですか？」

「んー、中央広場から右に行つた、南広場沿いだ。あの白い建物、みえるか？」

質問に對しブラドウはそう答えながら真正面を指さし、それを右にずらす。

「はい、わかりました」

エリザは頷き、そつとしゃがんで掌上の二人を街壁の上に移らせる。少し離れて貰うように言つてからスカートの裾を上げて街壁を跨ぎ、そして力を抜いた立ち姿勢で目を閉じる。

すると、街壁の三倍はあつたはずの彼女の巨躯が、あたかもそれが自然な営みであるかのように音もなく縮み始める。街壁の二人だけでなく通りの眼が呆然と見つめるなかエリザは何事もなかつたかのように前の半分くらいの大きさまで縮むと、くるりと振り返つて膝に手を当て軽く屈む。そうすれば丁度二人の正面に顔が来る案配だ。

「じゃ、行つてきます」

微笑みながら壁の上の二人にそう言つて振り返ろうとするが、エリザは不意に視線を右前方の家に止める。間近で見ると鎧戸が微かに開いており、そこから彼女を伺う視線と目が合ったからだ。

しかし、見られていると解つた途端に、その鎧戸は小さな音を立てて閉まつてしまった。それに続く震える声と速い足音。怯えている人に何か声を掛けようとエリザは思ったが、適切な言葉が咄嗟に思い浮かばない。暫し悩んだ末、彼女は極力柔らかな声でこう言つた。

「怖がらないで下さい。覗いてたからって怒ったりしませんから」

その様子を街壁から見ながら、今度は弟をあやす姉のようだとブラドゥは思っていた。

言われたとおり、エリザは目抜き通りを中央広場まで進み、右折して南広場まで歩く。通りや広場はどこも無人だが、脇の小さな家々から来る怯えた心というか気配のようなものを彼女は感じとっていた。どうか彼等の不安を取り除いてあげられないかと考えるものの、話し掛けることはおろか、気づいた素振りを見せるだけで先刻のような反応が来るのは明らかだ。もどかしさを感じながらも、エリザは視線に気づかない振りをして慎重に歩を進めた。

南広場の周囲で一軒だけ扉を開けている白壁の建物、それが治療院であることはエリザにもすぐに解った。扉の中には恰幅の良い年齢四十ばかりの治療師の女性が控え、窓枠に手をつけてじつと見ている。エリザが軽く会釈するとその女性も頭を下げ、彼女の方から先に話しかけてきた。

「挨拶は聞きましたよ。エリザさん、で宜しい？」

「あ、はい」

「私はフレイア。しかし、あんた本当に大きいんだねえ」  
自己紹介もそこそこに、心底驚いたような声を上げる。エリザにとつては何度も聞いている台詞だが、威圧や恐怖を感じている様子でないのは彼女にとつて意外であり、そして救い

でもあった。ゆつくりと腰を下ろしつつ、「ええ、まあ」とはにかんだ笑みで応える。

「ま、いいや。まずは患者さんだね」

もう少しエリザの大きさに言及するかと思いきや、フレイアは一方的に話を切り替えてしまう。その話によれば、患者を症状の重い順に並べたのでその順に治療して欲しいとのことだった。

（私が怖いから、切羽詰まってる順に決めたのかな……）  
訝つてもみるが、もしそうならなおさら意向に従うべきと考え、エリザは申し出を快諾した。

それを受けて担架に乗って出てきた最初の患者は、ほぼ全身を包帯で巻かれた子供だった。顔もまた殆どが包帯に隠れているが、固く閉じた目だけでその子供が何を感じているかが痛いほどに解る。

「人の流れに押し潰されたんだ。打撲と骨折、あと内臓も少し破損してるかもしれない」

フレイアが淡々と説明する。彼女の方を見ると、傍らに女性が一人不安そうな表情を浮かべて立っている。その女性が誰であるかは直ぐに察しがついた。

エリザはその女性に向かって頷くとおもむろに担架の下に左手を入れて支え、ゆつくりと胸の高さまで持ち上げる。掌にすつぽり収まる小さな体は強ばって力無く震え、熱を持ち、何力所かに板が添えられている。その痛々しい姿は自分

の無策による結果であり、震えは物言わぬ抗議。そう思うと、改めて後悔の念に苛まれてしまう。

「ごめんなさい。もう大丈夫だから……」

そう囁いて、エリザは震える小さな体をそつと左胸に抱き寄せる。最近、神経を集中させれば相手の命の灯を感じる事が出来るようになっていた。その灯火は優しく包まないとすぐに消えてしまいそうなくらい弱々しかったが、彼女の大きな鼓動を聴いているせいかな恐怖は少しづつ和らいでいるようだった。エリザはそのまましばらく待ち、頃合いを見計らってから治癒術を施す。相手の状態がわかるから、以前のように様子を伺いながらおつかなびつくり術を掛けることもない。小さかった命の火は、徐々に元の輝きと温もりを取り戻していった。

治療が無事に終わると、エリザは胸から子供を離して尋ねる。

「痛いところはありますか？」

相手が元気に頷くのを見て微笑み、エリザは左手をゆつくりと下ろす。その途中で不意に、側まで駆け寄っていた母親に目がとまった。今にも泣きそうな表情で、背伸びして彼女の方へ両手を一杯に伸ばしている。エリザは母親の前に左手を下ろすと、真つ先に我が子を抱きしめた母親の背中に右掌をそつとあてる。

「ひっ?!」

突然のことに母親は短い悲鳴を上げ、子供を庇いながら身を翻す。その反応に驚いたエリザも咄嗟に手を引いてしまう。

「ご、ごめんなさい」

反射的にそんな言葉が口について出る。言い終わってからようやく、エリザは自分の行動が恐怖を与えてしまったことに気づいた。引いたままの右手を下ろし、代わりに自分のしようとしていたことを伝える。

「あなたも、疲れていると思ったんです。だから癒そうと思つて……」

その説明で真意を理解したのか、母親は何度も頷いて一歩前に出る。エリザは右人差し指の腹を彼女の前に差し出し、手を置いて貰うのを待つてから治癒術を施した。

両者の治療が終わり改めて礼を言う母子に、エリザは少し戸惑い気味の微笑で応じた。彼女にとってこれは最低限の償いであり、礼を言われるようなことではない。

視線をフレイアの方に戻すと、彼女の傍らには既に次の患者が用意されていた。担架に乗ったその男は、両足と背中に添え木があてられている。

「脱出しようとして市壁から落ちたらしくてね、両足と腰を折つてる」

フレイアの説明を聞いたエリザが拾い上げようとしたところで、不意に担架の男が口を開いた。

「あー。さっきの、俺にもやってくれな……うう?」

最後まで台詞を言い終わらないうちに、フレイアが彼の頬を振りあげていた。

「まずはこの減らず口を治さないとねえ」

悪戯っぽい、本当に楽しそうな口調でそう言うと、助手に二言三言指示を出す。それを受けて担架は建物の中に帰ってしまった。

「え？ えっと……」

『さっきの』の意味さえまだ解していないエリザには、この展開についていけない。

「いいんですか？ さっきのひと」

「いーんだよ。後回しだ」

おぼおぼと尋ねるエリザに、フレイアは即答する。

次は、窓と人の間に押されて肋を折った兵士だった。それから、大荷物持つて転倒し膝の皿を割った亭主……。四人目の治療が終わったところで担架は来なくなつた。あとは骨折が数人いるだけで殆どは打撲や擦り傷だけという説明をフレイアから聞き、エリザもやつと安心することができた。

緊張が途切れると途端に体が熱く感じる。既に結構な時間が過ぎていたのだろう。今の大きさのまままで残り全員を治療できそうにはないと判断し、エリザは遠慮がちに問う。「すみません。ちよつと、さっきの大きさに戻りたいんですけど、構いませんか？」

突然の申し出に、フレイアは戸惑つた様子で傍らの助手と顔

を見合わせる。だが先の挨拶で言及していたことを思い出したのか、二三度頷くと彼女の方を向き直つて言う。

「構うも構わないも、そうしなきゃならないんだろ？ 好きにしな」

「すみません」

エリザは腰を浮かせ、膝を擦りながら広場の真ん中まで下がり、スカートと布地の布地を前に送つて座り直す。それから膝を開いて広場から延びる道に向け、さらに後ろを振り返つて左右の長靴の爪先が通路に向いていることを確認する。

「じゃあ、あの……驚くと思えますけど、心配しないで下さいね」

前にいるフレイア達だけでなく周りを見渡しながらそう言い、両方の膝と爪先に気を使いながら少しずつ自らの念想を伸展させる。始めは膝と爪先が道に掛かる位まで大きくなるつもりだったが、前の三人が迫ってくる服の裾に対して明らかに怖がつているのが見て取れたので、多少手前で止めることにした。一息つき、さっきの半分近い二寸程の大ききさになってしまったフレイアに声を掛ける。

「終わりました。こんな感じなんですけど……」

戸口のところまで下がっていたフレイアは暫し口を開けて見上げていたが、エリザの台詞に気づいてはつと我に返る。改めて彼女の各部位を見渡すと、膝が織りなす稜線は二階の窓に届く高さがあり、それに挟まれた白い沢に居るよう



な錯覚さえ感じてしまう。腰から更に上にある顔まで視点を上げ、そこでやつと錯覚から解放された。

「間近で見るとまた大きいねえ」

フレイアの口から本当に驚いたような声が出たのは、暫く経ってからだった。心配そうに見守っていたエリザも、その声を聞いてやつと安心する。

「つてことは、まだ大きくなれたりするのかい？」

「やめて下さい。街から出られなくなりますから」

フレイアの問いに、エリザは照れ笑いでこたえる。言いながら両足だけでこの広場を埋めて立ちつくす自分を想像してしまい、彼女は慌ててそれを振り払った。

この大きさと術の行使にはもう少し慎重さが要求されるが、慣れているエリザは次々と治療院の患者に術を掛けていく。フレイアの言う通り残った患者は比較的軽傷の者ばかりだったため、ほとんど流れ作業のようなものだった。疲れている助手とフレイアにも最後に術を施し、エリザは他にまだ怪我人か病人が居ないかと尋ねる。

「いや、そうは言ってもねえ……」

「まだお詫びもしていませんし、治せる人はみんな治したいんです」

少し気怠そうに應えるフレイアに、エリザは畳みかける。フレイアが見上げると、十丈(三十メートル)近い高みから来る真摯な眼差しと相對する。今となつてはその大きさほどの圧力は感じないが、なかなか抗いづらい。

(タフな娘だねえ……まあ、この大きさだから当然か)

諦めたのか、フレイアは乾いた笑みを浮かべてうなだれる。そして少し間をおいてから再び顔を上げ、提案する。

「じゃあ、今日の昼過ぎに使者が来るらしいから、それまでに何とか集めてみるよ。それまで外で待つていてくれないか」

しかしそれを聞いたエリザは意外だと言わんばかりに目を開き、二三次瞬きさせる。

「えっと、待つて欲しいっていうのは……私、何もしな

くて良いんですか?」

「あたりまえだろ。その大きさとで街を練り歩かれちゃあ敵わないよ」

その強い口調に何も言い返せない。今度はエリザが頭をうなだれる番だった。

「う……ごめんなさい。何もできなくて」

「いや、いいってんだよ。上手く行けばあと四〜五日は休めるからね」

謝るエリザに、フレイアは慌てて取り繕う。広場を埋め尽くす大きさの割にはどうにも弱気な態度なので調子が狂わされる。もつとも、普通の大きさの子と話していると思えば良いのかもしれないが、端から見ればさぞ奇妙な光景に写ることだろう……。そんなことを考えているフレイアに、エリザがおずおずと問うた。

「あ、あと。使者の方が昼過ぎに来るって、仰ってましたよね?」

「そうだよ、それが何か?」

フレイアは即座に問い返す。

「いえ……ちよつと、初耳だったもので」

「あゝ。もしかして伝えてなかったのかねえ、あの馬鹿……溜息を前置きにしてフレイアは説明を始めた。

警備隊長であるブラドウの話によれば、昨日の晩に使者の先発が来ていたのだそう。明日の昼過ぎから護衛を頼む

という内容だったのだが、ブラドウはエリザの来襲を明らかにした上でこの街での合流を申し出た。結局それが受け入れられ、先発の男はそれを伝えるために帰っていった。ちなみに遅れた原因は、魔術師のローンハイムが土地の料理を食べ過ぎて体調を崩したためだそうだ。

「なんてーか、若い爺さんだねえ。ホントに」

「ええ、まあ歳を半分しか数えてないような人ですから」  
心底呆れたと言わんばかりのフレイアに、エリザも額とこめかみを押さえながら同意する。自分の年齢を把握していない無茶っぷりがなんとも師匠らしい。

ともあれ、フレイアに建物の中へ入って貰った上でエリザはゆつくりと立ち上がる。三階建ての家々の庇も彼女のスカートの高さと同じくらいの高さだ。すこし裾を持ち上げれば建物に当たらないので、道幅の狭さを除けば意外に都合がよいかもしれない。そんなことを考えながらエリザは市壁の外まで歩み出て、それから外壁つたいに元の西門まで戻る。

正門の上では隊長と副隊長、それにグランゼルの三人が何か話しあっているようだった。さらに彼らの後ろや壁の影に何人かの子供がおり、顔を少しだけ出してエリザの方を伺っている。だが彼女が目を合わせようとすると、子供達は物陰に引っ込んでしまった。仕方がないので、エリザは腰を下ろしながら三人に尋ねる。

「どうしたんですか？ その子たち」

「ああ、なんか興味があるらしいんだが……」

リオノスはその答えて自分の後ろに居る子供をせっついてみるが、頑として動こうとしない。やるかたなしといった風に肩をすくめて見せるリオノスに、エリザは

「それじゃあ駄目ですよ」

と言つて軽く首を横に振る。そして彼女は頭の位置を一段上げて目の高さをあわせ、柔らかい声で語りかける。

「こんにちは。お姉さんに、顔を見せてくれないかな？」

リオノスの後ろや壁の影から子供達はそうつと顔の半分だけを出し、互いに顔を見合わせる。しばらく無言の相談が続いた後、壁の後ろにいた男の子が頷くのを合図として四人が同時に横へと出る。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

エリザが会釈すると、子供達もぎこちなく挨拶を返す。

彼女は一旦両膝を立てるように座り直してから、掌を市壁の前にゆつくりと差し出す。

「さ、おいで。一緒に遊ぼう」

差し出された掌の大きさに驚いたのか、子供達は皆一様に口を半ば開けたまま暫くはエリザの掌や顔を呆然と見ていたが、やがてそろそろと歩み寄り一人がいったん片足の爪先で掌に触れた後に全員で一気に飛び乗る。勢いの付いた四人分の体重にも掌は全く揺るがず、そのことに彼らは驚

いているようだった。そんなちよつとした素直な反応を楽しみつつも、エリザは笑つて手を揺らしたりしないよう注意しつつ彼らに乗せた掌を自分の膝まで運ぶ。

三人が下ろされた場所、つまりエリザの膝頭は市壁の半分位の高さがあり、そこから白い斜面が彼女の腹とつま先に延びている。こんなところに下ろして何をするのだらうか。疑問に思つた子供達が彼らよりやや高い位置にある大きな顔を伺うと、彼女はそれを待つていたかのように口を開く。

「じゃあ、そこに横になつてちょうだい」

しかし発せられた言葉は、彼らの疑問を解くどころかさらに深める内容である。それでもなんとなく言われるままに横たわると、エリザは太さ一尺半ほどの親指と人差し指で一人の肩をそつと挟み、彼の体を前にずらした。

「ええつ?!」

思はず男の子の口から声が出る。先は斜面だ。その子は自分の置かれた状況を理解する暇もなく、加速と悲鳴を伴つて白い斜面を滑り落ちていく。彼の視界は相手の顔から紋章を付けた胸へと移り、そして腹の前でやつと止まった。

(死ぬかと、思つた……)

大きく息を吸い、おぼつかない足取りでなんとか立ち上がる。涙のにじむ目できつと見上げると、顎を引いて心配そうに見下ろしていたエリザと目が合う。

「ごめんなさい、そんなに怖がるとは思つてなかつたから

……」

「いやつ、怖くなんかないやいッ!」

腕を腰にあてて叫ぶ。怖いという言葉に過剰反応してしまふのは男の子の意地なのだろう。無理しているのは明らかだったが、エリザは敢えて突つ込まないことにした。

「でもまあ、慣れないうちはもう少し緩い方が良いでしょう」  
残りの子供がおちないよう膝の下側に手を当て、斜面を緩やかにするために少し爪先を前へ出す。

最初は怖々滑つていた子供達も徐々に慣れてきたようで、頭から滑つたり両手を広げて滑つたりといろんな滑り方をする子が出てくる。エリザはその子供達を楽しそうに見つめ、また滑り終わった子供を次々と拾い上げては膝まで持ち上げている。

「馴染んでますなあ」

リオノスが感慨深げに呟く。彼にとつてはこれ以上不自然な光景であると同時に、奇妙なくらい自然な光景でもあった。

「まあ、職業柄つてもんでしよう。あとは元々子供っぽいからかと」

グランゼルがそう答え、声を立てて笑う。実際に故郷のリーデアルドではちよくちよく見られる光景である。

そんな彼らの周りに突然影が差し、グランゼルはいきなり引つ張り上げられる。もちろん、こんなことが出来るのは一人しかない。

「えーと、聞こえますよお」

妙に楽しそうなエリザの声。グランゼルは彼女の顔の高さまで持ち上げられ、悪戯つきの混じった楽しそうな笑みに嫌でも対面させられる。

「遊びたいなら言つて下されば良いのに」

そんな台詞の後に今度はエリザの顔が遠ざかる。行き着く先は滑り台、だがいつの間にか急角度に設定されており上から見るとほとんど崖だ。慌てたグランゼルは手足をばたつかせながら必死で抗議する。

「ちよ、ちよと待て。これは……これは急過ぎないか？」

「ええ、だから貴方にお願ひするんじゃないですか」

笑顔を崩すことなくやんわりと却下され、グランゼルは落下ののち直滑降の恐怖を味わされることとなる。彼の場合は自業自得だが、ついでだからという理由で同じ目に遭わされたブラドウとリオノスにとっては災難という他ない。

「ああ、これでは子供達には無理かもしれませんね」

一気に疲労困憊になった三人を腹に乗せたまま、エリザはここにこしながら平然と言った。

そんな風に滑り台とか指を使った押しあいこで遊んでいるうちに、市内に正午の鐘が鳴った。かつての豊かな財政を示すような、低く重い音が響き渡る。

「ごめんね。もう行かないといけないの」

申し訳なさそうに言い、エリザは自分の膝の上で遊んでい

る子供達を拾い上げて自分の左掌に乗せる。乗せられた子供達は少しか残念そうに彼女を見上げているが、別れを惜しむ様子さえも彼女にとってはなんと嬉しいものだ。市壁に掌を添えて子供達に戻つてもらおうと、彼女は一旦腰を浮かせてから片膝をつきなおす。そして立ち上がる代わりに、再び掌を彼等の前に差し出した。

「じゃあ、最後にちよとだけ良いものを見せてあげる」

今度は、子供達は我先にと掌に飛び乗る。顔をほころばせながらエリザはゆつくりと立ち上がり、さらに子供達の乗った左手をいっぱいまで掲げ上げる。今の彼女の大きさなら、それだけで見張り塔の三倍くらいの高さだ。初めて見る光景に、子供達から感嘆の声が挙がる。

「どう？ いい眺めでしょ」

少しだけ自慢げにエリザは声を掛ける。それに応じて直ぐに一人の少年が掌から身を乗り出し、彼女の方に向かって叫ぶ。

「うん、すごいよ！ すごく遠くまで見えるー」

だがそのとき少年は、優しく微笑む彼女の表情だけでなくその遙か下にある市壁や家々まで見てしまった。自分の居る高さを実感した少年は顔を引きつらせ、四つん這いの姿勢のままゆつくりと掌の内側に引っ込んでしまった。

それを心配に思ったエリザは、徐に掌を自分の肩の高さまで下ろして子供達を見つめる。さつき顔を出していた少年は

後ろ手をついて座っており、彼女の方を向いている顔に怯えはない。その様子にエリザは安堵し、念のため尋ねてみる。

「大丈夫？」

「うん、なんだか落ちそうな気がして……。でも面白かったあ」

そう応えるものの少年の声や姿勢は気怠く、疲労の色が濃い。とかく初めてづくしだから当然といえれば当然だ。

「じゃあ、この辺で終わりにしよっか」

エリザは提案するが、即座に他の三人が立ち上がって抗議を始めてしまう。

「やだ。僕にも見せてよ」

「見たい」

「うん、見たい」

（あ、やっぱり子供はこうなんだ……）

大人しいと思っていた彼らがここへきて故郷の子供達と同じ反応をしているので、思わずエリザの表情から苦笑が漏れる。ここまで必要とされるのは彼女にとって嬉しいことなのだが、毎日のように子供達からもっと遊んで欲しいとせがまれ、その都度あれこれ宥め賺すのに苦労させられてもいる。一度などは数人がかりで服の裾に組み付かれてしまい、本当に難渋したものだ。

「ちよつとだけよ。人を待たせているんだから」

しようがないと言わんばかりに答えるが、その口調にも構

うことなく子供達は四つんばいになって掌の縁まで身を寄せる。気の早い動きに苦笑しつつも、エリザは彼らが落ちないよう極力慎重に左手を掲げる。だがそんな彼女の気遣いも知らない子供達は「僕が一番だ」とか何とか言いながら競って身を乗り出そうとしている。度胸試しの積もりなのだろうが、見ている方がはらはらしてしまうほどだ。しかし張り合っている子供達は、それでもまだ体を前に延ばそうとする。危険を感じたエリザは遂に掌を丸め、無理矢理彼らを掌の真ん中に押し戻した。そして左手を丸めたまま肩の高さまで降ろし、そこで開く。

「はい、これでおしまい」

子供達は突然のことに対応できずに少しの間哑然としていたが、もう遊んで貰えないことだけは察したのか直ぐに駄々をこね始める。

「だーめ。そんな我儘な子は握り潰ししやうぞー」

エリザは笑いながら軽く左掌を閉じる。子供に限っては少し脅してやるくらいが丁度良いというのも、故郷での経験から得られた教訓だった。それで大人しくはなったもののまだ物欲しそうに見上げている子供達を、エリザは一人ずつ摘んで市壁に戻す。そして立ち上がろうとしたところで、リオノスがふと感慨深そうに言葉を漏らした。

「子供相手には朗らかなんだなあ……」

それを聞いたエリザの視線が即座に彼を捕らえる。急な動き

に戸惑うリオノスの目の前で、彼女の顔が一気に赤くなる。子供達と遊ぶついでに彼に何をしたか、改めて思い出したからだ。

「い、いや……その、ごめんなさいっ」

顔を赤らめたまま、慌てて頭を下げる。

「昨日今日会ったばかりの方に、あんな、子供扱いなんかしてしまっ……」

「ああ、いいさ、今更気にしなくても」

顔を上げると、リオノスは笑ったまま宥めるように手を軽く振っている。恥ずかしかって縮こまってもなお、彼の姿は軽く見下ろす位置にあった。

「それより、使節が来たらしい。隊長が対応してて、今は治療院に居るらしいから」

「あ、はい。解りました」

エリザは直ぐに立ち上がり、一礼してから再び門を跨ぎ越して街に入る。さっき恥ずかしい思いをして体全体が熱くなった影響か、自分の体が少し大きくなっているように感じていた。

師匠と会うのは一年ぶりだが、元からの高齢もあってか着ている服装以外に変わったところは無さそうだ。再び南広場に来て座っているエリザは、自分の膝の前にいる老人を見ながらそう思っていた。

使節の他の者達は庁舎の中から見守っているだけだったが、この老人だけは彼女の全身を見渡そうと首ごと視線を上下に動かしている。何度かの往復の後、彼は本当に驚いたような口調で言った。

「うむ。暫く見ないうちに随分大きくなったのお」

その台詞に、エリザは思わず吹き出してしまう。

「いや、ちよつとそれは」

言い返しながら彼女は笑っていた。単に師の反応が面白かったからだけではなく、師匠の自分に接する態度も変わっていないことが嬉しかったからでもある。

大体の経緯は既に知らされているが、それでも実際に術を使っているところを見たい。そうローンハイムが申し出たため、エリザは彼を膝に乗せたまま集められた病人や怪我人に次々と術を掛けていった。それだけでは飽き足らぬ老師は、治療の間にも色々と質問を投げかける。

「魔力を絞るのが難しくはないのかの？」

「ええ、だいぶ慣れましたから」

「しかし加減は……傷が治ったことを、どうやって知る

のじゃ？」

「えつと、なんとなくですけど、触れていると解るんです」

「それは、大きくなっている時だけかの？」

「ええ、そうだと思います」

そこで矢継早の質問が一時途絶える。どうしたんだろうと思いつながらもエリザは治療を続けていたが、ローンハイムはいきなり思い出したように尋ねた。

「そういうええ、八十丈（二四〇メートル）程まで大きくなれると聞いたが……」

「ちよ、ちよつと止めて下さいよ。皆さん聞いているんですから」

さつきまでは冷静に答えていたエリザも、いきなりの質問に色めき立ち声を僅かに荒立てる。だが、もつと驚いたのは彼女の掌の上にいる患者だろう。目をと口を開いたまま固まっている患者にエリザは微笑みかけ、彼の背中を人差し指でそつと撫でる。

「あの、大丈夫ですよ。ここではそんな大きさになりませんから」

言われてほつとしたのか、患者はゆっくり頷き呟く。

「そ、そうか。しかし、八十つてーと……」

「今の四〜五倍くらいかのお」

患者の疑問に対してローンハイムが即答する。それを聞いたエリザは、先ほど思っていたより大きそうだと考えていた。



今いる南広場に両足を置くことは出来そうにない。片方の足の半分くらいだから、片足で爪先立ち……。

彼女は慌てて頭を振り、その想像を頭から追い払う。そして周囲を見渡してみるが、幸いにも景色に変化はなく、膝の先を見ても大きさが変わった様子は見られない。エリザは安堵のため息を漏らし、そして膝の上の師を睨みつけた。

「大きさのことは言わないで頂けませんか？」

エリザはそう言つて注意を促す。しかし思いがけず強くなつてしまった語調と視線、ましてやこの大きさだ。ローンハイムは言い返すこともできず、彼女の表情をちらと伺つて項垂れ「すまん」と小さく謝る。

その反応はエリザにとつて少し意外だった。いつも飄々としている師とは別人のようなその小さな老人が可哀想に思えたので、今度は極力柔らかい口調で説明し、尋ねる。

「変に考えてしまうと、その大きさになつてしまうことがあるんです。もしかして、聞いていませんでしたか？」

「いや、うむ……」

ローンハイムは彼女を見上げ、首を縦に振る。エリザは「そうでしたか」という呟きと小さなため息を漏らし、師の肩を指で優しく撫でる。

「強く言い過ぎてしまって、申し訳ありません」

エリザは師にそつと謝り、そしておもむろに治療を再開する。しかし、それからローンハイムが彼女に話しかけること

はかった。座つたまま動かない小さな老人を見るとどうしても気まずい思いを抱いてしまうが、エリザは自分の職務である治療を続けた。

結局、集められた三十人余りを治療するには小半時も掛からなかった。しかし治療が終わつても、師は動く気配を見せない。話しかけても応じず、肩に触れてそつと揺すつて初めて師は慌てて顔を上げる。彼がなぜ黙つていたのか、その時の惚けた表情で分かった。

「寝てたでしょう？」

師の顔より大きな人差し指で、間近から指さしつつ、エリザは悪戯つぽい笑みを浮かべて問う。

「いやあ、暖かかったからのお。つい……」

ローンハイムもまたばつが悪そうに笑い、頭を掻きながら答えた。

ローンハイムの命に従い、エリザは彼とフレイアを掌に乗せて中央広場に移動する。そこで庁舎から出てきたグランゼルや使節団、それにバラム自警団の面々と合流するが、エリザの提案により会談は西門の前で行われることになった。お互い首を痛めないからというのがその理由である。

ただ会談と言つても、その内容は王都や市庁舎の中でほぼ纏まつており、ここでは方針を伝えて可否を聞く程度だ。

エリザの存在を隠すか、それとも彼女の敵意の無いことまで含めて公にするか。王都の卓上では双方の意見が出てお

互い譲らないままだったが、他ならぬエリザ自身が山を越えてバラムの街に来てしまった今となつては既に議論の余地は無い。ただバラムの混乱ぶりを考えれば広報は慎重に行う必要がある。まずは主要な街や各公国に書簡を出す線が適切であろうという結論に達した。

災い転じて福となすというのはこういう状況を指すのだろう。そんな複雑な心境で使節団の説明に聞き入っていたエリザだが、説明を任せて黙っていたローンハイムが不意に発した言葉には面食らってしまった。

「どうせじゃから公国に派遣するか、向こうの重鎮を呼んでしまえと言つたんじゃがのお」

老師は笑つて言う。

「いや、その……いきなりそれは、ちよつと……」

エリザは顔を赤らめながらしどろもどろに返すのがやつとだった。きらびやかな衣装に身を包んだ自分が城より大きな巨軀を各公国の重鎮達の前に晒している……そんな冗談めいた光景を想像してしまつたからである。

王都では従事させるべき仕事についても話し合いが持たれた。存在を公にするか否かの決着さえ付いてない時点では話の纏めようもなかつたが、それでも灌漑や橋の整備といった大きな工事をさせようとか、鉱山を山ごと削らせようとか、戦に率いれば大陸に気兼ねすることなく全土を統一できるといふ意見まで出たという。

「戦は、ちよつと勘弁して欲しいですね。戦を止めるためならまだしも……」

エリザはほそつと呟く。

「それは、戦を止めるためなら赴く意志ありと見て良いかの？」

「えっ？」

不意にローンハイムから問われ、エリザは目を見開き老師を見据える。彼の表情は冗談を言うそれではない。質問を頭の中で反芻するも、なぜ彼がこんなことを問うのか解らない。もしかして、全土の統一を唱えたのは彼なのだろうか。「ええと……その。何にせよ人が傷つくのは嫌ですし、放つておけませんから」

疑念に言葉を詰まらせながらも、エリザは正直に答える。その答えを聞いたローンハイムの表情は温和な笑みに転じ、首がゆっくり縦に振られる。

「うむ、ならよし。しかし気を付けるのじゃぞ。戦を好む者は、同じ言葉でおまえを戦場に送るはずじゃ」

「えっ？ とすると……私を、騙すつてことですか？」師の言葉の意味がまだはつきりとは掴めず、問うエリザの声は不確かで弱い。それを察してか、ローンハイムはゆっくりした口調のまま応える。

「騙すかもしれないの。だが、頭からそう信じとる輩も居る」戦で流血を防ぐには、相手を完膚無きまでに叩くしかない。

お互いがそう考える状況では正しいだけに、譲れない者が多いのだという。

「怖い話ですね」

エリザは感慨深そうに呟き、問う。

「ということは、おいそれと『戦に加わる』なんて言わない方が良いということですか？」

「そうなの。とりあえず戦に出る意志は無いと伝えることにしよう」

ローンハイムは顎をさすりながら答えた。最初から持っている結論を押しつけられているような違和感を感じたエリザだったが、すぐにそれでも構わないと思ひ直した。彼の言っている内容は自分の意志に沿っているし、寧ろ足を掬われぬように気を配っているのかもしれない。どのみち師なら悪いようにはしないだろう。彼女はやや戸惑いながらもゆっくりと頷く。

「あ、はい。お願いします」

それを受けて、ローンハイムは自信に満ちた笑みとともに頷き返した。エリザにとつて師は掌に収まる小さきだが、その堂々とした態度は頼もしく写る。

「うむ、任せておれ。それより……」

だが、そこまで言つてローンハイムの表情が微妙に悪戯っぽく変わる。それはエリザが師の顔として最も印象に残っている表情だ。というのも、この表情を浮かべた師の口からは都

合の悪い頼み事がいつも出ていたからである。

「主の術を、別の場所でもう少し見たいのじやが」

術の影響が及ぶのを避けるため、エリザは師匠を掌に載せて町から西に移動する。四半里ほど歩くと森の中でも少し開けた場所に着いたので彼女は腰を下ろし、立てた膝の上に師を降した。

「で、どんな術をお見せすれば良いんでしょうか？」

治癒術は見せたはずだから、今の奇妙に鋭い感覚のことを言ってるのだろうか。それとも操霊の類か。エリザはそう思っただけだが、師の反応はその予想から大きく外れていた。

「そうじゃな。ではとりあえず、八十丈（二四〇メートル）という大きさを見せて貰おうか」

「えっ?!」

師の突飛な要求に、エリザはつい声を立ててしまう。

「良いんですか? 凄く、怖いと思いますけど」

師を正面から見据え、尋ねる。間近から焦点を合わせるとそれだけで大概の人は身を引くものだが、この老人は視線の圧力を平然と受け流している。

「だから良いのぢやよ」

むしろ楽しそうな声で答えるローンハイム。

「この齢になるとのお、怖いのも道楽じゃで」

いかにも好奇心衰えぬ師匠らしい答えぶりに、エリザも釣られるようについ苦笑いしてしまう。いざ百五十倍になった

自分を目にすれば狼狽えるかもしれないが、それはそれで見たい気がしてきた。

「じゃあ降りて頂きますけど、そこからは絶対に動かないで下さいね」

掌を膝に寄せながらエリザは言うが、その提案にローンハイムは両腕を振り上げて抗う。

「ま、まてっ!! 馬鹿を言うなっ!」

「?!」

突然の激昂に、エリザは目を丸くして固まってしまった。怒られている理由が解らないために何も言えず、膝上の師を注意深く凝視することしかできない。そんな面食った弟子に向かつて、師は更に畳みかける。

「儂を降ろしてどうする。掌に乗せたまま大きくならねば意味が無いじやろうが!」

「へっ?」

怒っている理由が解つても、その無謀さ加減には何も言い返せない。彼女が口を開くまでには、優に二三度瞬きする位の間が空いていた。

「そ、それって……本気ですか?」

うわづつた声で慌てて反駁を始めるエリザ。

「百五十倍って簡単に言いますけど、本当に大きいんですよ。だって、この指先でさえ……」

そう言いながら師から見て太さ二尺はある人差し指を師の

目の前に置き、次いで親指を三寸ばかり上に留める。ローンハイムにとつては家の天井よりも高い位置だ。

「これくらいの大さになるんですから」

ここまで大きくなると些細な動きえも周りに凄い影響を与えてしまうし、小さな人を傷つけずにいられる自信がない。そうエリザは主張したが、ローンハイムまた頑として譲らない。

曰く、掌に載せるだけで構わないし、万一落ちたとしても風に加護を賜われれば死ぬことは無い。そして百五十倍にまで大きくなれることが人々に伝われば、いずれその大ききさで動かざるを得ない状況が必ず起こる。だから今のうちに人を傷つけることなく扱えるようになっておかなければならない。

「そこまで言われてしまうと、エリザも折れる他になかった。」

「解りました。じゃあ、左掌の真ん中で寝そべってください」

まだ心の底では承諾しきれないのか、エリザは低い声で促す。

言われた通りにローンハイムが掌の真ん中まで来て横になるのを確認すると、彼女は片膝を立ててゆっくりと立ち上がる。そして右手の下に左手を沿え、正面やや上を向いて大きく息を吸い、そして吐く。ほんの些細な動きが恐らく

師の生死を左右するだろうから、失敗は絶対に許されない。そう思うと緊張で手が震えてしまい、ついエリザは心配そうに掌上の師を見てしまう。だが掌上の小さな老人は体中の力が抜けたような緩んだ姿勢で横たわっており、助けを求め視線に気づいても、心配するなどでも言うかのように手をゆっくりと振るのみだ。

(まったく……：貴方が一番怖いはずなのに)

自分の調子を崩さない師匠の様子に少しだけ呆れつつも、エリザは微笑で応じる。そうすることで体から余分な力が抜け震えも収まったので、彼女は手が動かないように両脇を締め、掌を胸の方に寄せる。なんとなく恥ずかしいし掌を見るときに首や顎が苦しくなりそうだが、背に腹は代えられない。

「じゃあ、いきますよ」

小声でそう伝えてからエリザは目を閉じ、自分の体が大きくなった場面を想像しはじめる。まず思い出したのが、昨日間違つて大きくなったときのことだ。二階建ての離れ小屋がすつぽり手の中に収まる位に、そして前に居た二人は炊いた穀粒くらいにまで小さくなっていた。あれでおよそ百五十倍、とすればその倍になれば家を摘み上げる感じになるのだろうか。そういえば昨日だけでなく訓練の際も雲を手で散らす自分の姿を想像したが、それくらいの大きさになれば山越しに故郷の町を見られるかもしれない……。

そこまで考えたところで目を開けると、彼女の前方には絨毯のように緑の森が広がっていた。その遙か向こうにある青い山と空も含めて、前に試みた時と同じような風景だ。左を向くと数間先にバラムの街が見える。エリザにとつて街は直径およそ一尋の大ききで、小さいながらも中にある建物の識別は十分に付く。体ごと向き直してよく見てみると、市壁の上に人が立っているのが解る。多分さつきまで話していた人達だろう。

(みんな、啞然としているんだろなあ……)

市壁の人達だけでなく街の人全員が驚き、恐れているのだろう。エリザは街に向かつて微笑み掛け、右手を軽く振ってみる。多少の遅れを伴いながらも三人ほどが手を振り返してくれた。

この反応からすれば街の方はまだ大丈夫だろうが、それもこれもいい歳して子供みたいなことを言ってる師匠のせいだ。そう思つてエリザが胸元を見下ろすと、左掌の上には長さ三分ほどの小さな影がぼつんと落ちていた。それが寝そべっている師匠だと判るまでに数瞬の間を要したが、良く見ればその表情——口をぼかんと開け放しているのがわかる。

(あ、驚いてる)

流石の師匠もこれには驚嘆したようだ。師が無事だったことに加えて、滅多に見せないその表情に、エリザの顔にもついで悪戯っぽい笑みが浮かぶ。

「どうしました?」

エリザは敢えて余り声を抑えずに問う。間近で聞けばそれこそ雷鳴のように轟く声に、ローンハイムはびくつと体を痙攣させる。それでどうにか我に返つたらしく、彼はぶるぶると頭を振ると拳を上げて怒鳴る。

「ば、ばっかもん! 声が大き過ぎるすわい!」

大声を張り上げておなほ、エリザにとっては辛うじて聞こえるくらいの小さな声だった。だが声そのものは小さくても、言いたいことは不思議と伝わってくる。

「ごめんなさい、まだ慣れていないんです」

少しだけ申し訳無さそうに、エリザは可能な限り抑えた声で答える。だがそれでもこの至近距離では相当堪えるようで、彼女の科白が終わるまでローンハイムは耳を塞いだまま目を閉じ、強ばつた表情を浮かべている。

「いいから声を出すな。心話に切り替えるのじゃ」

師の命にエリザは「はい」と応えそうになり、慌てて息を飲む。その代わりにゆつくりと頷くと彼女は目を閉じ、掌にいる小さな師匠に意識を集中させて命の温もりを感じとる。確かな存在を認識できたところで、彼女は心の声で話しかける。

(あの……どうでしょう、聞こえます?)

(おう、十分すぎるくらいじゃ)

肉声に似た声色が即座に返ってきた。その声が直接聞くより

大きくはつきりと聞こえたので、エリザはつい目を開く。

「聞こえたか？」

問う老師を見つめたまま、エリザは無言で頷く。そして今度は目を開いたまま心の声で話しかける。

(声を聞くよりはつきり聞こえました)

師はこんなに小さいのに、いや自分がこんなに大きいのに、意志の疎通は全く問題なく行える。そのことが彼女にとつては不思議であり、また相手と自分が同じ人であることをよりはつきりと認識出来るのが嬉しくもあつた。

(ん？ どうしたのじゃ?)

いつの間にかにここに笑っているエリザを不審に思ったのか、ローンハイムが尋ねる。

(え？ ええ……)

思わぬ問いにもエリザは微笑みを崩さず答えた。

(これだけ大きさが違つても同じ人として心を通わせられるのが、嬉しいんです)

「ああ、確かにのお……」

感慨深い肉声が仰ぎ見るローンハイムの口から漏れる。まともに目が合つたことで、彼は真正面からエリザの大きさと向かい合つていた。遙かな高みから彼を伺う視線と視界一杯に広がる優しい笑みは、まるで全天が見守り微笑んでいるようだ。地に目を転じれば、座っている白い地面には高さ五分程度の畝が二寸の間隔で走っており、ちよつとした

広場くらいの広さがある。この百五十倍という大きさが数字だけでは表せないものを秘めていることを、彼は感じ取つていた。言うなれば一人の人間ではなく景色と相對しているかのような、そんな錯覚さえ受けてしまうのだ。あくまでも一介の治癒術師でありたいと願う彼女自身はそんな畏怖など絶対に受け入れないだろうが……。

(あ、あの……余りじつと見られると、恥ずかしいんですけど……)

(ん?)

弟子が遠慮がちに呼び止める声でローンハイムは我に返る。焦点が合つてはじめて分かつたが、そのとき彼の視界に入つていたのは治癒術師の紋章が描かれたタペストリーだつた。その布地を押し出して曲面を作り出す膨らみもまた、相当な大きさだつた。

(あ……いや、すまん)

考え事をしてるうちに正面を凝視していたらしい。ローンハイムは柄にもなく顔を赤らめながら応えた。

(しかし、あれじゃな。ここまで心話が容易いのも意外じゃつたぞ)

ばつが悪くなつたのか、ローンハイムは早口にそう言つて話題を切り替える。

(え？ ああ、確かにそうですね)

指摘されて始めて気づいたことだが、確かに練度を考えれ

ば師の言う通りだ。しかし彼女自身は巨大化している時に様々な感覚が鋭くなっていることを日々感じていたので、心話もその一つと思えば余り不自然には感じない。

(靈的に何か有るのじやろうな。今なら操靈術も容易いやも知れぬぞ)

今の鋭敏な感覚と結びつけるエリザの推察に、ローンハイムも領きながら返す。その一方で、彼は契約だけでも修めていた幸運に思い至っていた。この弟子には赴任前に操靈術の基礎まで修めさせる予定だったが、前任の癒し手が倒れたことで半年も繰り上げられた経緯がある。それでもリードアルドへの道中に付き添って初歩の『万霊との契約』だけは執り行つたが、御霊に語りかける言霊の組み立て方は殆ど教えていない。

(それで、結局あれから言霊を用いたことは?)

(え、えつと……)

突然の質問にエリザは口ごもる。彼女に使える操靈術といえば、生命の力を魔力に変えることで大きな力を得る『術拡張』だけで、これも出来る限り術者の付き添いなしには使うなど厳命されていた。言われながらも彼女はこの一年で瀕死の患者を前に何度も禁を破つたが、それでも殆どの場合において術は患者を救うに至らず、幾つもの命が自分の腕の中で沈んでいった。その時の記憶、何とも言えない虚無感と罪悪感がよみがえり彼女の胸を締め……。

(まあ、よい)

師匠の優しい声が唐突に響き、エリザは閉じていた目をはつと開けて師匠を見やる。その視界が薄く曇っていることに今更ながら彼女は気づいた。

(この一年は辛かったじやろう。癒し手は皆通る道じやが、良く耐えたの)

(……)

暖かい言葉が心の奥に染み入り、代わりに何故か涙が込み上げてくる。涙が溢れそうになったので慌ててエリザは右手で両の目を拭い、ぐすつと音を立てて鼻を吸る。それから震える深呼吸を何度か繰り返すことでどうにか落ち着いてきたので、彼女は師匠に視線を投じて礼を言う。

(有り難うございます……あ、あの、ごめんなさい)

鼻を吸った時の音のせいだろうか、師匠は頭を垂れて耳を塞いでいた。だが、それでも彼は反応して頷く。

(で、念のため聞くのじやが……『術拡張』以外は使つておらぬな?)

(えっ?)

聞かれたエリザは唐突に、反魂を試みたことを思い出す。反魂の術は『奇跡にして禁忌』、使うことなどありえないと師匠からは説明されていた。それ以上の知識が無い中での試行であり、『下手打つと呼ばれる』とか『魂に罪を刻む』といった司祭の言動も併せて考えると非常に危険な行動だったの



だろう。

(何かやったのかの? まあ良いから、言うてみい)

弟子の戸惑いを訝しんだローンハイムは、苛立ちながらもそれを出来るだけ隠しつつゆつくりと問う。そんな師の口調に、迷っていたエリザも視線を師に戻し、そして数瞬の逡巡の末に思い切つて告白した。

(反魂を、使いました)

絞り出すようにそう言つたとき、小さな師匠の体全体に力が入るのが彼女にも解つた。恐らく先に渡されていた報告にも書かれてなかつたのだろう、押し黙つたまま僅かに俯く師匠。その中には怒りとも困惑とも取れる感情が渦巻いている。暫しの気不味い沈黙を経て、ローンハイムはゆつくりした口調で尋ねた。

(この大きさになつてからか?)

(あ、はい。一度だけ試みまして……)

問われるのを待っていたかのように、エリザは右手の手振りを変えつつ事の経緯を早口で説明する。知識の無い中で試みたこと、司祭の亡霊に捕まりそうになつたこと、それを振り払つたために術の行使には至つていないこと……。心話だから音量こそ普通なのだが、話す勢いと身振り手振りが起こす揺れに翻弄されたローンハイムは時折相づちを打つことくらいしかできない。

(というわけなんです。ですの……)

一通り説明が終わつても更に言葉を継ごうとするエリザに、ローンハイムは手を上げて素早く割り入る。

「解つた、解つたから落ち着け!」

(え……あつ、はい)

やつと我に帰つたのか、エリザは短い返事で素直に応じた。凝視していた視線を外し、深呼吸で息を整え、動かしていた右手を再び左掌に沿えなおす。それでやつと落ち着いたローンハイムも腰を降ろし、深い溜息と共に首を垂れる。

(このまま喋らせておくと酔つてしまいそうじゃ)

軽くふらついて居る様子を見せながらも、師の愚痴る声は妙に軽い。

(ご、ごめんなさい)

エリザは相変わらず申し訳無さそうに謝るが、ローンハイムは特に気にする様子もなく「まあよい」と返す。山のような巨躯を声だけで制御できるという事実が、彼にとつては少なからず奇妙かつ愉快だつたからである。

多少休んでからローンハイムは自分を心配そうに見下ろしている弟子を見上げ、諭すようなゆつくりとした口調で明を始める。

(蘇生ではなく反魂がそう呼ばれる理由について、話しておかねばならんの)

少し間を置いてエリザは注意深く頷く。それを見て師は説明を始める。

魂が繋がった状態での蘇生は単に高度な治癒術だが、更に魂を呼び戻す反魂は『奇跡にして禁忌』と扱われる。その理由は大きく三つ。まず高度な技術と膨大な魔力が必要であり、失敗すると術者自身の魂が黄泉に落ちるため。『下手打つと呼ばれる』に相当する術自身の問題だ。次に死地から魂を呼び戻す反魂は、厳正であるべき生死の境を曖昧にするため。これは『魂に罪を刻む』に相当する理（ことわり）の問題である。

そして最後に、人の欲望は常に現実の一步先にあり、反魂が可能という事実は更なる欲を招くため。現に文献から反魂の詳細が発見されただけで治世は何度も乱れており、現代においてさえ文献から反魂の事実を葬り、通常の蘇生に書き換えるための司書が存在する。

そこまで話して、ローンハイムは上を仰ぎ見る。彼を見下ろすエリザの眼差しは真剣そのもので、話に夢中で忘れていたのか今になって続けざまに何度も瞬きする。

（そんな理由があつたんですね。私、全然知りませんでした）

エリザは感慨深げな声を漏らす。自分の行使しようとした術が巡り巡って国を乱すなどは露ほどもも思っていないなかったからだ。

（うむ。奇跡が奇跡でなくなるというのは、本当に恐ろしいことなのじゃ。特に生死の境は厳正でなくてはならぬ）

ローンハイムは再びゆっくりとした口調で言う。

（主が一介の治癒術師で居続けるためにも、この一線は越えてはならぬぞ。よいな？）

更に彼は、反魂を行使した事実を漏らさないこと、治癒術による蘇生を施したらその度に反魂と勘違いされないよう説明が必要であることを注意する。念入りに釘を刺され、エリザは頷くしかなかった。

それからローンハイムはエリザに御霊を呼ぶ言霊の基礎を教え、それを用いた簡単な術を幾つか行使させる。

風を起こしたり、炎や水を出したり、土を思いの形に固めて摘まみ上げてみたり……基本的とはいえそれらの術が余りにもあつさりと成功してしまふ様子に、ローンハイムもやや驚いていた。人にして御霊の性質を備えた者たちを『妖精』になぞらえることもあつたが、今の彼女はそれに近いのかもしれない。ただ、それを口に出すのは憚られたので、弟子には別の表現で伝える。

(やはり大ききのぶん、感性和魔力に満ちておるのじやろうな)

(ええ。そう、ですね……)

エリザもまた、これだけ自然に術が使えることに違和感を感じているようだった。その困惑を感じ取った師匠は、努めて明るい声で諭す。

(なあに。生き死にさえ絡まねば、奇跡じやのうて『高度な術』で片がつくわい)

(え、ええ……)

(まあ、余り気にするな……それより、言霊とその組み方を学ばねばならぬじやろう)

諭す途中でローンハイムは何を思い出したのか、早口で言葉継ぐと肩から下げた鞆をまさぐりはじめる。ややあつて

彼が取り出したのは、羊皮紙の束だった。

(渡し忘れるところじやつたわい。こんなこともあろうかと、帳面に言霊を纏めておいたのじやよ)

書を掲げ自信満々に言う老師だが、直ぐに彼は五寸四方の紙束が弟子にどう見えるかに気づいた。今のエリザにとってその紙束は白い点でしかなく、いくら感覚が鋭くなつていと言つても書かれている文字を読むのは不可能だ。

(あの……後で、拝見しますね)

ぎこちない笑みを浮かべながら彼女はそう答えた。

操霊の基本はほぼ行使し終わり、日も傾き掛けている。帰路を考えればそろそろ頃合いと言えそうだった。エリザは元の大きさに戻り、師匠を掌に乗せたままバラムの街まで歩いて帰る。

街では夕の市が開かれていたが、巨大娘の帰還に伴って何人かは早々と荷を畳んで家の中に引っ込んでしまった。まだ市を開いている者も皆一様に怯えた目で見上げている。街に近づきながらでもその様子は解つたが、エリザはあえて彼らを見ずに歩調を保つたまま街壁の側まで寄り、それから少しだけ寂しそうな笑顔と共に言う。

「あの。街には入りませんが、安心してくださいね」

その言葉を意外に思ったのか、彼女を見上げる幾つかの顔に疑問符が混じる。それを察したエリザは一呼吸おいてから説明を始める。

「だって、ほら。埃だって立つちやいますし、市の間は人が多くて色々危険ですし……」

科白の途中で彼女は軽く目を伏せ、だがすぐに視線を戻して言い添える。

「それに、やっぱり皆さん怖いと思いますから」

弱々しく言う巨大少女に何と言つて返せばよいのか。残つていた住民にも答えは出せず、ただ俯き加減のまま仕事に戻ることにできない。

どちらにとつても話を切り出し難い雰囲気。それを破つたのは、街壁に出る扉を開けたたまたましい音だった。駆けて来た数人が親しい者だったからか、エリザの表情がぱつと明るくなる。

「あ、こんにちは」

「おう」

しやがんで挨拶する声も、さつきと異なり明るい。変わり身の早さに苦笑いしながらも、グランゼルは手を上げて応えそして尋ねる。

「術の練習はどうだった？」

「え？ ええ、まあ」

エリザはやや曖昧に答え、そして左掌を街壁の側までそつと下ろす。掌に乗っていた老人は一尺たらずの溝をやや危なげな歩調で渡ると、集まっている面々に対して簡単に説明する。

「まあ、上々じゃったと言つてよかろう。一介の治癒術師として、かなりの活躍を期待出来そうじゃの」

『一介の治癒術師として』という部分に力が籠もっているのは、一人の治癒術師という自分を越えないことを含めてのことだろう。そう思つてエリザはゆつくりと頷くものの、彼女が見渡す限りでは師の意図を読み取った者は他にいないようだ。となれば、やはり自らの言動で示すしかない。

「じゃあ、そろそろ帰りましょうか」

しばしの沈黙の後、エリザはそう言つて掌をグランゼルの前に差し出し、彼に乗るよう促す。グランゼルがやや重い足取りで一尺ほどの段差を上つたのを見てから彼女はゆつくりと立ち上がり、

「どうも、お世話になりました」

お辞儀と共に礼を言う。頭を上げてから改めて街の中を見てみると、帽子のつばをちよつと上げて会釈している市民と目が合う。なんだか嬉しくなったエリザは微笑み、そして想いを一気に吐いた。

「また来ますね。今度は……今度は皆さんのお役に立つて見せますから」

「もう立つてるよっ」

街壁のフレイアからさかさず突つ込みが入る。巨大な治癒術師の視線が自分の方に下りるのを待つてから、さらにもう一言。

「だけどこつちも、今度は辛気くさくない迎え方をしたいね。宿六も少しは反省しているようだし」

隣にいるブラドウを拳でつつくフレイアに、当のブラドウも

「おい、おまえ……」と困惑気味だ。

「えっ……そうだったんですか？」

いきなり漏れた事実を驚きを隠せないエリザ。だが彼女は直ぐに楽しそうな笑みを浮かべ、付け加える。

「でも、とてもお似合いの夫婦だと思えますよ」

「どこがだっ」

「何でだよっ」

即座に二人から反駁の声が挙がる。

しかし、期せずして声が重なったことに周囲から笑いが漏れ、二人は洪面を浮かべながら互いの顔を一瞥するしかなかった。

山を越えてリーデアルドに帰るエリザの足取りは、昨日と違ってかわって軽かった。やりたいと思っていたことがやっと出来たし、何より今日は話し相手がいる。

「本当に、今日はありがとうございました」

掌で包んでいるグランゼルに礼を言うのもこれで何度目だろうか。だが彼女にとつて、道中の孤独を癒してくれる同行者の存在はそれだけで嬉しいものだ。しかし当のグランゼは掌の中で身を丸めたまま、曖昧な笑みを返すのが精一杯だった。日没までに帰ることを考えれば休むわけにも行か

ず、ただひたすら揺れに耐えるしかない。

「ごめんさい。もう少し早めに切り上げるか、歩く練習を積んでおけば良かったんですけど……」

謝ってくれてはいるし、断続的に術を掛けることで酔いを緩和してくれてもいるそうなのだが、それでも気分の悪さを断ち切れるわけではないのである程度は我慢するしかない。

そんなわけで耐えていたグランゼルだったが、不意に「あつ」という声が響いたかと思うといきなり体が前方向に持つて行かれる。どうやらエリザが急に立ち止まったらしい。姿勢を立て直したグランゼルが重い身を起こしてみると、彼の目の前には困惑のあまり泣き出しそうなエリザの顔が対峙していた。

「あの。元に戻るかどうか、師匠に聞くのを忘れてました……」

その声は弱々しく、涙声に近い。彼女は後ろに向き直り、何とも言い出しにくそうに掌上のグランゼルと既に遠いバラムの町を交互に見ているが、何を言いたいかはその仕草から明らかだ。グランゼルは溜息を一つつき、ゆっくりとした口調で諭す。

「戻る必要はない。そのことなら聞いているからな」

「ほっ、本当ですか？」

グランゼルの言葉を聞いた途端に、エリザの視線が彼に収束する。この大きな視線にも幾らか慣れているグランゼル

だったが、不意に間近からやられるとやはり圧倒されて直ぐに反応できない。その間を誤魔化すために彼は一つ咳を払ってから話し始める。

「話せば長くなるから、後で話そう。それで良いな？」

グランゼルの提案に対し、エリザは「はい」と素直に頷いて応じる。しかし彼女は、柔和な表情もそのままにこう付け加える。

「じゃあ、少し急ぎますね」

「え？」

その突飛な提案をグランゼルが飲み込むより早く、エリザは彼を乗せた掌を丸めて軽く抱き寄せる。そして彼女は今までより速い歩調で歩き始めた。

さつきにも増して激しい揺れに耐えるため、グランゼルは腹に力を入れ身を強張らせる。さらに彼は目を固く閉じ、老魔術師から聞いた話を思い起こしつつ忌まわしい時間が終わるのを待つ。

偶発的な術の失敗が囁んでいるから元に戻るの  
は難しいこと。

陽光以外にも普通の炎の力を用いても大きくなれ  
る可能性があること。

ただし、実際に確かめるまでは伏せておくのが望  
ましいということ。

それから。

(次は代理を立てよう。揺れに酔わない者を……)  
彼は何度も強く念じていた。

## 第4章 「力演」

1

巨大な治癒術師に関する話は、およそ十日でラフアイセツト国内の主な町に届いた。それを以て正式にリーダーアルド領から出ることを許されたエリザは、目付役に抜擢されたイーゼムと供に再び領境の山を越えた。

目的地は王都ラフアイセツト。東西の街道をテルウオムまで進み、そこから南北の街道を北上すれば着く算段である。王都までは四十里程度、三十倍の大きさになったエリザが普通に歩けば一日掛からない距離だ。しかし知らせを受けているとはいっても初めて見る巨大な治癒術師に戸惑いや恐怖を感じる者は多く、彼ら住民の不安を丹念に解きほぐすため街ひとつ進むのに概ね一日を費やしていた。

住民の不安を解いたのは、エリザの癒し手としての力と威圧を感じさせない丁寧な態度、そして住民と彼女の接点となるための交渉役や時には人質の役さえ担ったイーゼムの存在もある。それだけの条件が有ったからこそ、住民も最後

には心を開いたのである。

ゆつたりした行程と引き換えに信頼と自信を得る、そんな旅も六日目に入った。この日は朝市の後にテルウオムを出て、昼過ぎには王都ラフアイセツトへ着く予定である。

治癒術師の一日は多忙なものだが、エリザの場合はその巨躯のために早朝の診療から朝市が終わるまで街に入れず、多少ながら手持ち無沙汰になる。そういうとき彼女は街壁の外をぐるっと見て回るのが常だった。

朝から元気に御飯の準備を手伝っている子供や何やら怪しげな体操をしている老人、懲りずに喧嘩している夫婦など、街を回っていると壁越しに様々な人々の風景が目に入ってくる。概ねそれらは平穏なもので、幸いにも急な治療を要する者は居ない。

そうこうしているうちに街を一周し、エリザは門まで戻ってきた。門の上は見張り塔になっているが屋上にいる兵はいかにも暇そうで、人目も憚らず欠伸などしている。そんな退屈そうな兵士に彼女は目を合わせて微笑み掛け、「おはようございます」と挨拶する。そして、兵士が欠伸を止めて挨拶を返す隙に彼女はその兵士を背後からそつと摘まんで肩の高さまで持ち上げた。

「お疲れさま。交替しましょうか？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、エリザは目の前の兵士に話しかける。だが兵士は突然のことに慌てるばかりで、腕を小

刻みに振りながら言葉にならない声を発するばかり。

ちよつと悪戯が過ぎたらしい。彼女は兵士を左掌の上に降ろし、掌を軽く丸めて彼をそつと包む。

「ごめんなさい、驚かせてしまつて。大丈夫ですか？」

その優しい声と、地面に降ろされたことでようやく落ち着いたのか、兵士は自分のまわり上下左右を見渡してから頷いてみせる。

「いや、ああ……本当に驚いたよ。うん」

感慨深げな声色から察する限りは、もう大丈夫のようだ。心配そうに伺つていたエリザの表情にも安堵の笑みが戻る。彼女は掌を開いて右の人差指で彼の背中をさすりながら、もう一度謝る。

「本当にごめんなさいね。退屈そうだから、楽しんで戴けると思つたんですけど……」

彼女の郷里ではいつもの悪戯に過ぎないのだが、この街テルウオムには昨日寄つたばかりであり、慣れない相手には酷だつたようだ。

エリザは改めてこの兵士が見張つていゝであろう街の外を見渡してみる。畑や遊牧地の向こうに森や山が広がる光景は平穩な絵に描いたようで、みるべきものといえば点にする小屋の様子くらいだろうか。

「確かに、見てると眠くなりそうな景色ですよね」

「だな。それに……あんたが居たら誰も攻めてなんか来

ねえし」

兵士は冗談交じりに返すが、実際にその通りだろう。なにせ見張り塔の三倍もある巨大な治癒術師が守つていゝのだから、まともな人間なら攻め込もうとは考えないはずだ。

もつとも、当の本人にとつては変に名譽な話で、曖昧な照れ笑いを浮かべるしかないのだが……。

「だから、見るもんつて言うとう向こうの狼煙くらいしか無いんだわ」

兵士の言葉に沿つて、エリザは彼の指さす先をとりあえず凝視してみる。変化などありようもないと思つていたが、指された街のやや左にある森から黄色い煙がかすかに立ちのぼつていゝのが見えた。

「えつと……あれ？」

意外なものを見て、エリザの声も上ずる。間近で聞いた兵士は身を強ばらせるが、構わずにエリザは兵士の乗る左掌を視線の高さまで上げ、右手の人差指で煙の方向を指さしながら尋ねる。

「あの煙の色つて、確か助けを求めゝる色ですよ？」

「ああ……確かにそうだ」

小さく答える兵士。見張り塔からは見えなかつたが、今の高さであればはつきりと見ることができゝる。この平和な国では珍しい、黄色のかかつた煙だ。

「なんか、もつと向こうからきてゝるつばいな」



「そうなんですか？ とすれば……」

続きを言うべきか迷ったため、エリザの科白が途切れる。だが、やはり緊急時だけに出来るだけのことはしておきたいと思ひ直し、彼女は兵士にだけ聞こえるように心話で言葉を継ぐ。

(どうしましょう。更に大きくなることも出来ませぬ……)

兵士は何も言わずに掌を彼女の方に向けて制し、そして煙を睨みながら紙束に何か書きはじめる。どうやら狼煙の中身を解読しているようだ。いったん書き終えてからも更に狼煙を見て確認し、それが終わってからようやくエリザを見上げた。

「よし、じゃあちよつと降ろしてくれないか」

「あ、はい」

エリザは慎重にしゃがみ、左掌を街壁の上に降ろす。兵士は即座に駆け出すが、二三歩走ったところで振り返って彼女を見上げ、見張り塔を指さして素早く言う。

「あと、代わりの奴を頼む」

「はあ」

エリザの要領を得ない返事にも構うことなく兵士は走り去ってしまふ。仕方ないのでエリザは辺りを見渡し、ちょうど足元にいた門番をそつと摘まみ上げる。

「えっと、そういうわけでして……見張りをお願いしたいのですが」

丁寧な口調とは裏腹の強引な引き込み、そして何より彼女の大きさに押され、番兵はただ頷くしかなかった。

狼煙は東の国境近くの街から櫓や街を継いで来ており、『王都より至急治療師の派遣を請う』という内容だった。理由の無い派遣要請も奇妙だが、それより王都ラファイセットに近いこの町から国境までは二十里ほどもある。集団で行けば丸二日掛かるところまで、それも援軍や工兵ではなく治療師を指定して助けを請うのは疑問を禁じ得ない。

再び町壁に戻ってきた兵士は、疑問と推測も含めてエリザに説明する。座して聞く彼女も、急な派遣が決まりそうとあつて表情は真剣だ。

「一応王都には伝えるが、もしかしたらあんたを呼んでいゝるんじゃないかと思うんだ」

「そうですね、どちらにせよ私は行きます」

兵士の提案にエリザは即答する。幾つか怪しい点はあるものの、怪我人がいるなら行く他にない。畏の有無は些細な問題だが、彼女にとつては別の心配事がある。エリザは軽く目を伏せ、細々とした声で付け加える。

「ただ、余り急いで行くと、町の人を怯えさせないかと……気になるのはそつちなんです」

王都ラファイセットからの書簡は国中の町々に届いているはずだが、聞くと見るでは大違いという言葉通り、ここに至る町々でも住民の動揺を治めるのには多少の時間を要した。

宥める暇もなしに町々を渡り歩けば、またバラムのような事が起こりはしないかと不安になってしまふのだ。

「じゃあ、狼煙で先に伝えよう。二十里なら、そうだな。一刻あれば届くだろう」

「はあ……」

とつさに思いついた妙案を披露する兵士だが、彼の自信に満ちた口調とは裏腹にエリザの応える声色は冴えない。不安を静める効果も不明であり、二十里を一刻というのは彼女の歩く速さと大して変わらないからだ。とはいえ狼煙より早い方法があるわけでもなく、住民をなだめながら町々を進むことを考えれば助けがあるに越したことはない。折角の好意だから甘えるべきだと思ひ直し、エリザはようやく顔をあげて応える。

「わかりました。じゃあ、済みませんがなるべく早くお願いします」

歯切れの悪さや開いた間は隠しようもないが、兵士は訝しげに一拍置きつつも強く頷いた。

「ああ。まあ、直ぐに掛かるう。許可を得るまで待機してください」

そう言つて兵士は、彼女の返事を待たずに疾く退去していった。代わつて今度は、簡素な革鎧に身を包んだ青年、イーゼムが塔から出てくる。

「あー、寝坊しててすまん」

イーゼムはエリザと目を合わせるなり一息に言つて軽く頭を下げる。そしてすぐに頭を上げ、

「さつき聞いた感じでは怪しそうなんだが、俺も行った方が良くないか？」

こう尋ねる。

「え、ええ」

比較的ゆったりした口調や動作とは裏腹に彼の言う内容は余りにも目まぐるしく、エリザは取り敢えず曖昧な答えを返すのがやっとだ。

数瞬の間を置いて、彼女はようやくその意味を理解した。「つて、ちよつと待つて下さいよ。もしかして、付いて来るんですか？」

「ああ。だからさつきそう言つたらう」

気色ばみ思わず声を荒だてるエリザに対して、イーゼムの態度は平然としたものだ。エリザは座ったまま首をずいっと前に出すが、縦横三間以上の顔を目前にしても彼に怯む様子は無い。

「確かに、来て貰えれば助かると思いますが。でも、戦もあろうという話なんです」

そこで彼女は一端言葉を区切つて視線を落とす。それからやや間を置いてイーゼムに真つすぐ向き直り、手振りを交えつつ科白を継ぐ。

「そうなつたらあなたを弓矢から守る必要がありますし、何

より私自身があなたを傷つけるかもしれない……それが怖いんですよ」

「そうだな」

イーゼムは僅かに苦笑を滲ませつつも、その主張をあつさり認める。視界一杯の心配そうな表情を目の前にして正面から反論など出来ようはずもない。しかしそれでも彼は尤もらしく腕組みし、頷きながら軽口を叩く。

「まあ、暴れるのに支障があるなら仕方ないだろう」

「あばれませんか」

音節を区切り、言い含めるようにエリザは反駁する。だが彼女の表情は笑っており、それに釣られてかイーゼムも惚け通せずに笑みを浮かべてしまった。

元からエリザは気持ちが出やすい性質で、今もそれは変わらない。そればかりか、大きさの分だけ表情がより豊かになったときえ言える。ちよつとした言葉でもころころと表情を変えるのがイーゼムにとって楽しくもあり、また違うのは大きさだけだと改めて確認できるのだ。

結局、イーゼムは謁見が遅れることを王都ラファイセットまで伝えることになり、エリザは狼煙の伝達を待つてから独りで東に歩を進めた。

謹慎が解けて此処に来るまではイーゼムを肩に乗せて歩いていたので、独りでこうやって道を歩くのは久しぶりだ。肩に気を使う必要が無いぶん気楽ではあるが、やはり軽口

を叩く相棒が側に居ないと寂しいし退屈である。掌で包めるほど小さな体躯でも存在は大きい、彼女は改めてそう思っていた。

（やつぱり、来て貰えば良かったかな……）

危険だからと言って同行を断つたのは確かだが、頼りになるのも事実だし、内心では彼が妙案を出してくれないかと期待もしていた。それを科白に滲ませなかったことが悔やまれる。

（もしかして、本当は一緒に居たくないのかなあ）

そういえば、グランゼルからも『すまないが、今後の同行は難しい』と言われてしまった。彼はかなり揺れに弱かったようで、バラムから帰った次の日は昼まで寝込んでいた上、その後数日間は何調がすぐれなかったのだが……。揺れに全然酔わないという理由もあつて代理になったイーゼムも、疲れが溜まっているのかもしれない。今日寝坊したのも、同行に消極的だったのも、恐らく疲労のせいだろう。そう考えると少し気が軽くなった。今は悩まないようにして、本意は後で聞けばよい。思い直して歩調を戻し、数歩進んだ、その時だった。

「わーっ！」

下からの小さな悲鳴を聞き、エリザははたと足を止める。足元を見ても人はいない。だがスカートを後ろに寄せてみると背に荷物を載せた馬が暴れており、行商人らしき男が

鞍にしがみついていた。

「あ……だ、大丈夫ですか？」

慌てつつもエリザは一步引いてしやがみ、子猫より小さな馬の首と背をそつと撫でる。馬にとつて上から撫でられることなど初めてのはずだが意外にも直ぐに落ち着きを取り戻し、鞍上の商人も身を起こして馬を彼女の方に向ける。身長十五丈の相手を間近から見上げると改めてその大きさに圧倒されるが、前の街で見ているだけに恐怖心はそれほどでもない。一呼吸置いて商人は話しかける。

「いやあ、急に速く歩きだすから驚いたよ」

「ごめんなさい、考え事をしていました」

柔らかい調子で責める商人に対し、エリザは大きな身を縮こまらせて頭を下げる。そういえば、イーゼムにも足元を何度か注意されていたような気がする。注意された時は肩に気を使うから足元まで気が回らないと思っていたのだが、実際は彼が足元に気を配ってくれていたから今まで無事に進めたのだろう。

じゃあ、ここまでは大丈夫だったのだろうか。彼女は慌てて振り返り、通ってきた道を目で追う。街からの道を二往復分丹念に追うが、幸運にも人影らしきものや忌わしい血の染みは見えない。あの時のような惨事は起きていないようだ。

「どうした？」

「あ、いえ、今までは大丈夫なのかと思ひまして……」

応、大丈夫みたいです」

何が大丈夫なんだ。男にしてみれば呑気にも安堵の息など漏らす巨人の娘に言つてやりたいこともあつたが、突つ込む気にもなれないので苦笑を漏らすに留めた。しかし、彼はすぐに何も言わなかつたことを後悔するはめになる。

「じゃあ、お詫びと言つては何なんですけど、次の町まで連れて行つてあげますね」

嬉しそうに言うが早いか、彼女は身を乗り出して両手の指を馬の腹の下に入れ、包むように馬ごと持ち上げたのだ。この扱いには馬も驚いたようで、鼻を奮わせ四肢と首を忙しくなく動かす。そんな馬の拗ねる様子もエリザにとつては可愛なものだつたが、巨人と馬の双方から揺さぶりを食らつた商人にはたまつたものではない。鞍にしがみつき、声にならない悲鳴をあげるのが精一杯だつた。

今度は足元にも十分な気を配りながら、人馬を両手で包んだエリザは更に東へと進む。大きくなる前に地図を貰えなかつたため『街道沿いに六里進めば最初の街がある』という情報しか得ていなかったが、ほぼ一本道の上に行向の商人が知っているの迷うことはない。峠を幾つか越えたところで視界は開け、平野と川そして川岸の街を見渡すことができた。

「この看板によれば、町まで一里らしいぞ」

商人が振り返つて言う。エリザはその言葉を確かめようと周

困を見回してみるが、草原にポツンと置かれたそれは爪楊枝に木片を付けた程度のものでしかない。屈んでまで文字を読む必要はないと判断した彼女は、

「そう、ですね。多分そのくらいだと思います」

と簡単に応えて街に視線を移す。凝視したところで街壁に遮られた街の中は家の屋根や見張り塔くらいしか見えないが、その見張り塔を今まさに兵士が大急ぎで駆け降りている。

(あーあ、そんなに慌てちゃって……)

それだけ自分のことを恐れているのかと思うと少し気が滅入るが、とにかく早く対処しなければならない。エリザはまず商人と馬を足元に降ろし、耳を塞ぐように言い含める。そして彼女は息を大きく吸い込み、両手を口に当てて思いきり声を出す。

「皆さーん、こんにちはー」

そして彼女は明るい表情で街に大きく手を振って見せる。その間に自分の声が木霊となつて帰ってくるのを聞き、きつと声は街に届いているだろうと判断した。とすれば次に何を伝えるか……：数瞬迷つた後に、彼女は再び息を吸う。

「治療師の、エリザといいます。危害は加えませんが、どうか落ち着いてくださいー」

そこで息継ぎ。大声に加えて間延びした言い方のため、すぐに息切れと目眩に襲われてしまうのだ。

数度の呼吸で落ち着いてから改めて街を凝視してみると、

別の見張り塔に立った男がこつちに向かって大きく手を振っている。友好的なその様子に、エリザの顔も思わずほころぶ。これならすんなりと街を通してくれそうだ、そう判断した彼女が街まで歩こうと足元の道に視線を転じてみると、道から外れたところで、またもや馬が暴れていた。

「あら。あつ、ごめんなさい……」

当たり前だが、耳を塞ぐなんて芸当が馬に出来るはずもない。駱駝という砂漠の動物なら耳を塞げるという話を不意に思い出し、不謹慎にもエリザは笑ってしまった。

一里の距離は彼女にとって一町ばかりでしかなく、直ぐに彼女は街壁前までたどり着く。はじめは賑わっているかに見えた街だが、大きな通りは人の流れで埋まつており、小道では人が次々に家へと入っている。

恐らく、避難させようとしたが間に合わなかったのだろう。混乱こそないものの、やはりこういう対応を目の当たりにすると悲しくもあり、また原因が自分だと思つと申し訳なくもある。だがそれでも彼女は僅かに眉を潜めるにとどめ、門の前に座つて馬を下ろすと門上の塔に居る番人に微笑み掛ける。

「初めまして、こんにちは」

「あ、ああ」

なんとも気の抜けた生返しか返せず、門番は彼女を見上げたまま固まつていた。しゃがんでもなお彼女の顔は塔より

も高く、番兵には覆い被さるように見えるのだから、無理のない反応ではある。しかし、砦や城のような巨躯が一つの意志をもつて動いている事実には気圧されはするものの、長い黒髪と治癒術師の装いは清楚な雰囲気さえ持ち、真つすぐ向けられた眼差しは見守るように暖かい。大きいけど優しそうな人だと彼は徐々に思い始めていた。

一通り自分の姿を見渡した門番が肩と視線を下ろす頃を見計らい、エリザは尋ねる。

「狼煙は、届いてますね？」

「ん？ ああ……」

再び見上げ、ややどもつた言葉を返しながら彼はその内容を思い出していた。

「えーと、『要請に対し、大きな治癒術師を派遣する』と……大きいってな、そういうことか！」

「ええ。どういふことだと思っていたんですか？」  
門番の驚く声にも動じず、彼女は笑いながら問い返す。

狼煙を受けた彼等は、『大きな治癒術師』という内容を『偉大な治癒術師』か『治癒術師の大群』のことだろうと思っていた。まさかこんな、文字通りに巨大な治癒術師が来るなんて……。

「そういうわけで、私が東の国境まで行くことになったんです」

「一人ですか？」

「え、ええ……」

彼女は不意に視線を落とし、幾らか沈んだ口調で答える。しかしすぐに頭を振って彼に向き直り、敢えて前よりも明るい声で提案する。

「それより。せつかく寄ったんですから、町の人を治療したいんですが」

「えっ？」

門番は思わず聞き返す。治癒術師には当然の提案も、厳戒令まで出している側には突飛な話である。だが目の前の巨人にはそんな事情などお構いなしだ。

「魔力には余裕がありますから。この大きさですしね」  
いつもの優しい微笑みとともに、彼女は付け加える。

その後も、エリザは東へと歩を進める。街の周囲を一巡して怪我人が居ないか呼びかければ隣町に鎮庄と誤解されたら逆に治療を願ひ出る者が後を立たず「明日まで待てるなら待つて下さい」と説得してどうにか切り上げたり……。そんな小さなごたごたを重ねつつも、一刻余りでどうにか目的の街に辿り着いた。

街を出て一刻余、たどり着いた街アレイオスの壁に立つのは、何とも派手ないで立ちの騎士だった。鎧の上に朱色のサーコート（戦用の外套）を羽織り、高さ一尺近い黄色の羽飾りを兜に付けたその男は、立ち止まったエリザに対して深々と一礼する。

「ようこそお嬢さん、我が街へ」

「え？ ……あ、はい。こんにちは」

どうにか返答して頭を下げるが、エリザは騎士の態度に戸惑いを隠せなかった。今まで通った町で最初に応対してくれた人達は、姿勢や言葉の端々に不安とか緊張が見え隠れしていた。その態度も自分の巨軀からすれば仕方ないと受け止めていたし、彼等の立場を尊重しつつ不安を解くのは自分の責務だと思っていた。

翻つて今、なぜこの騎士はこんなに堂々としているのだろうか。

彼女が考え事をしているにも関わらず——というより、話し出さないのをいいことに——騎士は一方的に名乗りを上げる。

「我が名はレイドヴィック・ロイ・エンスタール・アレイオス。偉大なる父レオワードと母ヴィエネトリアの間に生まれ、以後三十年に渡つて……」

長い名前だけで聞く気が失せてしまうが、更に彼は自分の親

や先祖にわたる血筋に関してあれやこれやとまくし立てる。聞き流すのも面倒になったエリザはやがて身を起すが、それでも騎士の男は話を止める気配を見せない。遠くから眺める彼女にとつてその様子は滑稽で、仰々しい手振りや小ささもあいまって玩具の人形を思い起こさせる。

とりあえずこの男を放置し、自分の考えを先に纏めることとした。テルウオムの兵士や行商人の話によれば、ここが狼煙を出した街であることは間違い無いはずだ。しかし見渡した限りでは、人通りこそ少ないものの攻め込まれた形跡は見当たらない。

とすると、やはり狂言なのだろうか。

エリザが疑いの目を向けると、騎士は何やら憤っているようだった。どうやら話を聞いていなかったことを咎めているらしいが、激しい口調といつてもこの小ささだ。既に玩具を想起してしまった彼女にとって威圧感など微塵もない。

（狂言だとしたら、そっちの方が余程腹の立つことなのに）そんな言葉を思い浮かべつつも口には出さず、代わりに彼女はしゃがんで身を屈め、間近から目前の騎士を見据える。

効果はできめんだった。家の間口ほどある顔に上から迫られ、しかも不機嫌そうな表情で睨まれては、饒舌な騎士といえども話を途切れさせざるをえない。その隙に、エリザは素早く口を挟む。

「すみません。で、助けの狼煙を出したのはこの街ですね？」  
「あ、ああ」

手加減なしの音量に打たれ、騎士には力無く答えるのがやつとだ。何度か問題を起こしてきた大音量や視線の重さも、今回ばかりは良い方に作用している。

「それにしても、特に助けが要るようには見えないのですが……」

さつきより抑えた声でそこまで言つて、エリザは台詞を止める。下手に理由を問えば、また聞くのも面倒な演説を食らうと思つたからだ。

「それより、まず治療をしましょう。怪我人はあちらの治療院ですね？」

代わりに彼女は、街の中心部を指さして問う。単純に是非を返す質問なのだが、それでも騎士は対話の主導権を奪いに掛かる。

「ああ、一応中央の治療院に居るが、貴方と呼んだのはそのためでは無い。ご存じの通り、この街はラファイセット公国の東の端に位置しておつてな。隣国まで三里ほどしか隔てて居らぬゆえ、『ラファイセットの東の砦』と呼ばれておる。それゆえに……」

もう彼の話を一々遮ることさえ面倒だ。しゃがんでいたエリザは眉間に皺を寄せつつ立ち上がる。

「上を見ないで下さいね」

一方的に言い放つてから彼女は右足を上げ、騎士の乗る街壁ごと跨ぎ越そうとする。

塔か櫓ほどもある長靴が向かつて来るのを目の当たりにし、騎士は反射的に屈んで身構える。彼の周囲がまず影になり、次いで低い風切り音と風圧が上から届き、着地の重い音が後ろから響く。更に風切り音と着地音が一回ずつあり、そして再び周囲が明るくなる。

慌てて身を起こし後ろを振り返ると、巨大な治療術師の後ろ姿がある。巨人は振り返ることすらせず、長い黒髪をなびかせながら街の中心部へと向かつていった。

治療院にいる怪我人も特に多くは無いようで、治療はすぐに終わってしまった。来院できない人は居るか？と院の治療術師に尋ねるが、そのレセティアという名の若い治療術師は呆気に取られた様子で首を横に振るばかりだ。

「じゃあ、どうして私を呼んだんでしょうか……」  
自問とも質問とも取れる呟きが、ついエリザの口から漏れる。

「あれ？ 呼ばれたんですか？」

レスティアも興味があるのか、身を乗り出して問う。エリザが首を縦に振ると、彼女は腕を組んで何やら考え始める。

「うーん、これだけの魔力ですからね……」

レスティアは腕組みしたまま、エリザの膝先で円を描くように歩き始める。同じ治療術師というだけで我事のように考



えてくれているのが、エリザにとっては少し嬉しい。

膝先でうろろするレスティアを暫く見守っていたが、不意に彼女は「あっ！」と叫んで足を止め、首を跳ね上げる。

「もしかして、戦が近いからじゃないですか？」

「えっ、戦……ですか？」

いきなりの怪情報に驚き、問い返すエリザ。それに対してレスティアは少々もどかしそうに説明を加える。曰く、この街は割と頻繁に隣国と領地の取り合いをしており、以前は二年前の収穫後だった。今が農作業の合間であることに加えて兵士たちの訓練がここ最近厳しいことから、戦が近いのではないかと不安を感じていたのだという。

「だからきつと、負傷した兵隊さんの手当をして欲しいんだと思うんですよ」

そこまで聞いて、エリザの首がかくんと落ちる。

「いや、それは違うんじゃないかと……」

手を軽く振りながら、苦笑混じりに突っ込む。

しかしながら、エリザの表情はすぐに固くなった。レスティアの出した結論はともかく、途中の分析は笑い事で済まないからだ。もし本当に戦が近いのなら、敵を蹴散らすために呼んだと考えるのが自然だろう。勿論、そんな恐ろしいことに手を貸せるわけがない。

（とすると、どうにか戦を止めさせて、それから怪我している人がいたら治療して……）

そこまで考えたところで、エリザの表情が少し緩んでしまった。それはまさに、さっきレスティアが言ったことと同じではないか。

膝の前に視線を落とすと、自分を見上げている小さな治療術師と目があう。彼女の背中をそっと撫で、エリザは言った。

「呼んだ理由がどうあれ、私もあなたと同じように思いますよ」

それを聞いて、レスティアの表情がぱっと明るくなる。エリザもまた微笑みで応じ、ゆっくりと言葉を継ぐ。

「やっぱり、癒し手ですからね」

西門に戻ると、例の騎士が門の上で腕組みして立っていた。いわゆる仁王立ちだが、威厳を出そうとすればするほど彼女の目には滑稽に映るということにまだ気付いていないようだ。

「えーと、話は聞きました」

騎士が何かしやべり出す前に、エリザは敢えて大きめの声で話しかけ、そして即座に問う。

「戦が近いから、それを止めるために私を呼んだ。それで構いませんね？」

「いや、待て。それは……」

『はい』か『いいえ』で答えてください」

弁明を遮り、強い語調で迫る。それでやっと騎士は首を縦に

振った。派手な羽飾りが上下に振れる。

エリザは長い溜息でその羽飾りをたなびかせ、なお語調を緩めずに言う。

「まあ、今回は事情が事情ですし、仕方ないと思います。でも、此処へ来るために患者さんを何人も置き去りにしているんですよ」

「う、うむ……すまなかった」

詰め寄られ頭を下げる騎士。エリザはその反応に驚いた様子で目を見開き、そして顔を軽く伏せる。

「あ、いえ。まあ、理解して頂けるのなら、構いません」

意外な反応に戸惑っているのか、口調もかなり弱々しく吃っている。それから二呼吸くらいの間をあげ、エリザは顔を上げて言った。

「戦を止められるなら、それで傷付く人が減るのなら、私も本望ですから」

エリザの真摯な眼差しを受け、騎士は僅かに上体を反らせつつもゆつくりと何度も頷いた。

アレイオスの街から国境までおよそ三里、その向こうにある隣国の街まで七里。一日で攻め入られる距離のため、元から戦の噂には敏感である。しかも今回は、巨人の介入がある前に領地を確定したいという意向まで聞こえているらしい。

緊張が解けたせいかわ、レイドヴィックの説明も以前ほど仰々しくはない。そのため特に口を挟む事なく聞いていたエ

リザだが、自分の力が疑心を生んでいるとあってその表情は沈んでいる。自分の大きさを最も疎ましく感じるのはいく時だ。

しかし、かといって逃げるわけにも行かない。彼女は目を閉じ、さらに念じる。疑心が出てしまったものは仕方が無い、今はそれを収めることを考えよう。戦の前に疑いを解く機会があるだけでも好機だから、これを無駄にしないようにしよう……。

前向きにとらえることで、どうにか気力も戻ってきた。目を開け、レイドヴィックの方に向き直って言う。

「分かりました。それなら尚更、私がなんとかしなければなりませんね」

覚悟さえ宿した目に気圧されたのか、レイドヴィックは頷くだけだった。

### 3

戦ではないため、レイドヴィックを含む数名だけを掌に乗せての出発となった。

街を出て丘をひとつ越えると平原が広がっており、街道と付近の村々を一望することが出来る。木々や作物の緑が規則的に並んでおり、平原のかなりの部分が開墾されているようだ。

「現在の国境は、あの柵になる。二年前の戦で破れ、あの場所から後退したものだ」

不意にレイドヴィックが前方の二か所を指して言う。エリザもその方向を見てみるが、国境を思わせるようなものは何も見当たらない。畑の所有者か、せいぜい村の境界を主張する程度の簡素な柵が幾つかあるだけだ。

「え、えつと。どの柵、でしょうか？」  
やや間を置いて、おずおすとたずねる。

「ん？ あー……」  
面倒そうに答えようとするレイドヴィックだが言葉での説明に窮してしまった。見るに見かねてか、兵の一人が助け舟を出す。

「街道を跨ぐ、三番目の柵です」

「う、うむ。四番目の柵から後退してしまっただ。父上の代には、更に敵側だったのだが……」

それを受け、補足にもならないことを呟くレイドヴィック。

二つの柵の間には集落がひとつあり、その横にある集落も含めて隣国に渡ってしまったのだという。

「じゃあ、この土地を巡って戦が起こっているということなんですか？」

エリザは確認のために尋ね、改めて広大な農地を見渡す。異変に気づいたのか、既に多くの人が家から出て来ており、また農作業の手を休めている者も多い。

「あ、すみません。挨拶したいと思いますので、耳を塞いで頂けますか？」

掌に視線を移し、注意を促す。さらりと言った内容は掌上の男達にとつて一見関連性が無いように思えたが、彼らはすぐにその意味を知ることとなる。

簡単な自己紹介と敵意の無い旨を知らせる挨拶が、平原に響き渡った。

国を隔てるはずの柵は間近から見ても本当に簡素な作りで、高さもエリザの爪先くらいしかない。その脇に立っている小屋が無ければ——いや、あつたところで誰も国境とは思わないだろう。

小屋の前で待ち構えていたのは、鎧の上にサーコート（戦套）を羽織った男たち。赤二人に緑四人、どうやって小屋に入っていたのだろうかという数だ。そのうちの一人、緑のサーコートに派手な紋様を縫い付けた上官らしき男が、エリザを見上げていきなり怒鳴った。

「貴様ら、一体これはどういうことだ?!」

いきなりのことにエリザも驚き、ついびくつと震えてしまう。その振動に右掌上の兵達が翻弄されるのを見て、慌てて彼女は左手を沿える。一瞥した限りでは落ちたり怪我をしたりした者は居ないようだ。

「人を乗せているんです。いきなり怒鳴らないで下さい」  
エリザは眼下の騎士を睨んで言う。その語気に押されて緑の騎士は言葉を詰まらせもごもごと言葉にならない音を吐くが、彼の怒りが収まった様子は無く、逆に顔は紅潮しているようにさえ見える。荒い呼吸を二三度おいて、彼は再び大声でまくし立てた。

「これが怒鳴らずに居れるか!　そこに居るのだろうかレイドヴィック、女の陰に隠れるとはこの卑怯者め。釈明の機会だけは与えてやる、すぐに出てこい!」  
掌に視線を落とすと、赤の騎士もまた自分を見上げていた。あごをしゃくって『降ろせ』と合図している。

エリザは領き、ゆっくりしゃがんで掌を地面まで降ろす。着地を待ちかねたかのように飛び降りたレイドヴィックは、即座に緑の騎士へと詰め寄る。

「卑怯者とは随分な言い草だな、オーヴエンドラット。貴様こそ何故ここに居るのだ?　おおかた我々が来る前に領地を掠め取ろうという魂胆なのだろう」

上から見守っていたエリザも、この成り行きには少し驚いて

いた。いきなり詰め寄ったレイドヴィックもそうだが、彼の台詞から察するに、オーヴエンドラットと呼ばれた緑の騎士は向こう側の領主かそれに近い人物らしい。

「はっ!　貴様こそ、巨人を唆して領を奪う気だろうか。この卑怯者!」

「卑怯?　傭兵頼みの貴様が言う台詞か!」  
二人の口論は更に熱を帯び、しかも内容が逸れて来ている。しまいには五十年前に得た開拓の許可まで及ぶが、そこでも両者は共にラファイセット王国から許可を得たと主張し、もはや水掛け論の様相を呈している。

その一方で、冷静に口論を上から眺めているエリザは、双方の言い分が共に正しいように思い始めていた。五十年前の話が未だに拗れている理由は、ラファイセットが開墾に関する密約を二重に結んだからではないだろうか。仮説の真偽はともかくとして、王国を挟んだ会談が必要なのは確かだろう。

しかし、彼女がそう思っているからといって下の舌戦が収まる訳でもなく、むしろ放置することで状況は悪化していた。

「もう我慢ならん。兵を集めるのも面倒だ、ここで決闘しろ!」

この台詞を聞いて初めて、エリザは自分の迂闊さに気づいた。

「ちよ、ちよつと……やめて下さい！」

慌てて彼女は二人の間に右掌を差し込む。いきなり彼等の背より高い壁が出現する様に騎士達も怯むが、直ぐに壁の主に向き直る。

「貴様、邪魔立てする気か！」

「決闘の邪魔をするなら、たとえ女であつても容赦はせぬぞ」

殆ど同時に、二人は強い語調でまくし立てる。

「容赦しないって……」

(どうするつもりなんですか)

思わず呟きそうになり、エリザは台詞の後半と呆れ顔をどうにか押さえ込んだ。自身の巨軀やそれに対する恐怖に日々悩んでいる彼女にとつて、彼等の言動は新鮮ですらある。無闇に脅えられるのと比べて、どちらが良いのだろうか——そんなことを一瞬だけ考えてしまったが、まずは説得を試みる。

「あのですね。そもそも私は、戦を止めるために此処まで来たんですよ」

取り敢えずは矛を収め、大元の原因である契約についてラファイセットを挟んで三者で会談してはどうか。エリザはそう提案してみるものの、オーヴェンドラットは即座に一蹴する。曰く、他人を頼るのは無能の証と。

「我が領地を真に我が物にするため、父も私もこれまで戦つ

て来た。これからもそうだ。その卑怯者がどう思っているかは判らんがな」

「面白い、ならばやはり決闘しかならう。だが傭兵頼みの貴様はそれで良いのか？」

壁越しでさえ挑発の応酬を止めない二人を見るにつけ、エリザは説得など無意味ではないかと思ひ始めていた。これだけ話を通じない連中だから領土問題は長い間こじれ、彼女は自分を待つ多くの人を見捨てて戦の平定などに来てなのだ。にも関わらず、原因となる二人は卑怯だ何だと怒鳴りあっている。そう考えると怒りさえ込み上げてくるのだが、そんな気も知らない緑の騎士は彼女の掌を蹴り始め、赤の騎士は抜き身の剣を突き上げて今度は彼女の方に向かって何か怒鳴っている。

エリザの我慢も、そろそろ限界が近づいていた。

「もう、いい加減にして下さい」

ゆっくりとした口調でエリザは言い放つ。そしてレイドヴィックの方を睨んで畳み掛ける。

「貴方は結局、私に何をさせたいんですか。戦が近いから、それを止めるために私を呼んだ。貴方は確かにそう言いましたよね？」

「うっ、うむ……」

出発前にそう問われて首を縦に振ったのだから、レイドヴィックに反駁の余地は無い。だが宿敵はその逡巡を見逃さず、い

きなり大声で笑い出す。

「なっ、何がおかしい!?」

レイドヴィックが怒鳴って問いただすも嘲笑は止まない。一息つくまで笑って、ようやくオーヴェンドラットは答えた。「どうとう認めたか。女の力に頼るなど、貴様も堕ちたものよなあ」

「きっ、貴様……」

侮辱に反駁しようとするレイドヴィックだが、何も言い返せずに喉の奥で言葉を詰まらせるのみだ。

「どうした。何も言い返せんのか、臆病者?」

味を占めた緑の騎士は更に畳み掛けるが、反論は意外なところから降って来た。

「貴方は黙ってください」

抑揚のない声でエリザは言い切る。命令するような口調に對してオーヴェンドラットは驚きと怒りの視線を向けるが、大きさの差もあつてエリザは平然としたまま台詞を続ける。「そうやつて煽るから問題がややこしくなるんです。どうして人を煽るようなことばかり言うんですか」

「煽つてなどおらぬ! 奴が主を頼つたことは事実であるう」

「事実だからどうだつて言うんですか。戦を止めたいということだつたから、私は協力したんです」

「なぜ止める? 白黒つけるなどというのか。何の権限が

あつてそんなことを言うう?」

「白黒つけるなどは言つてません。戦じやなくて会議なり何なりで付ければどうかと言つているんです」

予想以上の頑迷な態度に、エリザの口調も熱を帯びてくる。普通ならこの大ききで強い語調なら怯みそうなものだが、頭に血が上つているせいもあつてかオーヴェンドラットにその様子は無い。

「くだらん!」

きっぱりと言い、そして捲し立てる。

「騎士として誰ぞに泣き付くことなど出来るわけなからう。自分が正しいと思うなら闘つて力で示せ。それが我々、騎士のやり方だ!」

一通り怒鳴り終えたところで、不意に沈黙が場を支配する。奥歯を軽く噛みながら聞いていたエリザは、やや間をおいてから大きく息を吸い、そして吐き出す。

「だから、戦を起こすと言うんですか」

発せられた彼女の声は一転して低く、ゆっくりしたものだった。それを聞いたオーヴェンドラットは彼女を見上げたまま頷き、余裕に満ちた口調で応える。

「そうだ。もうこれしか方法がない」

そして彼は家壁のような掌を指さし、言葉を加える。

「さあ、その手をどけてくれ。私は決闘を受けねばならん」しかし、エリザは首を小さく横に振る。

「嫌です」

静かに言い放った拒否の一言。それは、屈服したと思つていたオーヴェンドラットにとって予想外の反応だった。更にエリザは、一語ずつ確認するような口調で尋ねる。

「貴方は、仰いましたよね？ 『自分が正しいと思うのなら、闘つて力で示せ』と」

その問いに答えるより先にオーヴェンドラットは剣を抜き、腰の高さで水平に構える。

「そうだ。貴様は騎士ではないし、女だから説得を試みたわけだが」

目の前の壁は彼の背丈より高く、構成する指の一本一本も樽ほどの太さがある。とはいえ、元は女の細く弱い指だ。骨の無いところを突撃すれば貫通もできるだろう。助走を付けるため、彼は剣を構えたままじりじりと後ずさりする。

一方のエリザも最後の決断を下そうとしていた。今から言う台詞で後戻りは出来なくなるが、それは承知の上だ。落としどころは、彼らが冷静に判断を下せること。それだけを確認し、やや上ずった声でエリザは宣告した。

「私から二人に決闘を申し込みます」

言うが早い。彼女は右手をどけ、腰に付けていた手袋を外して二人の上に下ろす。彼女にとってはそれだけのことだが、騎士達にとっては家の屋根より広い巨大な手袋だ。風を孕んでいるだけに衝撃こそ無いがその重みに勝てるはずもな

く、彼等はあつさりと倒されてしまった。

「確か、決闘の時は手袋を投げるんですよね？」

家一軒分の布地から這い出すため藻掻いている二人に対し、エリザは平然と言い放った。

騎士達が手袋と格闘している間にエリザは立ち上がり、後ろに数歩退いていた。手袋から抜けた二人は彼女に詰め寄ろうと駆け出すが、エリザは軽く手で制する。その次の瞬間、彼らの前の地面が音を立てて爆ぜる。

「決闘の前に見て頂きたいものがあります。そこで待っていて下さい」

そう言つてエリザは直立の姿勢になり、深く息をついて目を閉じる。何を見せる気なのか彼等には見当も付かないが、駄目だと言つて聞く状況でもなさそうだ。二人の騎士は互いに目を見合わせ首を傾げつつも、仕方なくそのまま待機する。

そんな二人の前で、巨人の治癒術師は徐々に前へと進み始めた。そう思つて足元を見てみるものの、足元の靴は全く動いていない。違和感があることには彼等もすぐに気づいたが、その理由が判つた頃には巨人の姿は前の倍程度にまでなつていた。

そう、巨人は更に大きくなつていく。皆が呆然と見守る中、ついには彼女のスカートの裾が二人の上を覆つてしまった。もはや相手の全貌を掴むことなど不可能だが、正面にある黒い長靴の爪先だけでも彼らの背丈よりも高いように、足の甲に当たる部分を見ることさえできない。それでもなお爪先はまだ彼らの方に延びて来ており、彼らは何も反応できずただ彼女が大きくなるのを止めるまで呆然と待

つしかなかつた。

体の拡がる感覚が収まったところでエリザは目を開け、周囲を見渡してみる。前方の低い丘は裏手まで見え、さらにその向こうにある海まで見える。比べる対象が無いので正確な大きさは判らないが、苛立ちもあつてか以前よりも大きくなっているのかもしれない。

吐息が下に行かないように上を向いてから一息付き、今度は地面を見下ろしてみた。国境の柵は一歩先にあるが、ただでさえ簡素なそれは今や茶色の線でしかない。道と交差する辺りには指先ほどの小屋があり、さらによく見てみると小屋の近くには兵士たちの姿が黒い点として見える。

とすると、肝心の騎士二人はどこに行つたのだろうか。足元を見てもその姿は見当たらない。何かの折りに吹き飛ばしてしまつたのではないかと焦るが、それなら他の兵士たちも吹き飛んでいるはずだ。そう思い直したエリザがゆつくりとスカートを引くと、ようやくその下から二人が姿を表した。穿つた穴と盛土の側に居ることから、動いてはいないようだ。

一方、騎士たちから見ることはできるのは巨人の長靴だけだ。大陸に渡る帆船より大きいであろうその黒い靴は、彼女のちよつとした動作にも反応しているのか何度も不気味な音を立てて沈む。さらに爪先が一際大きく沈んだかと思うと、周囲が突然明るくなり、上から吹く風が二人を撫で



る。何かと見上げる二人だが、兜が邪魔になって巨人の腰あたりまでしか視界に入れることができない。彼女の顔を見るためオーヴエンドラットは後ろに下がろうとするが、遠近感が掴めない状態で上を向いたままなので足取りはおぼつかない。案の定四く五歩ほどで後ろに倒れ、尻餅ついってしまった。

「あつ、大丈夫ですか？」

降って来る声も大きく、天地が共鳴しているかのように響き渡る。その音量に身を縮こまらせたオーヴエンドラットだが、すぐに後ろ手をつき上半身を寝かせて顔を上げる。それによつてやっと見えた巨人の顔は遙か上方から不安そうに彼を凝視しており、そして更に大きくなりつつある。

「まつ、まさはまだ……」

つい思考が声として、しかも舌が動かないまま漏れてしまう。

だが今度は逆の意味での勘違い、エリザは単にしゃがんだだけだった。更に背を丸めて顎が膝の高さに来るまで屈むと二人の様子がよく分かる。半ば寝つ転がって滑舌さえ不確かな緑の騎士に、左後と上を交互に見やっっている赤の騎士。真上からではゆらゆらと動く兜の羽根飾りしか見えないが、それだけで慌てぶりを表すには十分だ。

さつきまで頑として譲らなかつた相手がこうも狼狽しているのを見ると、彼女の心にも余裕のようなものが出てくる。力で対抗するのは苦汁の選択だったが、彼等に対しては意外

と有効なのかもしれない。怪我を負わせていないこともあり、心配そうな表情もいつの間にか少しだけ悪戯っぽい微笑みへと変わっていた。

「それくらい声が出せれば大丈夫ですね」

エリザは敢えて普段の音量で話しかける。そして少し間を置き、彼女は顔を赤くしながら付け加えた。

「お、乙女のスカートを覗くなんて、破廉恥ですよ。騎士様」

エリザは顔を紅らめたまま反応を待つが、騎士達からは反駁どころか喋る気配さえ見えない。それだけ堪えているのだろう。しかし、彼らの首を縦に振らせるには良い機会でもある。

「えつと。とにかく喧嘩は止めて、話で決着を付けて欲しいんです。それさえ守って頂けるなら決闘の話は取り下げます」

取つて付けた様な物言いに對し、やはり反応は無い。

躊躇いを感じつつもエリザは右手の人差し指をのぼし、オーヴエンドラットの背中に後ろからそつと触れる。

だが触られた側にとつて、それは暖かく柔らかな『壁』だ。

「わっ！」

悲鳴を挙げて飛び退き、見上げて、さらに右上に聳える砦のような塊を見て、ようやく彼はそれが——目の前にある高さ一丈ほどの壁が——指であることを理解した。

飛び退いた小さな騎士から安堵の溜息が漏れるのを見て、エリザは小声で尋ねる。

「大丈夫ですか？ 反応が無いから心配していたんですよ」

その問いに対し、緑の騎士は再び体を傾けつつ見上げ、腕を挙げて応える。怠そうな様子だが、触れたときの感触からも怪我等は無さそう。隣の赤い騎士も彼女の顔を見上げるためか、胡座をかいて腕を後ろに張っている。この分なら話を進めても良いだろう。

「じゃあ、もう一度言います」

エリザはさっきの話を再度言っただけ聞かせる。決着は話で付けて欲しい、それさえ守るなら決闘の話は取り下げると。

「ですが、あくまでも決闘を受けると仰るのでしたら……」  
不意に彼女は言葉を詰まらせ、眉尻を下げる。

「お願いします。力を見せたり、闘ったり……そんなこと私はしたくないんです」

そこまで言っただけエリザは軽く頭を下げ、騎士二人の反応を待つ。丘のように巨大な少女が身を一杯に屈めて小さな騎士に懇願する図は不自然で滑稽にさえ見えるが、当の本人は真剣そのものだ。

二人の騎士は座ったまま再び互いを見合わせる。

「どうする？」

「どうするって……まあ」

決闘を邪魔したかと思えば自ら決闘を申し入れたり、それで更に大きくなったかと思えば力を使わせないで欲しいと懇願したり。巨大な少女の言動は矛盾に満ちている。

だが、二人の戦いを止めようとしている点だけはは終始一貫しており、つまりはそれだけ必死と言える。

「ここで否めばどうなると思う？」

レイドヴィックが低い声でぼそりと問う。

「彼女は恐らく手段を選ばぬぞ。癒し手だから我々を傷つけることは無いだろうが……」

そこで彼は後ろ手を付いて見上げる。オーヴェンドラットもつられて見上げると、巨人は悲しそうな目で二人を凝視している。大きさと相まって、それだけで射抜かれそうな迫力だ。

「あんなでかいのに泣きつかれてでもしてみろ、厄介だぞ」  
苦笑交じりにレイドヴィックは言う。だがオーヴェンドラットはそれに応えず、エリザの方を見上げたまままだ。

そして彼は不意に声を発する。

「そこまで、己の力を忌避するのは何故だ？」

突然の問いにエリザは少し驚いた様子だったが、すぐ真顔になっただけで答える。

「それは、大きすぎるからです。この力が余りにも」

「まあ、確かにな」

見上げるにも苦勞する巨軀に、空気そのものを振動させる

ような声。大きすぎるといふ点に異論は無い。

「だが忌み嫌うほどの力なのか？ 巧く使えばより多くを従え、護る力にはならんのか？」

「そうですね、でも恐怖を与えてしまいますから。それに、誰かを癒したり護ったりするならまだしも、従えるつもりはありません」

軽く首を横に振りながら答える。

「そう言いながら、貴方は今この大ききになっているが」

「それは……」

痛いところを衝かれ、エリザは言葉を詰まらせ、視線を落とす。

だがオーヴェンドラットはそれ以上突っ込まず、

「まあよい」

と制する。先にレイドヴィックが言つてた辺りが答えであるうから、追求する意味は無い。

だがそれはあくまでも彼女の事情だ。相手の心情として理解は出来るが、それに自分が従うにはまだ足りない。話に聞くだけでは駄目だ、やはり……。

腕を組んで黙ってしまうオーヴェンドラット。その様子をエリザは心配そうに伺っていたが、不意に彼は上に向き直る。

「もし良ければ見せてくれないか？ 自ら忌み嫌うほどの力を」

反応を押し量りつつゆつくりとした口調で請うオーヴェンドラットだが、対するエリザは不思議なものを見るかのようにじつと彼を見下ろし、素早く何度か瞬きをするのみ。

その実、エリザは悩みと疑問を抱いていた。出来れば力を見せることなど避けたいが、力を見せろと言うわりにはこの騎士の態度が妙に大人しい。さつきまでの彼ならもつと挑発しそうなものだが、どうしたのだろうか。

少し考えたものの答えは出そうにないので、彼女は真意を問うことにした。

「えっと。どうしてそんなことを頼みますか？」  
責めていると取られないよう注意しつつ尋ねる。

しかし待つても反応がないため、慌てて彼女は言葉を取り繕う。

「いや、あの。純粋に疑問なんです。教えて頂けませんか？」

「あ、うむ」

とりあえず了解の意味を込めて短く返す。それからやや間を開けて、オーヴェンドラットは彼らしくない自信のなさそうな口調で答える。

「私には解らんです。自らの力を忌み嫌うなど」

「そ、そうなんですか」

とりあえず相槌のような言葉を返し、エリザは考え始める。力の怖さを知らない。何だか能天気にも聞こえる発言だ。しかし、この男は長く闘争の中に身を置いていた。恐らく、

その中で力ばかりを求められてきたから怖さを知らないのかもしれない。そういえば彼女自身もまた癒し手としての力不足を悔いることが多かったし、今この力で多くの人を助けられるのは素直に良いことだと考えている。

根の部分で不意に共通点が見つかってしまい、エリザは思わず軽く頷いてしまう。この男は力のみを信じるか、それ以外のものを受け入れるのか迷っている。自分もまた、反魂が何故恐ろしい術なのか師に問うたではないか。

とすれば、今度は自分が答える番なのだろう。もしかすると因果なのかもしれない。

考えが纏まったところでエリザは改めて視線をオーヴェンドラットに戻す。

「わかりました、やります」  
そう答え、彼女は大きく頷いた。

エリザはまず、二人の前の地面に人差し指を突き刺す。線を引いて二人に危険が及ばないようにするつもりだったが、地面は思いのほか柔らかく、彼女の指を第二関節まで飲み込んでしまった。

このことにはエリザ自身も驚いたが、もっと驚いたのは沈んだ指と彼女の顔を交互に見ている騎士達である。大樹の幹ほどある人差し指があつと言う間に沈んでしまう様を間近で見せられたのだから。

「あ、あの……線を引きますから、ここから先に来ない

で下さいね」

彼女はあわてて言い繕い、力を抜いて指関節半分くらいの高さで線を引いて行く。だがそれでさえ、重い音と共に地面を抉って出来る溝は幅・深さ共に二尋ほどで、ちよつとした城の堀に匹敵する。

「良いのか？」

レイドヴィックが苦笑混じりに尋ねると、オーヴェンドラットは胸を張って応じる。

「当然だ。怖気づいたか？」

緑の騎士はあくまでも強気だ。答えた上で小馬鹿にするところなど、いかにもこの男らしい。レイドヴィックはため息をつき、首を小さく横に振る。

そんなやり取りをよそにエリザは後方を確認してからゆっくり立ち上がり、左足を慎重に半歩後ろへ下げる。それだけでも、体を持ち上げる反動や右足への重心移動、左足の着地や体重を両足に分散させるまで一つ一つの挙動すべてに柔らかな地面は一々応じてくれる。その感触や音から新雪を思い出した彼女は、初夏にも関わらず雪を想起している自分が可笑しくてつい笑みをこぼしてしまう。

とはいえ、周囲の人達とりわけ真ん前に居る二人にとってはそれどころではないだろう。たとえ自ら志願したとしてもだ。すぐに彼女は真顔に戻り、下を見て尋ねる。

「あのお、大丈夫です……よね？」

「大丈夫だ。さつさとやれ！」

同じ質問を二人から受け、緑の騎士は苛立った声を返した。

まだ多少の躊躇はあるものの、意を決してエリザは右足を僅かに後ろへ下げる。

「この場所に、足を踏み降ろします」

言いながら右足を指さし、少し俯いて台詞を継ぐ。

「絶対に、動かないでくださいね」

堀があるから動こうにも動けないのだが。そう思いつつも二人の騎士は頷き、それを見届けたエリザはゆっくりと右足を上げる。

しかしその右足は踝の高さで止まり、上がる時と同様の遅さで着地する。

これでは力を見せたことにならない。疑問に思った二人だが、彼等が問いたですより前にエリザは「すみません」と切り出す。

「何か飛ぶかも知れませんが、盾を構えて頂けますか？」  
なんだ、そういうことか。そう言いたげに騎士達は肩を落とし、鷹揚な動作で盾を背中から外して構える。

しかし、彼等の準備が終わっても巨人は足を上げず、ただ怪訝そうに見下ろしているだけだ。

彼女から見た二人の盾は余りに小さく、ちよつとした砂粒くらいしか防げそうにない。また彼等自身も小さいため、もし土砂が跳ねたりしたらその重量で体ごと打ち倒されそうだ。

考えを纏めたエリザはおもむろに右の人差し指を出す。

「えーと。ちよつと、失礼しますね」

そう言つて彼女は左手で後ろ髪を前に寄せてから上半身を屈め、右手の人差し指で堀を二回押す。その結果、二人の前には身を隠せる程度の土塁が築かれた。

指であつさり土塁を築く力に騎士達が啞然としているのを余所に、彼女は独り満足そうに頷く。これで何か飛んだとしても大丈夫だ。

しかし飛来物こそ防げるものの、地面を踏みしめたときの音はどうなるか。

「えつと、音もかなり出ると思いますから、耳を塞いで下さい」

再び注意を促すと、二人の騎士は盾を置いてから耳を両手で塞ぐ。

これなら安心と思つたエリザだが、直ぐに別の懸念が思い浮かんでしまう。

「振動も大きくなると思います。転ばないように座つていて下さいね」

「それに、風とか埃も行くでしょうから……」

ついにオーヴェンドラットから怒号が出てしまった。  
「注意は聞き飽きた、早く始めろ」

幾分呆れた口調で彼は続ける。だが心配事の尽きないエリ

ザは承諾しない。

「いえ。ですけど、やっぱり心配ですから……」

消え入りそうな声で反論する。それに対してオーヴェンドラットは言葉も出さず、もどかしそうに腕を激しく上下に降るばかりだ。

そんな様子にレイドヴィックは苦笑していた。この癒し手の娘、巨躯の割に弱々しい態度だが人を傷つけないことに関してだけは恐ろしく——たぶんオーヴェンドラットより数段頑固だ。だが放置するのも面倒なので、彼は上を向いて助け船を出す。

「気を遣ってくれるのは嬉しいのだが、過度の弱者扱いは失礼だぞ」

その言葉にエリザは目を見開き、軽く息を飲む。相手が騎士であるということを忘れていたようだ。

「ご、ごめんなさい」

上ずった声と共に頭を深々と下げるエリザ。それでさえ彼女の爪先は幾らか沈み、空気の流れが二人の騎士を撫でる。

「じゃあ、行きますね」

ゆっくり宣言するエリザに普段の優しい笑みは無く、真剣な眼差しで見下ろしている。胸に手を当てて深呼吸。落ち着いたところでゆっくり右足を上げ、膝の辺りで止める。

「この高さから下ろします」

「わかったから早くしろ」

応えるオーヴェンドラットは既に投げやりな口調だ。焦らすことで恐怖を煽っているのかと妙な勘ぐりさえ抱きつつある。

だがそんな気も知らないエリザはあくまでも慎重に狙いを定め、そしてもう一度深呼吸してから一気に踏み降ろす。

着地の瞬間に備えて身構える二人の騎士だったが、着地より前にまず巨人の足に圧縮された空気が横殴りの突風となって彼等を襲う。そして想定外の暴風によるめいたところで着地。轟音と共に大地が激しく上下に揺さぶられ、その反動で二人は空中に放り上げられてしまう。

放り出されることもまたレイドヴィックの予想以上だったが、空中なら振動を感じることは無い。僅かにできた余裕で周囲を見渡すと、土色の壁が彼の視点より上にあり、それが津波のように迫って来ている。

このままでは飲み込まれる。土砂の動きは遅いが、体もまた動かない。土壁はあくまでゆっくりと、音さえなく襲いかかる。動く眼球を方々に巡らせると、緑の騎士も同様に宙を舞い、土砂に対して腕を突っ張っている。

そのとき背中と後頭部に突然の鈍痛が走り、視界が暗転する。それでも痛みを堪えて目を開けると、写ったのは巨大な何かに分断された青い空。そして下から現れ、急速に視界を覆う黒い……。

(もう駄目か)

レイドヴィックは咄嗟に両手を顔の前で交差させ、目を閉じる。

最初に降って来た飛礫はどうか防げるが、直ぐに大量の暖かい土が覆い被さる。その重みは彼の腕を押し下げ、胴体へのしかかり、体軀を地面に強く押し付ける。

音もない闇の中でレイドヴィックの意識は徐々に薄れていった。

足を踏み降ろす際も足元には注意を払っていたため、跳ね上がった土砂が二人の騎士を襲う様子にエリザはいち早く気づいていた。咄嗟にしゃがんで手を伸ばしたものの間に合わず、跳ねた土はあつと言う間に二人の姿を飲み込んでしまった。

そうなればせめてすぐに救出となるのだが、指の太さの半分ほど盛り上がった土を前にエリザは手を出すことができない。何せ相手の身長もまたこの盛土と同じくらいしかなく、下手に指で掻き出せば埋もれている騎士達に重圧が掛かり、押し潰してしまうかもしれないからだ。

なら吐息で土砂を飛ばせば。そう思って息を吸ってみるエリザだが、これも圧力が掛かることに変わりないと気付き、上を向いて息を吐きだす。

小さくなれば手を出せそうだが、その時間が惜しい。何かもつと早い方法は……

焦りで急に汗が滲んできたので、エリザは左手で額を拭く。ついでに彼女は前髪を掻き上げ、そこではたと思いついた。

腰まである自分の後髪を一房だけ摘まみ、筆のように握る。そのまま掌底を地面に降ろし、土砂の山をそつと撫でていく。こうすれば埋もれている二人を押し潰すことなく土砂だけを除くことができそうだ。

力を加えないよう慎重に払っていくと、ほどなく土の中から小さな鎧姿が二つ現れる。彼らの周囲にある土をさらに掃き、そして人差し指でそつと触れてみる。気を失ってはいるようだが、共に命の息吹は残っているようだ。エリザは安堵の息をつき、そして少しずつ彼らに力を注いでゆく。

目覚めたレイドヴィックの感覚にまず飛び込んできたのは、上から見守る治癒術師の顔と背中にかかか触れている感覚だった。

思わず振り向いた彼の目には、太さ一尋ほどもある白い柱。異様な物体に彼は驚き、短い怒号をあげて左肩から転がる。二回転して片膝立ちの体勢になったところで剣を抜き身構えるが、その巨柱は彼の視界から忽然と消えていた。

「あのう」

上から降ってくる遠慮がちな大声量に、レイドヴィックの顎は引つ張り上げられる。

「脅かして申し訳ありません。さつきのは私の指なんです」  
治癒術師の女は心配そうな表情を浮かべ、自分の掌を開いて見せる。

「あ、ああ」

見上げる掌は屋敷さえ摘まみ上げられそうな大きさ。レイドヴィックは改めて圧倒され、生返事がやつとだ。

らしくない態度を前にエリザは『大丈夫ですか?』と言いつつ、弱き弱きと言いつつ臍を曲げるかもしれない。



そう思つて切り出すのを躊躇してしまふ。

そんな一瞬の沈黙を、もう一人の男が破った。

「おいおい、女の指にその反応か？　情けないぞ」

その無神経な言葉に、非難のこもったエリザの視線が向く。だがレイドヴィックの反応は彼女の予想だにしないものだった。

「な、なんだと貴様っ！」

いきなり怒鳴り返し、さらには立ち上がつて詰め寄つたのである。

「そういう貴様はどうだったのだ。まさか嘘はつくまいな？」

レイドヴィックはそう問い、エリザの方をちらと見上げる。

「えっ？」

啞然としたままのエリザに答える余裕はない。しかし、どう答えるか迷ふ必要はなかった。

「私は一步引いただけだ。あそこまで無様ではない」

本人が馬鹿正直に答えたからだ。

「それを五十歩百歩と言うのだ」

「何を言う。人の差なぞ本来その程度のものよ」

もしかして、この二人は仲が良いのではないだろうか。目まぐるしくも不毛な展開を端から見ているエリザにとって、どうしてもその疑問を拭うことができなかつた。

とはいえ、いつまでも見守っているわけにも行かない。少なくとも日没までにテルウオムに着いておく必要があるか

らだ。意を決したエリザは遠慮がちに話しかける。

「あのー」

幾ら遠慮がちとはいえ、轟くほどの声量である。頑迷な騎士達も、渋々ながら彼女の方を向く。

「それで、もう決闘の話は無しということ構いませんね？

無ければ早めに帰りたいのですが」

彼女の頭の中では一件落着のつもりだった。

だが、オーヴェンドラットの返答は違った。

「いや、それとこれとは話が別だ。決闘を受けた以上は応じねばならぬ」

そう言つて彼はおもむろに剣を抜き、自分の周りに直径一尋足らずの円を刻む。

「この円から私を出せたら負けを認めよう」

エリザは呆れて何も言い返せず、ただ溜息を漏らすのみだ。決闘を受けるといふのみならず、わざわざ自分に不利な条件を示すこの強情さは何処から出て来るのだろうか。彼の描いた円は彼女から見ると爪の腹程もない小ささで、ちよつと爪で追いやれば勝負など直ぐに決まつてしまふだろう。何故そんな、あつさり負けることが明らかかな……

そこまで考えて、エリザにもようやく不利な条件の意図が解つた。

恐らくオーヴェンドラットは勝敗より、勝負から逃げないという結果を選んだ。不利な条件もまた勝負を受けることに

拘った結果であり、また自分が彼を傷つけることなく勝てる方法を示したのかもしれない。

エリザの顔には、呆れと安堵の混じった笑みがつい浮かんでしまう。騎士というのは何と真つ直ぐで捻くれた人種なのか。

「わかりました。勝負しましょう」

当然ながら、勝負はすぐに決まった。大盾の五く六倍もあるエリザの爪は緑の騎士の剣をもとせせず、彼を慎重に円の外に押し出す。

そしてレイドヴィックの方を見ると、予想どおりというか彼もまた地面に描いた円の真ん中で身構えていた。しかも御丁寧なことに、描いた円はオーヴェンドラットのそれより若干小さい。

エリザの口から、ふたたび深い溜息が漏れる。

「負けの内容で争わないでくださいね」

勝負の前に、彼女ははつきり釘を刺した。

雌雄も決した以上長居は無用だ。十五丈の大きさに戻ったエリザは近隣の村人達を治癒した上で帰路に就いた。まずレイドヴィックとその配下の騎士達をアレイオスまで届け、茶の誘いも断って一人テルウオムを目指す。

彼女が急いだ理由は、往路で残した者たちの治癒である。幸いにして子供達に遊んで欲しいとせがまれる以外にこれといった問題もなく、日没まで一刻以上を余してテルウオムに

到着した。

だが問題はここで起きた。

どういうわけか、イーゼムが東門の上で大袈裟に手を振って出迎えている。何事かと思つて耳に手を当て彼の声を聞いてみると、その仕草に呼応してイーゼムが叫ぶ。

「すぐリーデアルドに戻るぞ！ 救助の狼煙が来た！」

早速で合流し聞くとところによると、『要救助・負傷者発生、凶悪犯逃走』という内容の狼煙が入ったのだという。

「この凶悪犯つて……」

「ああ」

二人の知る限り、辺境のリーデアルドで『凶悪犯』などという狼煙で表されるような者は一人しか居ない。

結局その日は街二つ分だけ戻り、翌日にリーデアルドでの治療を終えて翌々日に王都という慌ただしい移動が続くことになる。リーデアルドで死者が出なかつたことは幸いだが、逃走した人物は二人の予想どおりだった。

なお二騎士の後日談だが、彼等とそれぞれが属する王の四者による会談が行われた。

五十年という年月で双方の王も代変わりしている上に証文の写しが無いため、事態の收拾を優先させたラファイセツト王室は非公式ながら二枚舌を認めることとなった。東国ハイムライストの王もこの問題には不干渉の立場を取つたため、領土問題は改めて二騎士に託された。

そうなると解決は早い。双方が真実と証明できた以上、彼らの執着する理由もほぼ無くなったからだ。

かくして二者間で公式に交わされた条文は以下の通り。

一、領土は作付面積が半々となるように決定する

一、収穫祭に模擬戦を開き、その勝敗によつて税収の取り分を決定する

真実を得ても矛を捨てる考えは無かつたようである。

## 第5章 「式典」

1

動力といえば人や牛馬しかない時代において、エリザの巨躯が持つ意味は極めて大きい。常人の百五十倍ということは、単純に計算しても三乗でおよそ三四〇万倍、これは島内五国の人口を一桁上回る数字である。

予想される影響の大ききゆえに、ラファイセットの円卓では彼女の存在を公にするか否かの議論が何度も交わされていた。

しかしその議論は、当事者でありながら議論の外にいたエリザ自身によってあっさり終結させられてしまう。辺境とはいえ隣国の者にその巨躯、しかも丁寧なことに最大の大ききを見せてしまった以上、隠し立てなど不可能になっってしまったのである。

その結果。街の中でエリザは難渋していた。

家さえ跨げそうなほど踵の高いハイヒールと、片足を降

ろすだけで左右合わせて指一本の余裕しかない道。

前に置く右足に体重を移してからエリザは左足を慎重に持ち上げ、建物に触れないようゆっくりと前に運んで右足の前に降ろす。安定したところで彼女は大きく息を吐き出して天を仰ぐ。

何度か深呼吸した後、スカートを後ろに引いて再び視線を足元に転じる。そして息を吸いきったところで止め、今度は左足に体重を掛けてから右足を浮かせる。

片足でいる間は体勢の安定に神経を注がなければならず、また浮かせた足が建物に当たらないようにせねばならない。おっかなびつくりな動作に加え不安定さと緊張でどちらの足も震えており、もし見る者がいれば恐怖を感じるだろう。しかも本番では街道を人々が埋め尽くす予定である。例えばもし足元に人が出てきたりしたら、対処出来るのだろうか……。

そんなことを考えている時に問題は起こるものだ。震える左足が僅かに動いたのをきっかけにエリザは平衡を崩してしまう。何とか腕を振って持ち直そうとするが間に合わず、遂に彼女は右足を通り沿いの家に突っ込んだ。

三寸（九センチメートル）ほどのヒールはその下にある家を屋根から地面まで一気に串刺しにし、爪先に掛かる重みは隣の家を完全に押し潰す。更に潰れた家からは粘土が溢れ、それを受けた近隣の数軒は粘土で繋がってしまった。

やってしまった。今日こそはどうか失敗せずに終えるつもりだったのに。

ため息を漏らし、エリザは振り返る。

「何とかならないんでしょうか。せめてこの靴か、大きさのどちらかだけでも」

巨大な治癒術師の存在を隠すことが出来ない以上、島内の王たちを呼び寄せて大々的に広めたほうがよい。その方法が、正装で巨大化して王都の中を行進するというものだった。

ラファイセットに入った翌日にその話を聞いたエリザは、多少迷ったものの結局その日のうちに提案を受け入れた。自分が原因である以上は断れず、また貴婦人のようなドレスをあつらえて貰えるとあれば断る理由もない。

ただ彼女にとつての誤算は、貴婦人の着用するハイヒールが歩くにも苦勞する代物であることと、町の目抜き通りが中途半端に広がったことである。その幅はおよそ十間（約十八メートル）、市を立てつつ馬車を行き交わせられる広さであり、百五十倍の大きさになったエリザが十分に片足を置く幅だ。

「まだ三週間あります。それまでには慣れますよ」

エリザより幾らか背の高い妙齡の女性にはこやかに答え、やや視線を下に投じて彼女の側まで歩み寄る。そこまで十数歩、同じくらい踵の高い靴を履いているが城の教育係であるハンナの動作は流暢で、落ち着いた物腰を崩すこともない。

（これなら街道の人達も危うさを感じないんだろうなあ）

一歩ごとに安堵している自分とは大違いだ。エリザの口からつい溜息が出てしまう。それを見てハンナは

「大丈夫ですよ。習熟は早い方ですから」

とやんわり諭す。

「あと、あまり足を上げる必要はありませんよ。家もこの大きさですから」

そう注意しつつ、ハンナはしゃがんで街路沿いの家に手を摘まみ上げる。百五十分の一の縮尺で作られた粘土の家は一辺が一寸半（五センチメートル）ほどで、高さは彼女の爪先より少し上、幅も指三本分ほど。掌に乗せて転がすのにちょうど良い大きさだ。

「本当に小さいんですね」

転じた粘土細工の乗った掌をエリザの方に見せ、ハンナが言う。

「それだけ貴方が大きいというべきかしら」

「あまり『大きい』って言わないでください」

エリザは弱々しく抗議するのがやつとだった。

それからしばらく、昼は治癒術師として周辺の町や村を回り、夜は歩行や御辞儀など一連の動作を練習する日々が続いた。訓練は最初こそ難航したが、ハンナの言ったように一週間経つころには町中を危なげなく歩けるようになり、更に一週間後には一通りの動作ができるようになっていた。

ただ、いくつか順調ではないこともあった。一つは普段の更に数十倍の大きさになるといふ悪夢を何度か見せられたこと。元々はある司祭の術が原因なのだが、これをローンハイム師匠に報告したことで問題が拗れてしまう。

「それは名案じゃな」

感心した風に頷くローンハイム。予想外の反応に面食らいつつもエリザは「どこが名案なんですか」と問い詰めるが、師匠は動じる様子も無い。

「火の絡む災いがあれば、おそらく同じことが起こるぞ」ゆえに夢を見ることで備えるのは有用。そう言われてしまつてはエリザに反論の余地は無く、自分を納得させることで後悔の念を抑えるしかなかった。

もう一つは、練習のためということで昼にもハイヒールを履いてみたものの、それが幾つかの問題を引き起こしてしまったこと。

問題というのは、まず街道がエリザのヒールの重みに耐えられなかったことである。特に石畳のない街道を普通に歩くと深さ一〜二尺の穴が出来てしまうため、爪先立ちで歩かざるを得ない。また、既に穴を穿つた道は後日彼女の手で埋められるまでまともに通ることさえ出来ない有様だった。石畳が敷かれた道は軽い凹凸や罅（ひび）で済んだが、式で彼女が通る予定の道は強度を見直され、踵が降りる場所を中心に石を増し敷きすることになった。

もちろん、この工事もエリザが担当した。まず元の石畳を剥がし、代わりに石を積み上げる。その石を爪先で踏んで均し、ある程度の高さになったら足掛かりの付いた棒を使って石突きで更に沈めていく。そして最後に元の石畳を敷きなおせば完成となる。これだけなら彼女にとっては簡単な作業だが、問題は周囲に家や野次馬までもが密集していることだ。石を飛ばしたりしないよう慎重に進めなければならず、結果として非常に神経を使つてしまった。また、自分の体重に対して感嘆の声が上がるというのもエリザにとつては良い気分ではなかったようである。

もう一つの問題は、悪戯坊主どもが踵の下を潜る遊びを思いついたことだ。

市街の外ではエリザは三十から四十倍の大きさになつているため、靴裏によるアーチの高さも一丈を超える。子供は普通にくぐれる高さであり、年中遊び相手に事欠く彼らにとつては格好的だ。もちろん、普段から死角に気を使つているエリザにとつてはたまつたものではないのだが、度胸試しのつもりでいる子供たちは何度注意しても聞きはしない。手を焼いたエリザは、ついに反撃に出た。

「そんなに度胸試ししたいなら、お姉さんがいいところ連れていつてあげるわ」

平静を装いつつエリザは悪童たちを掴み上げ、村外れにある大木の天辺に置き去りにしたのである。

「恐くなんかないでしょ？　だから日が暮れるまで存分楽しんでね」

最初は提案に目を輝かせ、我先に枝へと飛び移った悪童たちだったが、木の高さはおよそ十丈（三十メートル）余り。さらに枝や幹までも風で揺れる状況ではそう長く耐えられるものではない。一刻半の後に救助されたときにはエリザの胸の中で泣き出してしまい、彼女は日が暮れるまでずっとあやし続けなければならなかった。

「というわけで、色々大変だったんです」

疲労の色も隠さず報告するエリザだったが、聞いているハンナの方は平然としたものだ。

「ですが、本番でも同じようなことがあるかもしれませんが。沿道の人達からはあなたの靴しか見えないわけですから」

そう言つてハンナは自分の靴を脱ぎ、左手で拾い上げる。

「百五十倍となると、人の大きさはこの位ですよ」

右手の親指と人差指を靴の爪先に添え、わずかに開いて見せる。その間隔は三〜四分（九〜十二ミリメートル）ほどで、爪先の高さの半分以下。もし側に人が居るとすれば、爪先でさえ見上げる大きさになるだろう。さらにハンナは右手の指を踵の方に動かす。

「そうなると、踵なんて城の柱くらいに見えるんじゃないかしら」

他人事だと思つていいのか、彼女の表情は楽しそうだ。しかしそれは対照的にエリザの表情は沈んでおり、気づいたハンナは慌てて言葉を継ぐ。

「何にせよ、踵を真上に上げるようにすれば大丈夫ですよ。体勢はもう崩さないのですから、ゆっくり動けば良いんです」

「はあ……」

反応は鈍い。原理上はその通りだが、何かあつた時の被害が大きすぎるのだ。

「式は十日になりましたから、練習する時間はまだあります。心配する暇があつたら練習しましょう」

そこまで言われてしまつては、エリザも同意せざるを得ない。渋々頷いた彼女は右足を半歩引き、スカートの両裾を掴まんでお辞儀する。

「それでは先生、よろしく願います」

「はい」

ハンナも靴を床において履く。だがそのとき思いついたことを、彼女はつい漏らしてしまつた。

「そうだわ。ヒールに彫刻とか入れれば面白いと思いませんか？」

「思いませんっ」

即答である。

式典は夏至祭と重ならないよう、初夏月の十日とされた。

そのため夏至祭が終わっても各国の王や大使がラファイセツトに入り始め、街は活気の途切れる暇もない。

治癒術師のエリザにとつても多忙な日々となる。祭りは混雑のため怪我人が多く、それが一段落すると今度は各国の賓客を国境まで迎えに行くよう要請を受けたからだ。彼女の大きさはとかく疑いを持たせがちであり、疑念を晴らすためには最初に直接会っておくのが望ましい。そう説明されれば断れようなく、渋々ながら承諾するしかない。

やんごとない方々相手に緊張を強いられるため最初は乗り気ではなかったエリザだが、しかし実際に会ってみるとそれは杞憂であり、それどころか逆に面白いとさえ思うようになる。

王や大使たちは一目でそれと分かる豪華な衣装を纏い威厳を漂わせているが、大きさは普通の人と何ら変わりがない。対するエリザは平凡な治癒術師の装いのままで、どんな建物も及ばぬ圧倒的な大きさ。どちらがより緊張を強いられるかは明らかであり、また相手が冷静でないと分かれば逆に落ち着くものだ。

実際、エリザには動向を観察する余裕さえ持っていた。例外なく彼らは畏怖に似た感情を持つていたが、その状況下で取る態度は三者三様だ。動揺や驚きを隠さない者、すぐ立ち直って冷静に対応する者、妙に突つかかる態度の者。彼らの反応に特徴がよく表れており、エリザにとっては王たちの性

格を掴む材料であると同時に密かな楽しみでもある。

彼女が最も気を払う点は、このあまりに滑稽な構図が王や使者たちの尊厳を傷つけないよう振る舞う必要があるということだ。そのため、エリザは簡単に自己紹介したあと、持参した箱に乗って貰う前に質問を促すようにしていた。

「疑問に思ったことは、何でも聞いて下さいね」

返ってくる質問も十人十色であった。

「なぜそんなに大きくなったのか？」

「食糧等は どうしているのか？」

「百五十倍以上にはなれないのか？」

「ここでその大きさを見せてくれないか？」

これは、まだ若い東の王。オーヴエンドラットから話は聞いているようだが、それでも聞くとは大違いだと素直に驚きを表していた。質問の内容も同様で、答える側もつい率直に答えてしまう。エリザが気づいた時には、火の災いで百五十倍以上になりえることまで言ってしまった。ただ最後の要求に対しては、災いをここで見せるわけにはいかないと断ったが。

その結果から対話の主導権を渡すのは危険という報告がエリザからあがり、以降はローンハイムも同行するようになる。なお、質疑応答そのものを取りやめる案も彼女は出したのだが、そちらは却下された。相手の疑念を晴らすためには必要な対応であり、また質問自体に彼等の思想が反映さ



れているという理由からである。

「その大ききで今は何をしているのか？」

「その大ききなら、かなりの重量を扱えるのではないか？」

「露天掘りの鉱山がある。来ないか？」

これは高地連合の王。ずんぐりした体型と濃い髭が特徴的である。この体格差にも関わらず鉱山への誘いは熱心かつ強引ですらあり、曖昧な答えを返していると鉱山労働の苛酷さを述べ始める始末だ。

「ここまで厳しい労働に従事している我々を見捨てるのか？」

それだけの力を持ちながら」

良心に訴えかけられ、エリザは何も言い返せない。だが幸いなことにローンハイムはそう易々と引き下がる相手ではなかった。治療術師として本分が最も重要であることを説き、治療を求める声は普遍であるため今ここで判断するのは双方にとって危険であると応酬する。

結果として、到着後に他国と調整の上で訪問日程を決めるという穏当な線に落ち着いた。

（あなたが居なかつたら、このまま誘拐されていたかもしれない）

エリザはほつと胸をなでおろし、師匠に心話でそう語る。それに対し、ローンハイムは得意げに髭を撫でながらこう返した。

（馬鹿な。普通ならお前がする方じゃろう）

「どれくらいの物を持ち上げられるのか？」

「兵を相手にしたことはあるか？」

「投石機や城石弓で傷つくのか？」

「何人ぐらいの兵を追い払うことができるか？」

これは南の国の王。余りにも露骨に戦を匂わせる質問が多いため、業を煮やしたエリザは反撃に出る。

「意図は存じませんが、私は癒し手です。戦には絶対に加わりません」

家ほどある顔で間近から睨み、はつきりとした声で釘を刺す。それだけで王は言葉を失い、しばらく無言のまま顔を赤らめ、やがて力無く頷く。その急変ぶりは彼女にとつても予想外だったので、すぐに彼女はできる限り丁寧な口調で尋ねる。

「そもそも、どうしてそのような質問をなさるのですか？」  
前の脅しが効いたのか、それとも本来の性格なのか、王は率直に意図を語り始めた。南の王都は島内髓一の良港であるため大陸の干渉を受け易く、防衛には兵力が欠かせないのだという。

だから王都に滞在だけでもして欲しい。そう王は頼んでくるが、ある程度の正当性があるとはいっても野心的な王の依頼を直ぐに承諾するのは無理な相談だ。

「いずれ訪たいと思いますが、訪問と滞在は別です」  
やはり、後日訪問するという回答に収斂した。

「足が当たれば城壁も壊れるのではないか？」

「何か失敗等したことはあるか？」

「その際の被害は如何ほどか？」

「南の王は何と言っていたか？」

これは西の国王。やや線の細い初老の紳士で、運ぶ際は殊更に注意を要した。発した質問も彼女や南の王への懸念に基づく内容ばかりで、南の王に釘を刺した事実を伝えても安心しきれていない様子は王都に着くまで遂に消えることがなかった。

(南は歪んだ正義、西は疑心。厄介じやな)

ローンハイムが心話で語った寸評である。エリザが同意したのは言うまでもない。

王たちをラファイセットに案内してからの数日はほぼ普通の生活が続いた。王たちの間でいろいろと会議が持たれており、その中でエリザのことが議題にのぼっているのは確かだが、焦点であるはずの彼女自身が会議に関わる点は少ない。昼に挨拶がてら多少の質疑応答があり、夜に師匠から簡潔な報告が寄せられる程度だ。エリザとしても、会議で居心地の悪い思いをするよりは荷役なり治療なりで普通に生活していた方が気が楽だし、無茶な要求があっても突き返す積もりでいたため特に問題とは感じていなかった。

幸いなことに報告も式典の進行に関する内容が主で、無茶な要求は特に出ることもなかった。ただ一つ彼女を戸惑わせ

たのは、何らかの位階に就く意志を問われたことだ。諸国を巡るのに適した役を用意していると言うものの、どういう役なのか問うても「王達しか知らない、式で明らかにする」という曖昧な返事。そのためエリザも明確な回答を返すことができない。

「分相応で、本分に支障がなく、訪問先の方々に喜んで頂けるなら拝領します」  
方々と相談した結果である。

王都から少し離れた離宮で式典の朝を迎えたエリザは、鏡を前にして声を出せずにいた。

鏡に映っているのは、黒い長髪とは対照的な銀のティアアラをのせ、淡い色調で彩られたドレスを纏う自分の姿。内布でふわりと広がった臍丈のスカートにコルセットで締まった腹部、やや開放的な胸部にはティアアラ同様に正十字型の碧石が鎮座し、腕は膨らんだ肩袖と長手袋で纏められている。普段とは余りにも異なる装いを前にして、エリザはしばし鏡に見入っていた。試しに手を振り、目の像も動くのを見て自分の姿と確信しつつあるものの、地に足の着かない高揚感は収まるべくもない。

「よく似合っていますよ」

傍らで彼女の腰を留めていたハンナが声を掛ける。

「え、あ……：：：ありがとうございます。何だか、夢みたいで」

鏡越しに軽く頭を下げるエリザ。声の上ずり具合に、ハンナは笑って応じる。

「ほら、もうちよつと力を抜いて。余り緊張していると街で転んでしまいますよ?」

「や、止めて下さい。縁起でもない」

エリザはハンナの方を向いて反駁するが、そこで初めて相手の表情から冗談だと気づき、顔を赤らめて俯く。

「練習どおり、一つ一つの手順をきちんと踏めば良いんです。平静を保ちさえすれば、難しいことなんてありませんからね」

ゆつくりとした口調で諭すも、エリザは俯いたまま小さく頷くのみ。衣装から行動から注目の度合いまで全てが初体験ゆえ神経質になるのも無理からぬことではあるが、過度の緊張は悪い結果を招きかねない。

「じゃあ、とりあえず大きく息を吸って」

「はい、吐いて」

今度は深呼吸を促してみる。その間もエリザの表情は滑稽なくらいに真剣だが、続けるうちに少しずつだが肩から力が抜けているのが見て取れる。

たつぷり十回は繰り返し返した後で、ハンナはおもむろに尋ねた。

「どうですか? 少しは落ち着きましたか?」

すぐには答えず、うつむき加減で熟考するエリザ。

「ええ。でもやっぱりまだ、街を歩くことを考えると」

「そうですね」

ややあつて返した不安気な答えに、ハンナは微笑みで応じる。

「冷静に考えて判断できるなら大丈夫です。緊張してもとにかく焦らないこと。いいですね?」

「はあ」

気の抜けた返事。初々しいとも言えるが、なかなか難しいものだ。

そんな折り、不意に戸を叩く音が聞こえた。

「はい、どうぞ」

ハンナが答えると戸が開き、軽装の青年がひよつこりと顔を覗かせる。その男は部屋に首を突っ込んだまま中を一瞥し、そしてハンナに尋ねた。

「すみません、エリザはどこですか？　此処にいと聞いてたんですが」

青年はあくまで真顔だ。意外な人物の登場に唾然としていたエリザだったが、質問の意味を理解するにつれて悪戯っぽい笑みに変わる。

「そういう貴方こそ誰ですか。人を呼びますよ？」

歩み寄り指さして詰問するエリザだが、顔は笑っている。

そんな二人のやり取りを見て、ハンナは溜息と共に肩を降ろす。このイーゼムという男は、緊張を解く術でも使えるのか。

「早かったじゃない。どうしたの？」

ハンナの問いに、イーゼムは決まり悪そうな笑みと共に答える。

「いやあ、ちよつと準備を切り上げてきたんで」

よく見ると彼の装いは地味で、爪先案内人という役目を思わせる物は見あたらない。

「そこまで心配してたんだあ」

流し目でイーゼムを見やりながら、ハンナは言う。

「若いつて良いわねえ」

「ん？　いや、若いつて……道化みたいな格好で馬を駆

るわけにも行かないんで」

説明するイーゼムの口調は微妙にぎこちない。笑みを浮かべつつその様子を見ていたハンナだったが、ふと思いついたように頷いて言う。

「うん。じゃ、私も準備してくるわね」

「え？」

不意の発言に虚を衝かれた二人だったが、ハンナはそれを別段気にする様子も無い。

「化粧に時間が掛かるのよ。もう若くないからね」

冗談っぽく言い残し、あっさり部屋から出てしまった。

イーゼムは椅子を二つ運んで片方をエリザに勧め、自分も腰掛ける。

「面白い姐さんだな」

少し間をおいてからぼつりと感想を漏らす。

「ええ」

頷き、エリザは答える。

「でも、今日式典に臨めるのもあの人のお陰ですよ」

街を練り歩く話を聞いた時は不安で一杯だった。稽古係がハンナ以外だったら、今のようにならなかつたか分からない。

「そうだな。その靴で歩くだけでも一苦労だったらしいし」  
ハイヒールの靴を指さしつつ、イーゼムが言う。

「で、今はどんな感じなんだい？」

「え？ えーとですね」

しばし考えている様子だったが、エリザは椅子から立ってドレスの膝裏を軽くはたく。

「見せた方が早いでしょう」

そう言つて身を翻し、歩き始める。

エリザは真剣な表情で一歩ずつ確実に歩を進めて行く。一歩毎にドレスの裾を後ろに送り、足の下りる辺りを確認してから後足を上げ、ゆつくりと前に動かして足が前後に並ぶように下ろす。ゆつくりとした動作は装いに負けず雅やかで、腰を左右に捻る歩き方がちよつと艶めかしい。

まるで別人の様子に半ば魅入られながら、イーゼムは式典での自分の姿を重ね合わせていた。爪先の三分の一度度しかない自分が足下をうろつき、合図を送っているところを。頭上ではドレススカートが右へ左へと翻り、家を五く六軒並べたくらいの白い靴が落ちてくるのだろう。

(壮大な光景なんだろうな)

つい苦笑が浮かびそうになり、慌てて彼は奥歯に力を入れた。

十歩ほど進むと次は左に曲がるよう足を置き、三歩目をさらに左に曲がつて元の場所まで戻る。最後にエリザが一礼したところを、イーゼムは拍手で迎える。

「良かったよ。いやあ、優雅じゃないか」

「え、そうですか」

意外にも素直な感想だったのでエリザはやや戸惑ったが、すぐに彼女はにっこり笑つてお辞儀で応える。

「ありがとう。でも人混みの中だとやっぱり不安ですから、ちゃんと誘導をお願いしますよ」

「ああ、任せとけ」

今度はイーゼムが、親指を立てて笑う。

「何にせよ、だ。今日の披露目が終われば、他の街にも行きやすくなるな」

唐突に、イーゼムが真面目な表情で切り出す。

「ええ、そうですね」

エリザも確たる声で応える。

「受け入れて貰い易くなるのなら助かります」

王からの書簡が届いてもなお住民の恐怖や疑念は強く、街に入るまでには辛抱強い交渉を強いられていた。それを思い出したのか、彼女の表情も重くなる。

「貴方にも負担を掛けていましたしね」

恐怖の対象となるエリザ本人に出来ることは限られており、交渉の役はイーゼムに回ってくる。しかし実際には交渉役というより人質役と言つた方が近い扱いだつた。弱みを見せ均衡してからが本番なのだと言は言うのだが、外で待つエリザは気を揉むばかりだつた。

「あんなことが無くなるだけでも、ほっとします」  
そう言つてエリザは胸に手を当て、溜息をつく。

(よほど心配してたんだな……)

イーゼムは領きながら苦笑していた。危険な目にあつたのは自分だつたにも関わらず、なんだか申し訳ない気がする。

「だけど、そっちは逆に忙しくなるぜ。なんだつて『野望』に近づくんだからな」

「野望つて。なんですかそれは」

大仰な文言に対し、破顔して意味を尋ねるエリザ。しかしイーゼムは何事もないかのように、さらりと答える。

「言つただろう。『総てを癒す』と」

不意を打たれ、エリザは何も返せずに目を見開く。

丘の上で密かに語つた想い。日々忘れることはなく、治療への感謝を受けるたびに目標へ歩んでいることを感じていたが、口に出すと恥ずかしいので胸に秘めていた想い。

「いきなり、そんな……」

やつと出た言葉。その戸惑い振りにイーゼムは軽く笑うもすぐに真剣な表情に戻り、低い声で囁くように言う。

「がんばれ。きつと多くの人がお前を待っている」

エリザは無言で頷いた。

そのとき、突如として馬の嘶きが響き、静肅を打ち破る。次いで騒がしい足音が一直線に近づき、ノックもなしに扉が荒々しく開く。

「イーゼム殿、途中で抜けるとはどういう了見ですか！」  
入つてきたのは、中年の痩せた男だつた。身軽な服装だが大きな袋を肩から下げている。

「いや。あー、すみませんロンテさん。直ぐに戻りますので……」

「もう間に合いませんよ！」

イーゼムの返答を遮り、更にまくしたてる。

「衣装を持つて参りました。ここで御召し替え頂きます」

「はあ……」

凄まじい剣幕からして、抵抗は無駄のようだ。悟つたイーゼムはあえなく連行され、退場となつてしまった。

気づいたら独り、部屋に残されてしまった。

準備することは特に無い。着替えも化粧も済んでいるし、足元の香り付けも終わっている。

大鏡に自分の姿を映し、次いで自分の背中を映して確認するも問題とおぼしき点は見当たらない。仕方ないので大人しく椅子に座り、どちらかが準備を終えるまで待つことにする。

しかし思ったほど時間の経たないうちにノックが鳴らされる。入つて来たのは、体にぴったり合う革ベストの男。

「馬車の騎手を勤めるフェイタスと申します」

名乗つた男は深々とお辞儀する。

「はあ……」

勝手にはいることを咎めようとしたエリザだったが、間髪入

れぬ対応に何も言い出せない。それでも彼女は次に思い浮かんだ疑問をぶつけてみる。

「まだ時間ではないと思いますが、何か御用でしょうか？」

「ははは、申し訳ない」

男は頭をかきつつ詫びた上で、式の主役を一目でいいから見たかったと説明する。

「見に来て良かった。本当にお美しい」

悪びれる様子さえ無いのは困ったものだが、ここまで丁寧だと無碍に追い払いづらい。エリザがそんな逡巡を抱えている間にフエイタスは彼女の側まで近寄る。

「ほら、鏡をご覧くださいませ」

言われるままにエリザは鏡を見る。鏡に映るのはドレスに身を包んだ自分だが、やはりまだどこか自分でないような違和感がある。

「もつと近づいて、よくご覧ください」

「はあ……」

特に疑問を感じるでもなく、エリザは全身が見えるぎりぎりの距離まで近付く。

「この堂々たる姿。百五十倍となれば、王都の城さえも踵の下に置くことになるのですね」

フエイタスが耳元で囁く。

「遮るものもなく、王都の全てを見渡せますよ。」

逆に街の全住民が、貴女の御姿を仰ぎ見るようになります」

巨大な自分の姿を想像しているのか、エリザは微かに顔を赤らめ無言で頷く。

「想像してください。あなたの御姿が街のあらゆる建物を圧倒し、空さえも統べるところを」

「想像してください。何万という民が、あなたの足元で歓喜する場面を」

間をおきながら、あくまでゆつくりと囁くフエイタス。エリザは鏡に視線を固定したまま頷くのみだ。

「この世界を統べるのに、これ以上相応しい方がいらつしやるでしょうか」

「民は待つています。美しく、気高く、そして圧倒的な力を持つ救世主の出現を」

「さあ、私と共においで下さい」

フエイタスが差し出した手に、エリザは自分の手を重ねる。その瞳は既に焦点を失っていた。

前触れもなく重い音が響き、微かな揺れと共に周囲が薄暗くなる。この異常事態に殆どの者が窓の外へと注目し、そして見た。ちよつとした納屋くらいの大さきを持つ、白いハイヒールの靴を。まるで仮装馬車のようなその靴は静かに浮き上がり、前方へ五間ほど進んでから再び重い音を立てて落ちる。

何が起こっているかは一目瞭然だった。呆然としている着付け師の隙を衝いてイーゼムは窓から飛び出し、聳える靴の前方へと走る。走りながら上を一瞥すると、淡いドレスの裾は二階の屋根より高く館に覆い被さるよう広がっている。さながら巨大な日傘で館全体に影を落としているようだ。

その日傘から逃れたところで立ち止まり、エリザを再度見る。彼女は無表情のまま前方のみを見ており、足下に気を払う様子さえない。それだけで普段と異なるのは明らかだが、更には肩の上に乗っている見知らぬ男。彼の関与は間違いないあるまい。

イーゼムは二三度深呼吸して息を整え、可能な限りの大声で呼びかける。

「おおい、どこへ行くつもりだ?！」

その声に、浮き掛けたエリザの右足が戻る。

予想外の事態続きに、エリザの肩に乗る御者は舌打ちするしかない。操心術を掛けて連れ出せたまでは良かったのだ

が、着せた外套が日除けの用を成さなかったのだ。等身大の連行に失敗した以上、大きさを生かして強引に逃げなければならぬ。

「こつちを向けよ、エリザ！」

また足元の若者が大声で呼びかけ、今度は巨人は彼のいる方向に首を動かす。

以前の術の作用もあつて掛かるまでは早かつたものの、短時間ゆえの解け易さは如何ともしがたい。もつと時間を使つてしつかり掛けることも出来たのだが、それは後の祭りだ。この場を何とか切り抜けなければ。

「目を閉じよ」

彼はエリザの耳元で命じる。言つてすぐに、目を閉じているかどうか今の位置から確認できないことに気付くも、彼は気を取り直して次の命令を下す。

「右足をあげて、小さめに一歩進め」

足場がゆつくりと左に傾く。言つた通り右足を上げているようだ。右足を彼女の尺度で一尺ほど前に出せば、煩い男のほぼ真上に来る。

「よし、もう少し前だ」

やや熱を帯びた口調で、彼は命じた。

「待て！」

イーゼムは頭上に向かつて叫ぶものの、迫る靴底は止まるどころか減速の気配さえ見せない。



「エリザ、よせ！」

もう一度叫ぶも反応は無く、イーゼムは仕方なく飛び退く。数瞬ほど遅れて小屋くらいある靴が彼の側に落ち、まずは重い音と軽い振動が、次いで砂埃や小石までもが飛びかかる。腕で顔を庇いつつ隙間から何うと、白い靴は地面に大きくめり込んでいる。深さは五寸ほどだろうか。女性らしい形状とは裏腹に凄まじいまでの重量感であり、踏まれたらひとたまりもないと確信させるに十分だ。

そんなことを考えているうちに、いつの間にか上げられた左足が彼の方に向かって伸びている。

「おわっ！」

情けない叫び声を出しつつもなんとか避けたイーゼムは、さらに二三歩離れて呼びかける。だが今度は思うように声が出ない。そこで彼は予め大きく息を吸ってから余裕を持って次の一步を避け、そして大声で呼びかける。

「俺だよ、イーゼムだ！　目を覚ませ！」

肩の上の男は足元の若者を苦々しく思いつつ、その反面で感心してもいた。催眠術もあって巨人の動きは鈍く、回避そのものは容易だ。だが小屋ほどもある巨大な靴に追い立てられ、死と隣り合わせの状況下で呼びかけを続けられるだろうか。

普通なら足がすくんで踏み潰されるか、諦めて逃げるはずだ。しかしこの若者は二回に一回を呼吸に専念することで

焦りを排し、絶望的な長期戦を切り抜けようとしている。惜しむらくは、語彙がやや貧弱ということだろうか。

改めて周囲を見渡す。巨人は小幅ながらじりじりと進んでおり、あと数歩で街道に出られそうだ。街道に出たら振り切ってしまう。巨人に絶望を植え付けるのはその後で良い。

一方のイーゼムは、呼びかけを続ける中で自分の声が小さくなっているのを感じていた。一つ間違えれば即死という極度の緊張と、一瞬の回避を挟んでの深呼吸と呼びかけ。心身ともに消耗しているのも確かだが、原因はそれだけではない。

(こんなに、怖かったなんてな……)

エリザの巨躯に対する恐怖が、心の奥底で徐々に形作られている。そのことに彼は気付いてしまった。

認めたくはない。

優しさを失わず、以前にも増して慎重に行動していることを知っているから。

「前と変わらないよ」と言ったときの表情を覚えているから。

巨人の孤独な心境を聞いているから。

だが頭の中でいくら拒んでも、生物の本能が感じる恐怖は拭いきれない。気付いてしまえば尚更だ。

足の動向から目を離すことが出来ず、吸った息がなかなか肺

に溜まらない。声を上げるために息を止める、その一瞬の空白を作り出す勇気が絞り出せない。

いつしか呼びかけも止まり、無言での回避が何度続いただろうか。エリザを注視しつつ動き回っていたイーゼムの視界が、いきなり上方に跳ね上がる。

石に足を取られたと気づいたのは、腰をしたたかに打った直後だ。仰向けに倒れた彼の視界には、エリザの靴底が映る。

魅入られたかのように目が離せず、貴重な数瞬を浪費してしまった。我に返ったイーゼムは慌てて後ずさろうとするものの、今度は足に力が入らない。

「くそっ！」

短い叫び声をあげ、イーゼムは腹と腕に力を入れる。殺されるのはもちろん嫌だが、それより彼女に人を殺めさせるわけにはいかない。腕を踏ん張って身を反転させ、さらに転がって逃げようとしたそのとき。

エリザの靴底が地面に触れた。

重い音と同時に、イーゼムの左腕へ激しい痛みが走る。

「う……あああ」

呻きながらも右手を突いて身を起こす。痛む左腕を見やると、肘から先が不自然に消えている。虚ろだった声は、事態を飲み込むにつれて絞り出すような絶叫に変わっていく。

どうにか立ち上がるものの、混乱に加えて片腕を失ったため左右のバランスを保てない。すぐにふらついたイーゼム

は、聳え立つ白い壁に倒れ込む。それでも自分の腕を潰した靴はびくともせず、彼の体重を難なく受け止めている。

出血著しい左腕を右手で力一杯に握り、イーゼムは顔を上げる。視界の左半分はエリザのそびえる右足で占められ、上方は幾重もの内布が重厚なカーテンのようにたなびいている。

(もう駄目かもしれんな)

彼は死を予感し始めていた。このままでは、いま見ている景色が最期になるかもしれない。

(……スカートの中で終わるかよ)

がつくりと項垂れるイーゼム。何とも情けない最期だが、案外自分には似合っているかもしれない。彼は持ち前の悪戯心で視線を再び上へと持つて行く。

そのとき不意に内布の列が右から左へと流れ始める。ついには彼のいる場所が日向となり、眩しい光の中に彼を驚きの目で見下ろすエリザの顔が現れる。

何かを踏んだ感触で浮かび上がったエリザの意識は、足元からの痛切な悲鳴で醒めた。燦々と降り注ぐ初夏の陽光、眼下には森と街道。突然の変化をエリザは理解できない。

いつの間に外に出ていたのか？

いつの間に大きくなっていったのか？

泡のように次々と浮かぶ疑問に、彼女の思考は硬直してしまふ。

しかしそのとき左足に何者かが触れ、そこから伝わる苦悶が彼女の混乱を消し去る。苦しんでいる者が居るなら、疑問より先にまず助けなければならぬ。

ドレスの裾を後ろに引くと、やはり左靴に男がもたれておりその側に血溜りがある。しかも自分のよく知っている人物だ。

「イーゼム？」

何故と思うが、悩む暇はない。尚のこと治療が先だ。反射的にエリザはしゃがんで彼を拾い上げようとすが、そのとき小さな悲鳴をあげて右肩から別の誰かが滑り落ちる。

「えっ？」

不意の連続に驚かされつぱなしのエリザだが、咄嗟にドレススカートを張つて男を受け止める。怪我が無いことを素早く確認すると彼女はスカートを傾け、滑り台のようにして地面へと下ろす。そして再び左足元へ向き直り、倒れているイーゼムを拾い上げる。

見れば彼の左腕の肘から先は無くなっており、右手で必死に出血を抑えているものの顔色は既に青白い。

「目が……」

覚めたのか？　そう問おうとしたイーゼムの力ない声を、エリザは遮る。

「すぐに治します」

早口でそれだけ伝え、魔力を集中させる。

魔力の浸透に伴い、赤黒い断面は肉色に変わっていく。傷が完全に塞がったところでエリザは一旦魔力を止め、掌上のエーゼムに話し掛ける。

「まず傷を塞ぎました。痛むところはありますか？」

イーゼムは何も言わず、やや間を置いて首を横に振る。

「では、これから腕を再生します」

そう言つてエリザは右手の人差し指を彼の消失した左腕に沿えるが、イーゼムは震えながら身を強ばらせたため、反射的に指を離す。

「ご、ごめんなさい」

即座に謝るエリザに対し、イーゼムは「ああ……」と曖昧な生返事で応えるのみ。

「痛みました？」

心配になつて尋ねても、

「いや……大丈夫だ」

どう考えても大丈夫と思えぬ弱々しい口調。加えて掌上の小さな体躯は先程から震えており、そこからの視線は微妙に自分の目から逸れている。

どうにもならぬ態度だが、それは腕を失つた落胆と自分に対する怒りが原因だろうとエリザは判断した。そういえば治療に必死で、腕を踏んだことも謝っていない。

「あ、あの……」

ぎこちない切り出しにイーゼムが反応したところで、エリ

ザは一気にまくし立てる。

「ごめんなさい。貴方を、踏んでしまつて。」

この腕は必ず治します。ですから腕がある時の意識を持つてください」

対するイーゼムはやや驚いたような表情で固まっている。珍しく理解に時間を要し、彼は少し時間を置いてようやく頷いた。

「わかつた、頼む」

そう言つて、彼は肘までしかない左腕を突き上げる。エリザはその腕を右手の親指と人差し指で摘まみ、目を閉じてイーゼムの意識に自らの心を重ねる。

集中に伴つて彼女の中に流れ込む感情は、イーゼムが変調した本当の理由を表していた。

軽い驚きとともにエリザは瞼を開き、掌上で固く目を閉じているイーゼムを見やる。原因は落胆や怒りではなかつたのだ。体の強ばりも、震えも。

彼女は再び指を離し、心話で語りかける。

(怖いんですね、私が)

聞いたイーゼムはかつと目を見開き、エリザを見据える。それは言えない。人一倍寂しがり屋の彼女には酷な言葉だと知っているから。急に迫られて引いた時の寂しそうな瞳を見ているから。

しかし必死で思考を巡らせても、今の状態を説明できる理

由は出てこない。

さまよう視線が再びエリザの目に合う。真つすぐ彼に向けられた瞳は、むしろ心の内を語らないことを悲しんでいるようだった。

それを見て、彼は隠すことを止めた。

(すまない)

言葉を慎重に選びつつ、ゆっくりと伝える。

(信じてはいるんだが、体が言うことを聞かないんだ)

エリザは一つ溜息をつき、寂しげな微笑みを返す。

(なに言っているんですか。謝るのは私のほうですよ)

肘で途切れた腕を見やり、そして視線を再び合わせる。

(貴方の腕だけでなく、心まで踏んでしまったのですから)

(ははは、巧いこと言うなあ)

イーゼムは笑い、エリザは彼の反応に目を見開く。手に乗る体軀はいまだ震えているというのに、それでも笑っている。

こんなに小さく、震えているのに、この前向きな姿勢と大概……相棒の強さを目にして、エリザの胸の奥が熱くなる。彼の勇氣に出来る限り応えたい。彼女は微笑みを――普段の優しく柔らかい笑みを浮かべ、想いをはつきりと伝える。

(必ず治します。貴方の腕も、心も)

彼女は目を閉じ、相棒の小さな体をそつと抱き締めた。

思い起こしてみれば、こうやってイーゼムを抱きしめるのは初めてだった。怯える患者を安心させるために鼓動を聞かせることは度々あったが、彼はそんな素振りを殆ど見せなかったからだ。急に手を持って行ったり、顔を近づけた時に驚くことはあった。だがそんな時も彼はすぐに照れ笑いを浮かべながら歩み寄ってくれた。そんなときも本当は恐怖と戦っていたのだろう。

今回はどうだろうか。彼の体から伝わる鼓動や呼吸は落ち着いており、震えも止まっている。

どうやら小さな勇者は恐怖を乗り越えつつあるようだ。これなら治療も出来る。安堵の思いでエリザは目を開け、掌中のイーゼムを……

「えっ？」  
思わず甲高い声を出してしまう。居るはずの小さな体が手の中に無い！

(どこに居るんですか、イーゼム?)  
うろたえ、辺りを見回すエリザ。返事は来なかったが、代わりに胸の間で何かが動く。

「ひゃっ！」  
突然のくすぐりに彼女は身を振り、ドレスの胸元を見下ろす。そこには何もないが、異物の挟まる感触から答えは明らかだ。

(どど、どうして貴方がそんなところに!)

急激に上昇した心拍が文字通り胸中にいるイーゼムを直接叩く。さつきまで青ざめていたエリザの顔は今や耳まで紅潮し、頭の中は真っ白だ。

(どうしてって、お前なあ……)

彼を胸に挟んだ本人が、しかもなぜ今頃になって気付くのか。突っ込んでやりたいのはやまやまだが、鼓動だけで十分すぎるほど焦りが伝わってくるから下手なことは言えなさそう。

(まあいい。今から出るぞ)

代わりにそう伝えて、イーゼムは左右の柔かい壁に四肢を突っ張る。そして手足に力を込め、胸の隙間から這い出ようとする。

だが彼にとつて想定外のことが二つ起こった。一つは予想より深く手足がめり込み、左腕が短い現状では体を持ち上げられないこと。もう一つは、エリザが反応して体をびくつと震わせたこと。彼女にとつては小さな動きだが、胸中のイーゼムには強烈な揺さぶりとなる。

(おわっ!)

驚いたイーゼムは更に力を入れて四肢を突っ張り、翻弄に耐える。エリザも奥歯を噛み腹に力を入れ、なんとか胸の違和感に耐える。

(お願いします。私が引き上げますから、動かないで下さい)

(あ、ああ)

絞り出すような声で懇願するエリザに対し、イーゼムは鷹揚(おうよう)に応える。普段揺れに酔わない彼も、今回ばかりは少し厳しいようだ。

まずは深呼吸を二度三度。相変わらず何か動く度に小さな体が胸に擦れるものの、くすぐったさにも多少は慣れてきた。そろそろ次の行動に進もうとエリザは意を決するが、そのとき不意に後ろから声が掛かる。

「ちよつといいですか、お嬢さん」

「は、はいっ?」

上ずった声で応え、彼女は振り返って下を見る。そこにいるのは、さっきイーゼムを呼びにきた着付師だ。名前は確かオーエンと言ったか。

「あの、私ですか?」

二人しかいないから答えは自明だが、切迫した状況に慣れない呼ばれ方もあつてつい問い返してしまふ。

「ええ、そうですよ。お嬢さん」

オーエンは単純に純朴さゆえの反応と解釈したのだろう、軽く笑いながらゆつくり言い含める。和やかな雰囲気のまま、彼は問う。

「で、イーゼムを見ませんでしたか?」

「えっ?」

急所を突く質問に、エリザは声を詰まらせてしまった。

もちろん答えは知っている。知ってはいるが『胸の中にいます』なんて言えない、絶対に言うわけにはいかない。

(といつても、どうぞまかせば……)

考えてはみるものの、良案は出て来ない。それどころか焦りが邪魔で思考は空回りするばかりだ。

(どうした?)

「どうされました?」

ほぼ同時に、イーゼムとオーエンが問う。

「いえ、あの……」

曖昧な言葉をどうにかオーエンに返す一方、イーゼムに心話で語りかける。

(オーエンさんが来ているんです、着付け師の)

(つてことは、俺を探しているんだな?)

(ええ)

(ああ。胸から出す訳にはいかんわな)

(当たり前です)

突っ込みながらも、エリザは相棒の素早い察しに安堵していた。心境の変化が顔に出ないように奥歯を噛む。

(じゃあ、記憶が途切れていた事にしよう)

(え、ええ)

小さく頷いてしまい、慌てて何か考えている振りで誤魔化す。

(で、どう言えば良いんでしょう?)

余りにも安直な問いに、イーゼムはかくんと項垂れてしまう。それで擦った髪の毛がやはりくすぐったかったのか、呼吸が途切れ周囲の柔壁が細かく揺れる。笑ってしまいうしろな位の混乱振りだが、本当に一杯一杯なのだろう。

(分かった。じゃあ俺の言うとおりに喋ってくれ。いいな?)  
今の彼女なら、変な台詞を伝えても素直に喋ってしまおうだ。何を喋らせれば面白いのか。

そんな考えを一瞬抱くものの、さすがに今は不味い。悪戯心を打ち払い、今度は真面目に考え始める。

長い沈黙を破って、エリザは声を出す。

「ええつと、すみません」

オーエンの視線が自分のところまで上がるのを待つてから話し始める。

「あの、ちよつと、記憶が途切れているのか……それが、うまく思い出せないんです」

「ふむ」

オーエンは頷き返している。小さすぎて彼の細かな表情を判別出来ないため本当に信じてくれているのかはわからないが、一度出した台詞を引つ込める訳にはいかなない。

「さつきまで、その、操られていたみたいで、恐らくは、その後遺症だと思わんですが……」

心話を聞きながら微妙に嘘の入った台詞を喋るため、口調がたどたどしくなるのは避けられない。だが幸いなことに、

内容からすればその方が自然ともいえる。

「では、分からないということですね？」

問うオーエンに、エリザは戸惑う様子を見せながら頷く。せつかく場を切り抜けられそうなのに、安堵を悟られては台無しだ。

「心配なので、少し探して来ます」

そう言つて彼女は立ち上がる。

立ち上がるとき、エリザは焦るあまり自分の尺度と体に密着している相棒のことを忘れていた。

今までにない急激な上昇と上下の揺れに対し、イーゼムは力の限り両肘と膝で柔壁を掴んで耐える。だがそれに耐えられなかったエリザは思わず目を閉じ、胸を押さえてしまう。

(う、動かないでください！)

(馬鹿！ お前が急に立つからだ)

怒気さえ孕んだやり取りも、オーエンの前には出せない。エリザは眉間に皺を寄せつつ、彼の方に向き直る。

「すみません。ちよつと、動悸が……」

「ん、大丈夫ですか？」

「ええ、まあ何とか」

心配そうに問うオーエンに、エリザはやや辛そうに微笑む。「それに、放つておけませんから」

少しだけ本音混じりの言葉を添えて彼女は街道の方に向き直る。足跡は王都の方向にしか無いため、そちらに向かうの

が自然だろう。

「では、なるべく早く戻りますね」

「はい。奴への説教も頼みますぞ」

笑いながら言うオーエンに会釈し、エリザは足早に歩き始める。

（我慢して下さいね、本当なら焦っているところなんですから）

（わかった。そっちもくすぐりたいと思うが、まあ許せ）

お互い、少し厳しい行程となりそうだ。

エリザが去った後も、暫くオーエンは彼女の後ろ姿を見送っていた。幅広のドレスが持つ迫力や大きさと、巻き起す風の量に少なからず驚いていたからだ。百五十倍となれば今の更に数倍。もう少し軽い装いの方が良かったのかもしれない。

エリザは街道を足早に進む。彼女の靴は道に深々と穴を穿つが、一步毎に胸の間で異物が擦っている状況では足元に余り気を回せない。半里ほど歩いたところで村の建物が森の木々に隠れて見えなくなったため、彼女は適当な広場に手持ちの布を敷いて座る。

「うあつ」

くぐもつた声と同時に胸中の小さな相棒が四肢を張り、反射的にエリザは二の腕で胸を押さえる。すぐに自分が何をしているか悟った彼女は慌てて力を緩める。

（だ、大丈夫ですか？）

（ああ、なんとかな）

エリザが尋ねると、幸いにも返事はすぐに来た。

（こんなところで死んだら洒落にやらんぞ）

余り元気な声ではないが、冗談を言う余裕はあるようだ。肌を通じて伝わる命の灯も少し弱っているようだが、胸から出した後でも大丈夫だろう。

（じゃあ、出しますよ）

そう言ってエリザは開いたドレスの胸元に右手の人さし指をそつと差し入れる。

（この指に掴まってください）

（あ、ああ）

応えるや否やイーゼムは体を反転させるためにもがき、そのくすぐったさにエリザは身を震わせる。

（わざとやってませんか？）

（そんなことは無いさ）

疑問に対し、意外にも真面目な声が返る。

ともかくにもイーゼムが人さし指に掴まるところでエリザはその指を自分の方に曲げ、小さな体を保持する。次いで彼女は左手の親指と人さし指で胸を押し広げ、右手をゆっくりと持ち上げる。

胸の中で散々暴れてくれた相棒に何と言おうか。引き上げる間にエリザはそんなことを考えていたが、左腕の半分を



失い右手と両足だけで掴まるイーゼムを見るとそんな考えは直ぐに消えてしまった。

(まずは、治療しますね)

そう言つて彼女は右人さし指の直下に左掌を沿える。

(わかつた。頼む)

意図を理解したイーゼムは左掌に降り、エリザの方に向き直つて座ると左腕を彼女に突き出す。肘で途切れた小さな左腕が痛々しい。

(はい)

エリザは右人さし指の腹で彼の左腕を下支えする。小さな体はもう震えてなどおらず、表情にも恐怖の色は無い。嬉しいことではあるが、喜ぶより治療が先だ。

(では、貴方の左腕を意識してください。腕があつたときのように、動かす感じで)

そう伝えて目を閉じ、イーゼムの意識に心を集中させる。

高度な術のため多少の時間を要しつつも、エリザは心眼を通じて彼の霊体を視ることができた。霊体にはしっかりと左腕がついており、左手を握つたり開いたり、腕を曲げたり延ばしたりしている。

これなら大丈夫だ。彼女は今度こそ安堵した。イーゼムは左腕の感覚を十分に覚えており、しかも落ち着いている。彼の意識に心を重ねつつ、エリザは心話でゆっくりと言霊を紡いでいく。

イーゼムの腕と袖は肘の先からゆっくり伸び、ついには指先の爪まで完全に復元された。再生した左手を上げしげと見つめながら、彼は左手の指を動かしたり右手で掴んでみたりしている。

「凄いな。いち……」

一時は死ぬかと思つたんだが。その台詞の意味に気づいた彼は、慌てて口を閉ざす。しかしエリザの方を見上げると、彼女は控えめながら問うような視線を投げかけており、沈黙で通せそうにはない。観念したイーゼムは悪戯っぽい笑みを浮かべて無言の問いに答える。

「ああ、一時はどうなるかと思つただけだな。いろいろな意味で」

(い、色々な意味で、どういう意味ですか)

反駁しつつも先刻のことを思い出したのだろう、エリザの頬がほんのり赤くなる。

「んー、言つて欲しいのか。それは仕方ないなあ」

勿体付けて言うと、今度は少しだけ恨めしそうな目で俯く。表情が出やすいから、弄つて飽きない。イーゼムは笑いながらエリザの様子を見ていたが、弄つて終わりに出来ないことも判つていた。

「まあ、正直死ぬかもしれんとも思つたよ。怖かつた。

だけど今は、逆にお前が今まで気を使つてくれていたんだと思つてるよ」

正直に話し、すかさず追補を入れる。焦って言い過ぎたせいかエリザはしばし瞬きをするのみだったが、意味を理解するにつれて悲しげに目を細める。

(そうですね……本当に、ごめんなさい)

そう言つて頭を下げるエリザ。危うく殺しかけたという事実の重さを改めて認識したのだろう、その瞳は不安と悲しみを湛えている。

「まあ気にするなよ。腕ももう大丈夫だしな」

(でも、痛かつたのでしょうか？ それに心の方も、大丈夫なんですか?)

「ああ、まあ終わったことだよ。痛い以上に良い思いをしたしな」

前半の質問にイーゼムが笑つて答えると、エリザは先刻の騒動を思い出したのか顔を赤らめる。本当に反応が読みやすい。

「心の方は、うん、そうだな」

(『『そうだな』って])

後半への反応は歯切れが悪く、すかさずエリザは突つ込む。

(案内役として私のすぐ足元に来るわけでしょうか?)

彼を踏み潰しそうになつた靴が、本番では今の数倍の大ききで聳えることになる。彼の心はその状況に耐えられるのか、もし耐えられなかったらどうなるのか。

「ああ、それなんだが」

イーゼムは領きながら低い声で呟く。恐怖を完全に払拭できたか、案内役をこなせるかと問われると、答えは否だ。

(じゃあ、その、代わりの人とか……)

おずおずと出すエリザの案を、イーゼムは即座に手で制する。

「いや、予行演習で何とかしたい」

(予行、演習?)

言葉の意味を掴めないエリザに対し、イーゼムは噛み砕いて説明する。心の奥底に残つた恐怖は、おそらく自力でしか克服できない。だから今ここで、式典の案内役と同じことをやつて慣れておきたい。

そこまで説明してやつとエリザは領くが、不安そうな表情は変わらない。

(わかりました。ですが、絶対に無理はしないでくださいね)

今日成功しなかったら、明日挑戦すれば良い。それが駄目でも明後日がある。しかし失敗のしよつては、心の傷がずっと残る可能性がある。そうなつてしまうと挑戦そのものができない、終わりだ。

(一月でも一年でも、私は待ちます。だから、無理だけはないと約束してください)

説明するうちにエリザの眼光は真剣さを増し、瞳も潤み始める。そこまで真摯に考えてくれることが、イーゼムには嬉

しかった。

(わかった、約束するよ)

多少の間を置いてから、彼は重々しく頷く。

イーゼムを爪先の前に降ろしてエリザは立ち上がる。そうしてスカートを後ろに引くと、辛うじて彼の焦色の頭だけが見える。一步、二歩とゆっくり歩み寄るイーゼムを、彼女は無言のまま見守っていた。

「やっぱり、大きいよなあ」

爪先を目前に出す声は、驚嘆の中に僅かな震えを含んでいた。エリザは普通に立っただけなのに、細かな体重の動きを受けて地面は悲鳴と共に歪んでいる。冷静に観察しても巨躯の持つ存在感は圧倒的で、魂さえ揺さぶるかのようだ。イーゼムは靴まで僅か三尺のところに居ながら、最後の一步を踏み出すことが出来ない。

間合三尺を置いての逡巡がどれだけ続いたか。迷ったイーゼムが何となく上を見ると、彼を見下ろすエリザと目が合う。

彼女は何を言うでもなく、自分の方を見ている。その表情や眼差しは『ずっと待ちますよ』と暖かく見守っているようでもあり、『無理はしないで下さい』と心配しているようでもある。

イーゼムは一旦正面へと向き直り、そしてエリザの表情を見上げる。そうやって視線を往復させながら、彼は頭の中

で繰り返し念じる。この二つは同じだ、聳えるこの靴も彼女の一部分に過ぎない。だから恐れる必要など無い。

五往復はしただろうか。ようやく意を決したイーゼムは、前に一步踏み出して右腕を勢いよく突き出す。ほとんど殴るようにして彼は靴に触れた。

触れるや否や、心話の音が彼の頭に響く。

(どうです？ 大丈夫ですか？)

気遣う声は暖かく、強ばっていた肩や腕から自然と力が抜けて行く。余りの呆気なさに、イーゼムの顔には自嘲的な笑みさえ浮かんでしまう。そう、触れるだけなのだ。こうやって触れるだけの、ちよつとした勇気さえあればよいのだ。

(大丈夫だよ)

イーゼムは上を向いてゆっくり答え、今度は両掌をしっかりと靴にあてなおす。

(触れば分かる。だから、大丈夫だ)

その口調は自分に言い聞かせるようでもあったが、十分に力強いものだった。だからエリザはそれ以上問いただすことをせず、代わりにゆっくり頷く。

(じゃあ次は、俺の前に右足を降ろしてくれ)

そう言ったかと思うとイーゼムは速足で三間ほど前に出る。

(はい)

言われた通り、エリザはゆっくり右足を持ち上げる。その足を彼女の感覚でいえば四寸強、足の長さの半分ほど前に出

し、そして慎重に降ろす。右足へ体重が移るのに応じて柔らかな地面は沈んでいき、それが止まったところで重心を……

(やつぱ、でつかいなあ)

(えっ?)

いきなり聞こえた心話の声に、エリザは色めき立つ。重心移動中なのに彼が靴に触れているからだ。

(ちよ、ちよと待って下さい。いくらなんでも早すぎます)

(ははは、悪い悪い)

きつめに注意するが、全然堪えていない。

(これの何倍かだろ。慣れておかないとな)

そういう話なのだろうか。疑問に感じつつも反駁できず、エリザは大きな溜息を漏らすのみだ。

(その口調なら、もう大丈夫ですね)

(ああ。ただ……)

皮肉っぽく言っても内心の嬉しさを隠せないエリザに対し、イーゼムは語尾を濁らせる。

(ただ?)

(式の中でも、こうやって触れて良いかい?)

イーゼムの要望に、エリザははっと息を飲む。さっき彼が妙に素早く触れてきた理由が判ったからだ。

(もちろん、構いませんよ)

親指を動かして彼女は答えた。

(あとは、そうだな。ちよと遠くの方を見てくれないか?)

(え? あ、はい)

目が合わなくても大丈夫かどうか確認したいのだろうか。そう推測したエリザは特に疑問を抱くこともなく正面へと向き直る。

しかし予想に反して、イーゼムからは残念そうな声が返ってきた。

(あー、見えないんだなあ)

それを聞いたエリザは慌ててドレスの裾を押さえる。内布を巡らせているから見えないと聞いているが、だからといって覗いていいわけではない。

(見えないって、何がですか)

強い語調で問い詰めるものの、イーゼムは意に介さない。

(答えは知っているだろう。知らない振りは良くないな)

平然と返し、更に畳み掛ける。

(あー、あとそれから。しゃがむ時は裾を巻き込まないと駄目だぞ)

(……)

顔を紅くするエリザと、それを見て笑うイーゼム。左腕を踏まれたことに対する、彼の小さな仕返しだった。

式典の参加者を掌と前腕に乗せ、エリザは王都への道を進む。

本来は馬車で王都まで移動し、そこで巨大化する手筈だった。しかし時間が押している上に、今のエリザはどう身を折っても馬車に入らない。

「ちよつと、驚きに欠けるのよねえ……」

難色を示したのはハンナだった。曰く、通用門の半分もない五尺（一五〇センチ）余りの少女が市壁さえ踝の下に収める八十丈（二四〇メートル）まで一気に大きくなるから面白いのだと。

そこで可能な限り小さくなってみたが、そうすると今度は掌に全員を乗せることができない。

「折角の大きさですから、一人か二人胸にでも挟んで行きましょうよ」

ハンナの提案は当然ながら却下。結局、腕の上に乗せることで対応した。

王都の西門までは馬車で半刻の道程だが、エリザはその半分以下の時間で進む。城壁の上にはグランゼルが立っており、何やら両腕を振っている。何か言いたいのだろうと思つたエリザは右掌上の人々を左前腕に移し、聴力を彼に集中させる。そして耳に右手を当てて領き、聞こえていることを示

す。

「どうしたんだ。手筈と違うから皆驚いているぞ」

届いたグランゼルの声は、幾らかの緊迫を含んでいる。既に彼女の姿が城や市壁、見張塔からは見えているらしい。

「そ、そうなんですか？」

こめかみの辺りを掻きながら応えるエリザ。少し大きくなったけどという感覚で居たのだが、重要な式典だけに何かあつたと思われているらしい。いや実際に何かあつたのだが、いまま本のことを言うとは混乱を招くのは明らかだ。

（うーん、何と言いましようか？）

左腕の面々に当たり障りの無さそうな理由を問う。そして幾つか返ってくる案の中で最も妥当と思われる解を選び、照れ笑いと共に返す。

「すみません。支度で遅れてしまつて、それを取り戻そうと思つたんです」

幸いにも西門は少し高く作つているため、街の中から彼女の姿は見えていないらしい。エリザはここまで連れて来た人達を地面の上に降ろし、彼らが十分に離れたのを確認してから市壁に向いて頷く。

彼女の視線を受けてまず西門にある鐘が鳴らされ、追従するように方々の鐘が鳴らされ始める。そうして式典の始まりを告げる幾重もの鐘の音が街中に響き渡つた。

エリザは目を開けたまま、最大限まで大きくなった自身を

念想する。演出と安全のため、出来るだけゆっくりと大きくなるよう言われていた。

巨大化の開始とともに鐘は止み始め、最初は壁に阻まれて見えなかった街が北の港から徐々に見えてくる。

「あ、見えた見えた！」

聞こえてくる無邪気な声に、つい微笑がこぼれる。大きくなるにつれて歓声は彼女の足元に下り、代わって街の奥からはより具体的な会話が聞こえてくる。

「どれだけ大きくなるんだろう？」

「噂では八十丈らしいけど」

「八十丈ってーと、ここからあの広場くらいあるぜ」

しかしそれは距離の話。高さで八十丈というのはちよつと想像しづらいだろう。

街を見る限り彼女より背の高い建物は既に無く、市壁は膝より低い位置にある。壁の高さは五丈（十五メートル）と聞いているから、今の身長はその四〜五倍といったところか。街や村に滞在する間は十から十五丈の大ききで居るため、既に彼等が普段見ているより大きくなっているはずだ。

「まだ大きくなるぞ」

「凄いなあ」

「どこまで大きくなるんだろう」

わずかに始めた不安の声はエリザにとっても心配の種だが、まだ街からの声は好奇心と感嘆が主だ。

ドレスの裾が西門を傘下に収めても、中央広場と城が見渡せるようになっても、不安こそあれどそれが恐怖にまで高じた声は無い。

ついには視界の変化も収まり、巨大化の終了を確認したエリザは今や足元にある城に向かって頷く。その合図に応じて城の鐘が一度だけ鳴らされ、残響が引くと今度は拍手が城のテラスから聞こえ始める。拍手は城から広場へ、広場から道を通じて広がっていく。

その様子をエリザは目を丸くして見下ろしていた。拍手で迎えるとは聞いていたが、ここまでの規模とは予想していなかったからだ。彼女は不意に、山を最初に越えた時のことを思い出す。バラムで受けた反応は恐怖と猜疑に満ち、結局何も出来ずに泣く泣く帰らざるを得なかった。それから一月半、今や拍手は街中に広まっており、殆どの住民が彼女を祝福している。

喜びが彼女の心に染み出し、急に胸が熱くなる。

「あれ？ 泣いてる？」

「ほんとだ」

「おーい、どうしたんだー」

気づいた時には既に涙が頬を伝っていた。慌てて指で拭くものの、心配してくれる声が嬉しくてなかなか止まってくれない。なのでエリザは上を向いて何度か深呼吸し、落ち着いたところで街へ向き直る。そして満面の笑みを浮かべ、

この大きさでは始めてとなる声を発する。

「すみません。皆さんの歓迎が余りに嬉しかったもので、ついでに」

エリザの震えた声が街中に響き渡ると、先より大きな拍手と歓声が街から沸き上がる。市壁を蹀、城でさえ脛より低い位置に収める巨人に対しての不安も、彼女が流した涙とその理由を聞いて霧散していた。

だがそのおかげで、エリザは更に嬉し涙が込み上げて来るのをどうにかして抑えなければならなかった。

「ありがとうございます、皆さん」

心からの感謝を伝え、彼女は街に対して深々と一礼する。それに伴って小さな丘ほどもあるドレスの裾が一斉に動き、ラベンダーの香を含んだ突風が西門一帯を走る。

「あつ！　だ、大丈夫ですか？」

慌てて尋ねると、問題ない、大丈夫という声が直ぐに返る。良い香りと言ってくれる人まで居るのが何とも心憎く、また嬉しい。念のためざっと見て確認し、今度はゆっくり街に向き直ったエリザは万感の思いを込めて言い切る。

「ありがとうございます。私はいま、本当に幸せです」

三度、拍手と歓声が上がった。

頃合いを見てエリザは歓声を手で軽く制する。それから自己紹介と挨拶を……

(挨拶?)

はたと疑問を抱き、そして迷う。

喋る内容を忘れたわけではない、しっかりと記憶している。だが今ここで決まり切った自己紹介やら挨拶に戻るのには、余りに継ぎ接ぎではないか。

だが、ここで止まったままというのは更に良くない。妥協案として、決まりきった挨拶は短く収めることにした。

「念のため、簡単に自己紹介させて頂きますね」

そう切り出してエリザはドレスの裾を摘み、左足を引いて軽く屈む。一応お辞儀の積もりだが、街の人からどう見えているだろうか。そんなことを考えながら簡単な自己紹介を始める。

「私はエリザートランド。この東にあるリーデアルド出身の、とても幸せな治癒術師です」

街の至る所で笑い声上がる。この大きさでは人々との距離も遠く感じてしまうのではないか、また大勢の前で喋るから緊張するのではないかと思っていたが、どちらも杞憂のようだ。

「今日はこれから楽隊の方々について西通を中央広場まで歩き、それから左に折れて港大通りを進みます。」

これらの通りからは靴しか見えませんが、何より危険です。見物の皆さんは少し離れた通りから……」

言い終わらないうちに、先ほど示した沿道にぞろぞろと人が集まって来ている。

伝えた内容とは真逆の行動に、エリザは思わず溜息をついてしまう。

「あのう」

腰に手を当てて身を乗り出し、彼女は低い声で話しかける。

「私が言った意味は、理解できますよね？」

その声は町中に響き渡り、人の流れは瞬時に停止する。

素直に止まってくれたのは良いが、少々脅かし過ぎたのだろうか。そう思ったエリザは軽く一呼吸の後、明るい声色で続ける。

「怪我をされた場合は、式の最中でも対応致します。ですが、ご覧の通りの大きさと装いですので、平時のような対応は出来ません」

返事はないが、鎮く声が至る所から出ている。話を聞いてくれているなら大丈夫そうだ。

「ですので、くれぐれも慎重な行動をお願いします。特に、下から覗こうなんて絶対にしないでくださいね。色々な意味で困りますから」

「うん！」

「わかった」

「気をつけるよ」

そう返しつつ、人々は再び大通りへと歩みを進める。

余りにも堂々とした反目に、一瞬だけエリザは自分の言っていることが何か間違っているのではないかと疑ってしまっ

た。慌てて記憶をたぐり問題が無いことを手早く確認した彼女だったが、注意するにも切り出す台詞が見つからない。軽く眉間に皺を寄せたまま、人の流れをつい凝視してしま

う。

「どれだけおつきいんだろう」

「そりやあ大きいさ。八十丈だぜ」

「凄いなあ」

目に入ったのは、そんな言葉を交わす楽しそうな人々。つまり彼らが大通りに出ているのは、エリザの巨軀を間近で見たいからのようだ。

無邪気な理由だと解れば怒る気も失せてしまう。一つ溜息をついたエリザは少しだけ困ったような曖昧な笑みを浮かべつつ、何も言わないことにした。

式典の挨拶としてはもう十分だろう。エリザはドレスの裾を後ろに引き、足元の楽隊を見下ろして鎮く。合図を受けた楽隊が高らかにファンファーレを鳴らすと、呼応するかのよう周囲から歓声が上がる。本来なら盛大な式のはずだが、上から見ているエリザにとって百五十分の一という縮尺で繰り広げられるそれは滑稽にさえ見え、思わず微笑がこぼれてしまう。

ファンファーレが終わると別の部隊が現れ、手に持った縄で群衆を制して靴の置き場所を確保し始める。とはいえ既に通りは人で埋め尽くされており、部隊と群衆の間でちよつ



とした押し合いになつてゐるようだ。

「そこまで広げなくても良いだろう」

「馬鹿、踏みつぶされるぞ！」

そんな問答まで耳に入り、原因となつてゐるエリザとしては反応に困つてしまふ。だが仲裁するよりも足を置いて安心させるのが先決だと思ひ直し、左右の足に神経を集中させる。

まずは重心を少しずつ左足へと移す。土の地面は彼女の体重を受けてより深く沈んでいき、沈下が止まったところで右足の踵を浮かせる。爪先だけが地面に付いた状態で一旦停止し、足元に声をかける。

「それでは、足を入れます」

若干声が高いのは緊張のせいか。一呼吸置いて右足をゆつくりと踝の高さまで持ち上げ、頭を左に傾けて右踵と市壁を注視しつつ足を前に運ぶ。とはいへ超えるべき市壁の高さは彼女にとって僅か三寸余り、普通に歩けば踵を当てる方が難しい位だ。

靴底が壁を越えると、街中の群集から一斉に感嘆の声があがる。彼等から見れば爪先だけで一区画の半分は踏み潰せそうな靴底が突然表れたのだから、無理からぬ反応だろう。彼等の驚嘆と若干の恐怖を含んだ視線はきつと釘付けになつてゐるはずだ。

「落ち着いてくださいな。まずは踵から下ろします」

エリザは努めて優しく諭し、踵を下にしてゆつくりと降ろし

ていく。踵の先は細いので死角も少なく、部隊が確保した足形領域の踵部分に安心して降ろすことが出来る。

石の潰れる音と共に踵が地に着くと、エリザはそこを支点として残りの部分をゆつくりと降ろしていく。どうやら爪先の方は部隊の確保した足型に収まりそうだが、靴底の後側が死角となつてゐるため着地させることが出来ない。

「すみません、足の裏は大丈夫でしょうか？」  
尋ねてみると、土踏まずの下に居る兵士が大きく両手を振つて応える。大丈夫だと言つてゐる様に聞こえるが、今ひとつ確信を持ってない。

逡巡してゐると、男は彼女の方に向かって走り始める。何をやるのだらうと思いつつ見守るエリザの眼下で彼は彼女の踵まで動き、腕を突き出して触れる。

(大丈夫だ！ そのままゆつくり降ろしてくれ)

聞きなれた声が突如流れ込んで来た。

(イーゼム。貴方だったんですね)

(ああ)

問えば返事が来る。当たり前のことだが、彼女にとっては新鮮であり、また心落ち着く反応だった。事実、まともに会話をするのはこの大きさになつて初めてである。

(あれ、伝わつてないかな。下ろしても大丈夫だぞ)

(えっ……ああ、はい)

感慨に浸つてゐる場合ではない。エリザは意識を足元に戻

し、つま先を徐々に下ろしていく。

そして着地。ただの一步とはいえ、この大ききで初めて街に入った一歩だ。エリザはほっと一息つき、脚に寄せていたドレスを放す。裾はふわりと前に戻り、淡い色の生地が足元の群衆を遮る。それに応じて彼等から小さな声が挙がったので、疑問に思った彼女は尋ねてみる。

(何かありました?)

(いや、特に問題はないよ)

答えがすぐ返るといのが嬉しい。ドレスの裾が空を覆い、次いで香を含んだ涼しい風が吹いたので歓声があがったのだという。

(それにしても、大きいよなあ)

改めて感慨深そうにイーゼムが言う。

だが彼は、ついさつきまで自分の大ききに震えていなかったか。ふと思いつき出したので、エリザは問うてみる。

(それより、今はもう大丈夫なんですか? 怖くはありませんか?)

(ん? ああ、平気だよ)

朗らかな声が即座に返る。

(触れればわかる。だから怖いことなんか無いさ)

(そうなんですか)

あたかもそれが当然と言わんばかりの口調なので、拍子抜けしてしまう。だが、一つだけ伝えなければならないことが

あった。

(ありがたい、本当に貴方が無事で良かった)

(あ、ああ)

イーゼムの返事は、少しだけきこちない調子だった。

エリザにとつてもう一つ関心は、自分がどのように見えているかだ。そのことをイーゼムに尋ねてみると、少し間を置いて説明が始まった。

彼の傍らにあるヒールは高さが四階の窓より上にあり、太さは根元の辺りで一尋半。上に行くほど太くなるから威圧感が凄いのだという。石畳は五寸ほど沈められ、土が彼の頭の高さまで付いている。靴裏が作るアーチも堂々としたもので、普通の家なら一軒丸々入りそうな大ききらしい。

(うん。まあ、でっかい建物みたいだったのが正直な感想だよ)

そう言ったイーゼムは、すぐに次の句を継ぐ。

(それでいて普通に会話できるんだから、不思議だよ)

(そうですね)

エリザの返答に悲観の色は無く、むしろ嬉しそうだ。なので安心してイーゼムは実況を続ける。遙か上にあるドレスの裾は建物に囲まれた空の殆どを覆っており、この一帯に柔らかな影を作っている。中には幾重もの内布が展開し、その奥は陰になって見えない。

(前も言ったが、守りは堅いな)

(当たり前です！)

少し強めに言っても、イーゼムは悪戯っぽく謝るのみ。そして別の話を切り出す。

(あと、縄の中に入りたいて奴が多いんだ。入れても良いかい？)

(縄の中、ですか？)

(ああ。ええと、俺らが縄で確保した中な)

つまり部隊が確保した領域を開放しろと周囲からせつつかれているらしい。

(うーん。流石に危険だと思っんですが)

(だよなあ)

じゃあ断ろう、本人の言なら角も立つまい。そう伝えようとした矢先にエリザは続けて言う。

(でも、直接話を出来る機会でもありませんし)

(そ、そうか？ いやまあ、確かにそうだが)

意外な発言に、イーゼムは僅かながら狼狽してしまう。危険だからと言ってあっさり断ると思っていたのだが。

(だけど、大丈夫なのか？)

(大丈夫ですよ)

珍しく動揺したイーゼムの様子が可笑しくて、エリザの声に笑い混じる。たまには普段と逆のやりとりも悪くない。

(今から右足に体重を掛けます。それが終わったら入って

貰って下さいね)

そう伝えてエリザは右足に体重を移していく。石の碎ける乾いた音が微かに聞こえるものの、自ら補強した石畳だけあつて沈む感覚は殆ど無い。右足の前後左右へ念入りに重心を移してから、再び足元の相棒に語りかける。

(はい、終わりました)

しかし返事は無い。これもまたイーゼムの反応としては珍しいことだ。

(どうされました？)

再度問うてみると、多少の間を置いてようやく返事が来た。

(どうしたって、お前よう……)

その途切れ途切れな口調は、心話なのに息が上がっているかのように聞こえる。流石にただ事ではないと感じたエリザは、彼の説明を待つことにした。

右足に体重を掛けると言うや否やアーチ全体が悲鳴を上げるように軋み、聳える白柱が沈み込む。膨大な体重に圧迫される地面と靴の音、石の割れる音がそこかしこで不協和音のように鳴り響き、彼を含め周囲の全員がただ見ていることしか出来なかつたという。幸い割石が飛ぶことは無かつたが、石畳にも関わらずかなり沈んでいるらしい。

(す、すみません)

エリザとしては謝るしかない。右足に体重を掛けるということを彼以外に伝えていなかったのは軽率だった。

(他の皆さんにも伝えますね)

そう言つて、エリザはゆつくりとドレスの裾を後ろに引く。足元では彼女の靴から指の幅ほど隔ててぎつしりと人々が立つており、その色が素早く変化する。不意に日が差したため一斉に上を向いたのだろう。

「驚かせて申し訳ありません」

エリザは頭を下げながら、出来るだけ穏やかな声で語り掛ける。

「右足を安定させるために、先ほど体重を掛けました。ですので、今から右足を上げるまでの間は、来て頂いても大丈夫ですよ」

そう言つて足元に微笑みかけると、部隊が確保していた領域は群集に押されるようにして狭まっていく。

ただ彼等は側まで寄つたところで止まり、そこで立ち尽くしているようだ。おそらく靴の大きさに圧倒され、次にどうして良いか判らないのだろう。エリザはそんな様子を愛おしく思う半面、自分の希望を伝える良い機会だと考えた。

「もし宜しければ、私の靴に触れてみて頂けませんか？」

そう言つて、エリザは足元が反応する前に早口で台詞を継ぐ。

「そして、私に伝えたいことを念じてください。そうすれば皆さんとお話出来るんです」

一度に言い過ぎたせいかな、最初の反応までは二呼吸ほど

の間があいた。心を澄まして聞くにはやや長い時間だ。

(え、えつと。こん、にちは)

やつと聞こえた心話の声は甲高く、明らかにそれと解るほど緊張していた。大体こういう時に先陣を切るのは子供なのだ、初々しさが何とも可愛いくてつい笑みが漏れてしまう。

(こんにちは)

心で返すと、靴の側に居た一人が頭を跳ね上げる。

(あらあら、そんなに驚かなくても)

優しく諭したつもりだが、その少年は興奮した様子で周囲になにやら捲し立てている。彼の宣伝が効を奏したのか、直ぐに色んな人の声が聞こえてくる。

(すげーっ！ すごいよ！)

(これ、本当に聞こえてるのかな)

(靴だけでこれって、凄いなあ)

(聞こえますか?)

(ねーちゃん、でつかいなあ)

(高い高いしてー！)

(聞こえてたら手を振って！)

雪崩れのような声の重畳。それは群集までの八十丈という距離が一気に縮まった瞬間だった。エリザは突然増えた声への驚きと、自分が祭りの中にいる幸せを感じずにはいられない。

(ありがとう)

喜びと困惑の混ざった、どうにも微妙な笑みを浮かべて彼女は言った。

(でも、ごめんなさい。皆さん一人一人に答えるのは難しそうですね)

ただ一つ例外があり、これは声に出して言う必要がある。

「それから、今日は『高い高い』は駄目ですよ」

エリザの宣言に対し、街の至る所から「えーっ！」という落胆の音が返る。その大きさには苦笑を禁じ得ない。

「みんなを高い高いしてたら、日が暮れてしまいますよ。だから、だーめっ」

立てた人差し指を左右に振る姿と諭す声は街中に届くが、子供たちも声量では負けていない。

エリザは特に嫌がる風でもなく、むしろ状況を楽しんでいた。子供たちは遊ぶことに関して譲らないから手を焼かされることも多いが、すぐに懐いてくれる彼等には何度も心を救われている。

「じゃあ今度、この大ききで遊んであげる。それで良いかな？」

(今度ついていつ?)

提案しても、足元から直ぐにつっこまれる。こういうときの早さには感嘆するしかない。少し考えてからエリザは言う。

「じゃあ、明明後日と弥明後日。それでどう?」

そう言う、不満の声は歓声と拍手に一転する。今度の条件

には満足したようだ。

どうか一歩を踏み出し安堵するエリザの足下前方では、次の足置き場が確保されつつある。門前広場の一步目と違って道幅の余裕が少なく、通りから完全に人を追い出すのに手こずっているようだ。

(そういえばこの、踵に触れる方法な)

思い出したかのようにイーゼムが切り出す。その声は周りの民衆より幾らか大きく、またはつきりと聞こえる。

(グランゼル様と爺さんにも伝えて貰ったよ。だから踵を下ろしたら、一旦止まってくれ)

(はい)

足場確保の部隊は発着地と軸足で三班にわかれ、案内役としてイーゼム・グランゼル・ローンハイムの三人が付く。彼等も同様に案内してくれるなら心強い話だ。ただ、仮にも領主たる人物を案内役として使うことには、どうしても違和感が抜けないが……

(ははは。面白いことを気にするなあ)

イーゼムは笑いながら答える。

(今回はお前が主役だから構わないってよ。ドーセ城のテラスも足首より低いだろ、威厳も何も無いって)

(いや、うーん……)

エリザは反論できなかった。ヒールの先から踝までは五寸ほどあり、百五十倍すれば七丈半(二二・五メートル)にな

る。確かに彼の言う通りだった。

どうやら準備も終わったようで、グランゼルの旗を振って合図を送る。エリザは彼に頷いて返し、それから足元の群衆を見て軽く頭を下げる。

「ごめんなさい。これから動きまますので、少し離れて下さいね」

彼女の言葉を聞いて、右足の群衆は少しずつ靴から離れ始める。指幅ほど開いたところでエリザは左足の踵を上げ、軽く振って土を落とす。今度は市壁を目視できないので、十分な高さまで引き上げてから前に出す。

壁の遙か上を越えた左足は右足よりも前、新しく確保された足場まで進み、踵部分のみ着地する。そのまま静止していると、グランゼルが踵まで寄って触れる。

(あー。これで聞こえるのかな?)

(あ、はい。聞こえました)

程なく心話の声が届いたので、エリザは頷いて返す。

(おお。なるほど、これは巧いな)

グランゼルのいつになく感嘆する様子が妙に可笑しくて、つい笑みがこぼれる。

(では、靴裏には誰も居ないから安心して下ろしてくれ)

(はい)

すぐにエリザは真顔へと直って頷き、ゆっくりと爪先を降ろし始める。

しかし彼女はすぐに足を止め、爪先からグランゼルに視線を転じる。

(あ、その前に一つ)

(うん?)

見上げたところで彼女は微笑み返し、会釈する。

(よろしく、お願いします)

不意の挨拶に、グランゼルの表情が緩む。巨軀に似合わぬ初々しい礼儀正しさが滑稽で、また安心できたからだ。

(こちらこそ宜しく。大きなお嬢さん)

含ませるようにゆっくり言うと、エリザは僅かに頬を赤らめて目を反らす。この呼び方にはまだ慣れていないようだ。

再び動き出した爪先は程なく着地し、足元の観衆から声が上がると、どうやら張られた縄に手を掛けて解放を心待ちにしているようだ。そんな彼等を微笑ましく思うものの、解放にはまだ早い。

「これから一度体重を掛けます。もう少しだけ待って下さいね」

エリザはそう言うってはやる人々を制し、踵のグランゼルにも心話で注意を促す。

(グランゼル様も、少し離れていて下さい)

彼が踵から離れるのを待ってからエリザは左足に少しずつ体重を掛ける。その上で前よりも慎重かつ念入りに重心を動かし、地盤が概ね固まったところでグランゼルに視線を

向ける。丁度グランゼルも見上げているところで、彼は素早くエリザの踵に触れる。

(いやあ、イーゼムからさつき聞いてはいたんだが……) やや興奮した口調で彼は切り出す。

(本当に凄い重さなんだな。いやあ、驚いたぞ)

感嘆しきりといった口調で言いきられ、エリザはうなだれてしまった。彼女の全体重を間近で見ているのだから仕方ないとはいえ、それはあんまりだ。

(そんな、感心したように言わないで下さいよう)

(ん？ ああ、確かにそうだな。すまない)

抗議を受け、慌てて謝るグランゼル。その反応に、軽口だと思っていたエリザもまた逡巡しよう。

(あ、い、いえ私こそ……申し訳ありません、差し出がましくて)

(ああ、うむ)

鷹揚な返事。一呼吸の間を置いて彼は言葉を継ぐ。

(もう入って貰っても良いんだな?)

(え、ええ。そうですね)

エリザが答えると、グランゼルは更に一言加える。

(普段通りのように安心してよ。頑張れ)

暖かい励ましの言葉に、彼女は小さく頷いた。

エリザは足元の部隊に向き直り、

「終わりました。入って貰っても大丈夫ですよ」

と言って促す。その言葉を受けて部隊の縄が巻き取られると細い枝道から人が入りはじめ、やがて心話の音が幾重もの渦となって届く。先と同様、彼女の大きさに関する素直な驚きの声の主のようだ。

余りに多すぎるので全てには応えられないが、でも何らかの反応は返しておきたい。満面の笑みでエリザは手を振り、そして応える。

「驚いて貰えて、私も嬉しく思います」

ついでにもう一言。

「できれば、体重のことは心にしまっていてくださいね。私もちよつとだけ気にしているんですよ?」

次の足場が出来たところで足元の市民に退いて貰い、三步目に取り掛かる。左足に体重を移してスカートを前に送り、開いた右下後方を注視する。踵の後ろと爪先の前は十分に間が空いているようだ。

「これから右足の踵を上げて、爪先立ちになります」

宣言した上で、爪先を軸にゆっくりと踵を上げ始める。

何らかの建造物を思わせる白い柱が観衆の目前で上昇すると壁の一部が左右に膨らみ、更にアーチ全体が微かな軌音を立てながら大きく傾く。軽い動作が起こす情景の変化に対してどよめきが漏れる。

しかしエリザに彼等を構う余裕はなく、悲鳴が上がっているわけではないから大丈夫と判断するしかない。右足前

方の間隔が足りないのを見たエリザは僅かに爪先を浮かせ、一寸ばかり後ろに下ろす。そして爪先立ちになるまで踵を持ち上げて止まる。直立した靴の高さは十丈ほど、門の見張り塔に匹敵する高さだ。横になったヒールも家一軒分の幅は優に越えている。

エリザはドレスを元に戻して正面に向き直る。何日も歩行の練習を積んだとはいえ、両足を街に入れた次の一步はちよつとした難関だった。深呼吸しつつ彼女は練習のことを思い出す。最初はよろけて家に足をつくことが多く、その度に概ね四〜五軒の粘土模型が犠牲になった。足を捻って転んだこともあり、その時は数区画の百軒余りが彼女の体に押しつぶされていた。もし今、そのような過ちを犯してしまつたら……

彼女の思考を中断したのは、ほぼ同時に届いた二つの心話の声だった。

(どうした?)

(大丈夫か?)

不安定に震えたまま動かないのを不思議に思つたらしい。練習の失敗を思い出して不安になっている旨を率直に伝えると、まずグランゼルが反応する。

(今こうやって立っているのも練習の成果だろう? 大丈夫だ)

確かに、最初は脚を前後に配するだけで明らかにふらつ

ていたものだ。

(まあ、どうしても駄目だったら……)

続いてイーゼムが応える。  
(この辺の家は皆出払つてるから、家を踏み歩けばいいんだ。早いし安全だぜ?)

(いや、それは)

あんまりだ。だが、いざというときにも何とかなると割り切れば心が軽くなるのも確かである。

意を決したエリザは改めて二人に離れるよう伝え、そつと右足を上げる。いざ上げてみると危惧したふらつきは特に無く、杞憂どころか拍子抜けな位だ。右足を上げたまま前に送り、用意された領域にまず踵を下ろす。そしてローンハイムからの心話を待つてから爪先をそつと下ろす。

「まいったな、これは」

その様子をほぼ真下から見えていたイーゼムは思わず呟く。彼は離宮で見た光景を思い出していた。緊張した面持ちで練習の成果を披露するエリザ。足を前後に配するため腰を左右に捻る歩き方が、優雅で少し艶めかしかつたのを覚えていた。いま頭上ではドレスの裾や内布が彼の想像以上に大きく翻り、更には吹き下ろす風が一带に紫薫の香を振りまいていく。同じ動きでも大きさの差でこうまで違うのかと思うと、何とも形容しがたい思いだ。

もう一つ参ったことといえば、エリザが残した足跡だ。爪



先の縁で半尺強、踵は一尺半もの段差になっている。特に踵の跡は通りの真ん中にあるため、まるで落とし穴だ。

「とりあえず」

イーゼムは言葉を発しながら部隊の他の兵士に向き直る。

「踵の穴だけでいい。土囊で埋めよう」

今日は忙しい一日になりそうだ。

三步目の助手は魔術の師匠でもあるローンハイム。予想通りというか、彼女の大きさと重さを驚き楽しむ様子がありありと伝わってくる。だがそれだけではなく、老師からは魔術に関する幾つかの助言を貰うことが出来た。

緊張で汗が滲みそうなら、風を呼ぶ方法がある。といっても普通に風を呼ぶと足元になだれ込んでしまうので、腰より上の高さで自分の周囲を回すのが良い。

足跡の凹みについては、足を付いてから体重を掛ける前に地面の支える力を増やすことで対応出来る。とはいえふらついたまま術を行使するのは危険だから、これは余裕次第だ。

一通りの助言の後、ローンハイムは実に楽しそうな声で切り出す。

(実は、まだ大きくなれるんじゃない?)

(なれませんか!)

即答だ。そんなことを考えて、本当に大きくなっては困る。

(大体、今でも道幅ぎりぎりなんです。私に何をさせたいんですか?)

エリザは幾らか強い口調で問うが、師匠に怯える様子は全くない。

(いやおう。文字通り天を衝くお前の姿をな、死ぬ前に一度

見てみたいのだよ)

わざとらしい哀れみ声に加えて、『死ぬ前に一度』の殺し文句。この類の文言を使う人間に限ってしぶといものだ。

(殺しても死なないような人が何言ってるんですか)

(そんなことを言わずに……ほれ、広場から先は道幅も広いじゃろ?)

なおも食い下がる師匠に対し、エリザはきっぱりと言いつ切る。

(駄目です。もつと長生きして貰いますからね)

そして、間髪入れずに彼女は付け加えた。

(まだまだ教えて欲しいことは山ほどあるんです)

紫薫の風と優しい笑み、そして重い地響きを振る舞いながら、エリザは西門から続く大通りを進む。途中でふらつくこともあったが、市民はそれさえも楽しんでいたようだ。また足跡に躓いて転ぶ人も若干居たものの、これも周りの人々が彼女の爪先まで運んでくれたので容易に治療することが出来た。

中央広場までの十町（一キロメートル）は彼女の尺にして三間半（六・三メートル）程度。小幅でも十五歩に過ぎない行程だが、足場確保や何やらで色々と時間が掛かってしまい、広場に入った頃には優に一刻が経っていた。

南北に延びる中央広場は数万人を収容できる広さで、南西にはエリザの通ってきた通りが、北にはラファイセット城が配されている。城の幅と高さは共に十五丈（四十五メートル）余、王国一はもちろん全島でも屈指の規模だ。

しかし今日ばかりは相手が悪すぎた。

中央広場はエリザにとって小ぶりの机程度の広さに過ぎず、遠くから存在を示していた城も踝の少し上までしか来ず、大きめのドールハウス程度でしかない。何故か申し訳なくなるほどの対比ぶりだが、ドレスの丈は尖塔に掛からないとう設計されていることを考えれば、この高さで助かったというべきなのかもしれない。

部隊が広場とその周囲まで人払いするのを待ってから、エリザは切り出す。

「では、これから広場に座ります」

右手でスカートの裾を足に巻き付けて押さえ、左手をやや前に出しながらゆっくりと腰を下ろしていく。

裾が周囲の建物に当たると壁を崩す可能性もあるので、慎重に動かなければならない。練習でも苦労したところで、『裾が当たるのは仕方ないが、転ぶのだけは避けるように』と注意されている。

完全にしゃがんだところで左手の指先を着き、今度は膝を下ろしていく。立ち位置に問題はなかったようで、膝は城の展覧の目前を通って着地する。続いて右膝に体重を預け、後ろを見ながら左の爪先を立てる。右側も同様に動かし、それでやっと安定した姿勢に移行することが出来た。

一息ついて周囲を見渡すと、あつらえたように広場の端々まで淡いドレスが行き渡っている。特に幅が厳しく、腿や腰は広場を越えて周囲の家々に覆い被さっている。家の高さまで勘定して『正座すれば広場に収まる』と提案した師匠には呆れるほかない。

ともあれ、問題が出なかったのは確かだ。エリザは視線を正面に戻し、城の展覧に向かって語りかける。

「はい、終わりました」

彼女の言を受けて、展覧の奥から赤い服に身を包んだ恰幅

の良い人物が現れる。続いて同様にゆったりした服の男が四人、いずれも重々しい足取りで出てくる。

エリザは目を見開いてその様子を凝視していた。

出てきた王たちは、余りにも小さかった。恐らくは先頭で鷹揚に手を挙げているのがラファイセット王で、後の四人が他国の王だろう。豪華な衣装も、余裕の物腰も、王の威厳すらも、百五十対一という対比の前では意味をなさない。

大ききの差は、かくも残酷なものなのか。エリザは何も言えず、王たちを見つめていた。

一方、展台に出たラファイセット王もまた、山のように聳えるエリザを目前にして言葉を出せなかった。

王たちは城の窓から巨人の歩みをずっと見ていた。嵩上げされた靴の踵は居並ぶ家々より高く、爪先しか隠れていないため宙に浮いているように見える。視線を上にあげると、巨大なドレス姿が屋根より上の空間を独占している。周囲との差はあまりにも圧倒的で、家々と巨人の両方が実在するとはどうしても思えなかった。足元を気遣う窮屈そうな動きも、時に微笑んで話しかける言葉も、優雅な夢遊病患者に見えるてしまうくらいだ。

不自然な光景を醸す巨軀は近づくにつれて更に大きくなり、広場へ着く頃には窓の側でなければ全容を見ることが出来なくなる。他の王たちも平静を装ってはいたが、全員が窓に寄っていたから似たような心境だろう。

巨人が広場に座る段になってようやく、彼等は本当の大きさを知ることとなる。片方だけで展台の幅より広い膝は眼前をかすめ、巻き起こす風が部屋中のカーテンを一斉になびかせる。もしこの膝が当たれば、城などひとたまりもないだろう。

そして今、展台からの視界は巨人のドレスに占領されている。膝の作る台地は彼等より高い位置に広がり、奥にある丸い腰は周囲の家々に迫り出している。上方には女性らしい起伏を帯びた上半身が聳え、その上にやっと巨人の顔がある。穏やかな表情と見守るような眼差しは迫力を幾分和らげているように思えた。

目が合ったことに気づいた巨人はややぎこちなく微笑みかけ、右手を膝から持ち上げる。

(それでは、掌をお出し致します)

心話が王達の頭に響く。その優しい声に反して、迫り来る掌は展台など簡単に握りつぶせそうな大きさだ。後ずさりしそうになった王は慌てて掌から目を逸らし、巨人の顔を見上げる。そうすれば心が落ち着くことを彼は本能的に感じていた。

「さあ、お乗り下さい」

エリザに促され、ラファイセット王は視線を前に戻す。彼の正面には予め備え付けられた階段があり、その最上段と続くように巨人の白い指が添えられている。指の幅は階段よ

り広く、一尋半ほどはありそうだ。

彼は巨人の顔を見上げて頷き、ゆつくりと階段を登り始める。登るに従つて視界が開け、手の全容も見えてきた。中央の中指は軽く曲げられて谷のように窪み、その脇にはぴんと張られた人差指と薬指が掌までの橋渡しをしている。

(まるで雪山だな)

王の率直な感想だった。そういえば伸ばされた人差指からは、雪を踏みしめるような重い音が微かに響いている。筋肉の軋み音だろうか。王は巨人を見上げてみる。

(い、如何なされました?)

間髪入れずに心話で尋ねる巨人。注意深く見守っていたがゆえの即応である。

(力が入り過ぎていのように見えるのだが、大丈夫かな?)  
(え?)

指摘によつて巨人の目は大きく開き、そして直ぐに伏せられる。

(あ、はい。申し訳ありません)

心配されるとは思つていなかったのだろう。彼女のめまぐるしい表情の変化は、何を考えていたか察するに十分だった。

(気にするな)

王はまず心話で伝え、それから宣言する。

「では、参るぞ」

ラファイセット王を筆頭に、王たちは展台から次々とエリ

ザの指を伝つて掌へと移る。掌までの二十歩余り、不安定な足場に挑む彼等を巨人は緊張した面持ちで見守っており、下にはもう片方の手が添えられている。暖かい気遣いに安心しつつも圧倒的な体軀差を感じざるを得ず、自分達が小さな虫になったような錯覚さえおぼえてしまう。

全員が掌に到着したところでエリザは座るよう促し、確認してから自身の上半身をゆつくりと起こす。起こしきつたところで両掌を体に当て、腰から上をぐつと伸ばしながら息を吸い、吐くと同時に全身の力を抜いて首を左右に傾げる。「申し訳ありません。身を屈めておりましたので、少々疲れてしまいました」

胸元に据えた掌を前に上げて微笑みかけ、そつと話しかける。しかし当の王たちは皆果然と自分のほうを向くばかりだ。

(どうされました?)

尋ねても反応が無い。さっきの動作で揺れ酔いでもしたのだろうか。そう思つて更に問うてみる。

(もしかして、揺れたのでしょうか?)

(ああ……なかなかの揺れだった)

やつと返つてきた言葉と、釘付けの視線。ようやく果然の理由がわかり、エリザは顔を赤らめつつ溜息を漏らした。一国の王とて男、単純なものである。

事前の打ち合わせによれば、写生が一通り終わるのを待つ

てから港に行き、王の挨拶に入る予定である。エリザはその予定を周囲の群集に伝え、画家たちがいる物見櫓を一つ一つ注視してみる。

確かに、所々にある櫓の上には画板が据えられ、その脇には画家と思しき人物が座って彼女を注視している。しかし彼らは首を捻ったり筆を構えるばかりで、絵を描いている様子の者は誰も居ない。

「写生の具合は如何ですか？」

声を出して近くの櫓に尋ねるも、話しかけられた画家は肩をすくめて応える。

八十丈のドレス姿という稀有な被写体を求め、画家達は自ずとラファイセットに集結していた。彼女の堂々たる姿を残したいという国の思惑もあり、彼等には滞在費や画材、そして写生場所まで提供されていた。そして意気揚々と物見櫓に陣取った画家達だが、百五十倍という大きさについては深く考察していなかった。

結果として、彼らの眼前にある光景は予想から大きくかけ離れていた。街を歩く姿を描こうにも、巨人が建物と交わるのは踵よりも低い位置でしかなく、正直に描けば町と女性を別々に描いたような構図にしかならない。広場に座る姿を描こうにも櫓より膝の方が高いため、やはり町並みから抜け出した上半身という図になってしまう。もっと辛いのは近くに陣取った画家達で、空を覆うドレス姿に手も足も出せ

ないようだ。

「いやもう、恥ずかしながらお手上げですよ。貴女は大きすぎる！」

画家の一人が明るい声でそう言い、降参とばかりに両手を挙げる。支援を受けている手前敗北宣言は出したくなかったが、自分の想像力を打ち負かすだけの被写体に逢えたのは本望なのだろう。

「是非、後日、もう一度描かせて下さい。お願いします！」

「ええ、構いませんよ」

勝手に盛り上がっている画家の前に、エリザは苦笑しそうになるのをどうにか抑えつつ返す。それにしても『貴女は大きすぎる』とは、少しぐらい失礼だと思わないのだろうか。

(……思わないでしょうね)

でなければここまで興奮した口調なわけがない。もしかしたら、失礼だと感じているのは自分だけなのかもしれない。エリザは左手を眉間に当て、少しの間だけ目を閉じた。

写生を待つ必要が無いなら、次は港でラファイセット王の挨拶だ。エリザは王達に一度視線を落とす、正面に向き直ってゆつくりと深呼吸する。この挨拶は湾内に立ったエリザの掌から行う予定であり、言い換えると彼女は王達を掌に乗せたまま立ち上がって港まで歩かなければならない。

この立ち上がる動作もまた難しく、練習では後ろに転んでしまったこともある。服は泥だらけになり、全身で粘土の

家を百軒近く潰してしまった。

「これ、本番でやったら大迫力よねえ」

楽しそうなハンナの声を覚えている。

何度か息をつき、落ち着いてきたところでエリザは宣言する。

「そろそろ立ち上がります。裾が風を起こすと思いますので、注意してください」

彼女の言葉を聞いて、今まで静まっていた群衆から再び歓声が上がる。

（そこまで、一々祝って頂かなくてもいいんですけど……）  
滲む苦笑を抑え、エリザは掌上の王達を注視する。

（これから掌をすぼめますから、その後にお座り頂けますか）

王達が頷くのを見て、彼らが乗る右掌を窪ませる。市民から見えなくなったところで王達は腰を下ろし、エリザの方に向き直る。

（では、体を起こします。揺れると思いますので、十分にご注意ください）

念を押した上でエリザはドレススカートの後ろを抑え、ゆっくりと上体を起こす。それによって前腿が城に迫り、テラスに控えていた家臣たちは奥へと逃げる。十分に腰を浮かせたところでエリザは後ろを注視し、安全を確認した上で足首を曲げて爪先で地面を捉える。靴皮の軋み音と後ろのど

よめきからして、結構な迫力なのだろう。

「それでは、今から立ち上がります」

周囲にそう伝え、エリザは後方の爪先に体重を移してから膝を慎重に浮かせる。持ち上がる膝に引かれてドレスの布地が流れ、今度は前と横から声が上がった。布地は建物を擦っているようで、もしかすると窓を何枚か割っているかもしれないが、その程度は仕方ない。

蹲踞の姿勢になったところで、彼女はヒールを地面に降ろす。安定した姿勢でひと呼吸置き、左手でスカートを押さえ、右手の王たちにも気を払いながらゆっくりと立ち上がる。家々の屋根がどんどん視界の下方に落ち、再び街の全体が見渡せるようになった。

周囲の人たちからは少し離れてしまったが、それでも彼らのどよめきはしっかりと耳に入る。大丈夫、一人ではない。

「では、港に向かって進みます。誘導係の皆さんは、準備をお願いします」

エリザは足元の誘導係を見て微笑み掛け、視界に入る位置まで右手の王たちを持つてくる。

城から港までの道幅は広く、足を降ろす場所には余裕がある。しかし今まで以上に人が多く集まるのに加えて大切な貴賓を掌に乗せているので、緊張の度合いはさして変わらない。

そんな心の内を知ってか知らずか、貴賓たちは掌の縁まで

這い進もうとする。

(あ、あの……危険ですのでお止め下さい)

(構わんよ。無礼講だ)

上から見ているエリザには今にも落ちそうに見えるのだが、制止の声は微妙な理由であつさり却下される。仕方がないので、彼女は歩みを止めて王達が指先に到達するまで待つ。

(そんなに力を入れなくても大丈夫ですよ。お陰さまでとても安定していますから)

王の一人が優しく諭すものの、何か間違っている気がしてならない。

ともあれ、王達は高みからの景色を堪能しているようだ。

(これは凄い)

(いやあ、山から見るとはまた違いますな)

(うむ。ここまで小さく見えるとは……)

感嘆した様子でしきりに感想を交わしている。やがて足下の観衆に気づいたのか、王達は座つたまま沿道の人々に大きく手を振る。群衆から歓声が上がったのでエリザも軽く左手を振って返すと、さつきより大きな歓声が上がってしまう。

さすがにばつが悪いので、彼女はすぐに手を下げて前に進もうとする。しかしそのとき、王達の一人が不意にエリザを見上げて問いかける。

(貴方から見ると、さぞや小さいのでしょうか)

(え？ あ、ええ。そうですね……)

突然話を振られ、エリザは戸惑つて上げかけた足を下ろす。振り方もそうだが、余り小さい小さいと言いたくないエリザにとっては少し困った質問だ。

(それだけ慎重に動かなければならない、と気が引き締まる思いです)

暫し考えたのちに彼女は答えた。

そのころ、街から離れた海岸の断壁では別の儀式が進行していた。

「まさか、貴方と共謀するとは思いませんでしたよ」

「ははは。我らにとって神は普遍にして数多の存在だからのう」その言いように、鎧の男は眉を動かす。一神を奉じる彼の教団には受け入れがたい発言だ。表情の変化を気取られぬよう、空を見上げる。

南の空には夏独特の厚い雲が沸きつつある。海風を少し弄るだけで雷を起こせるのだから楽なものだ。

「炎の力を注げば更に大きくなる、か……」

今でさえ街のどの建物より高く聳えているドレス姿の治癒術師。更に雲を突き抜け、広がる裾が山のように鎮座する様はどう映るのだろう。恐怖が人心を引き離すのか、それとも畏怖の対象になるのか。

どちらであつても都合だ。あとは彼女の心を引き入れればよい。心には隙があるし、共謀している司祭は手段を目的としている節がある。そこを衝けば彼等を出し抜くのは容

易だろう。大きな博打だが、打つだけの価値はある。  
彼自身気づかぬうちに、魔法戦士は口許を歪めていた。

五間（五百メートル）ほど進んで港に着くとエリザは目を閉じ、水の御霊たちに心話で願ひ出る。

（万変のもの、深さ持ち蕩うもの。いま大地の支えを持ち、我を支え給え）

目前の水面に微妙な変化が出たのを感じとった上で、エリザは係留されている船を跨ぎ越して湾内に出る。

足を踏み入れても海面は微塵も沈まず、膨大な体重をしつかりと支えてくれる。足元には人も船もおらず、正面を向けば晴れ渡る空と遠い雲、そして碧い海だけが視界に入る。

エリザは大きく息を吸い、そしてゆっくりと吐き出す。自分の大きさを感じさせない光景に、彼女は何とも言えない安堵のようなものを感じていた。立てば城の尖塔も膝下に届かず、座れば広場を埋め尽くす。そんな巨躯で半日も居たため、気疲れも溜まつていたのだろう。思わず腕を伸ばしそうになったが、賓客に気づいて止める。

いくら緊張が解けたところでゆっくりと街に向き直ると、当たり前だが街の小ささは何も変わっておらず、ご丁寧にも空まで灰色の厚雲に遮られている。晴れ渡る空と海を見た後なので、差が余計に際立ってしまうのだ。例えば港に係留されている船。三本マストの西洋船でさえ片手分の大きさでしかなく、これで海原に挑むのは何とも無謀に見

える。赤屋根の家たちも靴の爪先に四く五軒は入りそうで、海や空が荒れ狂ったら無事では済まないだろう。そうなたら自分が護るしかないのだろうか……

（あー、もし？）

（はい!?）

声を掛けられて、やっとエリザは我に返った。右掌に視線を移し、まず頭を下げる。

（申し訳ありません。少し考えごとをしていましたので……）

（どんなことを考えておられたので？）

（え？ あ、いえ。その……）

思いがけない質問にエリザはしどろもどろになってしまふ。しかし、答えはすぐに当てられてしまった。

（おそらくは、海と街を比べていたのでしょう。今の大きさだと、差が目立ちますよね）

（……）

違うと言いたかったが、都合のいい嘘など出てこない。そういうのが得意な仲間もない。

（はい。申し訳ありません）

素直に謝るしかない。

（ははは、気にしないでください）

（うむ。儂も似たようなことを考えておったからの）

（おや、貴殿ですか？）

しかし失礼な考えだと思っていたエリザをよそに、王達は気



にするどころか勝手に盛り上がっている。

そんな中、ラファイセット王が不意にエリザを見上げて問う。

(そういうえば、例の件に関する返答は如何かな?)

(例の件……ですか?)

意味がわからずに問い返すが、王は意に介さない。

(まあ、悪いようにはせぬ。良い答えを期待しておるぞ)

(はあ……はい)

勝手に話を進められてしまい、エリザは生返事で応えるしかなかった。

エリザはラファイセット王に拡声の術を施し、背筋を伸ばした上で街に向き直る。ここからは王が主役。自分は彼等がよろめいたり、彼等より目立たったりしないよう気を付けるだけだ。

王はエリザの指先までゆっくりと進み、声が届いているか確認するように仰々しく咳払いする。そして高所から失礼するという旨のお決まりの挨拶を経て、ラファイセット王の演説は今日という日にエリザを迎え、紹介できたことへの感謝から始まった。『巨大で力強く、優しさと包容力に満ち、聡明で美しい治癒術師』とまで持ち上げられてしまい、当のエリザとしては赤面してしまう。

続く話の内容は、エリザの力に向けられた。彼女の力は比類なく、島内五国の軍勢をすべて合わせても敵わぬであら

う。あまりにも強大であるが故に、政争の種となることが憂慮される。よって王達は島内の紛争に際し、双方への治療以外には支援を求めない旨を確認し、不可侵の条約を締結した。

「というわけで、エリザ嬢には、今まで通り治癒術師として広く活躍頂きたい」

皆を治療したいと思っていた彼女にとつては、願ってもない配慮だ。

「ご配慮感謝いたします。これまで通り、癒し手としての任務に全力で当たる所存でございます」

王に即答し、そして民衆に向き直る。

「至らぬ点多いかと思いますが、これからも宜しくお願い致します」

一斉に歓声が挙がり、エリザは満面の笑みで応える。

歓声が収まるのを待つてから、王は次の話題を切り出す。

「またその一方で、この島は大陸より独立して百余年、未だ支配から脱しておらぬ。不平等を正し、対等の地位を確立せねばならぬ」

今度は妙に扇動的だ。なぜ今そんな話を切り出すのだろう。そんなことをエリザが考えている間にもラファイセット王の演説は熱を帯びていく。

「しかし、そのために戦を仕掛けるのは本意ではない。血で過去を清算することなど出来ぬ」

ラファイセツト王は言葉を区切り、ゆっくりと後ろに向き直る。そして遙か上方に位置するエリザの顔を見上げ、片膝をつく。それに倣い、他の王達も彼女に向かってひざまずいた。

何事かといぶかしむエリザに構わず、ラファイセツト王は静かに宣言した。

「不可侵の担保と地位の見直しを実現するため、貴女を真の王として迎えたい」

あまりに唐突な申し出にエリザは目を見開き、息を吸ったまま吐き出せない。

(真の……王?)

言葉の意味を飲み込むだけでも時間が掛かる。

『真の王』

エリザが王都に居たころ、ラファイセツト王による就任式に行つたことがある。五国の王が一年交代で就任し、島内の結束を示すのだと聞いたのもそのときだ。

(それが、私に?)

今度はその繋がり理解できない。いかに名誉職としても、いきなり王たちを飛び越えてその上に出るなど……

「そ、それは一体、どういう……どういふことなのでしょうか?」

しばしの間をおいて、ようやく上ずった声を搾り出せた。

話は通っている思っていた王にとつても、エリザの反応は

想定外だ。

「ははは。まあ、そう驚くでない」

(使者に信書を持たせたはずじゃが、屈いておらぬのか?)  
冷静な声と、やや焦り気味の念話がエリザの耳と心に届く。

(ええ)

(ううむ、あやつは滅棒じゃな……まあいい)

「改めて言うぞ。おぬしに、真の王となって貰いたい」

腹芸に感心する暇もなく、ラファイセツト王は滔々と説得を続ける。当面は儀式への参加のみ求め、政治的な場には同席を求めないこと。大陸との交渉だけでなく、王や領主からの干渉を防ぐためにも地位が必要という判断に達したこと。

「であるから、そなたの本分を損わぬことは保証しよう。どうかの?」

しかしエリザとしては是とも否とも言えない。

「ええ、あー、その……」

曖昧な言葉を返すのがやつとだ。もちろん、破格の条件であることは解る。説得には相当な手間が要つたことも想像できる。交渉したのはラファイセツト王か、ローンハイム師匠か、それともグランゼル様か……

しかしいくら肯定的に考えても、今すぐ応じる気にはどうしてもなれない。とはいえ何となく嫌とかそんな曖昧な説明で収まるとは思えず、応じられない理由を自分の中で掘り下げなければならない。

やはり大きいのは、癒し手としての自分に対する自負だろう。ラファイセット王は治癒術師としての自分を保証してくれると言ったが、実際に自分が治療するであろう多くの人たちはどう感じるだろうか。

そこまで考えれば、もう答えは決まったようなものだ。

「申し訳ありません。次の就任式まで、考えさせて頂けませんか？」

頭を下げ、弱々しい声で切り出す。

「多大なる配慮を頂き、本当に感謝しています。ですが、王である前に私は治癒術師です」

もつともだと言わんばかりに王は頷く。その点を何よりも配慮したという自負が滲んでいた。

「そのことを、島の皆様に直接お会いした上で、知って頂きたいのです。」

真の王を名乗るとしても、癒し手としての私を皆さんに覚えて頂いた後にしたいのです」

先よりもラファイセット王の領きは強く、他の王達も同意しているようだ。

「総てを癒し、真の王になる……うむ、それなら島の誰もが賛同するであろう」

王の賛同は、儀式を台無しにするのではないかというエリザの心配を打ち消すに余りある力強さだ。

「あ、ありがとうございます！」

嬉しさのあまり、エリザは力一杯頭を下げる。街から見れば微笑ましい光景だが、掌の貴賓にとつてはたまったものではない。急いで手袋の布地に捕まり、どうにか難を逃れる。

「も、申し訳ありません」

一転して弱々しい声が漏れた。

幸い彼等に大きな怪我はなく、打ち身はエリザがすぐに治療する。

「それにしても、今回の提案には驚きました」

心底ほつとした声でエリザは言う。

「『エリザ様』なんて呼ばれると考えるだけで、なにかこう、むず痒くなってしまう」

軽く首を振りながら付け足す。緊張が一気に緩んだせいか、別の理由も明かしてしまった。

「ははは。しかしそなたであれば人心は自然と付いてくるであろう」

ラファイセット王も手を挙げて応じる。

「そのときに改めて要請いたすゆえ、受けてくださいますな。『エリザ様』？」

エリザは背中を羽で撫でられたかのように肩をすくめ、身震いする。掌の王達は再び大きく揺さぶられ、街からは笑い声が沸き上がった。

目玉である就任式が省かれてしまったため、王による締め言葉で披露の儀は閉会となる。貴賓を城まで送った後は、

大道芸人たちによる余興の時間だ。

城までの道を開けてもらいう間に何気なく空を見上げたエリザは、いつの間にか雲行きが怪しくなっていることに気づいた。耳を澄ますと、遠い雷鳴も聞こえてくる。

これは問題だ。雷は高いところに落ちるから、エリザがまず標的となるだろう。彼女自身はまだしも、掌の王達は無事で済まない。

「これは、まずいかもしれんな」

「そうですね」

王達も危険を察知しているようだ。説明が省けるなら話は早い。

「はい。今からしやがみますので、一旦私の手から降りて頂きますね」

「うむ、わかった」

あつさり応諾、と思ったら意外な問いを返す王もいた。

「我々は良いのですが、貴女はどうなさるのです？」

「えっ？ 私、ですか？」

「ええ。傘ありませんし、折角のドレスが台無しでしょう。どうやら彼等は雨を懸念していたらしい。」

エリザは苦笑しつつ、雷の危険を説明する。

「問題は雷なのです。恐らく私に落ちますので、離れて頂きます」

なるほど、といった様子で王達は頷き、ややあつて一人が彼

女を見上げる。

「風で追い払えぬのか？」

王からの提案に、今度はエリザが頷く。

「ええ、やってみます。折角のドレスですから」

微笑みと共に、彼女はそう付け足した。

王達を下ろしてエリザは沸き立つ雲に対峙する。遠目には夏らしい入道雲だろうが、間近で見るとまるで灰色の怪物だ。自分が百五十倍といふ大きさになっているから、景色ではなく怪物に見えるのかもしれない。そんなことを不意に考えてしまう。

エリザが紡ぐ言葉に応じ、彼女の背後から前方に向かう海風が強さを増す。とはいえ、地上で吹いても街の人に迷惑が掛かるだけだ。彼女は更に、風が雲の高さに吹くよう念じる。

しかし風を当たっているにも関わらず雲が押し戻される気配はなく、逆に雲は風を包むように大きくなっている。雷鳴は近づき、稲光さえ見え始める。

これは一体、どういうことなのだろうか。もう一度雲に風をぶつけてみるが、やはり効果は逆に出してしまう。これでは手が出せない。焦りを察してか、足元で見守る人々からも不安そうなきわめきが漏れる。

「これは魔術による風じゃ！ 誰かがお主の風に合わせておる！」

鋭い声が雑踏を貫く。発言のほうを見やると、師匠が自分を見つけてくれといわんばかりに両手を大きく振っていた。

「では、どうすれば？」

短く問うと、師匠は腕を組み考え込んでしまう。

(いや、それでは意味が無いでしょう)

口から出そうになった文句を心にとどめ、焦れること数瞬。

ローンハイムは再び顔を上げ、いつになく緊張した声で叫ぶ。

「案も時間も無い。岸から離れろ！　　ここで雷を受けると

……」

「はい！」

師匠の言葉が終わる前にエリザは即答し、直ぐに踵を返す。

まさに、その刹那。

ドーン　という轟音と共に、閃光の柱がエリザを貫いた。

よるめきかけた体勢を立て直し、エリザは頭を振る。視覚と聴覚は一瞬閉ざされ、頭にはびりびりとした刺激が走り、そして体が熱くなる。

だがすぐに感覚は戻り、痛みも引いてしまう。無傷で手足も普通に動くとなれば余り焦る必要もなさそうだ。エリザは両手でドレスの裾を掴み、早足で沖に進む。続く雷が容赦なく打ち据え、落雷のたび彼女は立ち止まるが、受ける衝撃は徐々に小さくなっている。

港を出たところでエリザは振り返り、そして遥か雲の上

から街を見下ろす自分を念じる。視点は今までにない速さで上昇し、わずかに呼吸の後には霧に閉ざされる。頭が雲に入ったと彼女が気づいた直後に、雲内の雷が一斉に彼女を襲った。

元々、エリザの大きさは最大でおよそ百五十倍。身長は八十丈（二四〇メートル）ほどとなり、眼前に建物や木などは存在しえない高さだった。

そして目覚めた今、彼女の視界を遮るのは白い雲。

どうやら、意識を失っていたのは一瞬だけのようだ。幸いなことに体勢も崩していない。

（それにしても、大きくなつてしまいましたね……）

漏れた溜息に目前の雲がなびく。対比物が無いので正確にはわからないが、文字通り雲を衝いているのだから千丈（三千メートル）かそこらはあるだろう。変な司祭やローンハイムに見せられた悪夢と同じくらいだろうか、幸か不幸か何度も見せられているため驚きは無く、また一通りの対処法も頭に入っている。

まずは自分の動作が突風を起こさないよう、声が人々の耳を壊さないよう風に祈る。そして心の声に耳を傾け、人々の様子を探る。語り掛けや治療はそれからだ。

エリザは手を組んで目を閉じ、風の御霊たちに祈りを捧げ始めた。

ほどなく、彼女の頬を風が優しく撫でる。二つの願いは聞き届けられているようだ。更に眼前の雲を払うよう念じると、彼女を中心として渦状に風が巻き、視界を遮っていた雲

が散り始める。

視界が開けると、彼女の目に入ったのは厚い雲が織りなす景色であった。繋がった綿雲による凸凹な平原が広がり、所々に入道雲の山が沸いている。白一色の山野と澄み切った青空は夢で見るより遙かに鮮烈で、彼女が知るとんな景色とも異なっている。

見とれることしばし。足下にあるはずのラファイセットや船団を思い出したエリザは、勿体ないと思いつつも腰の前にある雲を晴らすよう念じる。雲の底は思ったより低く、足首近くまで払つてようやく緑の地面が姿を表す。

地面は一面の緑で、赤茶色の屋根がどこにも見あたらない。つまり街がないことに彼女は気づいた。

これはどういうことなのだろうか。街が見えないほど大きくなっている……わけでは、なさそう。自分より低いとはいえ、山々の稜線は十分に判別できる。

とするとラファイセット以外の場所に移動してしまったのだろうか。だとすればどこに？

除々に顔が熱くなり、喉が渇く。混乱を紛らわすためエリザは天を仰いで目を閉じ、三つ数えてから再び地面に相対する。

地面は相変わらず緑のままだが、よく見ると街道のような灰色の線がある。その線はスカートの中に延び……

慌てて彼女は裾を抑え、少し前屈みになってみる。すると胸元とスカートトの遙か下から街や港が現れ、港内には何隻か船も見えた。

エリザの口から思わず安堵の溜息を漏れる。

街には足跡など無く、船も大きく数を減らしている様子はない。最悪の事態を免れた幸運に彼女は短く感謝の言を念ずる。

とはいえ王都は赤い楕円の盆でしかなく、船も大きいものでさえ指先程度にしか見えない。王都が南北十町、東西二十町あつたことを考えると、以前見た夢と同じか若干大きい程度だろうか。実際に現実として見せられると、容易には受け入れがたい。

しかし、街の人たちにとっては『受け入れ難い』なんてものでは無いはずだ。文字通り雲を衝く巨人を前にして、混乱や恐怖に苛まれているかもしれない。

まずは彼等の声を聞こう。彼女は軽く前傾して左手でスカートの前を抑えたまま、右手を胸の前に当てて目を閉じる。僅かな違和感を覚えつつも、まずは街のある辺りに意識を集中させ、住民が発する想いに耳と心を傾ける。

住民の前で繰り広げられる光景と展開は、彼らの理解を大きく超えていた。

落雷を受けたエリザは耐えるように身を固めていたが、何を思ったのか突然きびすを返し、足元の船を跨ぎ越して湾の

外に走り去る。それでも雷の猛攻は止まず、何度も青白い閃光が頭上に煌き雷鳴が響き渡る。エリザは目を硬く閉じ、自身を抱きしめる姿勢で耐えながら街に近付き始める。

なぜ一度離れた街に再び近づくのか。疑問を抱いた住民だったが、落雷を重ねるにつれ稲妻の長さが減っていることに気づく。

「違う。大きくなってる！」

誰かが発した声の方に周囲の全員が振り向く。察した者は街のあちこちに居り、瞬く間にざわめきが街を覆う。

街の不安を余所にエリザは更なる膨張を続け、遂には頭が雲の中に入ってしまう。こうなるともう稲妻は見えず、雲から漏れる微かな光と遠い雷鳴があるのみだ。しかし巨大化は止まる様子を見せず、肩から胸、そして腰と次々に雲の中へ消えていく。

不安を口にしていた住民達も、いつしかこの一方的な展開の前に何も言えなくなっていた。静寂が街に戻りつつある中、空から届く雷鳴もまばらで遠くなる。それを受けてエリザの変化も鈍くなりつつあるが、依然として大きくなっていることに変わりはない。

そうこうしているうちに残された長大なドレススカートも上へ上へとこのぼり、彼等のほぼ真上に来たところで雲に飲まれてしまった。地上に残るのは足首の少し上までだが、曲線で構成されたハイヒールと足首は丘のように鎮座し、そ

の上に膨らんだ白柱が雲を貫き聳えている。何とも現実離れしており、夢の中かと思うような光景だ。

いつの間にか雷鳴は無くなり、巨大化も一段落している。そのままの状態がしばらく続いたのち、不意にギリギリという重い音が響き始める。重心を動かしたのだろうか、彼女が何らかの意志で動いているのは確かだ。

次は何だろうか。不安そうに住民達が見る中、今度は空が明るくなり始める。

周囲の分厚かった雲が少しずつ薄れていき、やがてくつきりした青空が現れる。しかし彼等の真上には依然として灰色の雲が残り、しかも不自然に整った楕円形だ。人工的な形を訝る住民をよそに、今度はその雲があり得ない速さで海の方へ走る。

そして最終的に、天を覆わんばかりの巨大なエリザの姿が現れた。初め憂いを湛えていた表情は、一瞬の驚きを経てすぐに緩やかな笑みへと転じる。

だがそんなエリザの表情よりも人々の目を引いたのは、彼女の大きさである。天高く聳える姿は側にある家々の屋根よりも高く、顔は真上にまで達している。街のどこからでも見え、空の半分を占めるドレスを前に彼等は呆然と見上げる。ことしかできない。

そんな彼等をよそにエリザは右手を胸に当て、静かに目を閉じた。

しばらく耳と心を澄まして街からの声を聞いていたエリザだったが、足元からの明確な声がなかなか聞こえて来ない。恐怖とか混乱の色が見えると思っていたのだが、これは予想外だ。

焦りも出てきたので、彼女は目を開けて足元を注視してみよう。だがラファイセツトの街並みは小さすぎて、人々の活動を捉えることができない。湾内の船も然りで、人手で動いているのか単に流されているのか判らない。次にエリザは、自分の方から語りかけることにした。

(あのう。皆さん)

街の人たちを驚かさないう、遠慮がちに心の声を送る。

(私の声、届いていますか？ 聞こえるなら、返事をお願いします)

目を閉じて返事を待つ。

住民の殆どは、いまだに目の前の光景を現実として受け入れられずにいた。彼女の姿は『大きい』ではなく『広い』と表現する方が似合っており、夢か催眠あるいは騙し絵の類と思うほうがまだ理解しやすいくらいだ。中には彼女の大きさを推し量る者も居るが、比較対象が無いので見当が付かない。

だが、そんな中でも彼女の更なる巨大化について知っている何人かは冷静に大きさを推定していた。

「おそらく三千から四千倍、つまり千五百から二千丈（四千



五百〜六千メートル」といったところですかのう」

落ち着いた口調でローンハイムが呟くと、周囲の王と護衛の者達が一斉に彼の方を向く。老魔導師は彼等を一瞥し、そして説明を加える。

「足首の上まで雲で隠れておりましたので、雲の高さを三〇〇〜四百丈とすれば、その五倍となりましょう。恐らくはそう間違った……」

「そんなことはどうでもいい」

西の王がびしやりと遮る。

「一体全体これはどういうことなのだ？　まずはその説明を要求する」

狼狽しながらも激しく詰問する王を、ローンハイムは軽く手で制する。

「エリザは元々、太陽から火の力を受けて大きくなります。このことは前に御説明致しましたな？」

反応を待つために台詞を区切ると、今度は南の王が割って入る。

「ということは、雷の力で今の大きさになったと？」

「ええ」

ローンハイムは満足そうに頷く。

「そういうえば本人も言ってたな。火の力で更に大きくなるとか、夢で訓練しているとか」

王都から迎えに来たエリザと話した内容を、東の王は思い

出していた。他人に知られたくなかったのか、大きな体で他言無用の旨を何度も懇願していたのが印象的だった。もつとも今となっては無意味なのだが。

「はい、対処法は十分に心得させております。山火事や噴火なら今以上の大きさもあり得ますゆえ」

王達はその空恐ろしい内容について特に問わず、代わりにエリザの方に向き直る。

「しかし、実際に見ると大きいもんだなあ」

見上げたまま、イーゼムがふと呟く。

「俺等のこと、見えてるんだろうか」

先ほどまで祈るように目を閉じていたエリザは目を開け、やや困惑した様子で町を見ている。ぼんやりとした視線は自分の方を向いているようにも、向いていないようにも思える。

「目で見るのは無理じやろうな。命の灯か心の声を感じ取るうとしておるはずじゃ」

「なるほど」

彼は頷き、腕を組んで再びエリザを見上げる。腕を振れば気付いて貰えるかもしれないと思っていたが、それは無いようだ。周囲から浮くのが関の山だろう。

（あのう。皆さん）

今度は不意にエリザの声が全市民の心に響く。遠慮がちな声色だが、初めて発した声に皆の注目が集まる。

（私の声、届いていますか？　聞こえるなら、返事をお願い

いします)

その声を聞き、町は徐々にざわつき始めた。

「返事って……」

「どうやって?」

「届くのか?」

「いやあ」

そんな声が上がりはじめ。

確かにその疑問はもつともだ。折角なので、イーゼムは傍らのローンハイムに尋ねてみた。

「返事って、俺等が言ってる聞こえるんもんですか?」

「ははは、それは流石に無理じゃ」

顎をさすりながら一笑に伏す。

「エリザの耳までは隣町以上の距離があるのじゃぞ。心話で反応せよと言いたいのはやろう」

そう答えてローンハイムは空に向き直り、エリザの方を凝視する。イーゼムも彼を真似てみることにした。

（おーい、聞こえるかー?）

しかし実感というか距離感が沸かないため、どうにも気が入らない。

（うーん、本当に届くのかなあ……）

今度は心の声が微かに聞こえるものの、まだ言葉として捕らえるには不明瞭なものばかりだ。

（うーん、ごめんなさい）

エリザは軽く頭を下げ、説明を加える。

（まだ少し、皆さんの声が聞き取りづらいようなんです）

夢で見たほど上手くは行かないが、糸口は掴めてきた。心を落ち着かせるか、相手に近づくことができれば何とかなりそう。手っ取り早いのは後者だろう。

（ですので、今から皆さんに近づくために、しやがみますね）

一語一句含めるように伝え、エリザは両手でスカートの前後を抑えながら慎重に腰を下ろしていく。

その途中でスカートの裾が地面を擦りそうになっていることに気付き、抑えていた生地を慌てて引き上げる。

中腰で止まったまま、エリザは地上の状況を確認する。人心に多少の恐怖が見えるものの、怪我による苦痛の声はない。また建物も彼女から見える範囲では無傷のようで、裾が街を蹂躪する事態は回避できたようだ。

（大丈夫、みたいですね）

思わず安堵の息が漏れる。

（ごめんなさい。これから気をつけます）

声を掛けて、エリザは再び腰を沈めていく。膨らませた分だけスカートの丈が長いようなので気をつけなければ。

（どうやら、心の声は届かなかったようだ）

（ですので、今から近づくために、しやがみますね）

エリザは普通なら何でもないと大げさに伝えると、山

をも越える巨軀を動かす。それは台詞の強調に劣らぬ大移動だった。

まず膝が前にせり出し、山裾のように拡がっていたスカートが垂直に起き上がる。聳え立つ巨大な布壁は滝を縦横に何十も繋げた規模があり、さながら世界の果てを示す大氷壁だ。

その巨大な布壁が、今度は揺れながら埠頭めがけて降下し始めた。

「えっ！」

「落ちる？」

「まさか！」

信じられない光景を前に港灣の市民達は凍り付く。声を上げられる者さえ少数で、逃げるところまで思いつく者は誰もいない。

呆然と見上げる中、白い裾は地表になだれ込もうとするが、幸いにして地上に届く前に落下は収まった。うねったファリルの一つ一つだけで一区画より大きな裾は、家々の上を舐めるようにして前後に揺れている。

その裾はすぐに引き上げられ、その上方ではエリザがあちこちに視線を配っている。一通り見て判断が付いたのか、彼女は安堵の表情で雲を吐く。

（大丈夫、みたいですね。ごめんなさい。これから気をつけます）

そう言つて、彼女は更に腰を下ろす。

動きに伴つて今度はごきごき、ぎりぎりという不気味な音が街中に響きわたる。

「なんだこれは？」

「関節の音じゃよ。あとは靴の皮が軋む音じゃな」  
誰ともなく問う声に、ローンハイムは平然と答える。

（よもやここまでとはのう。素晴らしい）  
これだけの不可思議な体験は、冥土の土産として申し分ない。彼は二度三度、満足そうに頷いた。

高度の低下によつて見える単位は徐々に細くなる。街全体から広場と大通り、区画、個々の建物、そして腰を下ろしきつたところで建物の凹凸まで見えるようになった。更にエリザは足の甲に手を置き、背を屈めて目を凝らす。そこまでやつてようやく、一人一人の姿を捕らえることが出来た。

それにしても小さい。街の建物や広場、通りが刺繍のように配され、その中にいる群衆はまぶした砂粒程度の大きさだ。当然ながら彼等の表情は何えず、心の声を聞いても依然として帰ってくるのは多少の恐怖や言葉にならないものばかり。ただ彼等が殆ど動かず、またその色から多くが自分を見上げていることは判る。

もしかして彼等は、ただ呆然と見上げているのではないか。そう考えたエリザが改めて聞き直すと、確かに断片的ながら『一体何が？』『本当か？』『嘘だろ？』『夢じゃやない

か？』『わからない』といった類の声が聞こえる。おそらくほとんどの住民は驚嘆や恐怖より前に、彼女の現実離れした大きさを前に実感が湧かないのだろう。言葉にならない声ばかりだったのも、これなら納得できる。

何にせよ彼等が心身ともに無事と判り、エリザは天を仰いで溜息をつく。眼下の街は相変わらず小さく人々も黒い点のままだが、彼らの心の内が判った今はその砂粒たちが何とも愛おしい。いつしかエリザの表情も普段の穏やかな微笑に戻っていた。

(改めまして、こんにちは。みなさん)

挨拶をすると、そこそこはつきりした返事がかえって来る。我を忘れていたわけではなさそうだ。

(私のことを夢か幻だと思っていませぬ？ 思ったことを正直に念じて下さい)

尋ねてみるとまず慌てたような声が、続いてそれを弁解するざわざわとした声が心に届く。何ともわりやすい反応に、エリザは沸き上がる悪戯心を抑えきれなくなっていた。

(幻なんかではありませんよ。これから、証拠をお見せしますね)

彼女は楽しそうに微笑みながら、右手の人差し指を立てて小さく振る。その人差し指を中央広場の上、五寸ばかりの高さにかざす。

(私の指、本当はとっても大きいんですよ)

そう言つて、エリザは指をゆっくりと降ろし始めた。

完全にしやがみきつたエリザは足の甲に手を置き、更に上半身を屈める。それによつて彼女の顔が徐々に大きく写り、街の多くがその影になる。

薄暗い街から見上げるエリザの顔は、その圧倒的な大きさに加えてやや緊張した面持ちと真摯な眼差しが神性に近いものを醸している。どうしても目が合ってしまった、一度合うと離せない。

「大きいなあ……」

絞り出すような声を出したイーゼムはようやく自分の目が乾いていることに気づき、目を閉じて目頭を押さえる。

再び上を見ると、エリザは軽く頷きながら微笑んでいた。暖かく、見ている者の緊張を解きほぐすような表情にあちらこちらから溜息が漏れる。

(改めまして、こんにちは。みなさん)

彼女の声からは緊張が消え、心に染み入るような調子になっていた。

(私のことを夢か幻だと思っていませぬか？ 思ったことを正直に念じて下さい)

凶星だ。

正確には頭で分かっているも、裾になぎ倒されそうになつても、心の奥底ではどこか信じきれないところがある。

そんな心境をイーゼムが隣の老魔術師に吐露すると、彼

は楽しそうな、だが少し曖昧な笑みを浮かべて頷く。

(幻なんかではありませんよ。これから、証拠をお見せしますね)

エリザは右手の人差し指を振りながら満面の笑みを湛えている。子供を相手にするときの、少しだけ悪戯っぽい笑みと仕草だ。ついで彼女はその人差し指を街の上に翳す。

(私の指、本当はとっても大きいんですよ)

そんな台詞の後に、エリザの指先だけが大きくなり始める。広場にいる者達は特に、指を降ろしていると気付くまで少し時間を要した。

最初は街から来るざわめきも好奇心に満ちていた。

(どのくらいだろう?)

(でも指だよな?)

といった感じの声をおぼろげながら聞き取ることが出来た。

しかし地上まで二く三寸あたりから、どこまでも大きくなる彼女の指に対する不安が声に混ざり始める。

(まだなのか?)

(どこまで……)

翳した指はどこまでも大きくなり、限度が見えない。広場に落とす影も濃くなり、先の見えない恐怖と圧迫感が徐々に彼女の心を侵し始める。

(安心してください。絶対に、潰したりなんかしませんから)

一方のエリザは優しい微笑を浮かべたまま、中央広場に向けてゆっくり指を下ろしていく。

指の腹と中央広場がほぼ同じ大きさであることが解って貰えれば、そこで中止するつもりだった。しかし彼女にとつての誤算は、彼らの恐怖が徐々に増していくと思ひ込んでいた点にある。

(うわああああ!)

いきなり誰かが叫び声を上げたかと思うと、広場の黒い点たちが動き始める。

突然の変化にエリザは目を見開く。広場から外への流れは周囲で見ていた人々にぶつかり、あちこちから悲鳴と怒号が上がる。

(ちよ、ちよと待つてください)

遠慮がちに声を掛けるが、反応する者はいない。混乱は止まず、人々の激しい動きは外へ外へと波及しつつある。

このままでは街全体が混乱してしまう。激しい押し合いで圧死者が出る可能性もあるため、早く手を打たなければならぬ。エリザは素早く意を決し、緊張した面持ちで街に向き直る。

「止まって下さい」

エリザは短く声を発する。凡そ四千倍の体軀から出された肉声は街の隅々まで響き渡り、人々の流れを凍らせる。

おずおずと見上げる人々の目には、緊張した面持ちの巨大

な治療師が映る。広場の周囲にいた者はみな彼女の広く投げかける視線が自分に向けられていると錯覚し、目を離すことが出来ない。

「これから、皆さんを治療します」

エリザは静かに宣言する。口の動きから二呼吸ほど遅れて届く声は雷鳴のように轟きながらも優しく、群衆の心を落ち着かせる。

(倒れている人が居ましたら、周りの人が起こしてあげてください。いいですね?)

心の声で付け加えると、エリザは右手を胸に当てて感覚を研ぎ澄ませる。

今までになく明瞭に伝わってくるのは、やはり痛みや苦しみの声。それも、痛む部分を具体的に訴える声だった。出来ることなら違う内容をはっきりした声として聞きたかったが、そんなことを考えている場合ではない。エリザは彼らの声を受け止め、目を閉じて彼らのために祈る。

夢の中で何度も治療していることもあり、エリザに躊躇は無い。一方の群衆にしても山のような巨躯が静謐に祈る姿は幻想的で、なんとなく口をはさみづらい雰囲気だ。静かな時間のなか、エリザに伝わる感情も驚きに変わり、いくらかの喜びと感謝を経て穏やかに薄れていく。

思ったより変化が早いので、エリザは逆に不安を抱いた。目を開けて広場の周りを見るかぎりには平穏な雰囲気のように

だが、それだけでは安心できない。

(えーと。皆さん、大丈夫ですか?)

端々に忙しく目を配りながら、エリザは問いかける。

(もし怪我などありましたら、遠慮無く声を上げてください。どんな小さな怪我や痛みでも構いません)

切実な訴えに対して得られる反応は苦笑のようなものばかりだ。苦しみとか痛みといった類の声は全く聞こえない。

(あの、本当に大丈夫なんですか?)

念を押すと、今度は笑い声が返ってくる。

(おかげさまで元気ですよ)

(持病の腰痛まで治ったわ)

(心配しすぎだよ、ねーちゃん)

(まったく、おまえらしいや)

内容どころか一字一句まではつきり聞こえ、エリザははっと息を飲む。

(き、聞こえました!)

驚きに満ちた表情は、すぐに満面の笑みに転じる。

(皆さんの声が、聞こえました。全部。良かったあ……) あふれ出る思いをそのまま言葉に出しながら、エリザは崩れるように長い息を漏らす。

しかしその暖かい吐息が街の端まで届く前に、エリザは表情を引き締めて頭を下げる。

(ごめんなさい。皆さんを怖がらせるばかりか、怪我までさ

せてしまったて)

街から反応する声は『気にするな』とか『いいんだよそんなの』といった内容だ。

(ありがとうございます)

エリザは沈んだ表情のまま軽く笑み、視線を落として訥々と語り始める。

(私はちゃんとここにいて、幻じゃないということを感じて欲しかったんです。

皆さんに幻だと思われたら、私は独りになってしまいますから……)

そこまで言つてエリザは顔を上げ、いつもの優しい微笑を街に投げかける。

(でも今は、皆さんの声が聞こえますから、大丈夫です。

本当に、自分でも驚くぐらい大きくなつてしまいましたが、よろしくお願いしますね)

軽く会釈すると、街のあちこちからぱらぱらと拍手が沸く。それは人づてに広まり、ほどなく街全体が拍手に包まれた。

エリザは目を丸くし、軽く口まで開けてその様子を見ていた。自分にとつて彼等は点にしか見え、彼等にとつて自分は街を丸ごと踏みつぶせる山だ。しかし、それでも心はしっかりと通じ、彼等は自分を受け入れてくれている。何ともいえない様々な感情が一気に沸きだし、エリザは思わず口到手

を当てる。

(ありがとうございます)  
想いを込めた言葉と共に、エリザは再び頭を下げた。

落ち着いたところでエリザは先ほど王達を降ろした埠頭に目を転じる。まず目に付いたのは銀色の点の集まりで、これは護衛の騎士達だろう。とすれば、その中にいる点が王達となるのだろうか。

(あのう)

声を掛け、彼等が自分に向き直るだけの間を置いて言葉を継ぐ。

(申し訳ありません、予想外の展開になってしまいました)

(う、うむ)

返事に多少の狼狽はあるようだが、反応が分かるなら大丈夫だろう。

(次は如何致しましょう?)

問いかけたものの返事がなく、もう一度声を掛けようかと思つたところで別の声が返ってくる。

(いま協議中だ。少し待ってくれないか)

それは彼女の良く知っている声だった。

(あら、イーゼム? そこに居たんですね)

半刻前に聞いた響きだが、今はなぜか懐かしい。

(ははは、ちゃんと居るさ。死んだとも思つたのかい?)

(あ。いえ、そういうわけでは……)

(儂もおるぞお！)

答えを遮るように、呼んでもいない好々爺の声が飛ぶ。

(貴方の心配もしていません。残念でした)

エリザは笑いながら言い放つ。この二人は何があつても無事だろう。

まだ協議しているらしいので、エリザはふと湧いた疑問をぶつけてみた。

(ところで、貴方達から見てもどうですか？　今の私の大きさは)

(どうつて、まあ……うん、大きいのは確かだよな。本当に)

答えにくそうなのは、うまい言い回しが見つからないのだろうか。夢の中でもそんな具合だった。

(やっぱり、表現しづらい大ききさなんでしょうか?)  
ちよつと突つ込んでみると、イーゼムはたどたどしく説明を

始める。曰く、街のどこからでも見える存在感はもう圧倒的だ。しかし距離があるため本当の大ききさは分かりにくく、まるで騙し絵のようだ。指を降ろしたことでやつと少し実感出来たという感じらしい。

ローンハイムも同じような感じらしい。圧倒的なのは言うまでもないし、見た限り数千倍と見積もってもいい。しかしそれがどの程度大きいのかはまだ完全には理解できず、説明も出来ないのだという。

(折角の素晴らしい大ききさじゃのに、これでは冥土の土産にもならんわ。

どうせじゃから、此処に指か何か降ろしてくれぬかのう)

(無茶言わないで下さい)

口惜しそうな師匠を、エリザは半ば呆れながら宥める。

協議の結果は単純だった。式典そのものは落雷の前に終わっているし、新しい大ききさのエリザに対する式典も必要なら日を改めるのが妥当だ。よつて、王達が城に戻った後は彼女自身で判断して進めて欲しいとのことだ。

(ああ、はい。そうですね)

一応そう返すものの、いきなり進行を任せると言われても困る。さりとて、彼らの説明に筋が通っているので反論もできない。

王達が城に戻るまでの間、エリザは今の大ききさで街の住民に何をしてあげられるかを考えていた。今のところ関係は良好であり、反応を聞くこともできる。過剰な心配も不要だから、考えも自然と前向きになる。いろいろ出来そうだが、まずは夢の中で試したことからやってみよう。

城に戻った王達から、以降の進行はエリザに任せざる旨が宣言されると、人々の視線は再び彼女に戻る。

(ええと。私からちよつと、提案があります)

人差し指を立てて、少しだけ遠慮がちにエリザは持ちかけてみる。



彼女の提案は、いつも子供たちにねだられる『高い高い』だ。しかも今回は街を丸ごと、雲の上まで持ち上げる大きなものである。住民の方も彼女の大きさに慣れてきたのか、聞こえる意見はほぼ賛同の声で、特に子供達は明後日の約束が今日になったと喜んでいいる。それと同時に、高所恐怖症と思しき何人かの不安や反対もはつきりと聞こえてくる。

(うーん、そうですね。高い所が苦手な方も、いらつしやいますよね)

エリザはちよつと首を傾げ、しばし思案する。意見が拾いやすいと余裕を持つて対応出来るから有り難い。

(では、苦手な方は、街の真ん中まで移動をお願いします。そこなら、下さえ見えなければ何も変わりませんよ)

そう論すと、彼らの不安も薄れてゆく。これなら大丈夫だろう。

街を持ち上げるといっても、夢でやったように直接手で持ち上げるわけではない。そんなことをすればさっきの二の舞になるし、街が崩れる可能性もある。その代わりにエリザは街を包むように両掌をかざし、目を閉じる。

街の半分以上を覆えそうな両掌にざわめきが挙がるものの、そこに恐怖はない。薄暗くなつた街の住民は空を分断する指を好奇のと期待の目で見ているようだ。

(えっと、そうですね。これから街に魔法を掛けます)

自分の行動を伝えていなかったことに気付き、エリザは目を

開けて慌てて補足する。

(まず、建物が壊れないようにします。それから、地面を少しだけ持ち上げます。いいですね?)

途方もない規模の魔術だが、説明するエリザの口調は軽やかだ。

(はーい!)

子供たちの返事も陽気なものだ。その愛おしさにエリザは微笑み、再び目を閉じて大地の御霊たちに念じる。

御霊たちの加護はすぐに街の全域まで行き渡り、街中の建物と支える大地が魔力を帯び始める。これで少々の無茶をしても建物が潰れることはないだろう。百五十倍で練り歩いたときより安全というのも皮肉だが、被害が出ないに越したことはない。

一方の住民たちも、石壁のたてる微かな音で変化を察したようだ。

(これで強くなったの?)

(じゃあ、叩いても壊れないんだ)

(ははは、元々おまえじゃ無理だろう)

そんな微笑ましいやり取りまで聞こえる。

声が落ちてくのを待つて、エリザは次の術を宣告する。

(では、次に魔術で地面を起こします。少し揺れると思いますので、不都合がありましたらお伝え下さい)

(おっけー!)

(お願いします)

(はやくやってくれー)

我先にと届く怒濤のような返事に、エリザは困ったような笑みを浮かべ眉間に皺を寄せる。

(えーと。言つて頂くのは嬉しいのですが……これでは、不都合がある人の声が聞こえません)

結局、階段を上り下りしている人や鍋に火を掛けている家が少しあつたようだ。彼らの対応を待つてエリザは街の地下に魔力を送る。

するとほどなく微かな地鳴りが響き、街全体が小刻みに揺れ始める。棚のものが動く程度の弱い揺れが長時間続き、同時に何か持ち上げられるような感覚がある。

(いま持ち上げています。大丈夫ですか?)

術に集中しているせいか、エリザの問う声にも余裕がない。

(ああ、大丈夫だよ)

(思ったより揺れなくて安心しました)

(すごいや、本当に持ち上がってる!)

街の連中は気楽なものだ。一々怖がるよりはよほどまだが、市壁の回廊から見ているのは流石に気を抜きすぎではなからうか。

(もう、しつかり捕まっついて下さいよ。落ちても知りませんから)

エリザは僅かに拗ねた口調で注意を促す。しかしその返事

は思つてもない場所から来る。

(う、うむ。そうじゃな)

遠慮がちに応えた声は、テラスに出ていたラファイセット王のものだった。

街全体が指二本分ほど隆起したところでエリザは術を止める。

(では、これから街を持ち上げます。掌が下りますのでご用心下さいね)

そう言つて両の掌を向かい合わせたまま下ろし、小指と掌側で街を包み込もうとする。

市壁の高さは、指幅の三分の一といったところか。逆に考えれば街壁の何十倍もの白壁が両側から迫っているわけで、市壁に居る者はもちろん、街の中にもいる者にとつても相当な脅威になりそうだ。

(大丈夫ですか? 怖くはありませんか?)

一寸ほど余らせて手を止め、エリザは尋ねる。

(ええ、大丈夫ですよ。今のところは)

(これ手なんだよね、大きいなあ)

(まるで雲みたい)

返る声の大半は朗らかなものだが、不安の声もある。曰く、先ほど指を近づけたときは際限なく大きくなるのが怖かったそうだ。

(そうですね)

手をいったん引き、少し考えてからエリザは案を示してみる。

(じゃあ、ゆっくり近づけてみましょう)  
そう言つて、しかしエリザは首を傾げる。

(えーと。もしかして、一気に近づけた方が良いのでしょうか?)

(いや、多分速さの問題じゃないと思うぞ)  
割つて入つたのはイーゼムの声だ。

(問題はどのくらい大きくなるか解らないことだから、お前の大きさが解れば良いんだ)

(あ、はい。そうですね)

エリザは応え、掌の幅を示しながら自分から見た町の感覚を伝える。

(私の掌は、おそらく……そうですね、高さは壁の二十倍近いと思います)

彼女の見積もりを聞いて、街から一斉に驚嘆の声が挙がつた。

(そんなになるのか)

(すごい)

(やっぱり大きいんだな)

(おいおい、本当なのか?)

不思議なほど怖がる声は挙がらないものの、疑問を挟む声はわずかに混じつて聞こえる。

(え、ええ。見たところ、壁の高さは指の三分の一くらいです。掌はその位になると思います)

説明しながら自分の大きさを想像してしまい、エリザの顔ががつい赤くなつてしまう。

(いまさら恥ずかしがるなよ。可愛い奴だな)  
茶々を入れながら、イーゼムはエリザの大きさを計算していた。指幅の三分の一を一分(三ミリメートル)、市壁の高さを四く五丈(十二く十五メートル)とすると、エリザの尺度が計算できる。

(四く五千倍つてどこか。大きい大きいとは思っていたが、本当に凄いな)

イーゼムの感嘆の声を受け、エリザは照れ笑いを浮かべる。

(あまり大きい大きいって言わないでください。気にしているんですよ)

彼女は止めてくださいと言わんばかりに手を振る。少し間をおいて、香を含んだ涼風が街を駆け抜けた。

掌から市壁までの距離を逐次報告しながら、エリザはゆつ

くりと掌を近づけていく。

(あと二分くらいです……一分……)

最後をことさらゆつくりと近づけ、どうにか街の土台と壁に

接することができた。包み込むように触れた石壁はやはり

小さく、中や上にいた連中は避難しているようだ。

(大丈夫ですか?)

怪我されている方や、恐怖を感じてい

る方はいらつしやいませんか?)  
念のため尋ねて答えを待つ。

問題がないことを確認して、作業を次に進める。

(それでは、街を地面から切り離します)

そう伝えて大地に念を送ると、ぴきぴきという甲高い音が出る。それを聞いた住民から不安の音が挙がったので、彼女は微笑んで説明を加える。

(これは石が割れる音です。安心してください)

切り離しが終わったことを確認するため、エリザは少しだけ街を回す。今度は石同士の間擦れる音が地響きとなって轟き、驚きの声が一気に届く。

(ご、ごめんなさい)

なかば反射的にエリザは頭を下げ、確認のため動かしたことを説明する。

彼女の反応と説明で町の人も落ち着きを取り戻したので、いよいよ街を持ち上げにかかる。

(それでは、空の世界にご招待いたします)

そう言つて、エリザは慎重にラファイセットの街を持ち上げ始める。

上昇の速さによつては、重さを感じたり揺れに酔つたりするらしい。エリザは人々の様子を慎重に伺いながら、大きめの盆くらいある街を恭しく持ち上げていく。

二寸ほど持ち上げたところで手首を上方方向に捻り、指四

本を町の下に滑り込ませる。そして膝の高さまで来たところで掌全体を街の下に滑り込ませる。

そうすることでやつと支えが安定したので、膝の上に掌ごと街を置いてひと休みだ。改めて街の様子をつぶさに見渡し、何度目になるかわからない質問を投げかける。

(やつと膝の高さまで来ました。皆さんは大丈夫ですか?)

(もちろん!)

(おかげさまで、全然揺れてないよ)

(そんなに一々確認しなくても大丈夫ですよ)

(ねーちゃんも必死だなあ。心配し過ぎはよくないぞ)

逆にこつちを心配する反応の数々に、エリザはつい吹き出してしまった。

(ちよつと待つてください。そんなに私のことが心配ですか?)

(だって、なあ)

(全然揺れてないのに、すつごい緊張してたんだもん)

(緊張しすぎて落つことすんじゃないかって、それが心配だったよ)

緊張していたのは確かだが、かなりの言われようだ。そもそも四万とも五万ともいわれる数の命を掌に乗せて、それで緊張しないほうがおかしい。

(もう。そんなこと言う人は)

エリザは掌をずらして親指を街の外に出す。そして塔の何

倍も高く高い親指を街の両脇に出現させ、首をもたげるように曲げて左右に振る。

(ひとの心配なんて出来ないようにしてしまいますよ)

(ひゃあ、こわいこわい)

(たいへんだー)

怖がつている気配など皆無だ。爪に城が乗るくらい大きな指にも慣れてきたのは、果たして良いことなのかどうか。エリザは苦笑するしか無かった。

今の時点で街の高さは灰色の雲と同じくらいまで来ているが、エリザにとつてそれはまだ膝の上に過ぎない。

(では、そろそろ立ち上がりませう。本番はこれからですよ)

(あ。そうだったんだ)

(おう、行ってくれ！)

(あっ！ 少し待ってください！)

意外な反応に、エリザは目を開いて声が出た辺りを凝視する。

(どうなさいました?)

尋ねてみると、先ほどの声の主が応える。

(ありがとうございます。今この光景を描き留めたいんです)

どうやら、広場で自分を描こうとした画家の一人が待ったを掛けているようだ。

(あ、はい)

素直に応じるものの、どうにも彼の真意が見えない。差し出がましいと思いつつも、エリザは疑問をぶつけてみた。

(ですがその、立ち上がった後のほうがずっと遠くまで見えますし、綺麗だと思いますよ)

(いえ、この景色が良いんです。天地がいま、丸ごとあなたの上に置きかわっていますから)

横槍に怒ることもなく、画家は熱を帯びた口調で断言する。  
(そうなんですか)

力ない返事をして、エリザは街が置かれている状況を考えてみた。確かに街の下にはスカートの生地が広がり、引き寄せたことで上半身が覆い被さっている。

(この世で最も美しい被写体は、大自然の光景と女性の体だと思っっています)

その両方が一緒だなんて、本当に素晴らしい。奇跡だ！  
(はあ……)

褒められているのか、単に欲情しているのか解らない内容だが、熱の入った口調に押されて無下に断れない。結局エリザはデッサンが終わるまでしばらく姿勢を保たなければならなかった。

やっと画家のデッサンから開放されたので、エリザは一言断ってからゆっくりと立ち上がる。

ずっと同じ姿勢を保っていたので、筋肉が伸びる感覚に思わず声を漏らしそうになり、慌てて彼女は奥歯を噛む。

彼女が立ち上がるに従い、街はどんどん高度を増していく。殆どの住民には重力と雲の流れる方向から認識できるのみだが、一部の者は壁や櫓に登って風景の変化を直接楽しんでるようだ。

(壁の上で立つのは危険ですから、身を低くして下さいね)

(はい！！)

注意を促すと元気の良い声が返り、壁の上に居る点が少し長くなる。

(うん、素直でよろしい)

子供相手の口調がつい出てしまい、慌ててエリザは台詞を継ぎ足す。

(あ、安全のため、御協力をお願いしますね)

完全に立ち上がったところでエリザは街を左手に移し、ゆっくりと息を吐き出して雲を作る。その雲を右手で均しつつ、念を送って支える力を与える。最後に街を雲の上に乗せてゆつくりと左手を離すと、街はわずかに沈みつつも空中に留まった。

(はい、これで安定しました)

安堵の笑みを街に向け、エリザは宣言する。

(もう動いても大丈夫ですので……って、あの……)

説明は途中で終わってしまった。言ってるそばから、街の黒い点たちが一斉に街の縁に向けて動き始めたからだ。

(見せて見せて)

(いや、俺が先だ)

その動きだけでも明らかだが、声を聞くと彼らの先を争う様子がよりはつきりと伝わってくる。これにはエリザも苦笑するしかない。

(ゆつくり、落ち着いて移動して下さい)

溜息混じりに注意を促すが、返事はまばらだ。人の流れにも変化はない。

(もう)

エリザはその反応に呆れる反面、内心では彼らが楽しんでいることを喜んでもいた。何か思いついたのか、彼女の表情はすぐに悪戯っぽい笑みへと変わる。

(怪我なんてしたら許しませんよ。もし何かあったら)

そんな声と共に、走る群衆の周囲が暗くなる。変化を察して見上げると、彼らのすぐ上には広場よりなお大きな人差し指が翳されている。

(みんなまとめて治療します。一人だつて逃しませんからね)

脅迫にしては妙に楽しそうな声が、彼らの心に届いた。

エリザが翳した指によって、群衆の動きは目に見えて鈍くなった。かといって怒号が上がるわけでもないのが、衝突や事故は無いと判断していいだろう。冗談混じりの脅しは思った以上に効果があるようだ。

(ふふ、解って頂けましたか?)

指を引つ込め、身を屈めて尋ねる。

(ああ……)

(うん)

(そう、だな)

返ってくる声はくつきりと聞こえるのだが、なぜか生返事ばかり。

(ん？ どうされました?)

気になったエリザは更に問うが、やはり釈然としない返事ばかり。怖がつているようでもないし、いまさら彼女の大きさに驚いているとも考えにくい。

数千倍も差があると、こういうときに相手の様子が判らないから厄介だ。伝わる声からして深刻な状況ではなさそうだが、やはり不安と好奇心は拭えない。

エリザはもう少しだけ身を屈めてみる。

(うわ)

(おお)

(すごい)

聞こえるのは短い感嘆の声ばかり。ただ、近づいたことによつて人の手足が何となく識別できるようになった気がする。もう少し近づければ、何か見えるかもしれない。エリザはさらに身を屈め……

そのとき、彼女の胸が何かに触れた。

反射的にエリザは上半身を反らせる。その動作にやや遅れて揺れる胸の重みで、ようやくエリザは違和感の正体を悟った。

(え? 大きい……?)

衣装で強調されているとはいえ、朝よりも明らかに一回り大きい。王達を掌に乗せた時とも違うから、雷を受けて変化したのだろうか。

いや、それよりも問題は街だ。エリザは慌てて街を上から確認する。

しかし街に事故の痕跡は見あたらず、どこに自分の胸が当たったのかも判らない。

(あ、あの……)

今から訊く内容を考えるだけで、頭に血が上る。唾を飲み込み、勇気を振り絞ってエリザは尋ねた。

(わ、私の胸が当たったと思うんですが、どこに当たったかわかりますか?)

(ああ、ここだ(こー!))

返事はすぐに来た。しかも聞き慣れた声だ。

(どっ、どうしてあなたが……)

目を見開き、耳まで赤くしてエリザはしどろもどろに問い詰める。

(そりゃあこっちの質問さ。どうして俺の居るところに胸を

押し当てたんだよ?)

しかし問われたイーゼムの方は冷静なものだ。

(押し当ててなんかいませんっ!)

反駁するエリザの目は潤んでいる。その様子を見て、さすがにこれ以上言うのはまずいと思っただろう。イーゼムは即座に話を切り替える。

(とりあえず、この辺りはみんな無事だよ。建物が支えてくれたようだ)

(えっ……あの……)

一方のエリザは話の転換に付いていけないようで、視線はさまよい何度も瞬きしている。

(つまり、無事、なんですか?)

(そうだよ)

苦笑しながら答えると、エリザの表情が一気に緩む。

(良かったあ)

安堵の息と共に一言漏らす。本来、一番聞きたかったのはそれだったのだ。

(他の方は如何ですか? 怪我とか、ありませんか?)  
さらにエリザは、街の他の場所に視線を配りつつ尋ねる。

(大丈夫だよ)

(それより、向こうの連中が羨ましいぜ)  
(そうですね。こちらにもお願いしたい)

(あ、いいねそれ)



最初は苦笑混じりの返事だったが、それは徐々に要望へと変化する。

(や、やって欲しいって、その、まさか……)

(もちろん、そのまさかです)

(胸でぎゅっ、とね)

(いいねえ)

(いいぜ。この街で受け止めてやるよ!)

彼女の狼狽は隠しようもないが、住民は容赦しない。

(いや、その……)

エリザは救いを求めて視線をイーゼムに合わせるが、それに気付いた彼は事も無げに答える。

(怖がつてる奴らを抱きしめたりするだろ。それと同じだと思えば良いじゃないか)

その説明に対し、周囲からは賛同の拍手まで沸き起こった。

その反応に、エリザの中で何かが切れた。その顔はみるみるうちに紅潮する。

(いい加減にしないと、怒りますよ!)

潤んだ眼で街を睨み、心の声を叩きつける。

(そんなこと出来るわけじゃないでしょう。誰ですか、そんな破廉恥なことを言うのは?)

腰に手を当てて身を屈め、きつい視線を街のあちこちに配る。さすがに肉声や手を出すことはないが、配慮もここま

でだ。

街からの反応は無いが、それも当然である。数千倍の大きさによる眼力は、目が合うだけでたじろくほどだ。それが怒気をはらみ容赦なく畳みかけたので、さつきまで調子に乗っていた連中は軒並み震え上がってしまったようだ。

(ちよつと、言い過ぎました)

瞬き二つ三つの間を置いて、エリザはあつさり折れる。上を向いて溜息をつき、幾分柔らかな視線で街に向き直る。

(いや、こつちも言い過ぎた。すまん)

(良いんですよ。あなたが言い出したわけじゃないんですから)

いち早く反応したイーゼムに、エリザは微笑みかける。

(あの、失礼な申し出、本当に申し訳ありません)

それを見てか、画家の一人がおずおずと切り出す。

(仕方ありませんね)

頭を振って許すと、画家は釈明を始める。曰く、小さな街なら丸ごと飲み込めそうな胸が降臨し地面を包みこむ光景は情欲的というよりも幻想的といった方が正しく、神話の再現にも匹敵する壮大な光景なのだという。

(そうなんですか……)

やや呆れ気味の表情のまま、エリザは右手を腰から離す。

中央広場の上空を分断する影がいきなり現れ、広場の一角を闇に閉ざす。更に空からは何かの擦れる音が轟く。少し離れた場所からは、広場を丸ごと飲み込むほどの指先が降

臨して輪を描くように周囲を蹂躪するのが見える。両者とも突然の事態に目を奪われ、驚きの声さえ出せない。

(これでは足りませんか？ 十分に壮大だと思えますけど)

少し悪戯っぽいものの、普段通りの優しい声が市民の心に響く。

エリザにとつては人差し指で軽く撫でるだけのことが、街の人達には天地を揺るがす事象に見えているだろう。強化魔法を掛けていなければ指の下は何もかも押し潰されてしまはずだが、指の下から恐怖心は感じられない。ただただ驚き、理解するにつれて感嘆に変わっていくのを彼女は敏感に感じ取っていた。

怪我人も多少いるものの、反射的に身構えたことで肘を当てたり、尻餅を付いたりといった軽い被害だ。指を下ろしていることで怪我人との距離が近いため、治療はたやすい。

(あ、ありがとう)

(どういたしまして)

感謝の声に笑って応える。真つ暗な天井に感謝していると思うと、なんとも愛おしい。

治療が終わったところで指を上げ、街の上で横に振りながら諭す。

(指だけでこうなってしまうんです。胸なんて下ろしたら、皆さん驚いて死んでしまいますよ)

口調こそ軽いが、指一本の威力を見せつけた後だけに内容は重い。しかしそれでも住民たちは心の準備ができれば問題ない、今ので慣れたから大丈夫といった銘々の意見で反論する。

(もう、駄目といったら駄目です)

エリザは口を尖らせて突っぱねる。

(じゃがのう、エリザよ)

(今度は何ですか?)

ローンハイムの呼びかけに、エリザはやや強い口調で応える。この老師は変なところで好奇心が強いから油断できない。

(街を抱けば、住民の存在をより強く感じ取られるぞ)

身構えていたエリザにとつて、老師の提案は全くの想定外だった。彼女は目を大きく開いたまま何度も激しく瞬きする。

(そ、それは……)

返す言葉に詰まってしまう。街を胸で抱きしめて欲しいなんて、普通に考えれば応じられるわけがない。指で脅したのも、彼らの見え隠れする欲に嫌気がさしたからだ。しかし……

(皆さんの存在をもっと身近に感じたいというのも、私の偽らざる心境です)

エリザは素直に心境を吐露する。今の彼女から見た人々は

一厘（〇・三ミリメートル）強の点でしかない。もちろん、  
どれだけ小さくても彼らを尊重する意志に変わりはないし、  
心話が通じているなら尚更だ。

しかし彼等が自分を幻だと認識していたように、エリザ  
も住民の存在を直接的には実感できていない。心話が通じ  
ることで、眼下の動く点を『ひと』だと思えているに過ぎな  
い。いま聞こえている心話がもし幻聴だったとしたら、今  
までの会話から住民の存在までもが全て幻となってしまう。  
残るのはどこまでも小さく、単調で、耐え難いほど孤独な世  
界……

気付けば要望の声は無く、代わりに急に冷えて寒いとか、  
息苦しくて頭が痛いといった訴えが街のあちこちから出て  
いる。

（あつ、ごめんなさい）

考え事をしていたため気づくのが遅れたようだ。慌てて街  
の前で手を組み、街の周りが暖かくなるよう祈りを捧げる。  
そして更に彼女は街の人々の快癒を念じる。

（これで如何ですか？）

尋ねてみると、彼らの頭痛は収まったようだ。しかしどこか  
にぶつけたわけでも無いようだし、何より一斉に発生とい  
うのが解せない。

（うーん。大きな問題でなければ、良いのですが……）

エリザが言うが早いのか、頭痛を訴える声が再び拳がり始め

る。先と同じ人の声も聞こえるから、再発していると考え  
べきだろう。

（この症状を納めるためには、街ごと抱きしめるしかない  
ぞ）

（もう。どうしてそうなるんですか）

便乗する師匠に反論しつつ、エリザは自分の胸元を見下ろ  
す。両胸の張り出しは前より大きくなっているものの、街を  
覆うにはまだ足りない。もうふた回りほど大きくなければ  
……

我に返ったときにはもう遅かった。

眼下の双丘は掌が余るほどに大きくなり、街の半分以上を  
彼女の視界から遮っている。その街も、心持ち小さくなって  
いるような気がする。

（これはすごい）

（大きいなあ）

（ねーちゃん、やる気だなあ）

街からは囃し立てる声が届き、エリザは自分の胸を抱きし  
めて体を横に捻る。

（いや、あの、これは……違うんです）

消え入るような声に堅く閉じた目、紅潮した顔。初々しい仕  
草に、街からは口笛や拍手まで聞こえてくる。

どうしてこう、退路を断つ方向にばかり事が進むのか。も  
しかして、心の底では街を抱きしめたいと思っているのだろ

うか。

思つて、いるのかもしれない。

エリザは沸き上がる問いを冷静に捌いていた。

小さな住民の實在に疑いを持った時点で、既に答えは出ていたのだろう。一度沸いた疑いは会話だけで晴らしようもなく、彼らを直接抱きしめて存在を確かめるしかなさそうだが、情欲に応じるのは癪だが、他に手段が思いつかない……

深呼吸しながら覚悟を決め、街に向き直つて腕を解く。街から拳がどよめきは、解放された胸の大きさと揺れを見てもの反応だろう。単純なものだ。エリザは自然と出る以上に呆れた表情をつくり、両手を腰に置いて溜息までつく。素直に応じる気は無いし、そう思われるのは絶対に嫌だ。

(今日は特別ですよ。明日言つたら怒りますからね)

強い口調で伝えるものの、エリザは諦観していた。この嘆願は後で絶対に出てくるだろうし、自分もまた文句を言いがら応じるだろう。

膺の少し上に街を据えて覆い被さるように身を傾けると、胸の重みで服の布地が悲鳴を上げる。気を抜けば前に倒れかねない重さに対し、エリザは背筋と爪先に力を入れて耐える。しかし守っているはずの市民は相変わらずの様子で、いつそのし掛かってしまおうかとさえ思つてしまう。

(では行きますよ)

邪念を振り切るように短く伝え、エリザはゆつくりと身を

屈める。楕円形の街は左右にも広場を持ち、そこからの円を二つ繋げると街をほぼ網羅できそうなので、両胸が広場の上に来るよう照準を定める。街からの声は聞こえないが、固唾を飲んで降臨を今か今かと待ち望んでいるのが何となく解つてしまう。それより気になるのは、何人か屋根や塔に登っていることだ。自分の影になつてあまり見えないが、なぜか彼女はそれを確信していた。

(屋根に登っている人は下りてください。潰れてしまいますよ)

やや強めの口調で注意すると、彼らは返事してすぐに下りる。素直な反応にエリザは安堵しつつも、内心では彼らと触れ合えないことを少しだけ残念に思う。

全員が屋根から下りたことを確認してエリザは小さく頷き、最後の半寸を詰める。胸が街に触れると、屋根の尖った感触が微かに伝わる。体重を少しずつ街に掛けていくと、自重で潰れた胸が徐々に広がっていく。屋根や道や広場が次々と飲み込まれ消えゆく様子は、彼等の目にどう映るのだろう。津波のように見えるのだろうか。

雲の浮力は思つたより大きく、身を預けても街が沈む気配はない。体重を掛けながら両腕で軽く抱き寄せるだけで、彼女の胸は街を丸ごと覆いつくした。建物が潰れた感触はなく、代わりに大小様々な建物の凹凸を服越しに感じる。逆に自分の鼓動も街全体に伝わっているようだ。

(胸のつかえが降りた気分ですよ。皆さんは如何ですか?)

エリザは冗談交じりに尋ねてみる。

(真つ暗だ)

(なんも見えねえぞ)

(怖いよう)

鼓動や温もりへの反応が来るだろうと思っていたが、これは予想外だ。

(あらあら……)

少々面食らうものの、考えてみれば当然の反応である。自分の胸が上空を塞いでいるのだから、光は門の隙間からしか入らない。

(それでは、光を灯しますね)

そう伝えて、エリザは自分のドレスを光らせる。強すぎると彼らの目を潰すおそれがあるため、敢えて魔力を込めずに念じる。日光の下にいるエリザに自分の明るさは解らないが、素直な反応から大体の感じは掴める。

(これくらいで如何でしょうか?)

念のために尋ねてみると、街からの声は一層大きくなる。

(いやあ、これはすごい)

(これが刺繍なの?)

(大きなあ)

相変わらず尋ねたことには応えてくれないが、素直な驚きぶりが嬉しくて笑ってしまう。

(ふふつ、大きいでしょうか?)

町中を見ることは出来ないし、皆が喋っているから一人一人の声を聞き分けるのも困難だ。しかし彼らの全般的な様子や、皆と違うことをしている者の動向はわかる。例えば……

(小刻みな地震は、おそらく私の鼓動です)

答えてあげると、納得する声がいくつか上がる。

(もう、そんなに大きいのですか?)

少しだけ攻めるような口調で問うと、慌てて謝る声が返ってくる。

(梯子なんて取り出して、どうなさるおつもりですか?)

悪戯っぽく尋ねてみると、あわあわと言葉にならない反応が幾つか出る。

(触りたいんでしょう。仕方のない人ですね)

呆れたように言うが、意図が読めるのは有り難いことだ。

(じゃあ、もっと低くしましょうか)

そう言つてエリザは更に街を強く抱き締める。膨大な重さに加えて力まで掛けたら街など跡形もなくなりそうだが、強化魔法のおかげで木の一本さえ折れる気配はない。

ほどなく無謀な連中がドレスにとりつき、表面の糸の隙間を広げて生地内に入り始める。しかし生地の張力に阻まれ、糸一本分より奥へは入れないようだ。これまでも増して動向や心理まではつきりと掴めることに加え、もがいている

様子がおかしくてエリザはくすくすと笑うが、彼らはその動きにさえ翻弄されて悲鳴を上げる。

(ごめんなさいね。それ以上は御招待できないんです)

謝る声は余裕に満ち、そしてなんとも楽しそうだ。

まわりついでに連中が服の表面で落ち着いた頃を見計らってから、エリザは以前から持っていた疑問を今一度投げ掛けてみる。

(ところで、街を抱き締めた私って、どのように見えましたか?)

先程も似た疑問を投げたような気もするが、何度聞いても想像しづらいのだ。しかも、その疑問を抱くのが当の自分自身だけというのが何とももどかしい。

(そうだな……)

思いだしながら、彼らは思い思いの印象を語り始める。

エリザの予想通り、住民の視線は彼女の胸に釘付けになっていた。街の遙か上に鎮座していた双丘は屈むことで一気に街の直上まで落ちる。街の中心部では淡い色のドレスが雨雲よりも低く垂れ込め、周囲を薄暗く閉ざしている。外縁部からは、釣鐘型に伸びた山脈が街を押し潰さんばかりに迫っているのが見える。

ドレスの表面にある文様が激しく動いているのは、彼女のちよつとした動きに翻弄されているのか、それとも置き場所迷っているのか。体温を含んだ暖かい風が吹き抜け、生

地の軋む音が雷鳴のような音量で轟く。

(屋根に登っている人は下りてください。潰れてしまいますよ)

優しいが凜とした声に響き、家や見張り塔の屋根に登っていた何人かは慌てて屋内に入る。言われて初めて気づいた者も含め、誰も彼女の言葉には逆らわなかった。

素直な反応にエリザは満足したらしく、軽く頷いて更に半身を下ろし始める。手を伸ばせば届く高さだと思っていた中心部の住民たちだったが、天蓋は彼らの予想を超えてどこまでも落ちてくる。最初は家ぐらいの大きさと思っていた紋様が区画ほどになり、更にそれをも凌駕する。指を下ろした場所以外の住民は初めて彼女の大きさを実感する羽目になり、どこまでも大きくなる体軀を呆然と見上げるしかない。

慎重な動作に加えて元が柔らいたため、着地の振動と音は比較的穏やかなものだった。しかし重みを受けて膨らんだ胸は、馬の速駆を遙かに超える速度で市壁に迫る。それに伴って逃げ道を求める空気が嵐のように辻々を駆け巡ったが、吹き飛ばされた人々は怪我をする前に快癒していた。

厚い雲が街を飲み込むような光景に周辺部の住民は一步も動けず、薄闇に包まれて初めて自分が胸の下に入ったことを知った。気づいたときには南門を除いた街の大半は真っ暗だ。南門からは、天から聳える白い二子山が互いの山肌を押し合う光景が一瞬だけ見えた後、やはり闇に閉ざされて

しまった。

視界が閉ざされて、やっと住民はそれ以外の変化にも気づく。先程までの寒さから一転して暖かくなり、湿気と僅かな塩気を含んだ香水の匂いが辺りを優しく包んでいる。天の奥底から周期的に鳴り響くのは鼓動だろうか、微かな振動まで伴っている。それとは別に、風の唸る音とゆっくりした上下の揺れもある。こっちは呼吸だろう。風景のみならず氣候まで、しいては五感のすべてが巨大な治療師の支配する世界となっていた。

暗さを訴える声はすぐに届いたようで、空はすぐに明るくなった。そこで住民はようやく、治療師の本当の大きさを間近に見ることとなった。生地は織糸だけでも縄のような太さがあり、模様やフリルの一枚一枚でさえ広場を凌駕している。淡い色調で輝くドレス生地は晴天のようであり、尖塔を飲み込む様は雲のようでもあり、屋根から屋根へと渡された天幕にも見える。広場ではより低く垂れ込めており、手を伸ばせば届く高さで上下に動いている。

深く話を聞き入るうちに声は遠くなり、代わりに彼らの思い描く景色がぼんやりと瞼の裏に写る。それは神話の天変地異を具現したような光景で、とても自分のちよつとした行動が引き起こしたものとは思えない。

(うーん。そこまで凄かったんですね)

感慨深そうにエリザは唸る。ちよつと抱きしめただけで、こ

こまで感銘を受けている。そう思うと小さな彼らがどこまでも愛しくなり、沸き上がるような震えを感じた彼女は街を擦るように上半身を動かしてしまふ。

服越しの建物の凹凸から街の存在をより強く感じられるが、すぐにあちこちから声が上がリ、エリザは我に返る。そして自分の僅かな動作が及ぼす影響に気づいた。

(だ、大丈夫ですか?)

慌てて尋ねる。

(え……あ、うん)

(だ、大丈夫……みたい)

(治つちやつたよ)

(ほんとあつという間だね)

返事に苦痛はなく、代わりに幾らかの戸惑いの色を含んでいる。雲の流れを早めたように天の模様が一斉に動き、建物に擦れて地響きのような轟音をたてる様は中々の見物であつたらしい。壁にぶつかつたり転んだりした者も何人か居たようだが、痛いとか何とか言う前に治ってしまったので、怪我をしたという実感さえ無いようだ。服に取りついていた連中も全員落ちたものの、やはり即座に快癒している。

(良かった)

安堵の声を漏らし、エリザは治療のからくりを説明する。これは誰もが身に纏う僅かな魔力によるもので、本来なら効果が出るほどの力はない。

(ですが何と言ってもほら、今はこの大きさですからね)  
その声は嬉しそうで、また誇らしげでもある。

街からの声が収まってきた頃合いを見て、エリザはいつからか閉ざしていた瞼を上げた。軽く身を傾け視線を下げているため、目に入るのは緑や灰などの色が織り成す絨毯のような大地で、自分が大きいのではなく周囲が小さいかのような錯覚を覚える。草原や森を縫う灰色の線は街道で、赤茶色の点が集まっか集まっているのは村落か。視線をもう少し遠方に投げれば、やや大きな灰茶色の円が見える。これは隣街のバラムだろう。確かあそこまでは三里ほどあつたはずだが、今の自分なら数歩で辿り着けそうだ。

ということは、自分の姿も街から見えている……？  
今更ながら気づいたエリザは慌てて身を起こしかけ、そこで街への影響に気づいてすぐに下ろし、街を抱きしめ直す。しかし胸の重みに加えて勢いも付いていたため、街は彼女の尺度で五分ほど沈みこんだ。

(ああ……ご、ごめんなさい。またやつてしまいました……)

短く謝ってからエリザは町の人々の快癒を祈り、彼らの様子に心を傾ける。今度は上下の揺れに翻弄されたようので、外に出ていた者は彼女の胸に一旦受け止められてから地面に激しく衝突していた。しかし先と同様、痛みを感じる前に完治している。

(ごめんなさい。あの、ちよつと、慌ててしまったんです。遠くの街から私の、その、今の姿が見えていると思うと、つ……)

少し間をおいて釈明するが、その口調はどうにもただどかしい。

(ああ、確かに、何やつてるんだらうつて思うよね)

(街に胸押し付けてるんだからねえ)

(しかも擦り付けてるし)

(俺たちも変な目で見られそうだな)

(やれやれだ)

翻って住民の声。元はといえば彼ら自身が望んだことなのに、勝手なものである。

身勝手な住民はさておき、実際のところ遠方から自分はどう見えているのだろうか。彼らの声を聞くことはできないだろうか。色々と初めて尽くしの状況もあり、一度沸いた疑問は今すぐに確かめなくなる。

(ではちよつと、身を起こしますね)

一言伝えてエリザは下支えする腕を解き、今度はゆつくり上体を起こす。

再び陽光を浴びる街は無傷だったが、形状のみ小皿を二つ並べたように歪んでいた。自然にも不自然にも見える不思議な地形にしばし見とれるも、これが自分の胸で作った凹みと思うと、つい赤面してしまう。



(と……とりあえず、均しますね)

エリザは慌てて宣言し、左掌で下支えながら右の四指で慎重に周辺部を押し下げていく。「それも胸でやってくれよ」という不埒な輩も居たが、少し強めに押せば大人しくなった。

凹凸がほぼ無くなったところでエリザは街を脇の雲に乗せてゆつくりと遠ざけ、南方を向いて祈るように手を合わせる。

(改めまして、こんにちは。ちよつと大きくなりすぎてしまいました。治癒術師のエリザです)

簡単に自己紹介。小さな町や村落を前に自然と笑みがこぼれる。

(折角ですので、皆さんの声を聞かせて頂けませんか?)  
心話は届くだろうが、彼らの声は聞こえるのだろうか。

耳をすませつつ、エリザは足元の集落から徐々に遠くの町へ、またその逆方向に意識を往復させる。

やはりというか、近くの集落からは少数ながらもつきりと声が届き、遠方の街からは微かな声が多数聞こえてくる。

最も近いのはスカートの裾近く、右の方にある別荘地だった。森の中にポツンと切り開かれた広場があり、その中央には今朝自分が支度した別荘が配置されている。今となつては麦粒程度の大ききでしかない別荘に、何人かの衛兵と執事が留守を預かっている。

数刻前の出来事を思いだしたエリザは、軽く身を傾けて

声を掛ける。

(こんにちは)

(おう。大丈夫か?)

(こんにちは。いやあ、素晴らしい)

返ってくる声からは、兵長の緊張や着付師の感嘆が手に取るようにわかる。

(そちらはお変わりありませんか?)

(ああ、襲撃は無いな。クルスも無事だったよ)

先般の魔法戦士は御者のクルスを緊縛して成り代わつたものの、手荒な真似はしていないようだった。しかし野放しには出来ないため、明日にでも討伐を奏上する予定だ。そう兵長は語気を強めて言い切る。

(そうですね……)

当事者であるエリザも同意だった。今の彼女が操られてもしたら、どれだけの惨事になるか想像も出来ない。

爪先を下ろすだけで街が一つ消え、足を払えば王都でさえ灰燼と帰す。踏みしめれば山をも崩し、横たわれれば領土を丸ごと覆い尽くす。山深い渓谷も絶海の孤島も身を隠す場所たりえず、逃げ場所はどこにもない……

考えるほどに事態は深刻に思え、思わずエリザは身震いしてしまう。

(私の方でも、ちよつと探してみますね)

エリザは足元の兵長に答えてから王都や他の町村に向き直

る。

(えっと、ですね……)

多少の逡巡の後、エリザは周囲に対して説明した。

(人探しの依頼がありましたので、少しお時間を頂きます) 真相を説明するのは長くなる上に混乱を招くとの判断である。

エリザはドレスの裾に注意しながらゆつくりとしゃがみ、まずは先の別荘から延びる街道を目で追ってみるものの、人影は全く見あたらない。周りの集落を見渡して声を掛けるも、留守を預かる村人からの返答は『来訪者そのものが皆無』という簡単なものばかりだ。

脅されていたり、成り代わっている可能性も考えられるが、疑えば要らぬ恐怖を与えるし、何より留守番のため祭典に出られない人達を疑うのはどうにも気が引ける。

折衷案として、彼等にも祭に参加して貰うことにした。一言断つてからエリザは家の集まる区域を隆起させ、小さな茸ほどの集落を一つずつ左手に乗せていく。

(安心して下さいね。決して危害は加えませんから)

優しい声で諭し、微笑み掛ける。やや落ち着きを見せたところでエリザはゆつくりと立ち上がる。

(良い景色でしょう? 島一番の山より高いと思いますよ)

摘み上げられた時には緊張していた彼等も、巨大なエリザに見守られむしろ安全であることを理解したようで、前後

ともに雄大な景色を楽しんでいるようだ。彼等の余裕ぶりから判断する限り、魔法戦士は居なさそうだ。

(そういえば首都の人達ですけどね、こんなことまで要望したんですよ)

はにかみ混じりにそう言つて、エリザは集落の乗る左掌をゆつくり自分の左胸に引き寄せ、丘よりも大きなその膨らみをそっと乗せる。

(酷いと思いませんか?)

(うお、すげえ!)

(あつたけえ)

(酷いな。あいつら、羨ましすぎるだろ)

喜ぶ声も素直というより欲望に忠実であり、彼女の予想は確信に変わった。

疑いも晴れた上に楽しんで貰えたのは良いとして、肝心の魔法戦士が村に居ないとすれば、やはり身を隠しやすい森なのだろうか。集落を戻したエリザは周囲に深緑の絨毯のように広がる森を見渡してため息をつく。

地面は木々に覆い隠され、中を探すのはいかにも骨が折れそうだ。木々を撫で払えば下まで見通せるかと思つたが、今の彼女にとつて森の木々は余りにも小さく脆い。手を翳すだけで異変を感じた動物達が激しい鳴き声を響かせる。

決断を渋り思案するエリザの心に、聞き覚えのある声の不意に届く。

(こつちだ)

声のする右方を見ると、彼女を迂回するように陸地が湾曲し、後方の海へと突き出ている。湾を挟んで王都の反対側に岬が伸びる形だ。

海から切り立つ岬の地表はなだらかな草原で、エリザはそこに小さな人影を認めることが出来た。

(まさか……)

エリザは体を右に向けてスカートを引き、足元を凝視する。小さすぎる上に角度の関係で人相は判らないものの、地面に描かれた幾何学的な模様や、何よりこんな辺鄙な場所に居るという事実だけで疑うには十分だ。

(ようやく気づいたか)

以前と異なる口調ながら、低い声には聞き覚えがある。そう、これは……

(何故、こんなところに?)

何よりも先にエリザから発せられたのは、素直な疑問だった。

(何故か? それは、貴女をよく見るためさ)

一方の魔法戦士は、普段の仰々しい口調に戻っている。

(ここから見れば分かる。偉大な女神と、矮小な街の対比は実に見事だ)

城壁はもはや意味を成さず、いかに堅牢な城を築けども指一本であつさり突き崩せる。足でも踏み入れようものなら街

を一気に消し去ることさえ可能であり、もはやエリザを止められる存在など皆無。なれば戸惑うことなく、超越者としての絶対的な態度を示すべきではないのか?

内容を咀嚼するだけの間を与えつつ、反論に至る前に畳みかける魔法戦士。計算高さを感じさせない念の入れようだが、エリザは全く心を動かされていなかった。彼女自身が身構えていたことに加え、今の大きさと距離では声が弱すぎる。聞き取ってみれば内容は前回の焼き回しで、徒に修飾詩を重ねた文言も自分に酔っている印象しか与えない。

完全に冷め切ったエリザは集中するのも億劫になり、自然と溜息が漏れる。

(なっ!!)

魔法戦士からは憤慨とも驚嘆とも取れる声が届く。本気で催眠術に掛けるつもりだったのだろう。しかし、その自信はどこから出てくるのか。

(御高説、痛み入ります)

エリザは低い声色で一言一言区切るように伝えると、左足を浮かせてゆっくり前に出す。

(おお?)

彼女の動きに応じ、足元からは一様に感嘆の声が上がる。爪先だけで町を丸ごと踏みつぶせると計算できても、その大きさを実感できるか否かは別の話だ。彼等にとつての大きさの感覚は靴が近づくにつれて何度も上書きされ、目の前に

下りた頃には言葉を失っていた。

司祭達が陣取る場所は、海面から十丈近く切り立つ崖の上にある。ゆえに王都での式典や超巨大化したエリザの様子も完全に把握できていたのだが、いまは巨人の靴の底敷がほぼ彼等の目線まで切り立っている。それより上に聳える靴本体は一面の白い曲面としか見ええず、全体の大きさを推し量ることすら出来ない。

(なんと……)

(これは)

司祭達は呆然と眺めているのだろう。エリザが心の内を探っても言葉の断片らしき物しか聞こえない。

次にエリザは踵を着けたまま爪先を浮かせ、更に前へと送り出す。街より広いと評した革の靴底が司祭達の上空を占め、初夏の日差しが遮られる。

(これまた)

(ううむ)

やはり反応は限定的だ。足元の彼等にとつては、空が丸ごと靴底に変わったように見えるのだろうか。想像しながらエリザは、殊更ゆつくりと爪先を下ろしてみよう。横からの光も減り、彼等の周囲は更に暗くなったようだ。靴底の縫い目も見えず、夜のような暗さになっているらしい。

なおも爪先を慎重に下ろしていくと、ようやく司祭達は自分達が置かれている状況に気づいた。

(まさか……)

(踏みつぶす気か?)

明らかに動揺した声。エリザは答える代わりに爪先を止め、靴底と闇に加えて無言の圧力まで掛ける。内心では相手が気づいてくれたことに安堵していたのだが、司祭達からは靴底しか見えていない。

二呼吸ほど待つてエリザは一気に爪先を前に出し、ヒールと爪先の間を岬が来るように下ろす。岬の幅は半寸にも満たないので、ハイヒールのアーチ部分に跨がせるのも容易い。足元の司祭達は圧力と闇が去ったと思う間もなく、前方に聳える柱と、そこから真上を通って後方にまで繋がる雄大な曲面を目の当たりにする。

足を置いて落ち着いたので、エリザは改めて司祭達の心境を探ってみる。巨躯が次々と織りなす大景観に圧倒され、現状を把握するだけで精一杯という感じだ。たとえばいま見ている景色が靴底のアーチであり、靴にすっぽり覆われていることを理解するまでに幾許かの時間を要している。

エリザは彼等が現状を掴むまで待った後に体重を左足に掛け、左右に重心を動かす。革が立てる小さな音も、足元には地獄の底から響くような轟音として届いているようだ。対策を考える余裕は見られず、もはや最初の目的を覚えていくかさえ疑わしい。

仕上げにエリザは爪先を再び浮かせて左後方に引き、人

が居ないことを確認してから岬に踏み下ろす。今の大きさと比べて初めて踏む大地は想像以上に柔らかく、綿を踏むように抵抗が無い。上陸は出来るだけ避けたほうが良さそうだ。数拍おいて左足を戻すと、岬は分断されて新しい島になっっている。

その司祭達から見れば白い生きた山脈が岬を容赦なく押し潰し、それでいて何事でもないかのように軽々と退いていく。元の大地は綺麗に削り取られ、抉った痕跡の崖が残るのみ。祭壇は島として分離し、向こう岸まで五く六町ほどあるので脱出不可能だ。

いや、違う。この巨人に見つかった時点で、もはや逃げ場など無かったのだ……

絶望に打ちひしがれる司祭達を無表情で見下ろしつつ、エリザは次の手を考える。操心術を防ぐためには、まず自身の恐れや不安を振り払う必要がある。その上で相手にこちらの優位を認めさせれば良く、絶対的かつ深層に訴えるほど効果は高い。術に陥れていることでエリザは不安を、魔法戦士は自信を抱いていた。この不利を精算し、手を出せなくなるまで徹底的に対処せねばならない。

意を決したエリザはスカートを手で押さえつつしやがみ、祭壇の周囲をに右手を伸ばす。このときも王都で見た懐帳重さは敢えて出さず、早さを少し控える程度だ。当然ながら司祭達はドレスが巻き起こす風に翻弄され、吹き飛ばされ

る者さえ何人か居る。

それも見越してエリザは素早く動き、右人差し指で彼等を受け止めてから目前に寄せる。

（大丈夫ですか？）

（あ、ああ……）

怪我がない訳ではなかったが、いつの間にか癒えているので生返事しか出せない。怒るところか、暫くぶりに声を聞いて安堵さえしている。

（良かった）

エリザは微笑みかけ、右手首を膝の上に置く。そして今度は左手を伸ばし、親指と人差し指で祭壇の周囲を丸ごと摘まみ上げる。

（こちらもお怪我はありませんね？）

持ち上げた地面に対しても、エリザはあくまで治療術士として対応する。こちらも擦傷程度であり、しかも完治済みだ。肯定の返事しか出せない点も共通している。

エリザは右人差し指を地面に添えて傾け、合流させたまま土塊を三指の腹で囲む。祭壇は高さ十丈余りの白壁に囲まれ、三角形の空は優しい微笑に占められている。

（改めまして、こんにちは）

そのような圧倒的な状況で、エリザは語り始めた。

（先の雷も、貴方たちの仕業ですね？）

少し前から抱いていた疑問をぶつける。王都が見える僻地

に、しかもこの日に祭壇を組む理由は他に見あたらない。

（おおかた、街の皆さんが私を恐れれば、と思つたのでしよう）

多少は我に返つていいのか、何やら弁明する声が聞こえる。よくよく傾聴すれば他にも聞き覚えのある声色があり、初めてエリザはウニレフの一団が居ることに気づいた。孤立したところに付け込む心算かと思いきや、純粋な興味もあつたようだ。

（貴方達でしたか）

思わず漏れたため息が彼女の摘まむ地面に襲いかかり、司祭達は家ごと吹き飛ばせそうな暴風に激しく翻弄される。

（あら？ あ、まあ大丈夫ですね）

そんな司祭達の上から、エリザは軽い調子で呟く。自分の手の中にいる限り、彼等が怪我をすることはない。

矢継早にエリザは本題を切り出す。

（単刀直入に言います。私の心を操らないで頂けますか？）  
余りにも提案が核心だったのか、迷つていいのか、二呼吸ほど待つても返事は無い。

そこでエリザは土塊を傾けて左手側に人を送り、右の人差し指を軽く動かして二く三度擦つてみる。地面の一割ほどが削れ、かぼそい悲鳴が上がる。

（ふふふ、大丈夫ですよ）

いとも簡単に大地を削り取る力と、その力に起因する恐怖

を溶かして余りある慈愛に満ちた微笑。

（潰さないように注意していますから、ね？）  
ウインクまでして見せる。

敵うわけがない。

爪先の威力に加え、間近で見えるスケールの大きさ。膨大な力や巨躯のみならず、体躯相応の自信と慈悲までも備えている。もはや女神にも匹敵する彼女に何か使役させるという考え自体が根本的に間違つていたので……

そんな思いが彼等の心の奥底、魂にまで刻み込まれていた。

沈黙する司祭達に、エリザはなおも畳みかける。

（お返事を、頂けていないようですが？）

一言一句、ゆつくりと伝わる声。にも関わらず上空に佇む顔は変わらず柔らかい微笑を湛えている。

そこに居る全員が、無意識のまま頷いていた。

状況を知つてか知らずか、不意にエリザの眉尻が下がる。

（申し訳ありません。声として伝えて頂けませんか？）

はつと気づいた一人がすぐに声を上げると程なく他者も倣い、大声で二度と操心術を掛けない旨を叫ぶ。絶叫による宣誓は繰り返され、その様子は使命感さえ抱いているようだ。

今後一度たりとも失敗は許されぬ事情もあり、エリザは全員が誓っていると確認できるまでじつくり聞き入る。

（もう大丈夫ですよ）

そう言つて止めた頃には、二十回近く繰り返されていた。も

う喉は枯れ果て、全速力で走ったかのように肩で息をしている。

(お疲れさまでした。ありがとうございます)

そう言つてエリザは土塊から左親指を放し、両人差指で挟んだ大地の一面を左胸にそつと当てる。更に魔法で強化し、柔肉にめり込ませる。

文字通り山のような胸に抱かれ、優しい鼓動が大地を揺さぶる。喉の痛みもいつの間にか消えており、穏やかな温もりと服に染みた香りに思考を奪われてゆく。

(約束は、守って下さいね)

エリザの心声も、遠くから響いていた。